
空バカの革新者の往く変革の世界

望夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空バカの革新者の往く変革の世界

【Nコード】

N0171U

【作者名】

望夢

【あらすじ】

空バカの男が00の世界にTS転生。しかし、そこは少し『機動戦士ガンダム00』とは異なる世界であった——男は女となり、人類の革新者として、変革の世界と向き合う。虚空の蒼穹の大空を、ひとりのファイターとして…… 原作を大事にしたい方は回れ右を推奨する。

prolog(前書き)

ソラとクリスカの性名が間違っていたのを今日気づいた。

全く、愚かで無様を晒してしまった。

この場を借りて謝罪する。

prolog

時として人は、予期せない不幸に見まわれる時があるだろう。

かくいう私も、そんな類に当てはまるのだろう。

昔から空が好きだった私は、空を求めてスカイダイバーの免許を取り、何度も空を飛んだ。

そしてその内、宇宙を夢見始めて、宇宙飛行士となった。過酷な訓練を乗り越えて、ようやく宇宙飛行士となれた。そして私は久しぶりに空を飛んだ。でも、それは失敗だった。

パラシュートで降下中に突風に煽られて、パラシュートが身体に絡みつき、予備のパラシュートすら開けずに、そのまま地面と衝突した。我ながら呆気ない最後だったな、宇宙に行く前に死ぬとは……

「で、ここはどこだ？」

自分の記憶を振り返ることで現実逃避をしていた。

さて、現実を向き合おうか――

「コレが……私か？」

自分の声よりも高い『自分』の声。

何故かガラス戸のような物で遮られた容器のようなものの中に自分が居る。だがそれはまだ置いておこう――

「私……女？」

一人称はこうだが、私はれっきとした男だった。お世辞にもカッコイイとは言えなかったが――

しかし、今、ガラス戸に辛うじて移る『自分』は自分の知る容姿とはかなりかけ離れていた。

銀色の流れるような髪に、吸い込まれそうな深い青の眸、ほっそりとした四躯、触れば小振りだが程良い弾力を返してくる胸、そして息子が消えている股――

結論〃超美少女の身体

「……………」

言葉が出ないとはまさにこのことだろう。

いったいここがどこでなんなのかもはやどうでもいい。問題は、どうやってこの状況を如何にするかだ。悪い夢なら覚めて欲しいとも思うが、そうしたら死んだ自分が待っているだろうからすぐに思考から撤廃した。あいにくまだ死にたくはないし、もう30後半の仲

間入りだったが、まだまだ心残りは沢山あった。
とにかく、この状況を如何に抜け出すかだ。

ガラス戸を叩いた。意味なし――

容器内を物色。あまり動けない為に意味なし――

「開かないものかな……」

そう思っていると、唐突にガラス戸が開いた。

かなり怪しいが、外に出れるのだから文句はなしだ。

「どこだ、ここは……？」

一言言えばマトモな場所でもないだろう。

周りには私の居た容器と同じような容器の機械が多数ある。そして一度自分の居た容器を見る。

「……ソ……ラ……ビ……チェ……ノワ……？ああ、ビャーチェノワか」

本格的に胡散臭い。

悪の秘密結社とか軍の機密施設的な匂いがプンプンする。

《————》

「っ！！ぐっ！がつ……」

《————》

「くっ、うるさい！！黙れっ！」

ふと聞こえた声——

だが次の瞬間、今までの人生で経験したことのない痛みに、私は床にうずくまる。

頭を駆け巡っていく走馬灯のようなもの、どれもこれもマトモなものはない。

「うえっ、げほっ！」

あまりの光景に、胃の中身をブチまけた。胃液しか出てこなかったが——

「……PMCトラスト……」

私が居る場所――

P M Cトラストという民間軍事会社の秘密研究所。

人類革新連盟――通称人革連の超兵計画を独自のルートで察知したP M Cトラストは、それに対抗するまたはビジネスチャンスとしてある計画を立ち上げた。

デザインベイビーに様々な強化処置を施した強化人間の製作とE S P能力を人工的に付与した人工E S P能力者の第5世代として産み出された内の1体が『私』という存在らしい――

E S Pとは超感覚能力の事をさす。念話、透視などがこれにあたる。つまり概念的にはN Tのそれに似てなくもない。

「00とA l t e r n a t i v e がごっちゃになってまったくもって予想が出来ないな」

ロボット系ヲタクだったことに今日、これほどまでに感謝したことはない。

ガンダム00は、1stシーズンはスペシャルエディションでしか観られなかった為、そこまで詳しくはないが、2ndや各技術の概要の説明くらいはできる。

M u v - L u vはT Eはマンガとホビーの小説からの為に自信はないが、A l t e r n a t i v eならやっていたからそれなりの設定は大丈夫だ。

話を戻すが、どうやら『私』は、デザインベイビーではなく、リーディングにより判明した天然ESP能力者を調整した宇宙世紀タイプな強化人間らしい。しかし、洗脳を受けていなかった『私』は、ここを抜け出す為に色々やっていてそれがバレ、凌辱の限りを尽くされて精神崩壊を起こしたが、天然ESP能力者はまだ『私』しか見つかっていないらしく、捨ててしまっ前に絞り取れるだけデータを取って廃棄待ちの運命だったようだ。

死亡フラグ乱立ですね、ありがとうございます。

「……逃げるか……」

一応、逃走経路は考えていたらしく、MSを奪取して逃げ切るようだったらしく、逃走経路はMSの格納庫へと続いていた。

AEUヘリオンを奪い、研究所を吹き飛ばして逃げ切る気でいたらしい。

「アレルヤか、私は……」

しかしわからないこともない。

今はブロッキング出来ているからいいが、さっきから人の頭を、多くの悲鳴が叩きつけられてくる。こんなところにいたら気が狂って当たり前だ。

「とにかく早く出るか……」

滅多に人は来ないらしいが、見つかると面倒だ。

私は、逃走経路——通風口を探した。しかし別なものが見つかった。

「この子も……か」

部屋を軽く一週して見つけたのは、私よりも若干幼く感じる少女が容器の中で眠っていた。

こんな子までも——

正義感なんて私は持ち合わせていないが、それでも言い知れない怒りがふつつつと湧いてくる。

「世界の歪み……か」

正しく、この研究所もそうだろう。CBが知れば武力介入でもされるだろう。

「ソレスタルビーニングか……」

2300年現在。

CBの武力介入はあと7年を要する。

その間までに、私は生き残れるのだろうか？

私は少女の入っている容器を見る。

容器とそれを操作するだろうコンソールの間に、『私』の名前があった。ならばと思い確認してみる。

「イーニア……シェス……チナ……」

もっとう反応すればいいんだ？

「……お……は……よう……ソラ……」

「は？あ、ああ、おはよう？」

先程まで寝ていたはずなんだが、イーニアという少女は優しい笑みでこちらを見ていた。あと7年したらああなるんだろう。今のイーニアは、少し幼く感じる。

「少し待っている、今開ける」

「うん」

私は『私』の記憶を頼りに、コンソールを操作し始める。するとまた走馬灯のように——おそらくは『私』の記憶か？——が、流れていく。

イーニアもやはり少し特別らしい。どうも『私』の天然ESP能力とイーニアの人工ESP能力をリンクさせる形で調整されていたらしい。しかも『私』はイーニアを妹のように扱っていたために、さらにその繋がりは強かつたらしく、『私』が精神崩壊を起こした翌日にはイーニアも意識不明となり、何をしてもうんともすんともいわず、廃棄が決まったらしい。

まったく、人間を物のように扱う。私は我慢強い男なのだぞ！ちなみに乙女座でもある。逢えるならばあつてみたいものだ……

「……ソラ、たのしそう……」

「ん？そうか？……いや、そうさ、そうさな。私はこれほどまでに自らが乙女座であれたことを幸運に思った日はないさ」

「……?」

イーニアは首を傾げた。

ふむ、イーニアにはまだ難しかったな。

しかし、今日は不思議な日だな。死んだと思ったら、今度は異世界憑依物トリップからの、00の世界にイーニアというか、MUV-

LuVの世界観が入ってきているらしい。BETAという単語も『私の記憶からは上がって来なかった為に、00基準でMuV-LuVの設定やイーニアが居るといふならば、探せば居るのかもしれないが、その辺りはまずは逃げ延びてからだ。

私は容器からイーニアを出すと、身長差から片膝立ちになり、少し見上げるように彼女の肩を両手で掴み、真っ直ぐ、私と同じ吸い込まれそうな深い青の眸を射抜く。

「良いかイーニア、良く聞いてくれ」

「????」

真剣な私に、イーニアは不思議そうに首を傾げた。

私はブロッキングを解除して、イーニアとのリンクを始める。ブロッキングを解除した時はまた一瞬激しい頭痛に見舞われたが、イーニアに意識を集中したらそれもなくなった。

「イーニア、私はこれからこの研究所を抜け出す。イーニアもこのままだと殺されてしまう。私と一緒に、来てくれるか？」

私がリンクすると、イーニアも本人なりに真剣な顔——少ししかめっ面で、真剣な顔と言うよりはちよつとわがママを言いそうなカワイイ顔にしか見えないが——で、私をリーディングしたのだろう。なんとなく自分を覗かれる感じがしたが、それには少し心配するような感情を感じた。これがEPS能力者同士の精神感応の感覚なのか？

そしてイーニアの答えは、私の、肩を掴む手にそつと自分の手を重ねて、ギュッと力を込めて、静かにだが確かに頷くことだった。

「往こうか……イーニア」

「うん」

私はイーニアの手を握り締め、脱出口となる通風口を壊して、MSの格納庫へと向かい始めた。

mission01# 変革の空へ…

私はイーニアを連れて格納庫へと辿り着いた。幸いにも時間は夜中であり、格納庫には人の気配ひとつ無い。

格納庫に多数並ぶMS——AEUヘリオンだが、大型の機体が多く、申し訳程度に小型の機体が極少数あった。

「2300年だからあるとは思っていたが……」

AEUヘリオンメディウム

この時代のAEUの最新鋭機と言ってもいい機体だ。

「行くぞイーニア」

「うん」

私はイーニアの手を引きながらヘリオンメディウムに向かう。無論MS形態の機体にだ。

コックピットに乗り込み、イーニアを膝の間に座らせる。ちなみに互いに素っ裸の為、今更ながらに少々気恥ずかしいが、緊急時故に余計な思考は排除する。武器はソニックブレイド2本に、これまた

最新装備のリニアライフルを2挺拝借、予備弾倉も可能な限り積み、長距離飛行用のプロペラントタンクも取りつける。秘密研究所とあって、それなりに良い品揃えだ。あとはアグリッサでもあれば良かったのだが、無い物は仕方がない。

「ソラ！」

イーニアが言うと警報が鳴る。

気づかれたか、だが遅い！

記憶を頼りに機体を動かす。MSを動かす日が来ようとは思わなかったが、記憶から、少し複雑な操縦系統だが、戦場の絆感覚で機体は動かせる。しかしここは遊びではない。

「イーニア、怖くはないか？」

「だいじょうぶ」

イーニアは強いなと私は思う。

実際、私は震えていた。恐怖していた。

これから人を殺す自分に、戦場という場所に身を投じること——
だが、それもすぐに晴れた。

「イーニア……」

「だいじょうぶ……こわくない、こわくない……」

操縦桿の震える私の手に、自分の手を重ねるイーニア。と同時にイーニアが私にリンクしてくる。

落ち着いた——『白』

私を信じて違わない。全幅の信頼を寄せているのがわかる。

これは、『私』云々以前に、大人として信頼に応えなければな。

「……ソラ・ビャーチェノワ、出る！」

フットペダルを踏み込み、操縦桿を倒す。

隔壁をリニアライフルで撃ち抜き、ヘリオンメディウムは空へ飛び立つ。

深き闇が支配する空に、私は舞い上がる。昔から恋い焦がれる、この空に——

しかし感動は束の間だ。

機体を後ろに振り返らせ、私は片腕でイーニアを抱き締めると操縦桿のトリガーを引いた。

リアライフルから放たれる電磁加速された弾丸は、格納庫を射抜き爆発を起こす。

管制塔も研究所も撃ち抜く。

頭に絶えず人の悲鳴が轟めく。老若男女関係なく。もちろん、私達の兄弟までも――

人の死を感じるというのはこういうことなのか？これならカミィユが壊れてしまうのも無理はないのかもしれない――

私は少しでも己を保つ為に、まったく関係のないことを考えていた。でないと本気で死に引きずられて押し潰される。

あらかた撃ち終わり、空の弾倉を交換する。

「…っ…ぐっ……」

操縦桿を握る手が震える。イーニアを抱き締める力が増す。

「ん、…ソ…ラ……？」

「すまないイーニア、少し…このままにさせてくれ」

イーニアの肩に顔を埋めて恐怖と死を噛み締める。私は自由の為に人を殺した。

引き金を引いた後悔はない。あそこの研究員は屑の集まりだ。兄弟を助けられる算段もなく、あの手先では部品や商売道具として扱われるか廃棄されるのが末路だ。

責め立てられようとも構わない。追われるのも覚悟の上だ。

「ソラ？」

「…ありがとう、もう大丈夫だ」

私はモニターに移る研究所の成れの果てを目に焼きつけて進路を東に取る。

『私』も色々考えていたらしい。

脱出ルートとして、PMC絡みでAEUは信用に置けず、人革連も超兵関連でボツ。故に残りは、世界の警察を自負するユニオンに助けを求めているらしい。しかも接触出来た人物の上司がなんとあの、ホーマー・カタギリ司令なのだからこれまた運が向いている。

私は秘密コードを通じてホーマー・カタギリ司令に暗号電文を送っておいた。あとは信じるのみか――

私はヘリオンメディウムを東に、ただひたすら東へと進めた。その
先に、希望があることを信じて。

mission02# これからの道

十数時間後――

東――

オホーツク海経由で日本海に入り、私達は空中で輸送機に回収され、日本へと降りた。

一応、服は貰えた為、今の私とイーニアはユニオンの軍服を着ている。もつとも、イーニアの場合はサイズが合わなさすぎて服に着られているので歩きにくそうだが、今は我慢して貰うしかない。

武装した兵士に連れられてひとつの部屋に連れて来られた。

「ご苦労だった。お前達は下がってくれ」

私達を出迎えてくれたのは、顔の左側に大きな傷痕を持った、オルバックの男だった。

「私達を保護して頂き、ありがとうございます」

「遠路遙々ご苦労だった。君達のお陰でAEUの新型ヘリオンの実機も得られた。君達には悪いが、技術屋としては名利につきるよ」

「土産としては充分でしたでしょうか？」

「ああ、充分どころか十二分さ。アレをバラせばA E Uの今のM S技術基準もわかるしな」

「それだったならば、アレを選んで乗ってきた意味がありましたよ。
巖谷 榮二……少佐殿」

「おや、こんな綺麗なお嬢さんに名前を知られているとは、おじさん照れてしまうな」

「リアルドの開発に携わり、テストパイロットも務めた極東一の伝説ファイターであると記憶しています」

「わっははははは！それは持ち上げ過ぎだよお嬢さん。レディに褒められても照れ恥ずかしいばかりさ」

巖谷 榮二――

M u v - L u vでは日本帝国陸軍技術廠・第壹開発局副部長で、階級は中佐。

しかし目の前にいる彼は少佐だ。

だが、どちらにしても良い人であるのは見てわかる。初対面ならば強面のおじさんに見えるが――

「あの、ホーマー・カタギリ氏は？」

「ん？……ああ、ヤツはアメリカに居てな、どうにもこうにも手が離せなくて、個人的にお嬢さんの面倒を頼まれたのさ」

「そうでしたか……」

「ま、この基地に居る限りは安全は保証する。今日はもう休んで、また明日話そうじゃないか」

「ええ、わかりました。ではお言葉に甘えさせて頂きますね」

そういうことで、今日は解散となり、あてがわれた部屋に入ると、どっと疲れが身体を襲って来た。

「巖谷 榮二……か、とんだ大物と出逢えたな」

「ソラは、あのおじちゃんをしってるの？」

「ああ、少しな」

ダボダボの制服を脱ぎ捨てたイーニアが、ベッドに腰掛ける私の膝に頭を乗せながらこちらを見る。

私は苦笑いしながらイーニアにダボダボのタンクトップを着せた。いくらまだ子どもでも素っ裸は女の子としては頂けない。

私はイーニアにタンクトップを着せ終えると、そのまま制服を脱いで寝てしまった。我ながら、今日は人生で最大の慌ただしかった日だと思いながら――

翌日。

私はイーニアを連れてまた巖谷少佐の部屋を訪れていた。イーニアにはオレンジジュース、私は私のリクエストでブラックコーヒーに、茶菓子を食べたりしながら、今後のことを話していた。

ホーマー・カタギリ氏——今は中佐で、アメリカで副司令をしているらしい——と巖谷少佐との両名と、『私』が今まで流していたPMC絡みの裏情報と私達が奪取したヘリオンメディウムのお陰で、それなりには融通の利く待遇が受けられるらしい。もっとも、身の安全の為に軍関係の施設に居なければならぬが——

私は別にそれでもいいし、何より命の保証がされているのだから何の問題もなく、やりたい事は山ほど、いや、軌道エレベーター並みにある。

だが、問題はイーニアだ。

リーディングで私の意図を知ってしまったのだらう。

今後の話題になった途端、私の腰に抱きついて離れないのだ。

「そっちのちっこい嬢ちゃんはどうしたんだ？」

「ええ、まあ、私をリーディングしてその意図を知ったから置いていかれると思っているんですよ」

私はMS工学を学び、行く行くは軍に入ろうとも思う。

私が目立てばイーニアに目が向かなくなっているのもある。だがそれと同じ位に、あの、ユニオンのファイター達の憧れの機体に私も乗ってみたいのだ。

それに私は、CBの理念はひとつの心理だとも思うし、その信念にも共感出来る。だがそれは画面の向こうのアニメでの事だ。

しかし今私はここに居て生きている。CBが動かなければ死ななかった命もあるだろう。だが、CBが動かなかつたら、ELSとの対話は成されなかつただろう。擬似太陽炉が世に出回らなければ、人類のイノベーターへの覚醒はもっと程遠い未来になつただろう。そしてCBがなくともイノベイド——リボンス・アルマークが世界を統一しただろう。

彼も彼なりに世界の為に動いていたのは間違いない。しかし、なまじヒトを見下して、答えを急ぎ過ぎてしまったのだろう。

そしてアレハンドロの野望があつたからこそ、人類は対話の為の最初の鍵を得られたのだらうと考えると、すべては運命の輪の中で定められたことなのかもしれない。

だが、私やイーニアが居る事は決して無意味とは思わない。私は私

なりに、来るべき日に向けて自分の力を使うことを決めた。兄弟達を殺した業を背負い、その業を清算する日がくるその時まで――

「巖谷少佐。私にMS工学を学ばさせてください」

すべてはここから始まる。

「別に構いやしないが、良いのか？」

「ええ、もう決めたことです。この子を――イーニアを護る為にも……」

『私』の願い――

私の願い――

『私』の想い――

私の想い――

私と『私』では違うところが多すぎる。
言葉使いも態度も振る舞いも何もかも――

だが、護りたいと想う気持ちはどうやら同じらしい。

「ソラ…?」

「私がお前を護るからな、イーニア」

mission02# これからの道（後書き）

巖谷のおじさまに御登場頂きました！

しばらくは戦闘描写皆無です。

ユニオン在日駐留軍というか、技術部がヤバいかも……カタギリと組んだら怖いもの無しなんじゃないか？

感想を待っているぞフラッグファイター諸君！

mission03# 休日

2301年――

この年、紛争下にあるクルジスにてC Bの試験的武力介入が行われ、初めてガンダムが人目に触れる事になる。

「まあ、今の私にはなんとも出来ないがな」

やはりMS工学の勉強は私の心を強く惹きつける。この気持ち、まさしく愛だっ！

私はMS工学を学ぶ学生としてはかなり恵まれた環境にあると言える。

昼は文学に励み、夜や休日には巖谷少佐の計らいで、ユニオンリアルドを1機、私の勉強用に貰った。

テキストを見ながらリアルドの構造を理解し、それをフラッグへと昇華させるが、やはり技術レベルの問題で、今のところフラッグはまだ造れそうにはない。

さらにそれに平行して、核エンジン搭載MSの研究も、紙媒体であるが始めている。悪あがきだろうが、ヴェーダ対策である。

どうも太陽光発電に依存する今日、核エンジンをMSに搭載すると

いう発想はないらしい。しかし、A E Uを中心に稼働中の原子力発電所はまだ複数ある。ユニオンは太陽光発電分野に置いて世界のトップにいる為、跡地はあっても稼働状態にはない。それもそうか、最もクリーンな太陽光発電技術があるのだから、危険性のある原子力発電が廃れ行くのも定めか……だからこれをM Sに搭載するという発想も生まれなかったのだろう。上手くすれば擬似太陽炉でも半永久的に稼働出来ると言うのに――

まあ、それは置いておいて、現状ではミノフスキー核熱反応炉を造るのはまず無理そうだ。そもそも燃料たるヘリウム3が地球にはないし、木星方面に木星船団があるわけでもない。今は通常の核融合炉ないし反応炉を下地に、C・E・製核エンジンを研究しているが、M S工学を勉強して1年では、まだまだ先行き不透明で長い。だが最低でも、試作機でもいい為、6年後を目処に1機、核エンジン搭載M Sは造りたいところだ。

太陽炉搭載M S――ガンダムに対抗する為には、核エンジン搭載M Sが必要だろうというのが私の見解だ。それも性能的にはガンダムクラスの機体が必要――この世界で言えば、カスタムフラッグ並みの機動性と運動性を兼ね備えた機体が好ましい。他世界なら、グリプス戦役以降の高級M Sクラスや、トルギスクラスならC B製第三世代ガンダムにも十二分に渡り合えるだろう。

そして万が一に備えた研究も――

「つと、もうこんな時間か……」

時計は既に日を跨いでいた。明日は久しぶりにイーニアとショッピングだ。ここところリアルドの格納庫に入り浸り過ぎてイーニア

がへそを曲げてしまったが為に明日は遊ぶ約束をしたのだ。

「ソーラー！」

「ふっ、はいはい」

無邪気なイーニアを見ると、人殺しの研究をしている私でも心が安らぐ。

ウィンドウショッピングをしながら、イーニアにとっては初めてのクレープを食べ歩いたり――

昼にはハンバーガーを食べたり、街を物珍しく2人で見て回った。

昼のハンバーガーで口周りにソースの着いたイーニアは笑えたがな。

だが3世紀で見違える程に変わってしまった東京の地を歩くというもの、新鮮だが寂しくもある。

「ソラ、だいじょうぶ？つかれた？」

「いや、私はなんともない」

イーニアの頭を撫でながら空を見上げる。広く晴れ渡る青空は、私の好きな空と、何ら変わりもなかった。

「ソラは、いつもそらをみてるね」

「…ああ、そうさ。私はこの蒼い空が大好きだからな」

手を伸ばせば届きそうなのに届かない気紛れ者。無邪気で、子どものように……

「イーニアはそらじゃないよ？」

「さあ、どうだろうな」

「むう」

「フッ……」

たまには、こつこつ日が悪くはないな。

mission03# 休日（後書き）

とりあえず1年経過。

あと6年もあるのか

クツ、フラッグファイターとしては早くフラッグの勇士を描きたい
ものだ……

mission 04 # 基礎理論提唱者

技術学校通いも2年目に突入すれば、優れた者とそうでない者の優劣の差は月とスッポン並みになるのは想像に難しくはない。

憧憬や嫉妬は大いに結構なのだが――

「はあ、またか……」

ここの工学部の掲示板には最優秀者のレポートが掲示されるシステムらしく、それを掲示する事は私も承しているのだが、それを見た者の大半が嫉妬の眼差しを向けて来る。

ここの工学部は、ユニオン在日駐留軍基地しかも駐留軍の技術開発部の近所故か、ユニオンでもそれなりに名の通っている技術者の二世三世が通っている。だが、親の仕事を見ている所為か、考え方が硬すぎて親の技術をそのまま自分の技術として通してしまっている。故に目新しい技術は出て来る事が余りにも無さ過ぎる。

親の技術を継ぐのは大いに結構だが、新しい技術をレポートに書いて提出したい者の意欲を削いでしまうのだ。誰しもそういう所謂技術坊ちゃんとは無用な争いは避けたいからだ。私はバカバカしくて自分の好きなようにやっているが――

今回はMSが携行可能な超電磁レールガンの基礎理論と大型陽電子ライフル、Eカーボンに代わる次世代の新素材としてガンダニウム合金精製基礎理論、そしてA・C・製ビームサーベルの基礎理論

である。

Eカーボンは近年ようやくMSの次世代装甲素材として注目を集めているが、ガンダニュームにはやはり劣るだろう。なにせ戦略級エネルギー砲にすら耐える代物だ。ただし、Eカーボンと違い、宇宙でないと精製出来ないこと、Eカーボンよりも5倍近くコストがかかること、そして一般的技術では精製不可能であることなど――

おおよそ、工学部の生徒の考え得る規格を超越し過ぎた理論だが、この部分は、巖谷少佐からお墨付きを貰っている。現に駐留軍技術開発部経由でユニオン軍から、タワーでのガンダニューム精製実験の発行許可と特別顧問としての要請を受けているが、学業を盾に少しわがままを言わせて貰っている。ガンダニューム精製の基礎理論は紙媒体で起こしている為、この掲示板のコピーと私の手元の原稿のみ、さらに基礎理論があっても、技術という物は想像以上に難しく、エイフマン教授ならばこれを見て理論は理解出来る人だろうが、その他の人間が理解するには時間がかかるだろう。

「まったく、君にはいつも驚かされてばかりだよ」

「カタギリ……」

「相席、いいかい？」

「ああ」

昼食の学食で、私は食堂の端――空の見える席で食事をするのが当たり前だ。

こちらを睨む目もあって、この席は一種の私の貸切のようなものだ。そんなところに近づくのは隣りの戦闘機バカぐらいだろう。

ビリー・カタギリ――

技術開発部に所属している技術者にして、技術学科に特別講師として招かれている。本当は巖谷少佐が来るはずだったらしいのだが、私のレポートが端を発する技術開発に着きつきりで、ユニオンで優秀な技術者として頭角を表し始めた彼が呼ばれたらしい。というのは建て前であって、本人面倒くさいのをカタギリに押しつけたと言っていた。

まあ、巖谷少佐絡みで面識はあったし、私の中身が30後半とあつてか、接し方は講師と生徒ではなく同年代の友人感覚だ。

「そういえば、来年辺りにエイフマン教授の下に移るそうじゃないか」

「まあね。新型機開発プロジェクトに呼ばれてね。君だってそうだろうっ?」

「まあな、その前にガンダニウム精製実験をしると強制されそうだな」

「無理もないよ。Eカーボンより硬くて、重量が約7分の1なんて詐欺だよ」

「そうは言ってもまだ理論上の話で、夢のまた夢さ」

しかし実現出来れば、ガンダムとの戦いをパイロット次第で五分五分に持っていける。カスタムフラッグやオーバーフラッグがガンダムニュームを使えば、ガンダムとて苦戦は強いられるだろう。

さらにGNブレイドが厚さ3mのEカーボンを難なく切れるのというのを意識して理論を組んだ超電磁レールガンは、厚さ5mのEカーボンを撃ち抜く威力を持つ。あとは小型化しながら、目標は8〜10mのEカーボンを撃ち抜くことだ。

あとは、ガンダムニュームの精製実験が成功すればA・C・製ビームサーベルの開発にも乗り切れる。

そしてさらに汎用性を高めたMSの構想も出来ている。

「ビーム兵器を実用化するのは、もしかしたら君が一番最初かもしれないね」

「基礎理論提唱者だからな。そうでなければただの無能だ」

「君が無能なら人類の大半が無能だよ」

「でもないだろう」

苦笑いをするカタギリに軽く笑みを浮かべてそれに答えた。

「ただいま」

「ソラ！」

家であるマンションに帰ると、イーニアが飛びついて来た。

「おっと、ただいまイーニア」

「お帰りなさい。ソラさん」

「いつもすまないな。唯依」

「いえ、この程度のことなら」

もうひとり、出迎えてくれた少女に返す。

簗唯依――

両親は共に軍人だったが、太陽光紛争によって命を落とし、それ以来から巖谷少佐が親代わりで、彼女も少佐絡みで面識はあり、一週間に3度くらいはこうして講義で居ない私の代わりにイーニアの面倒を見てもらっている。

ピンポン♪

「ん？…はい」

「や、こんばんは」

「カタギリ？どうかしたのか？」

玄関先に立っていたのはカタギリだった。家には何度か招いたことがあるが、今日は特に誘った覚えはないが……

「俺が呼んだのさ」

「巖谷少佐！」

リビングの方から出て来たのは巖谷少佐だった。だが玄関に靴は無いぞ。

私が玄関に目線を落とすと、少佐が靴箱を開けて靴を取り出し、フラフラ振るいながら意地の悪い、悪戯の成功した子どものような顔

をしている。

してやられたな――

「しかし少佐がなぜここへ？」

「お前の卒業祝いと唯依ちゃんの軍の入隊祝いだ」

「卒業？私は聞いていませんが」

「そりゃそうだ。今言っただからな」

「また何故……ガンダニウムですね」

「それが決定打だが、お前さんの頭をお偉いは遊ばせておく気はないらしい。来年にはアメリカに飛ばされるんだ、今のうちにやるしかないだろう？そんなわけだ、今日はいつくらでも食って飲め！俺の奢りだ」

そんなわけで、久しぶりに日本人らしく回転寿司を堪能させて貰った。

m i s s i o n 0 4 # 基礎理論提唱者（後書き）

ユニオンの技術力がやばくなるフラッグが乱立しつつあるようだ。

感想は随時受け付けるぞフラッグファイター！

mission05# ヴァイスリアルド

半年が経ち、私は特別技術顧問として、ユニオンの宇宙軌道ステーションに居た。

私なしでガンダニュームを一応は造れたらしいが、重量はEカーボンより2割軽いだけで、コストが8倍の物がやつとだとのこと、しかし防御力は凄まじく。

リアライフルを近距離で100発撃ち込んでようやく貫ける程の強度だが、私の計算では500撃つてようやくへこむレベルの防御力故に、技術者達はそんなアホな顔をしていた。

そして私が本格的にプロジェクトに合流し、3ヶ月をかけてようやく私の計算水準を満たすガンダニューム合金が完成した――

「おめでとう。ガンダニューム合金、形になったらしいじゃないか」

「技術者達が先に始めてくれていたお陰さ。私は1年はかかると思っていたからな」

上層部に結果を伝えてからまず真つ先に、カタギリに連絡をとった。巖谷少佐には、軍経由で話が行くだろうし、唯依は今は士官学校通いで忙しいだろうし、そういうわけで、こういう連絡をして話しが出来るのがカタギリしか居なかったというだけだ。寂しい程に友人が居ないのさ私は……

「3ヶ月……実質8ヶ月か……。今度はどんなの造るのか楽しみでならないよ」

「一応、純ガンダニウム合金製のMSを造ることになった。場合によっては新型でも良いらしい」

「へえ、若干17歳にしてユニオン最年少のMS開発者か、成功すれば世間から引っぱりだこじゃないか」

「言っな、気が滅入る」

「おっと、こいつは失敬」

「まったく……」

おどけてみせるカタギリに、私もだいぶ肩が軽くなった。お前は良い友人だよ。

「でもそれだと今しばらくは宇宙に缶詰めかい？イーニアが寂しがつているよ？」

「…大丈夫さ。時々連絡も取り合っているしな」

「そうかい？なら良いんだけど……半年後、待っているよ」

「フッ、望むところだと言わせてもらおう」

「ぶっ、くくっ——」

「な、なにがおかしいカタギリ!？」

「ぶっ、ははっ…い、いや、別に——」

「ええい！いきなり笑い出すとは、それが友人に対する仕打ちか！？」

「い、いや、だからねっ、っふ、あーダメっ！お、お腹が」

結局笑い過ぎて腹筋が吊るまで笑って、ようやくカタギリは笑うのを止めた。

「まったく、私の心はシャー心よりもポツキリ弱いのだぞ？」

「いやいやごめんごめん。僕の知り合いに君そっくり……あ、容姿じゃなくて言葉使いがね。そんな人が居るから、久しぶりに君と話しているのに彼を思い出してね、つい思い出し笑いをね。でもホント、君とそっくりだよ、空バカでMSにメロメロなところは特にね」

「ほう、それは耳寄りな情報だ。出来れば逢いたいものだな」

「逢えるさ。なにせ彼は半年後の新型機開発プロジェクトのテストパイロットを務めるからね」

「そうか、ならば半年後の楽しみにしておこう」

「ああ、また半年後にね。そろそろ時間だから切るよ。おやすみソラ」

「そちらは夜だったか、すまなかった。おやすみカタギリ、良い夢を」

通信が切れたあと、自室の窓から私は地球を見た。

3ヶ月も宇宙に居るのに、未だに実感が湧かないが、ESP能力をフリーにしてもなんともない。逆に宇宙に包まれるような感じで安らぎを感じる。

前世でそれなりに女性とは付き合っていたし、夜を共にした事もあるが、女性の温もりとはまた違った心地良さに、私は眸を閉じて微睡みの中に身を投じた。

1ヶ月――

リアルドに準ガンダニウム合金（私が来る前のやつ）をフルで使

い。データを集め、さらに1ヶ月で、新型MS開発の打診を上層部に提出。上層部の期待度が伺えるふたつ返事で、私を中心として、ガンダニウム合金製新型MS開発プロジェクトが始動することになった。

さらに8ヶ月をかけて——結局エイフマン教授の誘い……カタギリの話しを聞く限りではどうもフラッグを造っているらしいが2304年……あと3年も間があるとみれば、これが私がもたらした世界の変革の第一歩なのだろうか？

そしてガンダニウム合金に始まる私の初のMS開発プロジェクトは、1年をかけて、ようやく1機のMSの開発に成功した。

ヴァイスリアルド

その名の通り白いリアルドだが、コレの機体性能は、リアルドの80%増し、はつきり言おう、フラッグ並みの機体を造ってしまった。ガンダニウム合金により、防御力は世界一頑丈なティエレンに比べて3倍は硬い、機動力は軽量化と新型バックパックにより60%増し、運動性はマグネット・コーティングにより40%増し、さらにパラジウムリアクター搭載と新型コンデンサーにより機体稼働時間も各段に上がった。武装もリニアライフルの5倍の電磁加速により4mのEカーボンを撃ち抜く120mm新型試作レールガンを装備。はつきり言ってフラッグよりもスゴい機体を造ってしまったかもしれない。

そして最初の飛行テストは、無論開発責任者である私が務める。

「これが……宇宙か……」

360度をカバーする全天式モニターには、漆黒の宇宙と青い地球が映っている。

しばらくその美しさに見とれていると、急に頭に刺激が走った。

「ぐっ！…な、何だ！？」

リーダーを見ても何も映ってはいない。だが確実に何かを感じている。

出所は――

「あそこからか？」

フライトコースから少し外れるアステロイド帯から感じた。そして頭の中に何かのイメージが流れ込む。

「ぐああっ！…こ、これは……っ、ああぐっ、プ、プロジェクションか…」

ESP能力の内、MUV・Luv的には2つの能力が確認されている。

感情を読み取るリーディング能力——相手の感情を色として思考をイメージとして捉えることができる。

プロジェクション能力——言葉を交わさなくてもイメージで物事を他者へと伝える能力。

そして今のところ私が使えるブロッキング能力——拒絶のイメージによりリーディングをブロックする能力だ。

そして今、私はプロジェクションにより、あるものを見せられていた。

それはとてもとても昔のこと——

イオリア・シュヘンベルグは、イノベーターの他にも、人類の進化について研究していた。

EPS能力——

そしてニュータイプに関してもだ。

しかし彼ひとりではGN粒子によって変革するイノベーターの存在しか思い当たらなかっただろう。だが、彼にはある協力者が居た。

「っ！？…はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ………は
ああ……」

頭を駆け巡るイメージが終わり、ソラは荒く息を整えた。

「転生者か……」

イオリアに人類の革新たるニュータイプが存在を示唆した男がいた。そしてその時には技術的には無理なものばかりも提示していた。例えば核エンジン搭載MSや擬似太陽炉――

「最悪だな……」

そしてそれを見たソラは、託された。

アステロイド帯から射出されたひとつのカプセルと、明らかに見覚えのあるものを――

ニュータイプでありESP能力者であり、イノベイドである少女を――

1 基のエンジンを――

「私を調停者とするのか？それとも裏切り者を予期した抑止力としたいのか？イオリア・シュヘンベルグ……そして転生者――」

mission05# ヴァイスリアルド（後書き）

魔改造リアルド登場！

感覚的には硬くて軽いフラッグだ。

mission06# フラッグVSヴァイスリアルド前編

カプセルと例のエンジンを回収した私は、軌道ステーションへと帰還した。

いきなり荷物を——しかも2つも持って帰ったことをどう説明するか迷った結果。

軌道ステーションにハッキングを仕掛けて一時的に電源を落とし、その隙に着陸した。

カプセルとエンジンは、パラジウムリアクターの倉庫に置いた。パラジウムリアクター関連はS級レベルの機密の為、開発責任者の私が許可しなければ入れないようになっている。特権万歳だ。

そして電源が回復したあとに何気ない顔で報告書を書いたり、フライトレコーダーを改竄したりやることは多かったが、アレらは、まだ世間に見せていい代物ではない。特にエンジンは——

それから数日は、日程通りヴァイスリアルドのテスト三昧だ。

超電磁レールガンの出来はそこそこだが、やはり冷却システムの問題上、地上で使うと冷却問題で1発撃つ事に3秒タイムラグが発生する。それを無視して撃てるが、10発目からは砲身が曲がり始めると、地上試験をしていた巖谷少佐から連絡をもらった。

「エイフマン教授の新型と？」

「ああ。プラストとの模擬戦で、次期主力量産機に認定されたが、

お前んとこのリアルドとも勝負させたいんだとさ」

「そうですか、日程は？」

「それはお前が決めて良いらしい。新型試作機だからな、万全の状態で戦わせたいんだろっ」

「……わかりました。上層部にはおって連絡しておきます」

「相手は訊かないのか？」

「たとえどんな相手だろうと、負けるつもりはありませんよ。開発責任者として、ファイターとして」

「はっははははは！お前も、心はファイターらしくなったな」

「腕前もそのつもりです。少佐には劣りますが」

「はは、まだまだ若い連中には負けないつもりさ。模擬戦が終わったら日本に来いよ、嬢ちゃんも待ってるぞ」

「そのつもりです。それにガンダニウムの研究も軌道に乗っていますし、そろそろまた自分の時間を持つと思います。詳しくは地上で話しますよ」

「ああ、楽しみにしてるぞ」

通信が終わり、私は早速スケジュールと、現在の作業工程の照らし合わせを始めた。

3ヶ月後。

アメリカ合衆国MSWAD基地の第3試験飛行場――

今日この日。ユニオン軍に置いてその名を歴史に残すだろう模擬戦が行われるのだ。

天才科学者レイフ・エイフマン教授が自らが指揮を取ったユニオンの次期主力量産型MSと、若干19にしてユニオンに技術革新を巻き起こす奇オ―ソラ・ビャーチェノワが開発責任者を務めたリアルドの試作強化発展機の模擬戦である。

先日、ユニオンブラスト対ユニオンフラッグの模擬戦が行われ、不運な事故もあったが、人の集まりは以前以上であった。

それもその筈。

天才と奇才が手掛けたMS同士が戦うなど、前代未聞の事態に、期待の程も大きい。

「なのにあの子はどうしたんだろうねー？」

「…ソラ、おねぼうさんじゃないのに」

カタギリは苦笑いしながら、こてんと首を傾げるイーニアと一緒に、空を舐めまわしていた。

予定より既に20分が過ぎているのにも関わらず。ソラの姿も、MSの姿もない。

試験場の滑走路では、YMS-01A プロトタイプフラッグが巡航形態でその時を待っていた。

しかし、予定より20分遅れにより、観客はピリピリし始め、中には野次や罵倒を飛ばす人も出てくる始末だ。

「少佐、なにか彼女から聞いていないんですか？」

「聞いてないから俺も気が気でないよ」

この模擬戦は注目度が異常で、明らかにプロパガンダの側面も見え隠れしていて、テレビ局まで来ている始末だ。故に遅刻とか言語道断なのだが、既存技術の粋を結集して完成をみているフラッグと、未知の技術を注ぎ込んでいるソラの試作機では勝手が違うのだろうと巖谷は思っていた。

「お、おい！なんだあれ！？」

人混みの中から声が上がった。

「ソラ……」

「おいおいまさか……」

「いくらガンダニウム合金製だからって、大気圏直接降下なんて……いやはや、彼女も無茶をするなあ」

空から降ってくる2つの赤い光――

それは段々とユニオンの人間なら一度なら見たことがあるシルエットに変わるが、近づけば近づく程に細部が変わっているのがわかる。2機のヴァイスリアルドの内、1機はMS形態でゆっくり降下して来たが、もう1機は巡航形態で強引なアプローチでだが試験場への着陸はソフトに行い。フラッグの正面を向いて止まる。

そしてあとから来たヴァイスリアルドが、先に降りたヴァイスリアルドに一挺の大型ライフルを背面に装備させ、離脱した。

「遅刻したことに先ずはお詫びを……この機体、なかなかへそ曲がりですね」

試験場に響くソラの声。だが知らぬ物にはまだ若い女性の声としかわからないだろう。

「なんと、パイロットは女性か」

「女と言って、手加減容赦不要。全力で向かって来てもらいたい」

「その旨をよしとしよう！」

擦れ違いながら空に飛び立つ2機の機体。

程なくして模擬戦開始の合図が知らされる。

「刮目させて貰おう君の力を！」

「MSの性能の差が、戦いの優劣を左右するわけではないことを、魅せてやろう！」

mission07# フラッグVSヴァイスリアルド後編

フラッグとリアルド――

その差は歴然としている。そしてそれはフラッグと、本来は戦闘中の空中変形を想定していない機体で空中変形をしてみせたグラハム・エーカー少尉と言うコンビは、現ユニオンにとって最高のコンビだろう。

だが、そんなコンビに対抗しているのがリアルドと若い女性と言う現実には、会場の人々は声があがらなかった。

「さすがはテストパイロット、新型の癖を熟知している。だが私にも意地はある！」

後ろに見えるフラッグは、こちらの頭を完璧に抑えながら回避地点に本命を撃ち込んでくる。だが、その攻撃をバレルロールや減速、加速を駆使して避けて避けて避けまくる。

「やはりこの程度の小手調べでは揺るがないか、早く顔を拝見したいものだ」

グラハムは目の前の白いリアルドの性能とパイロットの技能に素直に感心していた。

数ヶ月前の模擬戦で上官を撃墜し、死に追いやってしまった自分を未だに許せず、しばらくは空からも離れていたが、今回空を飛ぶきっかけになったのは、友人の背中押しがあったからだ。そして何よりも、以前から友人に聞いていた女性の造ったリアルドの新型試作機との模擬戦と聞いて、怖さよりもそのリアルドを見てみたいとも思った。何よりもその友人が語る様がMSや空を目の前にした自分と同じようだと思ったからだ。

「やはり君の言う通り、素晴らしい機体だなカタギリ」

姿形はリアルドの強化発展機に見えるが、性能はフラッグに見劣りしない。パイロットの腕も自分と同等……或いは上回っているかもしれない。

「たえそうだとしても、私にも意地がある！」

機体を加速させ、リアルドを追い抜く。そのまま旋回し、リアルドを正面に捉える。

「人呼んで——」

友が名付け、今この世界で私だけのマニユーパー——

「グラハム・スペシャル!!」

機体が変形し、ソニックブレードを抜き、斬りかかる。

「だとしてもっ!」

接触する寸前。

ソラは機体を急上昇させ、その攻撃をやり過ごした。

「なんと!?!」

一瞬ヴァイスリアルドを見失ったグラハムだが、上方に影。太陽を背に降下してくるヴァイスリアルドを見た。

「お前だけが変形マニューバーを使えるわけではないぞフラッグフ
アイター!!」

ヴァイスリアルドは加速し、各部を変形させ、MS形態となった。

「リアルドが変形を!?!」

「ラピットアクセレーション・モビータイブレイク・ボレーシ
ユート！！マニニューバー R a M V s！刮目しろフラッグファイター
！！」

2挺のリニアライフルで弾幕を張る。

上手く躲してみせるが、それすら計算されている牽制だ。

「誘い込まれているとわかっていても！！」

計算し尽くされた弾幕にグラハムは顔をしかめる。

ライフルで応戦するも、被弾も気にせずに突っ込んでくる。

「なんという装甲！？」

弾丸はペイントだが、中ればそのダメージの分、機体は機能が低下
するがなんともなく突っ込んでくる。

「ぐっ！」

とうとう左脚と右肩に被弾する。そのままヴァイスリアルドはフラ
ッグの脇を通り過ぎ、180度旋回しながらリニアライフルを捨て、
背中の大型ライフルを構える。試作超電磁レールガン――

「もらった!」

「やらせんよ!」

互いのライフルから弾丸が発射され、弾丸は交差し、互いのライフルに損壊判定が出る。

被弾したライフルを気にする暇もなく動いたのはグラハムのフラッグだった。

「フラッグファイター……良き名だ!その名を受け取るう、私の勝利と共にっ!」

重力を味方につけたフラッグの加速力で、ソニックブレイドから光が伸びる。ビームサーベル開発過程で生まれた技術を転用したプラズマソードだ。

「やるかあああ——!!!!」

ヴァイスリアルドは腕のブレイドシースから柄の様な物を取り出した。

「なに!？」

プラズマソードを受け止めた柄から伸びた緑色の光――

「ビームサーベルだともいうのか!！」

目を見開くグラハム。そして一瞬の隙が、勝負を分かった。

プラズマソードを弾かれたグラハムのフラッグは、すぐさまもう一本のプラズマソードを抜いたが、それすらヴァイスリアルドのプラズマソードとビームサーベルに斬り払われた。そしてプラズマソードを解いたソニックブレイドを胸部に突きつけられた。

「……私の負けだな」

「はあはあはあはあっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあ……（久しぶりに死を覚悟したぞ、フラッグファイター……）」

リアルドでフラッグを下す。

前代未聞の事態に、そしてビームサーベルと思わしき物の登場に、試験場は震撼した。

模擬戦を終えた私は、格納庫で待っていたカタギリと再会し、話しをしていた。

「まさかビームサーベルを持ってくるなんてね、遅れたのはそれかい？」

「まあな、コネクターとパラジウムリアクターの調整に手間取っただけ。それも急場しのぎ、プラズマソードと同じく現状では3分しか保たん。だがその分、良いプレゼンだっただろう？」

「そりゃそうだよ。それに、僕の予測も当ててくれた」

「友の予測だからな。無碍にもできまい。だが、エイフマン教授には悪いことをした」

「それは大丈夫さ。核エンジンを積んだMSと、バッテリー駆動のMSじゃ、そもそもパワーが違い過ぎるよ。それにフラッグの正式配備は決まっているし、君のリアルドはフラッグよりもコストが15%高いんだ。試作機2機でやっとなんだろう？」

「耳が痛い話しだな」

「それで、もう1機のパイロットはどんな人なんだい？」

「ああ……少し待ってくれ」

携帯端末で連絡を取る。

「君があのリアルドのパイロットか……」

耳に覚えのある声に振り向く。そこにはパイロットスーツを着て、ヘルメットを脇に抱えた金髪の癖っ毛の男が立っていた。

グラハム・エーカー――

ある意味、待ちわびた瞬間であった。

「あなたは」

「グラハム・エーカー少尉、フラッグのテストパイロットだ。先ほどの機動は見事だった」

「お褒め頂き、光栄の至りだ、グラハム・エーカー少尉。試作リアルド開発責任者兼テストパイロットのソラ・ビャーチェノワだ」

「なんと、君が……」

私が差し出した手を、彼が握り返しながら言った。

「逢えて光栄だ」

「こちらもだ。乙女座の私には何か運命めいた物を感じずにはいられない」

「君も乙女座か」

「オマケに空が大好きで堪らないと来ている」

「さらにMSに骨抜きときた——」

「「フッ」」

手を離すと、今度は腕同士を軽くぶつけあう。

「あーらら、やっぱりこうなったか」

「やっぱりとはなんだカタギリ」

「それに疲れた顔をしてどうした？疲労は科学者の大敵だぞ？」

「君たちがそれを言うかい？」

溜め息を吐いて苦笑いを浮かべるカタギリに、私と彼は揃って首を傾げた。

するとちょうど良く待ち人が現れた。

「なにか用か、ソラ」

「来たな。紹介しよう、私の友人のビリー・カタギリとグラハム・エーカー少尉だ」

「初めまして——」

待ち人——パイロットスーツを着た、私よりも少し幼いが、イーニアよりは年上の体格をしている女性が、ヘルメットを脱いだ。

「クリスカ・ビャーチェノワです。以後お見知り置きを」

「ぎこちなくもピシツとした敬礼をするクリスカ——」

彼女が、私が託された少女だ。

まるで狙いすましたかのような容姿と名に、転生者はクリスカ好きだったのかと眉間をしかめたのが3ヶ月前だった。

ESP能力者でニュータイプでイノベイド、いたてりつくせりだ。ちなみにこめかみにつけたヘッドセットにはニュータイプの感応能力とリーディングと脳量子波を遮断する作用がある。

他のイノベイドや超兵、ESP能力者対策である。一応、リーディングは出来なかったし、私がつければクリスカも私には干渉出来ない。今はクリスカの分しかないが、そのうち私達の方も作るつもりだ。

「ソラ！」

「イーニア！」

走りながら突っ込んで、というよりロケットずつきをして来たイーニアを抱き留める。少し腹に利いたぞ……。

「…………だれ？」

イーニアがクリスカを見ると動きが止まった。

「クリスカ・ビャーチェノワ——お前のお姉さんだよ」

「おねえさん……おねえちゃん……クリスカが……イーニアの……？」

「ああ。だから、これから仲良くな？」

「うん！」

「随分母親らしいじゃないか」

「意地悪しないで頂きたい少佐」

イーニアの後から唯依を連れてやって来た巖谷少佐に、グラハムとカタギリが敬礼し、遅れてクリスカ、不格好にソラが続いた。

「まさかビーム兵器を実用化するとはな、上も大目玉喰らってるぞ」

「3ヶ月で用意しましたからね。報告に上げてもバカにされるのが落ちだと思い、現物を披露しました」

「つまりフラッグとエーカー少尉を前座にしたか、高い前座だな」

「ご冗談を、本当なら模擬戦後に見せるつもりでしたよ。模擬戦で死を覚悟し、身体が反応してしまっただけですよ」

そう会話が成されると、グラハムの顔に影が指したのをソラは見逃さなかった。

「エーカー少尉。模擬戦とはいえ、死ぬ時もある。だが私は生きている。背負い込むな、引き摺るなどは私は言わない。だが、スレーチャー少佐もまたファイターだ。面識のない、記録でしか彼を知らない私が言うのも筋違いだろうが、あえて言わせてもらおう。同じファイターならば、彼の分まで空を飛び、彼が愛しただろう空を護るのが、遺されたお前のする戦いなのではないか？」

「ビーチェノワ……」

「ソラで構わない。空を飛び続けるフラッグファイター……私がそのステージに乗り詰めるまで、そして宣誓しよう。最高のフラッグファイターとして、お前の前を飛んでみせると！」

私は拳を突き出した。

「……フツ、望むところだと言わせてもらおう」

拳と拳を突き合わせる私達。

「そして私も宣誓しよう。キミが追いつけぬ程の世界最高のフラッグファイターとして、この空を飛び続けると」

「それこそ、望むところだと言わせてもらおう。私は負けず嫌いだ」

「私もだ」

そんな誓いを立てる私達の横では――

「ファイター根性もソラに軍配が上がったな」

「ソラさんは空が好きですからね」

「似た者同士、変に言葉なく解り合っているしね。羨ましいよ」

「ふぁいたーくんじょう?」

「…イーニアも、そのうち解るさ」

こうして誓いと共に、邂逅の時は幕を下ろした。

「書類は明日にして食事と行くか? 模擬戦故に朝食以外口にしていない」

「その旨をよしとしよう。イーニア、クリスカ行くぞ。少佐もどうですか? カタギリも唯依も」

「それじゃあ、新たな出逢いと祝勝祝いと洒落込むか!」

「僕も構わないよ」

「私もです」

囁かだが、温かい祝勝会を開いた一行は、翌朝まで飲んだりして、ソラとグラハムは祝勝会の8割りを空とMSの素晴らしさについて語り合っていたのだとさ――

機体解説 ヴァイスリアルド（前書き）

ヴァイスリアルドの大まかな設定だ。刮目して見よ、フラッグファ
イター！

機体解説 ヴァイスリアルド

ヴァイスリアルド

型式番号：VMS - 15 - 01C / VMS - 15 - 02C

全高：18.5m

頭頂高：15.3m

本体重量：8.6t

動力機関：パラジウムリアクター

推進機関：水素プラズマジェットエンジン

ソラガリアルドを母体に開発した、世界初の核エンジン搭載MS。

Eカーボンの約1/7の重量であるガンダニウム合金製MSでもあり、全体の姿形はリアルドであるが、総合スペックで僅かにフラッグを上回っている。しかしパラジウムリアクターの調整が困難であり、コストもフラッグより15%高いという、いろいろと課題が残る機体でもある。

試作機2機が建造された。

武装

リニアライフル

試作超電磁レールガン

ソニックブレイド/プラズマソード

ビームサーベルA・C・

ディフェンスロッド

20?機銃

肩部ロケットランチャー

機体イメージ

変形させる為に、背面をメタスやリゼルを参考にして開発している為、機体はリアルドで背中がリゼルとイメージしてくれて構わない。

mission08# 邂逅の空

模擬戦後、ソラはユニオン中の技術開発部からオフアーが殺到した。ソラがもたらず技術は、ユニオンの軍事力に幾つもの道を指し示した。フラッグの3年繰り上げ実戦配備もそれに起因する。

そしてファイターの間でも、グラハムとソラ——フラッグとヴァイスリアルドの模擬戦は半ば伝説化され、そして模擬戦を視察に来ていたAEUや人革連は、ユニオンのビーム兵器の実用化に危機感を抱く。

世界的に有名なMS開発技術者——レイフ・エイフマン教授でさえ到達していない高みの頭脳を持つ存在を引き入れようとするが、ソラは何処にも首を縦に振らなかった。

「ふう……」

クリスカの眠っていたカプセルに横たわり、ソラはカプセルのシステムにアクセスしていた。驚くことに、これはコールドスリープ装置でありながらヴェーダのターミナルユニットでもあり、ESP能力者でも使えるようになっていた。もっとも、バイオメトリクスによりクリスカしかアクセス出来ないのだが、私とクリスカのバイオメトリクスはかなりの類似点が見られ、こうしてシステムにアクセスが出来る。だが、強引なアプローチ故か、転生者の意図か、ヴェーダの意思か、アクセスする度に、私は00のストーリーに関する知識や記憶を失っていく。しかし、そうまでしてもヴェーダにアク

セスしなければならぬ。これよりボンズ対策であり、MSの開発技術のさらなる発展の為だ。

模擬戦より2ヵ月。

私はクリスカと共に、ユニオンの国際総合大学に居た。理由はパイロットになる為だ。

私はMSを造るのも好きだが、何よりもこの空が好きで、私の手の届く範囲で良いから護りたいと思った事も大きい。だが一番はやはりグラハムとの誓いが一番の理由だ。

男の誓いに訂正はない。私はフラッグを駆って、グラハムを超える！

故に私はパイロットを目指す。クリスカは、いざという時に軍属であれば身の安全はある程度は確保出来るからだ。それにクリスカもフラッグに少なからず興味があるらしい。

半年間という短期間カリキュラムだが、私は大学の単位は持っているため、実質軍事基礎訓練を終えればカリキュラムは終了で、授業

時間にも虫食いのように穴がある。クリスカもテストパイロットと
言うことで半年間の短期間カリキュラムを受けているが私と違って
フルで入っている。まあ、同世代の友人が出来ればそれで良いんだ
が、クリスカは突っかかり難いからな。似たような私が言うのもア
レなんだが――

そんなわけで、今私は空き時間を利用して、MSの設計を行ってい
る。ヴァイスリアルドの量産型モデルだ。コストのネックはパラジ
ウムリアクターとガンダニウム合金にある。それを性能を落とさ
ずにフラッグよりもコストを抑えろと言われるのだから、上も無茶
を言う。

「何をしているんだ？」

「クリスカか、授業は？」

「昼食だからと講師が早めに切り上げた。良いのかあれば」

「時々そういう講師も居るさ」

私の隣りに座って弁当箱を広げるクリスカ。

「午後は実機を使った訓練だったな」

「…そうだった」

それを言つとクリス力は広げた弁当箱をしまった。MSに乗る前にはあまり食事はしない方が良いのだ。胃の中身をブチまけたくなければな。

「久方の空だ。心が躍らずにはいられない」

「お前は本当に空が好きだな」

「自他認める空バカだからな私は。あの蒼い虚空の蒼穹の大空に心奪われた人間さ、MSに乗って飛ぶようになってからは余計にな」

「……羨ましいな。私には、そのような感情がわからない」

「そのうち解るさ。お前はまだまだ若い……」

もう精神的に40である私から見れば、クリス力は倍も歳の離れた女の子でしかない。先達として、託された者として、彼女を導くのも、私の役目だ。

「空は良い……」

リアルドの編隊に紛れて、私はヴァイスリアルドを駆って空を飛んでいた。少しでもデータを取る為に、上層部からのお達しでもある。まあ、その所為で他のパイロット候補生には嫌われてしまっているがな。

「全機に通達。直ちに引き返すぞ、先頭はソラ・ビャーチェノワが務める」

「何かあったのでありますが、教官殿」

「ああ、スクランブルだ」

スクランブル――

テロリストでも出たのか？

「お供します」

「ダメだ。命令に従え」

「先頭はクリスカ・ビャーチェノワでも務められます。ヴァイスリアルドの足ならば邪魔は致しません」

今現在、武装しているのは教官のリアルドのみであり、スクランブルでも出撃には時間を要する。その間、教官ひとりで敵を足止めして生きて帰れる保証はない。

ヴァイスリアルドならば盾代わりにはなる上に、機密保持の為に、世界に唯一のビームサーベルはいつも装備している。調整も完璧で充分戦闘行動は出来る。

「わかった。だが死ぬなよ、お前はユニオンの空をリードするファイターなんだからな」

私が頷くと、ヴァイスリアルドにデータリンクで情報が表示される。

目的地はそうは遠くなく、敵はテロリスト——確認出来る戦力でもヘリオン15機とアンフ6機と中々に豪勢であり、迎撃に先行したリアルド隊は全滅したとのこと。犯行声明も出ており、内容はありきたりな反政府抗議と留置されている仲間の釈放であった。

「今日の私は、少々腹の虫の居所が悪いぞ。テロリスト……」

先行したリアルドは2個小隊計6機。つまり6人のファイターが命を落としたのだ。

ユニオン国際総合大学は、MSWA D基地の近場とあって、パイロットコースには臨時講師に現役のパイロットが招かれることもある。

私達の教官——ハワード・メイスン軍曹もそのひとりだ。

今はまだリアルドに乗っているが、彼がフラッグを語る姿は子ども
のようで、まさに真正銘のフラッグファイターを垣間見た瞬間で
もあった。そしてあとはグラハムと同じようにファイター同士、意
気投合したのだ。模擬戦では64試合中、21勝20敗23引き分
けと、かなりもつれ混んでいる。

一度目は私が勝てたが、次から回を重ねる毎にハワード教官は私の
動きに追隨して来た。同じリアルドでこうなのだ、やはりグラハム
との勝負はヴァイスリアルドの性能のお陰だと痛感した。そしてフ
ラッグファイターと言う存在の大きさを垣間見れたことは僥倖だっ
た。以来、私は空き時間に新型リアルドの設計図を模索しながら、
シミュレーターに籠もることも多くなった。データ検証の名目でシ
ミュレーターを好きに使えるのは、時の人の特権だな。

つまり何が言いたいのか、仲間であり、同じ空を駆けるファイター
に哀悼の意を表すると共に、テロリストを捕まえ、彼らの墓前に土
下座させる事を胸に誓う。ハワード教官の後に続くように、私はヴ
ァイスリアルドを飛ばす。逸る気持ちを抑えながら。

数分後、後方から1機のリアルドが接近してくる。教官の減速に合
わせて減速、3機編隊を組む。

「遅れてすまねえ、ハワード」

「ダリルか、そうか、お前も訓練生と飛行研修だったか」

ダリル・ダッジ——

ハワード教官と同じく臨時講師に来ているMSWAD所属のファイターで、階級は同じく軍曹である。

「ああ、それにしてもその白いリアルドはまさか」

「ソラ・ビャーチェノワ訓練生のヴァイスリアルドだ」

「お初にお目にかかります」

「まさかお前と一緒に飛べるとはな、ファイターとして自慢になるよ」

「気を抜くなよダリル」

「わかってるさ」

「センサーに反応？速いな……フツ、待ちわびたぞ」

後方から3機のリアルドを追い抜いて前に出る機体。現在ユニオンでエースパイロットや特殊部隊に優先配備されている最新鋭MS―ユニオンフラッグ

「待ちかねたぞ、フラッグファイター！」

「「エーカー少尉！」」

「待たせたなハワード、ダリル。そしてキミと共に空を飛べる事を

不謹慎にも嬉しく思うぞ、ソラ」

「それは私もだ、グラハム……いや、隊長と呼ぶべきか？」

「グラハムで構わないさ。これはカタギリからの餞別だ」

グラハムのフラッグが、リニアライフルの弾倉を巡航形態の私のヴ
アイスリアルドの2挺のリニアライフルに装填してくれた。

「カタギリが？」

「キミの妹から連絡が行ったらしい」

「そうか、さすがクリスカだ。あとで礼を言わないとな」

「そうすると良い。……さて、お喋りはここまでだ。私がこの隊の
指揮を執る、いいな！」

「」「了解！」「」

これが未来のフラッグファイター達の出逢いだった。

「グラハム！目標をレーダーで捉えた。前方2時、ヘリオン15、
アンプ6、間違いないターゲットだ」

「さすがヴアイスリアルド、フラッグのレーダーよりもレンジが広

いと恐れている」

「関心はあとだ。指示を」

「言われずとも。エーカー隊、スタンドマニューバーと同時に散開。弔い合戦だ！だが殺すなよ、奴らを彼らの墓前に突き出す！」

「了解！」「」

「全機、フルブラスト！」

加速する4機のMS。

約5倍の兵力差だが、それを埋めてお釣りが来る程、このチームの練度が高い。

武器やカメラだけを撃ち抜くという器用な戦い方をしながらも、彼らに1発の被弾はなかった。

そして最後のヘリオンは少し手応えがあったが、相手が悪すぎた。

「グラハム！」

「その旨をよしとする！ハワード！ダリル！」

「了解！」「」

Gに耐えられるソラのヴァイスリアルドがヘリオンを追い越して急

旋回、退路を断つ。方向を変えようとしたところに、ハワードとダリルのリアルドがリニアライフルで牽制し、動きを封じる。

そして、加速して突っ込むフラッグとヴァイスリアルド――

「人呼んで――グラハム・スペシャル!!」

空中機動変形マニューバー――通称グラハム・マニューバー（グラハム・スペシャル）。

変形し、プラズマソード2本とビームサーベルとプラズマソードを抜くフラッグとヴァイスリアルド――

「うおおおっ!!」

グラハムは、擦れ違い様に、ヘリオンの頭と左腕を切り裂き、ソラは、擦れ違い様に右腕と両脚を切り裂き、バランスを崩したヘリオンは、落下した。

「フォーメーションEF9――即興だったが、成功したな」

「見事なフォーメーションプランとミッションプランだ。キミは戦術予報士の技量も持ち合わせているようだな、羨ましい限りだよ」

「なに、器用貧乏なだけさ」

敵の横から高機動による強襲と、各自の技量を考慮した各個撃破の遊撃戦。そして最後のヘリオンに対するフォーメーションは即興で――丁度4機編成だった為、名前はネタ的だが内容はちゃんとした攻撃フォーメーションで対応した。すべてソラの提案であり、ソラの実力を知るグラハムとハワードがその提案を採用したのだった。

「見事なフォーメーションだった。機会があればまた使いたいものだ。我々4人で」

「恐縮ですハワード教官。その日が来る事を心待ちにしております」

「さーて、帰ってメシにすつか、奢るぞルーキー」

「では、お世話になります」

「ミッションコンプリート。後発隊到着後、全機帰投するぞ」

「了解！」「」

「肩身が狭いな」

ヴァイスリアルドでの出撃によって久しぶりの実戦データには満足しているらしいが、量産型のヴァイスリアルドの催促も言うてくるから一概に良いことだけでもない。

さらに風当たりもまた強くなった。

「元気がないな、ソラ」

「ハワード教官」

定番のごとく食堂の隅でひとりで食事をしながら端末をいじっている私の隣りに、ハワード教官が腰掛けた。

「妹は一緒じゃないのか？」

「私のような姉とは居るべきではないのですよ。あの子にもようやく友人が出来たようですね」

最近、パイロットコースにて頭角を表し始めた訓練生達に、クリス

力も闘争心が刺激されているらしく、時々私も模擬戦につき合われる。

「それは聞き捨てならないな」

「別に良いですよ。日本の工学部でも同じでしたからね。天才は憧憬されますが、奇才は嫉妬されやすい」

世間一般では他人より優れていると天才と呼ばれてちやほやされるが、奇才は受け入れられずに遠ざけられ、結果を出せば嫉妬されやすいのが常。それが私がこの数年で実感したことだ。

「どうしたんだハワード、そんな片隅でずっと、ソラも居たのか」

「いやなに、悩める教え子の話を聞いてたのさ」

私には肉体的同年代の友人は皆無だが、代わりにこうしてファイターの知り合いやグラハムやカタギリのお陰であまり寂しくもない。やはり中身が中身だからかな？

量産型のヴァイスリアルドについては、パラジウムリアクターをバッテリーに戻し、新型コンデンサーを導入することで、パラジウムリアクターの約80%の出力ながらも機体性能にはそれほど影響がないようには出来た。そもそも量産の予定がなかった為に、そういう部分を度外視で造っていたため、若干の機体性能の低下は仕方がない。

ガンダニュームも研究は進み、ヴァイスリアルドに使っているガンダニュームをガンダニュームαと呼称し、今は防御力が30%下がるがコストが50%削減出来る新型のガンダニュームγを使って、先行量産試作型ヴァイスリアルドが、一部配備されつつある。そして私の権限で1号機と2号機はハワード教官とダリル教官に使って貰っている。他には3号機が士官学校を出てから日本の巖谷少佐の下で試作MSの実験運用をしている唯依の下に送ったくらいで、以後の生産ロットがどこに配備されているかはわからない。しかしMSWAD基地やアラスカに多数配備されているらしい。

他にも――背部のエンジンと翼を小型化し、機体の変形機構を排除、脚部にスラスタ、両肩に180mmリニアキャノンを増設。バッテリーとコンデンサーの他に、エステバリスの重力波受信アンテナを模したアンテナとバイナダーを背中に装備し太陽光発電システムからマイクロウェーブで電力を無線供給する外部電源方式を採用した陸戦型ヴァイスリアルドの実戦配備が決まった。特許料でがっばり儲けているが、悲しいかな、あまり使う道がない。

さらに少々取り回しに難を抱えるが、超電磁レールガンから発展したG・レールガンも実戦配備にこぎ着けた。ビーム兵器はまだまだ課題研究が必要なものの、高威力で射程も申し分ない為、特殊部隊を中心に配備され戦果を上げているらしい。

「トリニティーに真つ先に殺されるな、私は」

しかし私は止まらないし止まるつもりも毛頭ない。

現在はフラッグを私の技術での強化プランを考えると共に対ガンダムを本格的に意識した機体を開発中であり、その機体から本格的な反応炉とビーム兵器を搭載した世界初のMSとなる。さらにあと1ヶ月後には晴れて軍人になる為、さっそく試作機の実験運用部隊も作りたいとも思っている。

実質あと2年で武力介入が始まる。

それまでに私は……

世界は……

どこまで力をつけられるかが課題だな。

mission09# あと2年…（後書き）

ユニオンが戦力増加傾向にある今日的一幕だ。

これにAEUや人革連が呼応するかしないかの賛否をフラッグフア
イター諸君に問いたい。意見を待っている。

mission10# 期待の奇才

カリキュラムを無事に終えた私達は、久し振りに日本の地を踏んだ。
クリスカにとっては初めての日本上陸だが。

「ただいま」

玄関に入ると、リビングに続くドアが勢い良く開け放たれた。

「ソーラー……!!」

リニアカタパルトで加速したのかとツツコミたくなる勢いをつけて
イーニアが飛びついて来た。

「わつと、え、ちょ!」

「つと、…大丈夫か、ソー」

「あ、ああ、すまないクリスカ。イーニア危ないだろう?」

「うう、だって…」

勢いを抑え切れずに後ろに倒れそうなのをクリスカに助けられた。

後頭部に当たる柔らかい感触は脳内から徹底排除しながら、イーニアに注意する。しゅんとするイーニアだが、私達はただでさえ身体能力が高いのだから気をつけなければならぬのだ。

「唯依は居ないのか？」

「きょうはおしごといそがしいって、あたらしいのきたからって」

「そうか、陸戦型ヴァイスリアルドの第一陣が来たか」

今ユニオンは、リアルドの数を減らしながら、新型機を順次配備している。

手持ちのMSの数が決められてしまっている以上、性能面で戦力を上げていくしかないのだ。言ってしまうと、数さえ守れば、全機を核エンジン搭載MSにしても文句は言われても条約には違反しないのだ。

「なら、今日は家族水入らずだな」

「うん！」

「…家族……」

「私達は家族だろう？ クリスカ」

「家族…か……」

抱きついてくるイーニアを抱き留めながら、私は後ろを向いた。頬を僅かに赤らめながら軟らかい表情を浮かべるクリスカがそこにいた。そして何を思ったのか、私との距離を縮めて、私の両脇に腕を通してイーニアの背中に回した。つまり私ごとイーニアを抱き締めたのか？

「クリスカ……？」

「…今だけ……少しだけ……こうさせてくれ……」

ヘッドセットを外しながら呟いたクリスカが、私の背中に頬をあてた。

初めてクリスカが甘え？を見せたことに、私は口元に弧を描きながら、しばらくそのままにしていることにした。

「ソラ・ビャーチェノワ上級大尉、クリスカ・ビャーチェノワ准尉、

本日付けで、ユニオン在日駐留軍第一技術部にただいま着任致しました」

「ご苦労。向こうじゃえらく有名人になって戻って来たな、ソラ」

「そうする必要があったと、あくまでも私の判断ですよ。巖谷中佐」

私が他のオファーを断っていたのは、ここに居場所があると見たからだ。つまり古巣の方が気兼ねなく出来るのだ。

「着任祝いに、お前にはプレゼントがある」

「プレゼント？」

「ああ、上層部に掛け合つてな、参謀本部のカタギリ司令からの推薦もあつて、お前に実験運用部隊と、実験資材としてフラッグ1機とパーツで2機分を手配して貰った」

「ホーマー・カタギリ副……いえ、カタギリ司令がですか？しかも実質フラッグを3機も」

「世界で唯一ビーム兵器を運用するお前さんに、上も期待を寄せているのさ、予算も必要に応じて用意してくれるとさ」

「よもやそこまで」

「お前は無自覚な部分も時々あるが、今ユニオン……いや、世界はお前に注目している。AEUや人革連も新型機開発にやつけになっ

ている。新型造るのにあれやこれやで平均5年前後はかかるのを、お前は5年で3機造ってMSに搭載可能な核融合炉を造ってビーム兵器まで造ってみせた。異様な事だが、決して不可能でもない。戦時中は開発スピードも速い、それを思えば不思議でもない。だからお前はお前の好きなように動け、技術屋としてもファイターとしても、後悔のないようにな」

「はっ！」

巖谷中佐に敬礼で答えた。少なからず騙していることに良心が痛むが、今はまだ話すわけにはいかない。彼らが現れてくれなければ、だが私は現れるのを知っていて黙っているつもりはない。

恨みも何もないが、彼らが武力介入を始めればトリニティーも現れる。CBに恨みはない、彼らの行動理念——イオリア・シュヘンベルグの理念もわかる。人類が対話を成す為には変わらなければならぬのだから。それが良し悪しでも——

だが手当たり次第に、果てには鬱憤晴らしで民間人を撃つクズにくれてやる慈悲もない。

だいぶ細かいところはヴェーダとのリンクで失われてきてしまっただけだが、それでも現状覚えているものでも私の怒りは収まりきれない。下手を打てば恩師や友人を殺され傷つけられるのだから——

「少々の無理もお前のネームバリューなら無視は出来ないだろう。技術屋として俺も期待してる。頑張れよ」

「はっ！粉骨碎身の限り、全力を尽くします」

ここから、私の次の戦いが始まる。着任報告と挨拶を終えた私は、身を引き締めて格納庫へと向かった。

「着任早々での実験運用でも新設の部隊を任せる。中佐の言う通り、機体されているらしいな」

「望むところだと言わせてもらおう」

技術部のオフィスビルを出て、格納庫へと続く道を歩く。

リアルドやフラッグに混じって先行量産試作型ヴァイスリアルドが空を駆け、地上でも陸戦型ヴァイスリアルドがホバーを駆使して地を駆ける。

「壮观だな、ファイターの血が騒ぐ」

空を駆け、地を駆けるMSを見ながら顔を輝かせるソラに、クリスカは子どものようなとも思いながらそのあとをついて行った。

mission 11# 血塗られた運命……

ユニオン在日駐留軍第一技術部に着任し、1ヶ月。

この1ヶ月は新武装の開発に勤しんだ。

特殊部隊で好評のG・レールガンの強化型にG・レールガンカスタム(第3次αのG・レールガン)を拵え、さらにレールガンを取りニライフルのように扱いたいとの意見もあったため、リオン系のレールガンやバーストレールガンを開発。量産型ヴァイスリアルドの標準装備としてリオンのレールガン、陸戦型ヴァイスリアルドの拠点防御用やパイロットの選択によってランドリオンの大型レールガン、フラッグ向けにバーストレールガンが採用された。

他にはソニックブレイドのバリエーションに、刀身を延長したソニックセイバー、そして私達向けには高周波振動を強化した高振動粒子で形成された刃を超高周波振動を起こして驚異的な切れ味を出すプログレッシブナイフを開発。厚さ約3mのEカーボンがバターのようになく切れたのにはさすがの私も目が点になった。接触する物質を分子レベルで分離する事で切断するを忠実に再現したらこうなった。さすが未知の生物にもトドメを刺せる兵器だ、GNブレイドやGNソードより切れ味抜群なんじゃないか？

あとは届いたフラッグは、組み立てられて送られた機体はパーツ取り用に保管し、バラの機体をいじりながら組み立てていった。動力をパラジウムリアクターにしてマグネット・コーティングを施し、第2次装甲からガンダニュームαに代えたただだが、それでもパワーと防御力と運動性と機動性が向上し姿形の別の機体となる。

仕様のにはヴァイスリアルドと変わらない為に、私とクリスカは暫

定期的にヴァイスフラッグと呼んでいる。

「PMCめ、性懲りもなく……！」

定期的にPMCにハッキングをしているが、数日前から不穏な金や物質の動きがあった。

気になった私はヴェーダにアクセスして再度アタックしてみたら、我が目を疑う情報が入って来た。

潰したはずのEPS能力研究所が、私の潰した物の他にもあったということだ。

前称の通り、定期的にハッキングしていたとあって、今更見つけた事に、自分自身に腹が立った。しかも場所はなんと北海道だという。

「まさか日本に研究所を置いているとはな」

「中佐、出撃許可を下さい。これは私が片付けなければならない問題です」

「本気か？また兄弟を殺すのか？」

「先刻承知の上です。覚悟は出来ています」

「……わかった。これは俺の所で留めておく」

「ありがとうございます。中佐」

巖谷中佐との通信を終えた私は、後ろに居るクリスカに振り返った。
しかし居るのはクリスカだけではなかった。

「ソラ…」

「イーニア……」

「わたしも——」

「ダメだ」

「え？」

「今回は私ひとりだけで行く。イーニアはクリスカとお留守番してくれ」

「どうして？ソラ、どうして？」

「……どうしても、だ」

「いやだ。わたしもいく！」

「ダメと言ったらダメだ」

同族殺しは、私ひとりで充分だ。

「ソラ」

「クリスカ、イーニアを頼む」

「ソラ！」

「……行ってくる」

私はイーニアの呼び止める声を背に、私は家を出た。

「パラジウムリアクター出力安定、長距離侵攻用ブースター接続状況クリア。アルファ1よりCPへ、発進準備完了」

「こちらCP了解。良き旅を、ビャーチェノワ大尉」

「感謝する。ソラ・ビャーチェノワ、ヴァイスフラッグ……出るぞっ！」

普通の離陸とはまた違うGが身体をシートに抑えつける。

第2次装甲からガンダニュームαを使っている為、フルで使った9tよりも重い11tクラスだが、それでも67tあるノーマルのフラッグよりは俄然軽い為、離陸はノーマルフラッグより軽い。

「（低空飛行で5時間の旅か……純粹に空を飛べないのは口惜しいが——）」

発進後、太平洋からオホーツク海に向けて飛び、北から南下する形で飛行プランを設定して自動操縦に切り替える。

今日の装備は、バーストレールガン1挺、大型レールガン1挺、ビームサーベルとプログナイフに、バックパックの両翼に無誘導式ミサイルランチャーを装備してきた。

これだけあればよほどのヘマをしなければ無傷で帰ってこれるだろう。

「所詮は血塗られた運命……今更その罪から、免れようとは思わん。同族の血に濡れるのは私ひとりで充分だ」

機体が更に加速し、巡航速度に移行する。

mission 12 # 電

超低空飛行——地上から3mもの低空で、北海道を南下。

北海道は2305年現在でも自然に溢れていて、内陸部には手付かずの地帯も存在する。そんな手付かずの自然の中にPMCのEPS能力秘密研究所は存在する。

人工EPS能力者は、5年前の時、偶然私達の居た研究所からこっちの研究所に移れた2人のEPS能力者だけ。しかし1人は実験中に死亡し、残ったのはシェスチナ……第6世代の12の女の子、イニアの1つ下の子だけだ。

「ミッショントタイムクリア、これより攻撃を開始する」

迷彩塗料や自然の木々により上手く隠れていて、衛星からはその姿を捉えるのは難しいだろう。

「レーダーに乱れ？ECM？仕掛けてくるか！」

長距離侵攻用ブースターをパージし、機体を減速。前方からリニアライフルの弾幕が押し寄せる。陸戦型ヘリオンの防衛隊だ。

「又ルイ！」

フラッグを巡航形態からMS形態に変形させ、大型レールガンで応戦する。追加された正面装甲すら紙のように撃ち抜く弾丸とその威力に喜悦を浮かべつつ、機体の機動力で翻弄する。ヴァイスフラッグのバックパックは通常の物だが、機体重量が減って軽くなっている分、機動性が上がるのは当然であり、これでこのヴァイスフラッグをカスタムフラッグにしたらどうなるのだろうとついつい妄想が飛び出す、図面を引くのは、この私戦を終えてからだ。

P M C E P S 能力秘密研究所――

「フラッグだと！？しかも1機だと！？」

「はっ！現在第3防衛ラインにて防衛MS隊と応戦中ですが」

「この短時間でそこまで食い込んでくるか……だがなぜこの場所を………研究員と機材の回避は？」

「既に始めていますが、間に合うかどうか……」

「……モルモットをアグリッサに乗せて防衛させる」

「し、しかし！」

「データは充分に取れている。データさえ残れば研究は続けられる。なに、生きていればいたでまたモルモットにすれば良い」

「了解しました……」

「さすがだな、それなりに手勢が揃っているらしい。だが！」

空中から迫る巡航形態のヘリオンのリニアライフルをバレルロールで躲しながら、擦れ違い様にビームサーベルで下から斜めに掬い上げる斬り裂く。

そこから機体を上昇させ、無誘導式ミサイルランチャーを、施設に向けて全弾立て続けに放ち、空になったミサイルランチャーをパー

ジする。

対空砲やMSがミサイルを迎撃するが、中には弾幕をかくぐつて着弾する物もある。迎撃された分も合わせた爆煙により、施設からはこちらが見えないが、こちらは的確な位置を掴めた。

大型レールガンを構えて、操縦桿のトリガーを引く。砲身冷却のギリギリまで撃ち続け、残り少ない弾倉を取り替えて、バーストレールガンを装備させる。

連続的で大きな爆発が続き、空中に居るヴァイスフラッグへの攻撃が止んだ。つまり施設に隣接でもしているまたは施設内にある司令部と連絡が途絶えて指揮系統が分断されているのだろっ。

「戦場で動きを止めるとは、ナンセンスだな」

ミサイルを迎撃された地点周りにバーストレールガンを撃ち込む。森の中にいくつかの爆発が起こり、MSや対空砲に着弾したのが伺い知れる。

「それで…っ！」

殺気を感じて機体を動かす。瞬間、施設の方の爆煙の中から青白い閃光が放たれた。

「プラズマキャノンか！？まさか！！」

爆煙の中から現れたのは、武装を機体上部に増設したアグリッサであつた。

「くっ、沈め！」

バーストレールガンを撃つが、アグリッサはその巨体とは反した軽やかな動きでこちらの攻撃を回避し、増設されたリニアライフルやミサイルを撃ってきた。

「やる！だが！！」

攻撃を躲し、撃ち、躲され、撃ち返され――

まるでこちらの攻撃を読まれているかのように感じられて気持ち悪い。しかし――

「リーディングされているわけでもなしにここまで私が外すとは」

どちらも攻撃の当たらない状況に、私は打って出ることにした。

いくらMAだろうと太陽光紛争時に開発された旧式の機体だ。ユニ

オンの最新鋭機であり、それを強化した私のフラッグが負ける道理はない。

「いくぞ、ヴァイスフラッグ！」

大型レールガンとバーストレールガン、20mm機銃で牽制する。しかし牽制にも本命を入れるが、アグリッサは本命は回避し、牽制は必要以上避けずにこちらに突っ込んで来た。向こうも痺れを切らしたらしい。だが、アグリッサの機能を知っている私にはその突進は無謀だ。

接触する前にアグリッサは脚を開き、ヴァイスフラッグを捕まえようとしたが、私はビームサーベルでアグリッサの脚を斬り、プログナイフでその底面を斬り裂きながら擦れ違ふ。

破損箇所から小規模の爆発を起こしながらアグリッサは地上に不時着した。

その後は、指揮系統が分断した部隊は脆く、リーディングで敵の位置を探りながら敵を殲滅、地下道から逃げる研究員達もレールガンの餌食になった。あとは基地に戻ってPMCのコンピュータに侵入してEPS関連のデータを徹底的に削除なりすれば平気だろう。

私は引き返す前にアグリッサの横に機体を着陸させた。コックピットのハッチを力任せにひっぺがえし、遠隔操作でいつでも撃てるようにして銃を持ってフラッグを降ろす。

このアグリッサのパイロットがEPS能力者なのは、戦っている最

中のリーディングを受けたことで確信がある。死んでいるならそれでもいい。生きていて抵抗するなら撃つ。

アグリッサのコックピットの中に入った私は絶句した。

コックピットのシートに座る少女だが、裸の上に四軀を固定され、人革連のパイロットスーツのヘルメットの様な物を被せられていた。ヘルメットからは様々なコードが伸びていて、シートには操縦桿やフットペダルはあるが、少女のサイズにはあっていない。つまり――

「サ、サイコ・コントロールシステムとでも言うのか!？」

まさかPMCがここまで来るとは……

私のような転生者の介入を一瞬頭を過ぎたが、それならばAEU辺りで技術革新くらい起こっても良いはずだ。しかしそんな噂は聞いてはいない。ならば自力で到達したとでも言うのか――

「どちらにしろ、これは持ち帰る他はないな」

先ずは少女をコックピットから出すことを始めた。ヘルメットを取ったところで再び絶句。

「これでEPS能力者3人娘の揃い踏みか……」

ここのEPSの研究は独立端末でしていたらしく、誰が居たのかわからなかったが、少女の容姿にある人物の面影を見て、私のヘッドセットを逆さまに少女に着けて角度を弄ればなんとなくでも特徴が見えた。

社霞――

被験体名はわからないが、シェスチナ、第6世代の高いEPS能力の保持者だ。あとのデータは独立端末と共に吹き飛んだだろう。

「はあ……」

私は少女にちゃんとヘッドセットを着け直し――サイズが私様の為に合わないが――彼女の身体に以上がないかを調べたが、がちり固定されていたのが良かったらしい。

「……無言と言うのも対応に困るな」

少女は別に気を失っていたわけでもない。ただ機体がシステムダウンして動かないだけだ。なのに襲いかかってこようとせず、私の顔をジッと見つめているだけだ。

とりあえずシートから降ろす為に手を引いたら、あっさりと引かれてシートから離れた。まるで人形だと私は思った。

「自分の名前はわかるか」

「……………」

「お前はどつする。まだ戦うか？」

「……………」

「……はあ……」

私は彼女のヘッドセットを取ると、彼女とリンクを開始した。リーディングとプロジェクションを使えば、脳量子波の様に言葉がなくても相互の意思疎通が可能だ。

プロジェクションで呼びかけると、彼女は僅かに反応した。そして向こうからもプロジェクションで返事が返って来た。

助けて……と。

その後はリーディングとプロジェクションによって彼女の過去を垣間見たが、彼女もマトモな扱いは受けていなかった。ひとりになってからはまだマシになっても、やはりそこまで変わることはなかった。彼女はともプロジェクション能力にずば抜ける強化処置と遺伝子操作を受けているらしい。しかし、その処置や実験はやはりマトモではなく、彼女は自己防衛の為に心を封印して人形になり、廃人になるのを免れていたらしい。それは目の前で唯一の仲間を失ったのが最大の原因だ。リーディングとプロジェクションにより、死の鮮烈なイメージを直接受けた彼女は、死に臆病になり、どんな形でも生にしがみついた。それ故に人形になったというわけだ。

「すまない。もっと早くに見つけてあげられれば辛い思いもしなずにすんだのにな……」

謝られても彼女が困るだけだろうが、私が早く見つけていれば彼女の苦痛もその分短かっただろう。

私はヴァイスフラッグのコックピットに少女を連れて行き、私の予備のパイロットスーツを着せた。ブカブカだが何も着ていないよりはマシだろう。

そのままヴァイスフラッグで、アグリッサの機体を掴み、ゆっくりと上昇するが、アグリッサが重すぎて持ち上げるので精一杯だったが突然アグリッサが動き始め、生きているスラスターを吹かし、ヴァイスフラッグの動きに同調したお陰で難なく移動し始めた。

「まさかお前が？」

返答はないが、プロジェクションで肯定の意思が伝わった。

まさか遠隔操作まで可能とは、機械がスゴいのかこの子がスゴいのかわからないな。

私はアグリッサのスピードに合わせながらヴァイスフラッグを飛ばし、北海道の在日駐留軍基地に立ち寄り、補給と整備、そしてアグリッサを修理し、ヴァイスフラッグから無線操作出来る様に改良し、

私達は東京の在日駐留軍基地に帰還した。

「社霞。まあ、新しい家族で末っ子だ。仲良くするんだぞ2人とも」

「良いのか、ソラ……」

「大丈夫さ。この子は信頼出来る」

私が霞の頭にポンツと手を乗せると、イーニアがムスツとして自分にもとせがんで来た。そして頭に手を乗せてやれば動かせとか注文された。

イーニアとしては頭を撫でられるのは自分の特権だったのが霞に奪われてしまうと思つての行動だが、常にブロックキングしてさらにヘッドセットを着けているソラには知る由もなかった。

「ああ、それとクリスカ、明日から忙しくなるから覚悟しておけよ」

「……なにかしたのか？」

「プロジェクトで動くアグリッサを持ち帰った。その解析作業に入るからだ」

「……わかった」

プロジェクト能力でMAが動かせるということに最初はキョト

ンとしたクリス力だが、霞を見て、その目は怒気に染まり始めた。

「ソラ……」

「PMCは非公式だが一部の暴走だと言って来た。やけにあっさりしているところを見れば、世界にはEPS能力者は私達4人ということなのだろう。だが監視は続けるし、叩ける埃もすべて手元に既にある。あとは上層部の判断を待つさ。だがあまり期待はするなよ？事と次第によってはPMCどこるかモラリアやAEUと戦争になるからな」

「……チッ」

心底悔しそうに舌打ちしたクリス力。その様子に不謹慎にも私は嬉しく思う。誰かの為に怒りを感じる。これほどまでに人間らしさはないだろう。

クリス力はイノベイドでもある分、人間より長生きだ。さらにニュータイプであり私達と同じEPS能力者だ。その事に少なからず他人との距離感はあったが、それでもその距離感は自然と狭まり始めているのを、最近感じるようになって来た。それはやはり人懐っこいイーニアや、私達の事を知りながら人間扱いしてくれる巖谷中佐の存在が大きいだろう——しかしソラは1つだけ知らない。クリス力がそう変わっている最大の要因は、普段からリーディングやプロジェクションを禁じ、普通の人間の暮らしをしているから、クリスカも人間としての生活に馴染んでいることに——

「さて、夕食の支度でもするか」

「私も手伝う」

「その旨をよしとする」

その日の夕食は、ささやかながら豪華であつた。

mission12# 霞（後書き）

あれほど殺すと息巻いていたが、結局は連れて来てしまったソラ。

まあ、上級大尉で変態技術者で良くも悪くも真人間だから、そこまですでに非情というわけでもなく、5年前と違って地位があるのも大きい。

P M Cの一部技術が変態化した。しかしソラに潰されパクられた為にデータも成果も無しの上、M A方面までソラの自重がなくなりそうだ……

ちなみに私の好きなM Aは、ノイエ・ジールとメビウス・ゼロだ。

mission13# 2人の選択

鹵獲したアグリッサに搭載されたシステムはやはりサイコミュ系のシステムのように思考とプロジェクションによって機体进行操作するシステムらしい。しかし、使用者の負担は考えられておらず、私もこれは進んで使おうとは思わない。しかしこのデータを下地にすればファンングやビットではなくファンネルやドラグーンが運用出来る可能性もある。でなくてもインコムやガンバレルの運用も視野に入れている。というより有線制御の分、こちらの方が現実味があるが、フラッグに積めるかが微妙だ。Ex-SガンダムやガンダムMk-?や量産型Vガンダムのようなインコムなら積めるが、試験運用や何もかもをすべて1から始める為、最初はどうやっても大型のデバイスになる。サイコミュ試験運用ザクやネティクスを例に上げればわかる。

「どこに積むと言っんだ……」

デザインだけならば好きに書けるが、それを設計図とするのならばまた勝手が違い過ぎる。

しかも頭を悩ませる問題はそれ以上だ。

「まさかイーニアと霞がな……」

霞が家に来て昨日で1ヶ月なのだが、イーニアが突然士官学校に通うと言った。理由は断固として話してはくれなかったが、今のイーニアは14歳。私のように飛び級や何だのすれば行けなくはないし、既に巖谷中佐から推薦状も貰っていたらしく、入学も決まっているのだとか……つまり事後報告だ。

眸は真剣そのものでプロジェクトンまでも使って訴えてくる。つまりは本気だということだ。

場所はユニオン国際総合大学——半年だったが、私の母校だ。イーニアの学力はやはりというかなんというか、私並みに高い。だから、基礎学力は研究所で教えられる為に問題はなく、霞に至ってはMS工学までも習得しているとあって、私が使っていたノートやテキストを見て2人であれやこれや言い合いながら普通に理解していた。

それもあって、私からも要らないとは思うが推薦状を書いておいた。さらに入学式には保護者として着いて行く気でもある。久しぶりにフラッグファイターと会うのも良いしな。

そして霞の方は、MSのテストパイロットにしてくれとのこと。

未だ現在私の試験運用部隊は私とクリスカしか居ない。技術開発の為には優秀なファイターが必要だ。しかし、優秀といえどもフラッグファイターは一線に出払っている為、しかし量産型ヴァイスリアルドのパイロットでは私の望む基準をクリア出来ない。だがあと2年しかない故にこちらでも早急に対処しなければならない。

「問題は山積みだな」

2週間が経ち、私、クリスカ、イーニア、霞の4人はアメリカの地に居た。イーニアの入学式の為だ。

巖谷中佐と私の推薦により、イーニアも半年で戻って来る。甘えん坊で子どもっぽいが、一般教養も学力も問題ないし、人を見る目もちゃんと持っているし、ちょっとやそつとではイーニアは誘拐は無理だし、そして何より信頼出来る教官が彼女に着いてくれるのだから。

「久しぶりだな、フラッグファイター」

「直接はな、ソラ。いや、ビャーチェノワ上級大尉」

「公衆の面前だからと言って急に畏まる必要はないさ。それより皆も息災か？」

「ああ、相変わらず、毎日空を飛んでいるよ。今回は地に羽根休みとでも言うべきかな？」

「ウチの娘を頼むぞ、一人前のフラッグファイターに育ててやってくれ」

「了解だ、フラッグファイター」

久しぶりの直接対面に親好を温めつつ、入学式は予定通りに終了した。

「久しぶりだな、ソラ・ビャーチェノワ大尉」

「ご無沙汰しております、ホーマー・カタギリ司令」

入学式には参謀本部からカタギリ司令が直々に新入生の激励に来ていた。

「近頃また、PMCと事を交えたそうだな」

「ええ、ですがお陰でいろいろと貴重な物も得られました。報告書はご覧になりましたか？」

「既にな。だが凄まじい物だな、人の業ごうという物は」

「その業ごうを業わざとするのもまた人故に、私は私の出来うる限りで私戦をするだけです」

「そうか……追加予算とテストパイロットと追加人員については上

に掛け合っておく。期待しているぞ大尉」

「はっ！」

去って行くカタギリ司令が見えなくなるまで敬礼し、それから私はもう1人の友人に声をかけた。

「久しぶりだな、カタギリ」

「はは、叔父さんのすぐあとだとちょっと違和感感じるね」

「それは仕方ないさ、だが技術屋のお前がどうしてここに？」

「ああ、それは君に直接見て欲しいものがあるんだけど、ここじゃあちよつと……ね？だから基地に招待するよ」

「了解だ」

そのまま私はカタギリのあとについて、MSWAD基地へと向かった。

「ここまで揃うと圧倒されるな」

MSWAD基地の格納庫には、フラッグと量産型ヴァイスリアルドが軒を連ねていた。

私達の基地でさえまだまだリアルドは現役故に、最新鋭MSが揃っているのはここくらいのものだろう。

「で、これが君に見て貰いたい物さ」

カタギリに連れられたのは武器格納庫だ。正規採用された物もあれば、試作品の物も置いてある。

「あれさ」

「これは、ポジトロンライフルか？」

「まあ、形はそうだけど、実際はハイレーザーライフルさ」

カタギリが私に見せたかったものは、形こそポジトロンライフルだ。しかしカタギリがいう通りハイレーザーライフルならば、KARA

S A W A - M K 2とでもいうのか？

「威力はどの程度なんだ？」

「3 mのEカーボンが一発で2 m強削れて、試作ガンダニュームは20発、ガンダニュームγが60発で破壊出来るけど、ガンダニュームαは100発撃ってやっと1 m融解するのがやっとなんて、やっぱり非常識だよガンダニュームは」

「まあな、私の自信作だからな」

ガンダニューム合金の防御力は、私は胸を張って世界に自慢出来る。お陰で量産型ヴァイスリアルドや陸戦型ヴァイスリアルドを運用する部隊からは毎日感謝の言葉が絶えた試しがない。

「それで、そのハイレーザーライフルを私に見せてどうするんだ？」

「実はね、これをフラッグに積みたいんだけど……」

「フラッグの腕だと両腕で支えて撃つのが精一杯だが、ドッグファイトで両腕をライフルに使うのは死活問題故になんとかしてフラッグに積めるようにしてくれ、というわけだ」

「そういうこと、巖谷中佐に許可は貰ってるから、しばらくはアメリカンドリームを満喫出来るよ」

「中佐が了承したのならばしかたがないな」

やれやれと軽く肩を下げて一旦クリス力達の下へ戻り事情を話した。

「なら私と霞は日本に戻るのか？」

「そうなるな、向こうでもやってもらいたいこともあるしな。新装甲と新型の実験評価を任せる」

「また新型か？」

「ああ、新型反応炉搭載型試作可変型MSだ」

また、初のビーム兵器搭載運用型MSともなる。

「お前なら扱える。報告書はそちらの都合の合う時間に送ってくれ」

「わかった。いこうか、霞」

「…気をつけて……」

「ああ」

霞の頭を軽くポンポン叩き、空港に向かうクリス力と霞を見送った。

「えい！」

「うわっ、っと、イーニア……！」

「カスミだけずるい」

「……まあ、今日くらいはいいか」

抱きつくイーニアの頭に軽く手を乗せて撫でる。イーニアは嬉しそうに笑顔になった。

その笑顔を横目に、あのハイレーザライフルをどうフラッグに持たせたものかと、私は考えを巡らせ始めた。

mission14# 鷹と狩人

「やっぱりいじるとしたらこっちしかないみたいだね」

「だが、そこをいじると比重のバランスが崩れるぞ」

「かといってこれ以上どこにもいじる場所はないよ」

「だがこれでは旋回時に気を使う上に戦闘機動時はバランスを崩す」

「ディフェンスロットを大きくしてバランス取れないかな？」

「難しいな、そもそも細いフラッグの腕に対してライフルが重過ぎる」

まるでACのアセンブル議論のように、私とカタギリはあれやこれやと意見を出し合うが、どれもこれも理論上はそこまでは気にはならないが、パイロット視点で考えるとOKとは行かなくなる。そこで出た意見は新造の腕と脚を取り付け、脚にも姿勢制御スラスタを増設、メインブースターの出力も10%程上げるということだ。

フラッグが世に出てまだ8ヶ月程しか経っていないというのに、もう強化プランが立てられるとは……

「それにしても、君はいつもいつも、どこからその発想をひねり出すんだか……」

「発想する時は頭のネジを10本単位で緩めればそれなりにぶっ飛んだ発想も飛び出るぞ。あとはそれを形に出来るか否かを考えればいいだけだ」

例えば陸戦型ヴァイスリアルドの緊急展開用に、ASの緊急展開用ブースターを取り付けられないかとか、汎用機としてリーオーを造るかとか、汎用戦闘空母や、パラジウムリアクターやA・C・製核エンジンの高出力型や、ツインドライヴやサテライトシステムやフラッシュシステムやらやら――

「現実的な僕には合わなさそうだね……」

「発想と妄想の昇華さ、MSの開発というものは。『ぼくのかんがえたさいきょうのもびるすーつ』的なノリでな」

「はは、奇才の考える事は凡人の僕にはわからないな」

「お前が凡人なら世の中の大半の人間が凡人だ」

「ははは、前と同じ事を返されちゃったな」

「そつえば、こういうやりとりもあつたな」

まあ、久しぶりにゆつたりとした気分で作業出来たのは確かだ。

「でも、フラッグはまだまだ強くなるね。君がそれを証明してくれる。開発者のひとりとしては嬉しいよ」

私のフラッグを見上げて言うカタギリ。そのバックパックは、通常のフラッグとは異なったシルエットとなっていた。

昨日、日本から送られて来た新型のバックパックだ。

「ヴァイスフラッグカスタムtype-F……背中の新型バックパックによって、機動力はノーマルフラッグの約4倍。全速時には最高で15Gもかかる殺人機だ。脚部に増設した姿勢制御スラスタールと腰の高出力新型補助ブースターのおかげで、全速力からのバレルロールや急制動、急速反転や急速旋回も可能。機動力の徹底限界に挑戦した機体だ」

「そんなの乗れるのかい？」

「私ならばな」

「おお！これが大尉殿のフラッグでありますか」

カタギリに新生したヴァイスフラッグの大まかなスペックを説明していると、私が呼び出したハワードとダリルがやって来た。

「来たなハワード、ダリルも、呼び出してすまなかったな。それと敬語は私には不要だ、人間としても軍人としてもファイターとして

も私の方が後輩なのだしな」

「ですがそれでは他に示しがつきませんよ」

「真面目だな、もう少しグラハムやカタギリのようにフレンドリーの方が私もやりやすいんだがな」

「それは空の上でやらせていただきますよ大尉」

「まったく、私の周りはフレンドリーと真面目の人間差が激しいな。まあ、軍人としては間違っではないがな。さて、さっさと着替えて空に上がるぞ、フラッグの動作テストをしなければならんしな」

「お供します、大尉」

「もとよりそのつもりで呼んだのさ」

パイロットスーツに着替えて、ヴァイスフラッグカスタムに乗り込む。

巡航形態に変形させ、格納庫を出て滑走路に出る。別の滑走路からは、ハワードとダリルの先行量産型ヴァイスリアルドが滑走路に出て来る。

「パラジウムリアクター出力安定。メインブースター動作良好、出力上昇。アルファ1より管制塔へ、発進許可求む」

「こちら管制塔、第2滑走路を使用されたし」

「アルファ1了解。第2滑走路へ移動する」

ブースターの出力を上げて機体を移動させて行く。ブースターの出力が上がっている分、移動速度は速い。少し加減をしなければなら
ないな。

「管制塔よりアルファ1へ、発進を許可します。良き旅を」

「アルファ1より管制塔、感謝する。ソラ・ビャーチェノワ、ヴァ
イスフラッグカスタム、出る！」

いつもよりソフトに機体の出力を上げながら、風に乗せるように機
体を離陸させる。

「すげえ柔らかな離陸だな」

「以前からそうだったが、また腕を上げたなソラのやつ」

「史上初の最年少の女性フラッグファイターだからな。俺達も腕を
上げて、あいつの造ったフラッグに乗ってみたいぜ」

「同感だ。…離陸するぞダリル」

「了解だ」

ソラのヴァイスフラッグカスタムのあとを追いつ、ハワードとダリルのヴァイスリアルドも離陸する。

「これより全速による機動性テストに入る。しっかりトレースしてこいよ」

「了解！」

「よし、初期加速開始、続けてフルブラスト！ぐつつ」

ヴァイスリアルドやヴァイスフラッグとは比べ物にならないGが、シートに身体を押し付けるが、私の耐えられる限界加速Gは推定20G程。身体は重いが、耐えられないレベルではない。

「急速旋回から減速、変形から急制動」

言葉の手順通りに機体を操るが――

「ぐ、おおおおつつ」

急制動をかけてからの全力後退にはさすがに内蔵が飛び出すかとも思ったが、ギリギリで耐えられた。

「なんてムチャクチャな機動を、ソラ、大丈夫かソラ！」

「あ、ああ、私も機体も問題ない」

計測によれば最大荷重は急制動時の19Gだが、機体にはまだ余力はあった。つまりは急制動時は下手をすると20G以上ものGが身体を襲う事になる。あまり使うべきではないな。

「このままテスト飛行を続行する」

再び機体を巡航形態に変形させ、次々とテストを消化していれば、気がつくとも夜になっており、残ってしまったテストはまだ翌日と言う事になった。

日本から送られてくる報告書とその他の書類を処理し終えた私は、さっそく格納庫に向かう。実は今日は、アイリス社に発注したパーツが届く日であり、これをフラッグに組み込めば、片腕でもハイレーザーライフルを撃てるのだ。

「作業は順調のようだね、カタギリ」

「やあソラ。でもアイリス社はスゴいね、2週間で現品納入なんて」

「勅命で造らせたからな。それに日本工廠は私達の機体も造って貰ってるから顔が利くのさ」

「権力万々歳だね」

「違うない」

ハイレーザーライフル搭載における強化プランは以下の通りだ。

脚は通常のEカーボンだが、機体重量とハイレーザーライフルの重量に考慮して腕はガンダニウムVを使用、四軀が全体的に2倍程太くなり安定性を確保した。脚部にはヴァイスフラッグカスタムと同タイプの姿勢制御スラスタと両腰部にバッテリーとコンデンサーを増設。機体のバッテリーとコンデンサーもヴァイスリアルドと同タイプに換装しハイレーザーライフルの運用に充分耐えられるようにした。さらにセンサー類も強化され、それ専用のセンサーバイザーユニットを頭部に装着。ハイレーザーライフルの射程距離目一杯まで精密射撃が可能。メインブラスターの出力も当初の予定通り10%強化し、バックパックにゲルググと同じプロペラント・タ

ンクを搭載、出力が上がった分の消費燃料のバランスを取っている。さらにG・レールガンカスタムも片手撃ちが可能となったのは僥倖だ。私はこの機体をフラッグ・イエーガーと名付けた。

フラッグ・イエーガーが完成して2日後、やっと暇な時間が出来た私はグラハムに電話をした。

「射撃戦に特化したフラッグか」

「ああ、私が乗った限りでは充分評価試験をクリア出来る基準にある。遠距離攻撃を主にする特殊部隊への配備が上層部で議論されているが、明日にでも通るだろう」

「素晴らしいな。今度一度乗ってみたいものだ」

「オリジナルで良ければ置いていくから、好きに乗り回してくれ、その代わり」

「無論、データは提出しよう」

「感謝する。…それより、イーニアの様子はどうか？」

「そちらも素晴らしいの一言に尽きる。はつきり言って、私の腕でも墜とされかねない。いつかの模擬戦を思い出したよ」

「まだ9ヶ月前だというのに、それ以上に感じるよ」

「それはキミの毎日が濃いからだろう。だが私もその意には同意する」

あと3ヶ月で残り1年となる。新型が続々と配備されるユニオンの軍事力は間違いなく世界一だ。しかしそれでもまだガンダムには及ばないと私は思っている。

「そう言えば聞いているか？人革連の新型の噂を」

「ああ、巖谷中佐経由で私も聞いたが、どうやら宇宙で造っているらしくて、こちらもあり情報はないがな」

「だとしても人革連の新型となれば真っ先に思いつくのはティエレンタオツーだ。」

「だが人革連が動いたとなると、そういった噂のないAEUはかえって不気味だな」

「あそこは軌道エレベーターの建設に遅れを取っているからな。だが人革連が動けば嫌にでも新型ないし試作機の噂は出て来るだろうさ。こここのところテロも激しさも増して来ているし、中東諸国の情勢もここ5年で悪化の一途を辿っている」

「嵐の前触れ、とでもいうのだろうか？そして中心地はキミだ」

「安全なんだか危険なんだか判断に困るな」

「私は安全だとは思うがな。キミに勝てる機体とパイロットはそうは居ない」

「誉め言葉として受け取っておく」

そのあと私はグラハムと電話で会話しつつも、動き出した世界と、間近に迫る日の為により一層の力を模索し始めていた。

機体解説：陸戦型ヴァイスリアルド（前書き）

陸戦型ヴァイスリアルドのたまかな設定だ

機体解説：陸戦型ヴァイスリアルド

陸戦型ヴァイスリアルド

型式番号：VMS - 15 - 01J

全高：18.5m

頭頂高：15.3m

本体重量：30.8t

動力機関：バッテリー 太陽エネルギー受信アンテナシステム

推進機関：水素プラズマジェットエンジン

装甲材質：ガンダニウムV/Eカーボン

武装

リニアライフル

ソニックブレード/プラズマソード

180mmリニアキャノン×2

大型レールガン

ディフェンスロッド

20?機銃

脚部オプション式4連装ロケットランチャー

機体解説

背部のエンジンと翼を小型化し、機体の変形機構を排除、脚部に選択式で追加スラストミサイルランチャーを装備。両肩に180mmリニアキャノンを増設。バッテリーとコンデンサーの他に、エステバリスの重力波受信アンテナを模したアンテナとバインダーを

背中に装備し太陽光発電システムからマイクロウェーブで電力を無線供給する外部電源方式を採用した。

ユニオン初の本格的なガンダニウム合金採用の量産型MS。しかしガンダニウムの生成には無重力環境が必要な為、ガンダニウム合金は機体前面装甲とコックピット周りに優先的に使われ、それ以外の装甲にはEカーボンを使っている。

追加スラスターを装備した機体ならパイロット次第で通常のリアルドと同じように空戦が可能。

機体解説：量産型ヴァイスリアルド（前書き）

量産型ヴァイスリアルドの大まかな設定だ

機体解説：量産型ヴァイスリアルド

量産型ヴァイスリアルド

型式番号：VMS - 15 - 01F

全高：18.5m

頭頂高：15.3m

本体重量：26.6t

動力機関：バッテリー

推進機関：水素プラズマジェットエンジン

装甲材質：ガンダニウムV/Eカーボン

武装

リニアライフル

ソニックブレイド/プラズマソード

ディフェンスロッド

20?機銃

肩部ロケットランチャー

レールガン

G・レールガン

G・レールガンカスタム

機体解説

フラッグとリアルドを繋ぐユニオンの準主力MS。

パラジウムリアクターをバッテリーに戻し、新型コンデンサーを導

入することで、パラジウムリアクターの約80%の出力ながらも機体性能にはそれほど影響はない。陸戦型ヴァイスリアルドと同じくガンダニウムVとEカーボンを使い分けている。原型機のヴァイスリアルドは量産の予定がなかった為に、若干の機体性能低下はあるが、現行のリアルドやヘリオンの約40%増しのスペックを持っている。

主にエースパイロットや特殊部隊に配備が進んでいる。

機体解説：ヴァイスフラッグ（前書き）

mission12#で登場のヴァイスフラッグのたまかな設定だ

機体解説：ヴァイスフラッグ

ヴァイスフラッグ

型式番号：S V M S - 0 1 C

全高：1 7 . 9 m

重量：1 1 . 0 t

動力機関：パラジウムリアクター

推進機関：水素プラズマジェットエンジン

装甲材質：ガンダニュームα / Eカーボン

武装

バーストレールガン

ビームサーベルA・C・

プログレッシブナイフ

2 0 ? 機銃

ディフェンスロッド

大型レールガン

無誘導式ミサイルランチャー

機体解説

ユニオン在日駐留軍第一技術部に配属となったソラがフラッグを力
スタムした機体。

動力をパラジウムリアクターに換え、マグネット・コーティングを
施し、第2次装甲からガンダニュームαに換えたただだが、それで

もパワーと防御力と運動性と機動性が向上し姿形の別の機体となっている。

機体解説：フラッグ・イェーガー（前書き）

カタギリとソラの合作フラッグの大まかな設定だ

機体解説：フラッグ・イエーガー

フラッグ・イエーガー

型式番号：S V M S - 0 1 J F

全高：1 9 . 7 m

重量：5 4 . 9 t

動力機関：バッテリー

推進機関：水素プラズマジェットエンジン

装甲材質：ガンダニュームⅤ/Eカーボン

武装

バーストレールガン

ハイレザーライフルK A T A G I R I - M K 2

ソニックブレイド/プラズマソード

2 0 ? 機銃

ディフェンスロッド

G・レールガンカスタム

機体解説

カタギリとソラの最強タッグが造り上げた射撃戦特化型フラッグ。

脚は通常のEカーボンだが、機体重量とハイレザーライフルの重量に考慮して腕はガンダニュームⅤを使用、四躯が全体的に2倍程太くなり安定性を確保した。脚部にはヴァイスフラッグカスタムと同タイプの姿勢制御スラスタと両腰部にバッテリーとコンデンサ

ーを増設。機体のバッテリーとコンデンサーもヴァイスリアルドと同タイプに換装しハイレーザライフルの運用に充分耐えられるようにした。さらにセンサー類も強化され、それ専用のセンサーバイザーユニットを頭部に装着。ハイレーザライフルの射程距離一杯まで精密射撃が可能。メインブースターの出力も10%強化し、バックパックにゲルググと同じプロペラント・タンクを搭載、出力が上がった分の消費燃料のバランスを取っている。

副次的作用としてG・レールガンカスタムも片手で運用出来る。

機体解説：ヴァイスフラッグカスタムtype-F（前書き）

青き鷹な翼のフラッグだ！

機体解説：ヴァイスフラッグカスタムtype-F

ヴァイスフラッグカスタムtype-F

型式番号：SVM S - 01CF

全高：17.9m

重量：9.7t

動力機関：パラジウムリアクター

推進機関：高出力水素プラズマジェットエンジン

装甲材質：ガンダニウム α

武装

75mmハンドレールガン

バーストレールガン

ビームサーベルA・C・

レーザーソード

プログレッシブナイフ

20?機銃

ディフェンスロッド

機体解説

ヴァイスフラッグをさらにカスタムした機体。

背中の新型バックパックによって、機動力はノーマルフラッグの約4倍。全速時には最高で15Gもかかる殺人機。脚部に増設した姿勢制御スラスタと腰の高出力新型補助スラスタにより、全速力

からのバレルロールや急制動、急速反転や急速旋回も可能。機動力の徹底限界に挑戦した機体である。装甲もすべてガンダニュームαに換装されている。

わかりやすく言うと、トルギスのスピードが出るギガノスの青き鷹なマッフユニットを装備したフラッグ。

mission15# 大国の新型

虚空の漆黒の宇宙を飛ぶ2つの機影――

「アルファ1よりアルファ2、ミッションタイムクリア。これより最終テストに入る」

「アルファ2、了解」

1機はヴァイスフラッグカスタムtype-F。そしてもう1機はヴァイスフラッグカスタムよりも少々大型の物だ。

ティターズが超高高度迎撃用として開発した可変MSのギャプランだ。

フラッグを上回り、CB製第3世代ガンダムに匹敵しうる性能を持つMSの第一段として、ソラはこのMSを選んだのだ。

拡張性も充分に見込める上に、MA形態がファイター受けしやすいそうだという意図もあるが、ビーム兵器を搭載するにあたって、いくらなんでもビームライフルのように小型化はまだ少し時間がかかる。故にビーム砲を内蔵し、かつファイター受けしやすく高性能となると、このギャプランとメッサーラが思い当たったが、デザインや拡張性と大気圏内外運用実績のある本機に軍配が上がった。

推進機関周りを見直し、プロペラント・タンクを装備することで継

続戦闘時間をフラッグと同等にまで押し上げることなんか運用に耐えられる機体に仕上げたが、対G問題周りに未だ欠点を抱えており、実質対G強化を受けている人工E P S能力者がグラハムのよ
うな阿修羅すら凌駕するようなファイターにしか扱えないのが今後の課題である。

フライルーカーに塗装されたギャプランが指定されたコースを周
りながらダミールバルーンをビーム砲で撃ち落としていく。

ギャプランの売りはその一撃離脱戦法にある。いくらC B製ガンダムでも、ヴェーダのバックアップを受けているとあって、技量はトップガン達の方が上回っているところもある。ガンダムに非太陽炉搭載機であるカスタムフラッグで手傷を負わせたグラハムが良い例
だろう。

ならば後は機体を同レベルまでに仕上げれば問題ない。

「こちらアルファ2、ステージコードクリア」

「こちらアルファ1、テストミッションクリア。ご苦労だったクリ
スカ、帰投するぞ」

「アルファ2、了解。これより帰投する」

先導するヴァイスフラッグカスタムの後に続いて移動するギャプラン。
ン。

「こちらアルファ1。光学迷彩解除、着艦準備に入られたし」

「こちらデルタ1、了解」

漆黒の宇宙にその姿を表したのは、バージニア級やラオハウ級とは異なるシルエットを持つ縦長の艦が姿を表した。

二年前から新型全領域対応型戦闘空母としてソラが設計試作された空宙運用試験戦闘空母——エルシオール。

全長423m、全幅137m、全高196m

最大で21機7個小隊のMSを運用できる次世代型戦闘空母の試作艦である。

その名が示す通り、GAのエルシオールをMS運用艦として設計した物で、大気圏突入や大気圏離脱を単艦でオプションなしで可能としている超高性能艦である。武装はクロノブレイクキャノンは積んでいないが、下部ハッチの外郭に対空レーザー砲を増設して下部の守りを強化し、エンジンブロックの側面に収束ビーム砲を増設して火力の向上もしている。さらに今はまだ実験段階だが、プラズマフィールドや電磁シールドを応用したエネルギーシールドやテストラ・ドライブの実装も計画に入っている。

表向きにはユニオンの威信を賭けて建造されたこのエルシオールだが、裏向き——設計者であるソラは今後の対ガンダム戦や5年後のイノベイド、アロウズ戦も考慮し、かなりの拡張性を持たせてある。1番艦たるエルシオールに続き、2番艦エルシオンもラグランジュ1にあるユニオン所有の資源衛星にて建造中。半年後に完成予定だ。

「あと実質1年……なんとか形になりつつあるな」

機体を着艦用アームに固定させながら呟く。

フラッグ・イエーガーを開発してから2ヶ月。

宇宙でようやくギャプランとエルシオルの最終テストにこぎつけた。人革連も今月中に新型を発表するらしい。その発表会に、ユニオンの代表者として私とカタギリも出席する予定である。

「ソラ」

「ご苦労だったなクリスカ、お陰でまた上層部に良い報告ができる。だがお前には少々辛い事を押しつけてしまったな」

「私の事は構わない。あの程度のGでどうにかなる柔な身体の造りはしていない。それにこれでお前の助けになれるのなら、それで構わない」

「…すまないな」

私はクリスカに苦笑いしながら言った。

「お疲れ様です、隊長殿、少尉殿」

待機ボックスのドアが開き、ひとりの少女が入って来た。

レイナード・シャルロット

紫のストレートに中性的で整った顔立ちに瞳は赤、塩基配列パターン0988タイプの女性タイプイノベイドであるのだろ。CBやイノベイドを知らなければ普通の人間なんだが、あいにくとそれを知り、ヴェーダにアクセスできる私には彼女がイノベイドであるを知っている。知っていて隊に加えたのだから。ちなみに最近のヴェーダへのアクセスはクリスカにやってもらっている。何故ならばこれ以上00に関する記憶を忘れてしまうと、イノベイドと戦えなくなってしまう危険性があるからだ。ヴェーダにアクセスした時はストーリーの比較的重要な部分が抜ける。だからイノベイドとの決着がどうなったのか、ELSとの対話がどうなったのかも覚えてない。さらに1stシーズンは半分以上が虫食い状態で、万が一に人目に触れる事を恐れている私はストーリーに関するバックアップはとっていない為、不安はあるが、知らない方が逆に希望も持てる。

「シャルが、隊には馴れたか？」

「概ね馴れました。しかし、この艦は本当に女性しか見かけませんね」

「上層部が女性の紹介しか回して来ないからな。上は私達を広告塔にしたいのさ。世界初のビーム兵器並びに全領域対応型戦闘空母を運用し、しかも乗組員は女性ばかりときた。目立つなという方が無理な話しだ」

だが逆に言つと都合が良い。

紹介書類の中には見覚えのある名前もちらほらあつた事だしな。

エルシオールの主なブリッジ要員は、艦長はOGシリーズでお馴染みのレフイーナ・エンフィールド中佐。副長には戦術予報士免許も持つナタリー・マッケンジー上級大尉。チーフオペレーターはレフイーナ中佐と士官学校同期生のユン・ヒョジン伍長。

MS隊にはかなり基準値が厳しいが、今のところ2人ほど候補が居る。タリサ・マナンドル少尉と篁唯依中尉。

唯依は言うまでもなく地上で巖谷中佐と共に主に重力下試験を受け持つてくれていたし、彼女も私に次ぐユニオン数少ない女性フラッグファイターだ。

だがネパール出身のタリサがユニオンに居る理由を調べてみたところ、両親は唯依と同じく太陽光発電紛争で亡くし、戦時下の施設を渡り渡り、最終的にはアラスカまで飛び、そこで軍に入隊したらしい。

まだ任官1年だが、模擬戦時にリアルドで量産型ヴァイスリアルドを墜としたと言つのが私に紹介された理由らしい。

量産型とはいえ、ヴァイスリアルドは私が手掛けた機体であり、パイロット次第ではフラッグにも勝る機体だ。それをリアルドで墜としたのだから彼女の技量は本物だ。

MS隊は私とクリスカ、シャルと今は地上に居る霞の計4人のみ。あとは4ヶ月後に着任予定のイーニアが居るがそれでも5人だ。隊

を分けるにしても、隊長の私を除いたらあと2人は必要になる。だから2人に一応召集状は送ってある。

唯依は2つ返事で了承の旨が返ってきているが、タリサの方はまだ返答はない。急な話し故に期限は設けてはいない為、こちらは気長に待つしかない。

2週間後。

久しぶりの重力を噛み締めながら、私は人革連の地を踏んでいた。

「まったく派手だね、人革連は」

「ユニオンの披露会を意識してのことだろう。ユニオンが次々に新型MSを実戦配備する中、新型MSは自国の威信を賭ける物だからな」

「その首謀者の君が言うのかい？」

「私は私の創作意欲に従ったまでさ」

人革連の新型MS——MSJ-06?-A 全領域対応型ティエレ
ン。

フラッグの実戦配備が早まったことで予期していたが、全領域対応型タオツーの実戦配備も早まったらしい。

しかもそのタオツーと模擬戦を演じるのも新型と来た。

この世界では有り得ないMS——MS-06Fザク?の姿がある。
しかも仕様書にはリアクター搭載とまである。つまりリアルでザク?
の登場である。

両肩にシールド、両脚にホバー用としてスラスターが増設され、背
中のランドセルにもプロペラント・タンクが装備されているが、テ
イエレンよりスタイリッシュで高い運動性はザクそのまんまである。

「リアクター搭載機の先駆者としては、君はどう見る?」

「そうだな、何を燃料に動いているのかは気になるな」

核エンジンは今のところパラジウムリアクターが数基稼働中であり、
実験的にギャプランに搭載されているヘリウムを燃料にした擬似ミ
ノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉が2基稼働中の物しかない。
それ故に、人革連の開発したザク?の核エンジンの燃料が気になる
ところだ。

披露会は無事終了したところで、A E Uの技術者や記者団は人革連の代表者に詰め寄っていた。

それも当たり前か、A E Uとしてはただでさえ宇宙開発や軌道エレベーター開発に遅れている。新型は開発している噂はあれど、動力源に苦勞しているらしい。

私の見立てでは人革連の技術者に転生者が紛れ込んでいると見ている。でなければここまで忠実にザク？を再現されては偶然では片づけられない。

「行くぞカタギリ」

「え？いいのかい？話を訊かなくても」

「A E Uの視線が癢に触る。それに、必要なら向こうからコンタクトがあるさ。先駆者としてな」

その日は滞在先のホテルに戻った。そして案の定、私の予測通りにその日の内に人革連の技術者からコンタクトがあった。

mission15# 大国の新型（後書き）

人革連にザク？が登場。さらにソラは対ガンダム戦を想定し、本格的始動。そして出遅れているAEU。

残り8ヶ月になったら競争激化を予定している。

間を開けてすまなかったなフラッグファイターの諸君。

mission 16# 子どもはみんなニュータイプ？

人革連よりコンタクトを受けた私は、カタギリを連れて指定されたMSハンガーに向かっていた。

特に人数制限はなかったが、最初は私ひとりで行くつもりだったが、カタギリに「いくらなんでも女性の君1人行かせるわけにはいかないよ。軍人の君からしたら頼りないだろうけど、いざという時は盾代わりにでもなれるさ」と前置きして一緒に着いて来た。

私が女だったらドキツとしているのだろうな。まったく、頼れる友だよお前は。私を口実に人革連の新型をちゃっかり見れるんだしな。そして、ハンガーに到着したが、もう夜もそれなりと言う時間にも関わらず、ハンガーに明かりが点いていた。

「何者だ。この辺りは関係者以外立ち入りを禁止されている。速やかにここを立ち去れ」

「ユニオン日本駐留軍第13独立機動試験運用部隊隊長のソラ・ビヤーチエノワ上級大尉だ。私達は正式な招待を受けて来た、責任者に確認願いたい」

「…少々お待ちを……」

警備兵が端末で連絡を取っている間、私は奇妙な感覚を感じていた。

「どうかしたのかい？」

「……いや、気のせいだ」

カタギリに答えながらも、私は感覚に従って意識だけは周囲に向けていた。

「お待たせしました。今案内の者が来ますので少々お待ちを」

そう言われて待つこと数分。別の警備兵が私達をハンガーに招いてくれた。

「ほう……」

「近くで見ると余計に細く見えるね」

今はプロペラント・タンクを外されたザク？は、遠目なら両肩にシールドを装備したザクウォーリアに見えなくもないが、やはり近くで見れば見るほどザク？の色が濃い。

近目ではティエレンと四駆の太さはそう変わらなく見えるが、運動性の高さは全領域対応型ティエレンタオツーと同等或いは上回っているのは模擬戦で見せてもらった。

「プルプルプルプルー♪」

「ぶふッッ!!」

「おや、こんなところに子ども？」

いきなり聞こえたフレーズに思わず吹き出してしまった。

そしてプルプル言う子どもは私の方に真っ直ぐ突っ込んで来る。
って、減速しない!? 直撃コース!! 避けてみせるよっ!!

「なんとおー……!!」

「でも甘いよっ!!」

「なにっ!？」

戦闘時張りの心構えと身のこなしで横へのサイドステップで避けたつもりが、子どもは私の回避地点を予測していたかのような自然な動きで私を捉えた。コイツ、ニュータイプか!?

「ぐはっ!」

「あはははははは、スゴいスゴいっ」

「そ、ソラ！？っっ！！？」

結局避けられずに、しかもイーニアクラスのロケットずつきを不利な大勢で受けた私の末路は火を見るより明らかであり、当然の如く押し倒されるしかなかった。

「わあゝ！ふみふみしてる。いいなー、あたしもこれくらいおっぱい欲しいなあ」

「ちょ、おい、こら、やめろ！いきなりなんだ！！カタギリ、助ける！」

私を押し倒した子ども……言動と内容、そして容姿から120%女の子なんだろうが、私のマウントポジションを取ると胸を揉みだしたり、胸に顔を埋めたりする。

その様は母親に甘える子どものそれなのだが、変にこそばゆい為にカタギリに救援を求めたが、カタギリがウブでこういうのがダメであることを思い出した私は無駄かと思いながらもカタギリを見た。

案の定カタギリは手で口というより鼻の辺りを抑え頬を朱くしながらも顔を背けているが、脇目でチラチラとこちらを見ている。そして私の視線に気づくと余計に朱さが増した。わかってるさ、お前が純粹培養の男くらいは。私と並んで歩いている時に周りからからかわれたくらいですぐに頬を朱くしてムキになって否定したりする様が子どもっぽくてかわいいとか思いながら笑いをかみ殺したこと

もあつたさ、だからといって一応親友のピンチに助けはしないと、お前はそんな男だったのかカタギリ――

「ええい！いい加減に離れないか！――」

「えゝ！だってこうしていると胸がキュンキュンするんだよ？お兄ちゃんだってそうでしょ？」

「私に訊く……な……」

私は途中から言葉を紡げなかった。何故ならば、周りがMSハンガーではなく宇宙のような360度満天の星空だったからだ。

「お前は……ニュータイプ……なのか……」

「あたしはエルピー・プル！よろしくねゝって、お兄ちゃんを知ってるんだね」

「まさか私の記憶を！？」

「ここで隠し事は出来ないよ。お兄ちゃんがあたしを拒絶してたら話しは別だったけど」

確かに私はプルを拒絶していないが、それだけで私の記憶まで読んだとなると……

「ちょっとだけザクの力も借りてるけどね」

チロつと舌を出してお茶目に言うプルの言葉でひとつ確信が持てた。

「さすが人革連だな。まさかサイコミュまでも搭載するとは」

私は技術者として少し悔しく思いながらも、ようやくプルの目を真っ直ぐ見る。

「あ、やっとこっち向いてくれた」

「わかったから必要以上に近づくな」

鼻先同士が触れる距離まで詰め寄るプルを言葉で抑える。

「だが驚いたな。ニュータイプの力、これほどの物とは」

光景は宇宙なものにも関わらず、温かさで安心感を感じる。まるで人に抱かれているような感じだ。

「お兄ちゃんだってニュータイプでしょ？」

「私は違うさ。近い物はあるかもしれないがな」

リーディングとプロジェクションが勝手に発動しているらしく、プルをダイレクトで感じ取れる。これほどの強いリンクは、イーニアやクリスカでも感じなかった。プルのニュータイプ能力がそれ程に高いというわけか――

「プル！そんなヤツと戯れるのはやめろ！！」

「プルツー！」

子どもそのもののプルとは違い、トゲトゲしく攻撃的な感情が伝わってきた。

プルと同じ容姿だが、目はつり目で、私に敵意を剥き出しにする少女――プルツー

「ソラは違うよプルツー、わからないの？」

「そうだな、そいつはニュータイプじゃない。だからなぜここに居るのかを訊いている！」

「ニュータイプでなかったら、居てはいけないのか？」

「なんだと!？」

「確かに私はニュータイプではないさ。だが、生粋の人間というわけでもないがな。どちらにしろ、私にもここがどういふ場所なのか理解はあるつもりだ」

ニュータイプ同士の共鳴空間とでもいうのか。高濃度GN粒子による脳量子波交信領域に匹敵する本音と本音のぶつかり合う場や、死者との逢瀬の場でもあると言えるここではプル言うとおり隠し事は出来ない。確かにこれならば人は分かり合える可能性はあるのかもしれない、ジュードの言ったニュータイプの可能性、人と人との分かり合いという希望も理解出来る。

「くっ、なんなんだよ……本当に、なんなんだよお前は……」

「死に損ないのただのフラッグファイターだ」

困惑気味のプルツーに私はそれだけを告げた。

純粹に物事を感じて答えを導くプルとは違って論理的に物事を考えて答えを導くプルツーには私の記憶は困惑して当たり前だろう。まあ、年齢も年齢だしな。

「それってあたしが子どもっぱいってこと？」

「正論だろう？」

「ぶー、ソラの意地悪。……プルツーもおいでよ」

「あたしはいい、そいつは不愉快だ」

「プルツー！」

「いいさ、少し困惑しているだけだ」

「プルツーは難しく考え過ぎだよ」

「大人らしくていいじゃないか。ただ若いだけさ」

「そうやってプルツーの味方ばかりする」

「第三者視点なら大抵はプルツーに軍配が上がるさ。子どもっぽい姉を気遣い面倒を見る苦労人の妹。かわいい物じゃないか」

もう感じられないプルツーの事を思い出しながら、私は口元に弧を描いた。姉を取られまいとする妹の嫉妬に、知らない自分の事に関する記憶に困惑する姿。

少なくとも、洗脳を受けている様子はないな。

「大分時間が経ったが、外は平気なのか？」

「大丈夫だよ。ここの時間の流れはよほど意識しない限りは進まないから」

「そうか、だがそろそろ戻りたいんだが」

「えー！もう少しだけ居ようよー！」

「プルツーがガミガミ煩いぞ？」

「あたしがなんだって？」

「うお！？居たのかプルツー」

「お前がプルに変なことしないか見張って居る必要があるからな」

「信用ないな」

「誰が信用するか、この変態ロリコン」

「私は断じて変態ではない」

「ロリコンは認めるの？」

「……私の年齢を考えて言え」

身体は20でも四十路予備軍の私には大抵がロリコン扱いだろうが
……今更恋愛をする気は起きはしないがな、第一相手が居ない。

「ソラって鈍感」

「私のどこが鈍感だ」

結局現実に戻れたのが何時なのか私にはわからないが、かなりの時間そこに居たのは、会話した長さから理解出来た。

mission17# ザクの欲望？

現実世界に戻った私はすぐさまプルを引き剥がし、服の埃を払った。

「カタギリ、おい、カタギリ！」

「はっ！ なな、なんだいソラ？」

「ボサつとしているな。まったく、親友がピンチだというのにお前は私を助けないとは」

「い、いやあゝご、ごめんね、あは、あはははは？」

乾いた笑い声を上げるカタギリに仕方がないと思うと、白衣を着た男がこちらにやって来た。その後ろには私に敵意を剥き出しにするプルツーも居た。

「やれやれ、プルツーが血相変えて来るものだから少し心配はしたが、僕よりも先にエンカウトするとは、プルは堪え性がないな」

「あ、ドクター！」

白衣を着た男を見た私はどう反応すれば良いのかわからなかった。

「やあ、初めまして、人革連第3技術部門部長兼ニタ研責任者のジ

エイルだ。ドクター、プロフェッサー、スカティ、スカさん、好きなように呼んでくれたまえ」

ニタ研「ニュータイプ研究所の略称とは、Zを見てる人なら聞き覚えもあるだろうが、その責任者というか、ザクを造ったのがあのジエイル・スカリエッティだ！？作品が違うだろう！！」

「ガジェットはどうした？」

「ああ、ああいうのは対人オートマトンにしかないさ。MSが普及する今日、MSを造るのは技術者の本望だろう？ミス・ビャーチェノワ。僕も苦労したものだよ、ザク？の燃料調達に10年以上かかってしまったよ」

「ヘリウム3か」

「ご明察。人革には顔が利くからね、アクシズとア・バオア・クー、ソロモンが揃っているよ。あとは宇宙で有線のハンドランチャーの試験とかがあるけどね」

「ジオンでも作る気か？それにサイコミュ、そこまで行くか、悔しい限りだ。だがビットやファンネルは貰うぞ、それとガンバレルやドラグリーンもな」

「フラッグに積む気かい？なかなか面白い発想だよ」

「1年もすれば有線ドラグリーンかvのインコムくらいにはしたいな」

話しに置いてけぼりにされているカタギリ、プル、プルツを差し置いて、私達は今の会話で充分情報は交換出来た。

「今更だが耳は？」

「耳は心配ないさ」

「そうか…しかしスカリエッティとは難儀だな」

「アンリミテッド・デザイアらしく、毎日MSと睨めっこだ。そのお陰でザク？を造れたけれどね」

「宇宙では高機動型か？」

「そちらも全領域に対応させるつもりさ、エースパイロットならアイエレンよりも受けは狙える。1年以内にはビーム兵器も欲しいところだね」

「それを聞くとAEUがますます気になるところだな」

「向こうは無理さ。何せ僕が存在を知ってか、向こうの技術者が多数こちらに流れている。リリなのネームバリューには恐れいるよ」

「羨ましい限りだな」

「君のところも随分じゃないか。M u v - L u v がそれなりに混じっているらしいじゃないか」

「ロマンを語る相手が少ないがな」

そのまま私達は1時間以上話し込んでしまい、あとからカタギリにかいつまんで説明するのであった。

翌日、私は改めてスカリエッティと彼の私室で昨日の続きを話していた。

「はつきりいつて、私はプロミネンス計画のような2国ないし3国共同の開発計画でも立ち上がらないものかと思うんだが」

「それは難しいと僕は思うよ。僕達がこうして話せるのは同郷のよしみからであつて、人革連とユニオンもそこまで友好的でもない。地続きのAEUは余計にね」

「頭が痛い話しだな」

テーブルの上には何枚もの設計図が広がっている。設計図とは言つても、A4サイズの紙にラフ画で書かれているだけだが――

スカリエッティはジオン系列を中心に開発を進めるらしい。ラフ画には旧ザクからRFザクまである。さらに飛んでザクウォーリアやファントムまで、マイナーならザクスピードまでも――

「訊いていいか？」

「なんだいミス・ビヤーチエノワ」

「なぜザクばかりしかないんだ？」

「ザクは男のロマンだろう！隊長のザクさんは日々頑張っているんだぞ！日々新顔のゲルググになめられようとも、ガンダムにスルーされようとも――」

このスカリエッティはどうやら生粋のザク好きらしい。

30分もザクの素晴らしさを語られたあと、私は一枚のラフ画を引っ張り出した。

「なんなんだこのザクは……」

ザク？改がベースなんだろうが、それにティエレンタオツーのシールド兼ブースターが装備されている。それだけならばまだいいんだが、それに外装ユニットとしてノイエ・ジールらしきユニットが書かれている。対C B用としてもかなりやりすぎじゃないのか？そもそも1年でこれを作る気でもあるまいな……

「ああそれか、それは私の乗機として考えている最中さ」

「どおりでガチなわけだな」

ユニットはノイエ・ジールのままだが、ザクの方に対ビームコートにチタニウム合金を使っらしい。つまりザクなのにツールギス並みに硬いのだ。

「キミの方も随分イロモノに見えるけどね」

スカリエッティも一枚のラフ画を手にとって来た。

フラッグだが、こちらは両肩にテスラ・ドライブを搭載し、形がGNフラッグに近くなっている。

武器にもエピオンタイプのビームソードを新調する予定だ。

さらに新型対Gシステムの原案もある。

こうして互いに機密を見せられるのも同郷故だろう。

そして有意義な数日を遅れた私は、スカリエッティと個人用の携帯番号を交換して日本へと戻った。しかしすぐまた再会するとは思ってもよらなかったが――

mission18# ブシドーへの道……

人革連での出来事から半年――

私は特斯拉・ドライブと試作で大型だが、プラズマ・ジェネレーターとグラビコン・システムの開発に成功した。

さらにガンダニウムよりは防御力は俄然下がるが、Eカーボンの20%増しのコストで防御力は倍は期待が持てるチタン合金セラミック複合材の開発に成功した。

チタン合金セラミック複合材は、陸戦型ヴァイスリアルドへの新規採用が決定している。

重量が重くなった分は限定的に特斯拉・ドライブを搭載する事で機動性の低下を最小限に抑える。

さらに人革連ではザク？のバリエーションとして高機動型と局地仕様のデザート・ザクやザクキャノンを実戦配備していると、スカリエッティから連絡があった。

私達ユニオン在日駐留軍第13独立機動試験運用部隊は、新型のフラッグの開発にその全戦力を注ぎ込んでいた。

なにせユニオン軍参謀本部司令のホーム・カタギリ司令直々の依頼であるからだ。

カタギリ司令曰わく、射撃戦に特化したフラッグが造れるのならば、接近戦に特化したフラッグも開発して欲しいとのこと。

勅命書と何百枚ものフラッグファイターからの直訴書が私のオフィスに運ばれたのはつい2週間前だ。

直訴書にはフラッグを接近戦に対応させて欲しいというファイター達の切実な所望が綴られていた。その中にグラハムの物も混じっていた。

フラッグはその特性上、射撃戦と高機動戦闘を中心に運用されるが、MS同士の戦闘で、さらにどちらもベテランやエースならば、射撃戦は牽制の意味しか持たず、その肝はMS同士の格闘戦で勝負が決まる。

今現在、世界最高水準のMS技術を持つユニオンだが、人革連の新型の登場により、さらなる技術のブラッシュアップの必要性は、むしろ当然と言えるだろう。

だから、汎用機のノーマルフラッグ、射撃戦特化のフラッグ・イエーガーとくれば、格闘戦特化型のフラッグを所望する声は必然と言えるだろう。

だがこれにはいくつか問題があった。

先ず可変機であるフラッグの関節周りが、格闘戦は出来ても特化させるには腕や脚周りを強化する必要がある。それもイエーガーとはまた別の強化でなければならぬ。

イエーガーは射撃戦のチューンがされているため、格闘戦用の新しい設計を考えなければならぬ。

そしてそれが難航している。

華奢なフラッグを格闘戦に対応させるにはかなり本格的に弄る必要が出て来た。

「やはりフラッグを格闘戦に特化させるのは無茶ではないですか？」

シャルロットが1機のMSから降りて来ながら言う。

こちらはこちらで砲撃戦用MSの開発も平行している。

「アイディアはないわけではないんだがな……」

フラッグの格闘戦特化型、マスラオやスサノオが先ず浮かぶが、太陽炉無しにあれを造っても仕方がない。

それに私としては出来るだけ自分でなんとかしたいのだ。

迅速な展開の為にはやはり可変機である必要がある。そして格闘戦に邪魔にならない稼働範囲も必要だ。

武器に関しては既にアイリス社に発注はかけている。あとはMSだけなんだが――

司令部から直々のMS開発計画は暗礁に乗り上げてしまっていた。

開発に難航する格闘戦特化型フラッグだが、武装は次々に納入されてくる。

今回私が開発した武器は、マゴロク・E・ソード――

実にカタギリ司令に受けが良く、さらに実体剣としては世界最高の切れ味を持つ武器だ。

さらにブレード・トンファー、シシオウ・ブレード、ディバイン・アームも、ゾル・オリハルコニウムの代わりにガンダニウムαを使って造っては見た。

切れ味はやはりマゴロク・E・ソードに軍配があがるが、製造と超高周波振動発振器のコストが高い為、一般向けにはブレード・トンファーとディバイン・アーム、エースやベテランの中でも適性者にはシシオウ・ブレードとマゴロク・E・ソードが配備されることになった。

理由は、刀型の武器とあって、切れ味は問題ないが、乱暴に扱くと折れやすいという欠点があるからだ。故に、カタギリ司令やユニオ

ン軍に所属する剣道の有段者や剣術家に協力してもらい、適性検査用のシミュレーションプログラムまで組むことにまなった。私もその過程で散々しごかれた。あれは地獄だ。強化人間である私ですら筋肉痛を患うなど、サムライはどうかしている。

だがそのかいあつてか、以前よりも接近戦における駆け引きも上手くなったと確信が持てる。

そんなことをしながら3ヶ月、AEUから新型MSの発表披露宴の噂が流れてきた。

m i s s i o n 1 8 # ブシドーへの道……（後書き）

次回はソラが暴走するかもしれん……

待ち遠しいな、ガンダムッ!!

mission19# スペルビア - 誇り -

格闘戦特化型フラッグの開発に着手して3ヶ月。

日々剣術の腕を磨きながら、私は格闘戦特化型フラッグの造形をイメージしていた。

ガンダムに対抗する為には、ようやく完成したテスラ・ドライブの搭載は必須だ。

重量質量と慣性質量を分離して推進剤を加速させるこの装置を使えばより効率的な航行能力を得られ、ひいては機動性に直結する。

だが格闘戦時の慣性と加速時の慣性に機体を保たせるには華奢な機体を弄る必要がある。

そこで私は、格闘戦に定評がある航空機系可変機として、スパロボ系からR-1とART-1の全体像からヒントを絞り出し、フラッグに組み合わせた。

出来たラフ画は――

頭部と胸部、腰回り、両肩はフラッグ、胴体はART-1、四軀はフラッグの面影はあるが、マスラオやスサノオ、ブレイヴの造形が見え隠れしている。

両肩にART-1のブースターを着け、ソニックブレードやプログナイフを格納出来るようにする。テスラ・ドライブは背中の中中央ス

ペースに3基でフラッグ1機分の推力を誇るブースターに内蔵して装備し、変形時には機体上部の保護パーツと機首になる。

両腕には2連装ビームサブマシンガンを内蔵し、ある程度の射撃能力を持たせる。

接近武器は、前記の通り、両肩のブースターにソニックブレード、プログナイフを格納し、両腰にビームサーベルを2本装備する。

そしてパイロットによっては、ビームサーベルより強力なビームソード、反りがある強化型ビームサーベル、ガンダニュームⅡ製のバスターソードと肩部シールドと予備のビームサーベルやビームダガー、デイバイン・アーム、ブレード・トンファー、適性者にはシシオウ・ブレードやマゴロク・E・ソードが装備される。

私はこれに、今までのファイターとして、科学者として、そして武士としての誇りと対ガンダム打倒を賭けて、スperlビアと名付けた。

そして、アイリス社に発注して1ヶ月半かかり、ようやく試作1号機と2号機がロールアウトされることとなる。

「それにしても、相変わらず君は僕の予想を遙か斜めに行くことをしてくれるね」

「A E Uへの牽制には持つて来いだろう？」

「これほどの無茶が通るのは君だからさ」

私は通信でカタギリと話していた。試作2号機のフラッグ・スペルビアがMSWAD基地に届いたからだ。

2週間後にA E Uの新型MS——イナクトの披露宴が迫る中で完成を見た格闘戦特化型フラッグことフラッグ・スペルビア。

テストパイロットは私以上に近接戦闘に心得のある唯依と、MSWAD基地にいるグラハムに担当してもらった。

フラッグ・スペルビアの出来は予想以上で、なにせ私のヴァイスフレッグカスタムtype-Fがクロスレンジに踏み込まれた途端に、唯依のフラッグ・スペルビアに撃墜されてしまったのだから……

この点からも、テスラ・ドライブの実用性と有無の格差が露呈した。

「こつちでもフラッグファイターのみんなは狂喜乱舞の毎日だよ。MSWADのファイター達が君をなんて言ってるか知ってるかい？」

「いや、知らない」

「ファイターの女神や聖母やら、毎日毎日君のことまでフラッグ並みに語っているよ」

「フツ、嬉しい限りだが、想像するといささか怖いな…」

「あははは、そうかもね」

苦笑いするカタギリに、私が返すと、カタギリは頬を掻きながらまた苦笑いで言う。

「でも、ヴァイスシリーズ含めて、フラッグも君の手にかかればかなり化けるね」

「それほど拡張性が取られているのさ、フラッグは10年は保つM Sさ」

実際10年以上戦場に立つのだし、あと2週間で待ちに待った運命の日だ。

この7年、その集大成のスペルビアはノーチューンでも10年は第一線を張れる機体性能に仕上がっている。

もっとも、擬似太陽炉が手に入れば話しは別だがな。

そして運命の日が訪れる。

mission19# スペルビア-誇り-(後書き)

最新型フラッグをお届けする今回。

スペルビアの性能は近接戦闘特化型だが、総合バランス的にはジंकウス?を上回り、第三世代ガンダムと同等と考えてもらいたい。

まあ、機動戦闘以外の特化戦闘、特に遠距離系は手も脚も出ないが、そこはグラハムの腕の見せ所だ。

mission20# 天使降臨

この7年、どんなに待ったことか……

実物に見るガンダムをどれほど夢見たことか……

AEUの軌道エレベーター「アフリカタワー」はお祭り騒ぎだった。しかしそれはAEUの人間だけで、ユニオンや人革連の人間は表向きには興味があるようにしているが、内面的にはそれほど興味はなさそうだ。

AEUイナクト――

AEUの期待の新型だが、フラッグと違いパイロットを選ばない空中変形が出来る以外は、フラッグと陸戦型ヴァイスリアルドの猿真似とはカタギリ談である。

実は言うところを真似したのは私の方なんだが、出力や変換効率、陸戦型ヴァイスリアルドの方が上だ。あれから陸戦型ヴァイスリアルドも改良され、ハイレザーライフルKATAGIRIMk-2を砲身冷却ギリギリまで連射してもエネルギー切れを起こさないのだから。ちなみにフラッグ・イエーガーで同じことをやるとあつという間にエネルギー切れになる。

それに機動性を見るに、ノーマルフラッグと同レベルだろうが、ファイターとしての矜持は勝るだろうし、上層部にはオーバーフラッ

グへの改良案も打診しているし、遠距離ではイエーガー、近接戦闘ではスperlビアには齒が立たないだろう。

あらゆる面でノーマルフラッグを上回る機体が配備され始めている事情を知っているユニオンの視察団は、イナクトに興味を抱けないのは必然だろう。

私達も、当分はサイコミュ系技術を応用した研究が中心だろう。試作型のビットもそろそろロールアウトするし、それを扱う機体とパイロットも抜かりない。

「ソーラー」

「がふっ！」

思考の海に浸っていたら腹部に衝撃が走った。軽さから――

「何をしているんだ、プル？」

「えっへへー、久しぶりだね、ソラ」

腰にプルが突貫して来たのだった。

「ソラから離れて！」

「えゝ！やだよー！！」

「いだっ！止めるお前達、腰がつー！」

イーニアがプルをひっぺがえそうとするが、がちりしがみついているプルはビクともせず、私の腰に痛みが走るだけだ。

「モテる女はツライな、ソラ」

「スカリエッティかつ、イーニア1回止める、さすがに腰が痛い」

「うう…」

「プルも止めてあげなさい。僕達がゆっくり話しが出来ないからね」

「はあーい…」

プルとイーニアが離れて自由になった腰を叩く。さすがに子どもでも強化された2人に引っ張り合いをされたら痛くてかなわない。

「それにしても、イナクトはイナクトだったな、太陽光受信アンテナも、キミの陸戦型ヴァイスリアルドの比でもないみたいだ」

「当たり前だ。マイクロウェーブの受信技術は心踊るものではないか」

「コロニーでも撃ち落とすのかい？」

「さあな、だがそれも今後次第さ」

またぞろ私とスカリエッティにしかわからない会話に、プルとイーニアは首を傾げていた。

しかし何かを感じたのか、突然プルとイーニアは空を見上げ、私も同じく空を見て、スカリエッティも続いて空を見た。

軌道エレベーターに沿って降下してくる人型の機体――

特徴的な体躯、それを知る者なら必ずそう呼ぶMS――

「『ガンダム』」

私とスカリエッティの囁きが重なった。

mission20# 天使降臨（後書き）

いよいよガンダムが登場だ。

諸君に問いたい！

手みやげに、破片の一つと言わず、三つ、四つもいただいでいくか
否か……

意見を待っている、フラッグファイトの諸君！

mission21# 欲望の矜持：

披露会場から撤収した私達はエルシオールにグラムとカタギリを乗せて、宇宙から日本への帰路へついていた。

「やはり今のところ、ガンダムは4機か……だがイナクトやヘリオンでは、ガンダムの性能はこれっぽっちも見当はつかないな」

AEUへの第三世代ガンダムによる初めての武力介入とCBの創設者、イオリア・シユヘンベルグの声明。

世界はCBという第4勢力により、その運命を試されることとなる。

「それもそうだろう、彼らの武力介入は始まったばかりだ。そうそう手の内を見せることはしないだろう。もっとも、キミ達の部隊がぶつかれば、いやというほど彼らも手の内を見せなければならぬだろうさ。キミ達は強かな女性ばかりだ、パイロットの技量は彼らを上回っていると僕は思うけどね」

私はエルシオールの私室でスカリエッティと今回の事で通信で話していた。

「他人にそう言われると、やらずにはいられまいな」

だが実際、ガンダムの性能は推し量れない。

トランザムもそうだが、この世界ではユニオンのMSは破格の性能を誇っている機体が幾つかある。

ユニオンにもCBのエージェントは居るだろう。

ならヴァイスシリーズやフラッグ・イエーガーの情報はCBにも渡っているともていいだろう。

ならばそれにあわせて性能が強化されている可能性もある。

まあ、だからと言って負ける気はないがな。

「そちらのMSは、どうやってガンダムに対抗する気だ？確かにザクは良い機体だが、ガンダムには」

「今のところは、高機動型でなんとかなるだろうけど、ザク？改やハイザックの開発も進めているが、はつきり言って、世界でガンダムと渡り合えるのはキミ達くらいだろう」

やはりスカリエッティも同じ見解か、AEUのイナクトは、パイロット次第でガンダムと戦えるだろう。

人革連にも物量作戦がある。

だが、ガンダムが私の知る性能ならば、三国合同軍事演習まで、ガ

ンダムの目立ったピンチはない。

しかし、ユニオン——いや、私達にはフラッグを上回る新型が多数ある。グラハムとスペルビアの相性も良い。あれならばエクシアと互角か、逆にグラハムが圧倒する事も出来るだろう。というより、やってもらわなければ、私がスペルビアを造った意味がない。

「本艦はまもなくユニオン高軌道ステーションへの接舷作業に入ります。関係各員は——」

「忙しくなってきたから切るぞ」

「ああ、キミ達の健闘を祈るよ」

「そちらの機体にも期待しているよ」

スカリエッティとの通信を終えた私はブリッジに向かう。

一応この隊の司令官だから、いろいろと挨拶しなければならない。

さて、彼女にはああも言ったけれど、現状は厳しい限りだ。

ようやくザクが動き出してデータは集まり始めても、ガンダムの性能はゲルググクラスのMSでも造らない限り対抗は難しいだろう。

ちなみにゲルググクラスと言っても、実際にゲルググを造るのではなく、CBの第三世代ガンダムを初代ガンダムに置き換えた話しの基準だけだね。だとすると一年戦争期は羨ましいね、なにせ相手のパイロットは素人だからザクでも戦えたけど、ガンダムマイスターはヴェーダのバックアップを受けていると言っても訓練を積んだパイロットだ。

僕も暇な時にシミュレーションはやっているけれど、プルやプルツィ、そしてマリィダ程じゃない。

でも金ピカ大使みたいに出墜ちにならないようには気をつけるよ。

「ドクター、またアイツと話してたのか」

「ん、…まあね」

プルツィは彼女が関わると不機嫌になる。

原因は彼女がニュータイプでないのに精神感應世界に入れたからだ

ろう。一応脳量子波が使える僕でもそういう世界には行けていない。つまりのところ、プルとプルツー、そしてマリィダだけの世界だった場所を他人に踏み入れられて、しかもプルは彼女に興味津々で懷いているから、プルツーとしては急に現れた未知の存在に困惑して、しかもプルを取られるんじゃないかと嫉妬しているから彼女が関わると不機嫌になるらしい。

モテる女はツライとは言ったけど、あれは彼女の人間性と言うかカリスマとも言うのか、人を惹きつける何かがあるんだろうね、彼女には……

「さて、プルとマリィダはどこに居るか知っているかい？」

「2人ならMSハンガーでザクの調整中だよ」

「おや、いつもなら今の時間帯はシャワーかお風呂の時間じゃないのかい？」

「さあ、あたしは知らないよ」

「そうか、まあ、プルのことだから何かを感じているんだろうけど……よし、僕もアレの調整をするかな」

「アレ？……まさか出るのか、ドクター」

「まあね、ガンダムの性能を肌で感じようと思ってね」

「ハンツ！インテリはインテリらしく頭で考えてりゃいいのさ、子どもの遊びじゃないんだよ」

「僕からすれば、キミ達の方が子どもさ」

僕はそう言いながら、プルツィの下まで歩くと、その小さな頭を優しく撫でた。

「……あたしは子どもじゃない」

「わかっているよ。頼んだよプルツィ、プルとマリィダ、彼女達を守ってあげなさい。そして、キミも生き残ることだ。……肉体があるから、フフツ、やれるのさ」

「ドクター……」

プルツィの頭から手を離しながら、僕はマッドな笑みを浮かべているのだろつ。

肉体が死んでも魂は生きるのだろつ、輪廻転生に導かれるのか、何かに捕らわれるのかはわからないけれど、どちらにしても肉体がなければ何も出来ないのさ。特に僕みたいな技術者の場合は――

「ドクター！」

「おや、どうかしたのかい」

血相を掻いた兵士が僕の下に駆け寄って来た。

「報告します！エルピー・プル少尉、並びにマリィダ・クルス少尉がザクで出撃しました！それと、セイロン島にガンダムが現れたとの情報が」

「やれやれ、ガンダムには困ったものだよ。プルツー、先に出てくれ、それと援護のティエレン部隊も出撃、10分以内に僕も出よう」

「ドクター自らですか！？」

「ガンダムの性能を見る必要があるからね、今後の新型機開発のためにも」

彼女がフラッグファイターとしての矜持を持っているのだ。僕にもアンリミテッド・デザイアとしての矜持がある。

自分の欲望にはとことん妥協はしない。それがジェイル・スカリエッティさ。

mission21# 欲望の矜持…（後書き）

次回、スカさん一家大暴れの予感！？

戦うスカさんって、需要あるかわからんがやってみるまでだ。

さて、フラッグファイターの諸君の意見では……手みやげに、破片の一つどころの騒ぎではないな。

しかし、それでこそフラッグファイターと言えるだろう。

我々のガンダムへの想いはもはや愛を越え、憎しみも超越し、宿命となった！！

諸君！私はフラッグを駆ってガンダムを倒すというフラッグファイターの近いを、その序章の幕を切ることを、ここに宣言しよう！！

感想や意見を待っている。共にガンダムを戦おう、私達のフラッグで！！

mission22# ファーストファイト

スカティ side

地上型ティエレンが次々と発進して行く中、僕は機体の準備が整うのを待っていた。

隣りにはブルツのティエレンタオツーが出撃準備に入っている。

機体前面に外部パーツで戦闘機のような機首を作り、背面にも外部パーツに幾つものブースターが取り付けられる。

こういう日を想定して前々から試作していたVOBユニットだ。もつとも、上からは展開力は評価されたけれどGが殺人級で強化人間でないと使えないのと、推進剤の消費やユニットが使い捨てとあつて、此処に数個しか配備されていない虎の子の物だ。それでも、予測接敵前にはプルとマリィダと合流出来る計算だ。あの子達はベースジャバーを2人乗りで使って行ったらしいからね、そこまでスピードは出てないはずだ。

「ドクター、ブースターの取り付け作業終わりました！」

「了解したよ。ブルツ、いいかい？」

「いつでも」

今は落ち着いているようだね、いや、少し焦っているかな？

さて、タオツーやザク？はともかく、この試作品を満載した試作機のザク？FZ型——半分はザク？F型で各関節にはマグネット・コーティングもしてあるからアクトザクも混じっているけど——性能的にはドム程はあるはず、機体装甲もルナチタニウムでビームコートも搭載しているから、ビームライフルの直撃の3、4回は耐えられる。でもビームコーティングではないからビームサーベルの威力は軽減出来ないけどね……

もつとも、ビームサーベルはどうやっても防御は無理だけど。

「ジェイル・スカリエッティ、ザク、発進する！ぐっ！！」

「ティエレンタオツー、出る！っぐー！」

身体にかかるGに歯を食いしばって耐える。

ノーマルスーツを着て、対Gシステムとグリップス戦役レベルのリニアシートでも13Gはキツすぎる。上級大尉殿は間違いなく阿修羅すら凌駕する存在だよ。

あっという間に先行したティエレン部隊を追い抜いて、あとは2人と接触するだけか、さてはて、彼女にちゃんとメールが届いているといいけどね。

数十分前――

ブリッジで搬入物資のリスト確認を行っていたら、端末にメールが届いた。スカリエッティからだ。

「初めてだな……」

メールを開くと、その内容に私は、はつきり言おう、なぜスカリエッティが有名人でないのか疑問に思いたくなった。

やあミス・ビャーチェノワ。

知っているかもしれないけど、単刀直入に言うと、ガンダムがセイロン島を襲って来てね、出来れば手伝って欲しい。上層部には既に許可を取ってある。安心して大気圏ダイブを敢行してくれたまえ、それじゃあ、アデュー！

キャラが違くないかスカリエッティ……

メールを読んだ私は指示を出そうとすると、ブリッジにグラハムとカタギリが入って来た。要件はわかりきっているが――

「ソラ！ガンダムがセイロン島に現れた！」

「わかっている。今スカリエッティから連絡があった。許可はある、フラッグで直接現地へ向かう。レフィーナ艦長、全艦に第2戦闘配置発令、私とグラハムのフラッグをプロペラント・タンク装備で至急進進体制へ！それと、クリスカのギャプランを艦外で待機させておけ！CBに戦闘艦や第5のガンダムが無い保証はないのだからな」

「り、了解しました！ユニ、全艦第2戦闘配置の発令を」

「了解！」

「行くぞグラハム！」

「了解だ！」

私は必要最低限の命令を出すと、グラハムと共に格納へと駆けて行った。

ノーマルスーツに着替えてフラッグに乗り込む。

私のフラッグもテスラ・ドライブを搭載したお陰で、機動性は上がっている。武器も銃身後部を中折れ式にし、電圧を高め威力を向上させたバースト・レールガンカスタムを新たに装備し機首とする。グラハムもシシオウブレードとマゴロク・E・ソードを装備している。

エルシオールの艦底部が開放され、機体を固定するアームが下にせり出す。

「パラジウムリアクター出力正常、テスラ・ドライブ問題なし」

「こちら問題なしだソラ」

「了解した。レフィーナ艦長、補給終了後エルシオールも地球へ降下、私達の出迎えを頼む」

「了解しました。……無事に帰ってきてください、大尉」

「そう簡単には墜ちんさ。ソラ・ビャーチェノワ、ヴァイスフラッグカスタム、出る！」

「気をつけてくれよグラハム、スペルビアは虎の子なんだから、墜ちたらソラと伯父さんがカンカンだよ」

「それは遠慮したい限りだな。グラハム・エーカー、フラッグ・スペルビア、出る！」

巡航形態で発進する2機のフラッグ。

プロペラント・タンク分の推進剤を使い、地球の重力圏を舐めるように機体を飛ばす。

「いよいよガンダムとご対面だな」

「お前の狙いはイナクトをのしたガンダムだろうか？」

「さあ、だが相手がどのタイプのガンダムだろうとも、このスぺルピアで墜とす。ファイターの矜持に賭けて」

「頼もしい限りだ。さて、テスラ・ドライブを搭載し、限界までチューンしたこのカスタム type - TF、そして私の7年を捧げたスぺルピアがガンダムにどこまで通用するかどうか……いや、そうする必要があると見た！」

「キミもほどほどに猛っているな。だがその意見に同意しよう！」

今、2人のフラッグファイターが、ガンダムを目指し、駆け抜ける。

セイロン島での武力介入を終えた4機のガンダムは、隠れ家への帰路についていた。

「エクシアはどうした？まさかやられたのか？」

合流したガンダムの中に刹那のエクシアの姿は無く、アレルヤが尋ねた。

「先に帰投した……初めての紛争介入だ。思う所があるのさ……」

「わからないな。なぜ彼がガンダムマイスターなのか……」

ロックオンの言葉に、ティエリアが呟いた。

感情的に動く刹那が理解出来ない。そう思うティエリアの心境を表していた。

「でもいくらガンダムでも、単独行動は危険なんじゃ」

各ガンダムは、それぞれの性能に特化している分、長所と短所がハッキリしている。太陽炉の恩恵のお陰で、ガンダムは全世界のMS

を凌駕する性能を持っているが、単独のところを襲われ、しかもエクスシアの苦手とする遠距離戦に持ち込まれたら分が悪い。

「心配すんなアレルヤ、海の下真ん中で襲われるなんぞ宝くじを当てるよりも難し——」

言葉を続けようとしたロックオンだったが、急に機体が動き、モーターの脇を光が通り過ぎて行った。

「おわっ！？な、なんだ！！」

「テッキセツキン、テッキセツキン」

「マジかよ、なんちゅー確率を当てて」

「言っているそばから当てられましたね」

「……ヴァーチェ、迎撃行動に入る」

ヴァーチェが後ろに振り向き、GNバズーカを撃つが、手応えはなく、逆に撃ち返してきた。

「あの機体は」

各ガンダムのモニターがベースジャバーに乗り、Eパックカートリッジ式ビームライフルを構える2機のザクを映した。

「人革連の新型か！」

ロックオンは、デユナメスにGNスナイパーライフルを構えさせ、自身も専用のガンコントローラーを構える。

「もらった！」

GNスナイパーライフルから粒子ビームがザクに向けて放たれるが、ザクはベースジャバーから飛び立ち、それを回避するとビームライフルで応戦した。

「こいつ、ビームを！」

「墜ちちゃえ！」

プルの高機動型ザクは、ビームライフルでデユナメスの逃げ場を奪う。そしてビームの1発がデユナメスの肩を掠める。

「人革がビーム兵器を実用化したなんて聞いてねえぞおい！」

距離がまだ離れていて、掠めただけだから良かったものの、下手したら腕の一本やられていたと冷や汗を掻くロックオン。

一方、アレルヤとティエリア——キュリオスとヴァーチェも、マリダの高機動型ザクに翻弄されていた。

「墜ちろ！」

マリダは、ビームライフルと両肩のシールドに外付けされたミサイルを放つ。

「これしきの攻撃など、ヴァーチェには通じはしない」

攻撃はヴァーチェに向かうが、強固なGNフィールドを展開するヴァーチェには効きはしない。だが足を止めることは出来る。

「ぐっ」

「ティエリア！」

GNサブマシンガンで援護するキュリオス、だがマリダはザクを宙返りさせてその攻撃と突っ込んで来たキュリオスを躲す。そして宙返り中で頭の上を過ぎ去るキュリオスにミサイルを叩き込む。

「ぐあああつ、こ、このパイロット、僕達の動きを」

「それが！」

GNフィールドを解除したヴァーチェが両肩のGNキャノンを放つが、それすらマリィダは躲す。

プルとマリィダ、ニュータイプである彼女達にはわかるのだ、ガンダムの動きが、だから機体性能で劣るザクでもガンダムと渡りあえるのだ。

「テッキセツキン、テッキセツキン」

「増援！？」

レーダーには異常な速度で接近する機影が映る。それを確認した次の瞬間、デユナメスのコックピットが大きく揺れた。

「ぐあつ！」

「墜ちろ！」

ティエレンタオツィが、肩に担ぐ少し大きな砲からビームライフル

よりも太いビームが放たれる。

スカリエッティが試作したビームランチャーだ。連射性能には遅れを取るが、威力と射程はビームライフル以上だ。

「バカな、直撃のはず！」

「GNフィールドテンカイ、GNフィールドテンカイ」

「助かったぜハロ」

相棒のハロに礼を言いながらロックオンは撤退する隙を伺うが、ザクとティエレンはデユナメスを下に、つまり海に降ろさないように戦っている。そしてティエレンタオツーは空いている手にバズーカを構えて撃ってくる。ザクもビームライフルで援護する。

「（チツ、逃げ場がねえ）」

一方マリィダにも、スカリエッティのザクが援軍に加わった。

「高々2機のMSに！」

ティエリアはGNバズーカを構えて、砲口をスカリエッティのザクに向ける。

それを見たスカリエッティは、右肩と右腕で保持しているドーバーガンの砲口を向けて引き金を引いた。撃ち出された実体弾がヴァーチエに向かう。

「誘われた!？」

スカリエッティの意図を理解したティエリアは瞬時に回避行動に移る。ギリギリでGNバズーカへの直撃はなかったが、攻撃は避けられず、結局は爆風と衝撃でGNバズーカを手放してしまった。

「バズーカを!?!だが!」

両肩のGNキャノンを撃つ。

「その程度では...!」

スカリエッティは、粒子ビームを左手に持つ、明らかに大きな盾――V字型の装甲板を複雑に組み合わせた鋭角的なものになっており黄色と白に塗装されている――で防いだ。

「粒子ビームを!?!ぐあつ」

「荷粒子砲に17秒は持つ盾だ。この程度の出力のビームではビクともしないよ」

ドーバーガンを連射するスカリエッティ、ヴァーチエは完全に抑え込まれてしまった。

「ティエリア！」

「お前の相手は私だ！」

「邪魔をして！」

ビームライフルでの牽制を避けるアレルヤだが、それで手一杯だった。

カートリッジを交換する際の間隙を狙おうにも、交換中は盾の内側に装備されているMMP-80マシンガンで牽制される為に不用意には近寄れないのが現実だ。さらにマリーダのザクは背中の中のランドセルにも180mmキャノンを装備している為、弾幕が濃い。

「…ああ、わかっているさ、僕達はこんなことじゃ躓けない」

アレルヤはひとり呟くと、キュリオスをMS形態に変形させ、GNビームサブマシンガンでマリーダのザクを撃つ。

「くっ！」

瞬時に対応して躲すマリーダ。仕返しにビームライフルとMMP-80マシンガンと残りのミサイルで牽制するが、キュリオスはシールドを構えて突っ込んでくる。

「こいつ！」

「この間合いなら！」

キュリオスはGNビームサーベルを抜いてザクに斬りかかる。

「きゃあああ！」

「マリーダ！」

右腕を斬られたマリーダのザクは、体勢を立て直す暇もなく、キュリオスのシールドに殴り飛ばされた。

「今だ！」

「しまっ」

マリィダに気を取られた一瞬の隙にヴァーチェのGNキャノンがス
カリエッティのザクに向く。シールド防御は間に合わない。

「墜ちろ！」

「そちらがな！！」

GNキャノンを撃とうとした時に、混線した回線から声が聞こえ、
次の瞬間、ヴァーチェを今まで以上の衝撃が襲った。

「ぐああつ！なんだ！どこから！！」

「上だティエリア！」

ロックオンからの通信にすぐさま上を確認する。コンピューター照
合の結果、フラッグと出たがただのフラッグではなかった。

ヴァイスフラッグ――

この世に今現在たった1機しか存在しない機体だ。しかし細部が多
少異なる。

「やれやれ、寿命が縮んだよ」

「待たせたな、ヴァーチェは私が抑える」

「了解した。キュリオスは僕達で抑えるよ」

信頼出来る同郷の友人にそう返して、スカリエッティはマリィダの援護にまわった。

ソラ s i d e

対峙するヴァーチェは、GNバズーカを失い、さらに左肩が目に見えてへこんでいた。つまり、こちらの武器が通用するのだ。

ビームサーベルを抜き、ヴァーチェに斬りかかる。ヴァーチェもGNビームサーベルを抜き、鏖戦り合う。

「っぐ、たかがフラッグなどに…！」

「ノーマルとは違うのだよ！ノーマルとは…！」

パワーのあるヴァーチェと完全に拮抗するヴァイスフラッグ。

ヴァーチェはGNキャノンを展開するが、それに気づいた私は、ヴァーチェに蹴りを入れて一旦離れ、75mmハンドレールガンをヴァーチェの胸部目掛けて連射する。

「ぐっ、小癩なマネを！」

ティエリアはGNキャノンを撃つが、ヴァイスフラッグはそれを躲し、再度急接近してくる。

「手みやげに、破片の一つもいただいていくッ！」

75mmハンドレールガンを収め、右手に持つビームサーベルで斬りかかる。

先ほどと同じように、ヴァーチェはGNビームサーベルで受け止め、GNキャノンを撃とうとするが、此处からが勝負だ。

「今度は！」

「そう上手くは！」

GNキャノンが放たれる瞬間に、機体を急上昇させる。粒子ビームが脚を掠め、左足が膝から下を破壊されるが、脚の一本くれてやる！

「もらったー！」

左手にプログナイフを握り、GNキャノンの付け根を斬り裂く、激しい火花と共に、ヴァーチェの左のGNキャノンが脱落した。しかし振り向き様にヴァーチェはGNビームサーベルで、ヴァイスフラッグの右足を斬り裂いた。

「つう、やるなガンダム！」

両脚を失いながらも機体の体勢を維持する私だが、追撃しようとしたらヴァーチェは海の中に潜って行った。

「フラれてしまったな……」

「無事かい？ミス・ビャーチェノワ」

「ああ、しかし手酷くやられた。始末書物だな」

デユナメスとキュリオスも撤退したらしい。

スカリエッティのザクは右足を失っていたが無事らしい。

「キュリオスは？」

「まんまと逃げられてしまったよ。2対1で破片の一つも手に入れられなかったよ」

「そうか、だがガンダム相手に生きていられたのだ。今日はそれでよしとするしかないさ」

「ソラ」

スカリエッティと話していたら、プルザのザクとプルツールのティエレンタオツーがこちらにやって来た。驚くことに無傷で……

「すまないドクター、ランチャーをやられた」

「なに、また造ればいいし、予備もあるから大丈夫さ」

「……ガンダム……この借りは必ず返すっ」

プルツールはリベンジに燃えていた。

「ソラはケガとかない？」

「ああ、五体満足だ」

「さて、プルとプルツーには悪いけど、もう一働きしてもらえるかい？」

スカリエッティに言われて海に潜るプルとプルツーだが、回収出来たのはボロボロに壊れたGNバズーカとGNキャノン、GNスナイパーライフルだけだった。

グラハム side

宇宙でソラと別れ、大気圏へ降下した私は、乙女座であつたことを神に心から感謝した。

フラッグを変形させ、手始めにプラズマソードを抜き、眼下を飛ぶ白と青のガンダムに斬りかかる。ガンダムもその腕の大剣でこちらの刃を受け止めた。

「初めましてだな、ガンダム!!」

「な、何者だ!」

「グラハム・エーカー……君の存在に心奪われた男だ!!」

mission23# 手みやげに、破片の一つもいただいでいくッ!!

グラハムside

空中で鏖競り合う私のフラッグスperlビアとガンダム――

モニターにはガンダムの剣とプラズマソードが火花を散らし、ガンダムの素顔が画面を支配していた。

「まさかな…君に出会えるとは、乙女座の私にはセンチメンタリズムな運命を感じずにはいられない。それとも光の粒子を出していなかったから見つけられたのか…。おそらくは後者だっ!!」

ブースターの出力を上げ、押し込もうとしたが、ガンダムは剣を切り払う。

私はそれに反応し、すぐさまプラズマソードを引きながら機体の動きを急上昇に切り替える。

しかし危なかった。あのまま推していたら危うくプラズマソードを失うところだった。

ガンダムは追撃にと、大剣を下から振り上げてくる。だが――

「その大きな得物では当たらんよっ!!」

「避けた!?!ぐあっ」

スperlビアは上体を反らし、紙一重でガンダムの攻撃を躲す。そして距離を取る為にガンダムを足蹴に、その勢いを使い後ろに宙返り、蹴り飛ばしたガンダムに追撃する。

「手土産に…破片の一つもいただいていくっ!!」

右手にプラズマソード、左手にはブースターの格納庫からプログレッシブ・ナイフを抜く。

ガンダムも体勢を立て直し、大剣でプラズマソードを受け止め、プログナイフをシールドで受け止めた。その行動は理に適っているが、我が盟友が造りしこのナイフの前では愚行でしかない。

「シールドを!?!」

プログナイフがシールドを貫き、そのまま腕に到達する前にガンダムはシールドをパージし、シールドを装備していた左腕をこちらに突き出してきた。隠し武器か!?!

ガンダムは腕からビームを放ってきた。私はそのビームをディフェンスロッドで防御しながら一度距離を取る。

さすがはフラッグ、なんともない。だが、このガンダムとは因縁めいた物を感じる。

接近戦特化の機体に、腕の隠しビーム兵器。ならば私も応えなければなるまい！

プラズマソードとプログナイフを格納庫し、ブースターに外付けされている強化型ビームサーベルを左手に装備する。

デバイスから刀の如く反りを持つ緑色のビーム刃が展開される。

私は目を瞑り、呼吸を落ち着かせ、そして精神を集中させる。身体
の感覚を研ぎ澄ます。

狙うは一点のみ！

「…グラハム・エーカー、推して参るっ！！」

宙を蹴るように飛び出すフラッグスペルビア、ガンダムもこちらと同時に向かってくる。

やはり速度ではこちらが勝っているようだ。

私のタイミングで接近戦へと持ち込み、再び鏖競り合うが、ガンダムは先ほどから腕の大剣しか使わない。

「手を抜くか……それとも私とフラッグを侮辱するか！ガンダムッ！！」

私は右腕をガンダムに突き出し、ビームサブマシンガンを撃つ。

同じ武器を持つ故か、ガンダムの反応は良かったが、左肩がひび割れ、少々欠損も見られる。

「っ、エクシアー！！」

「ぐっ、圧倒された！？」

強化型ビームサーベルを切り払われた。やはりパワーでは向こうが上手か！

「もらった！」

「好きにはさせんよ！」

ガンダムは左手にビームサーベルを装備し、こちらに迫る。大剣だけではこちらをしとめられないと踏んだか、だが読みが甘い！！

ビームサーベルを強化型ビームサーベルで受け、大剣は新たに装備したビームサーベルで受ける。しかしビームサーベルと斬り結ぶ実体剣とは、何か秘密でもあるのか？

フツ、それを調べる為には是非とも持ち帰りたいものだ。

「我が盟友達の為に、その剣をいただいでいくッ!」

ビームサーベルを引き、機体を全力で後退させる。当然競り合う相手を失ったガンダムはこちら側に一瞬体勢を崩す。

私はフラッグをガンダムに向かわせながら、ビームサーベルをマゴロク・E・ソードに変え、ガンダムに振り下ろす。

「斬り捨て――」

ガンダムはビームサーベルではなく、大剣で受けるらしい。

だがこのマゴロク・E・ソードも、機構はプログナイフと同じ。さて、耐えられるかガンダム!彼女が鍛え上げた必殺の一撃をッ!!

「御めええええーんっ!!!!!!!!!!」

振り下ろされた必殺の一撃は、エクシアのGNソードと斬り結ぶが、マゴロク・E・ソードの超高周波振動により、GNソードは分子分解され、真っ二つに斬り裂かれた。

「なっ!?!」

「もう一撃いいいいっ!?!?!」

マゴロク・E・ソードを振り下ろした体勢のまま、私はフラッグの右手を左腰のシシオウブレードの柄に添え握り、躊躇なく刃を抜く、抜かれた刃はガンダムの右腕を二の腕から斬り裂き、その勢いを利用し、機体が斜めになりながらも右回転し、そのがら空きとなった右脇腹に回し蹴りを見舞う。

「ぐうううっ!?!くっ!」

吹き飛ばされたガンダムは、空中で体勢を立て直したが、一瞬こちらを睨むように顔を向けると海の中へと去って行った。光の粒子も出していて、リーダーにも映らない。

「フラッグスぺルビア……対抗してみせたが、水中行動すら可能とは汎用性が高すぎるぞ……ガンダム」

私は機体の状況を確認し、通信が可能となってからソラに通信した。

ソラ side

グラハムならやってくれると思ったが、早々にブシドーに目覚めてしまっているからなのか、接近戦ではガンダムエクシア——刹那すら凌駕する技量を持っているようだ。正直アメリカ人かお前？

GNソードも回収されたが、まさかGN粒子でコーティングされ驚異の強度と切れ味を持つGNソードをマゴロク・E・ソードで叩き斬るとは、さすがの私も想定外だ。

さらにエクシアの右腕、しかもGNコンデンサーも手に入れられたのは僥倖だ。これでGN粒子の研究も、トリニティが出て来るまでは普通に出来るだろう。

ちなみにヴァーチェのGNバズーカとGNキャノン、デユナメスのGNスナイパーライフルだが、キャノンは私が斬り落とした為、こちらが貰えることとなった。スカリエッティ達はGNバズーカとGNスナイパーライフル、私達はGNキャノンとGNソード、つまり各々の戦利品を獲得することで話しはついた。

ちなみに今回のガンダムとの戦闘結果だが――

高機動型ザク2機中破

高機動型ザク1機損傷なし

ティエレンタオツー損傷なし

ヴァイスフラッグカスタムtype-TF中破

フラッグスペルビア小破

戦利品——GNバズーカ、GNキャノン、GNスナイパーライフル、GNソード

戦果——ヴァーチェ中破寄りの実質大破

キュリオス中破寄りの小破。パーツに損失なし

デュナメス中破

エクシア中破

5対3で卑怯かもしれないが、現行のMSの数世代先を行くガンダム相手では十二分の戦果だろう。

そして、フラッグスペルビアが、ガンダムと互角に渡り合える事が実証された。最も、パイロットがグラハムで相手がエクシアだったのが最大の一因であると私は考える。

同じ土俵ならば、後はMSの性能差とパイロットの技量差だ。そし

て、グラハムが刹那の技量を上回り、機体性能差までも埋め合わせる技量を持っている事になる。

「しかしお見事だよ、フラッグでガンダムに手傷を負わせるなんて、またまた有名人になるよ君達は」

「不本意だがな……フッ」

カタギリの言葉に、私とグラハムの言葉が被り、さらに被ったことに対する軽い笑いも被る。

「しかし、これからが大変さ、今回は退けられたけど、次回の武力介入から新装備の投入も危惧しなければならないよ」

機体を損傷し、ベースジャバーも2機しか載せられない為に、エルシオールに乗艦したスカリエッティが私達に言った。私も同意見だ。つまりフルシールドやゼブソードの他の新装備の投入も頭に入れておかなければならない。最悪、トリニティの早期投入や新たなガンダムの可能性も否定できない。

「だとしても、やるのだ！我々の手で！！」

ガトー少佐よろしく握り拳を作り、私は言う。

グラハムは頷き、カタギリはやれやれと苦笑い、スカリエッティはかなわないと言った表情をした。

「そしてそれについては色々と上層部から打診が来た」

「本気なのかい？正直真っ先に武力介入の対象になりそうなものだけど」

「その時は迎え討つ！」

「一体なんの話しだ？」

「C Bのガンダムに対し、私のフラッグとスカリエッティのザクの有用性が証明されたからな、まあ、今回は急襲とパイロットが良かったから対抗してみせたが、これからもそうは行くまい。故に上層部は更なる対ガンダム戦用MSの開発計画を、人革連、そして癪だがA E Uの三大国家共同開発計画の立案と発足を承認承諾し、その最高責任者に、私とスカリエッティを指名して来たのさ」

「随分急な話しじゃないかい？ガンダムが現れてまだ3日だよ？」

「ミス・ビャーチェノワから、元々新規共同開発計画は打診されていてね。そこに来てガンダムの出現と、僕達のMSの戦果に、上層部も重い腰を上げたのさ、そこにA E Uが強引にねじ込んで来たと言っわけだ」

「なるほど」

「つまり、私達はこれから対ガンダムの為に戦う同志と言うわけだ」

私がそう言って、拳を突き出す。

「もう一度、あえて言わせてもらおう。ガンダムは我々でなければ倒せない。故にやるのだ！我々の手で！！」

「フツ、望むところだと言わせてもらおう」

「フフツ、合点承知」

「アンリミテッド・デザイアとしての矜持、存分にお見せしよう」

ここに、私達4人による対ガンダム同盟が誕生した。

隠れ家の孤島に一時集合したマイスター3人。しかし約1名がかなり荒れていた。

「クッ！俺がああも一方的に！これでは計画に支障が出てしまうっ」

「次からは人革連とユニオンへの武力介入は、慎重になるしかねえだろ。それにおやつさんが降りて来てガンダムを直してくれる。ギリギリで次の介入までには間に合うさ」

「でもまさかガンダムに対抗出来る機体があつたなんて」

「パイロットもな、おそらく今回の連中の技量は俺達以上だ」

今回の戦闘で、ガンダムは軒並み戦闘能力が低下している。そして自分達の上に行く存在に、マイスター達は自信を大なり小なり碎かれていた。

「……次は徹底的に消滅させてもらう。白いフラッグ……！」

「初めてだね、ティエリアが荒れてるの見るの」

「触らぬ神に祟りなしって言うが、ちょっと白いフラッグのパイロットには同情するよ」

閻魔すら裸足で逃げそうなオーラを放つティエリアに聞こえないように小声で話すアレルヤとロックオン。

すると先行していたエクシアも現れた。

「エクシア！片腕が！？」

「GNソードをやられたか、おやつさんに追加注文だな」

「……クツ、ガンダム……」

翌日、ガンダム修理にやってきたイアンが、予想以上にボロボロのガンダムを見てため息を吐き、ハ口達と徹夜の突貫作業で比較的損傷の直しやすいエクシアと、大破のヴァーチェの修理を終えるのだった。ちなみにデユナメスは最低限の修理とGNスナイパーライフルの装備でひとまず終了。装甲全取り替えのキュリオスは宇宙に戻されることとなった。

mission24# 動き出した者達

C B s i d e

宇宙に浮かぶソレスタルビーイングの多目的輸送艦プトレマイオス。しかし本来ならばこの時期のプトレマイオスは、コンテナを4つ装備し非武装のはずなのだが、ソラとスカリエッティが見れば、その艦がプトレマイオス2であると言っだろう。

当初はプトレマイオスのままで武力介入をする予定だったが、エルシオールの登場で急遽多目的輸送戦闘艦として、プトレマイオス2に改修されたのだ。

そのブリッジでは今、地上のマイスター達と通信が繋がっていた。

武力介入早々にガンダム4機破損。

想定されていたことであるが、やはりCBの象徴たるガンダムの敗北に、CBはこれから慎重にならざる得なくなった。特に日本周辺地域での武力介入には……

「ソラ・ビャーチェノワ。7年前から世界中に名が知れ始めた人物よ」

ブリッジのモニターに表示された人物の名を、スメラギが言った。
地上のマイスター達やイアンの端末にも同じプロフィールが表示されていた。

「MS開発者でありながらパイロットとしても優秀でユニオンのトップファイター、さらに指揮官としても侮れない」

「いるんすね、こういう完璧超人みたいな人」

「そう、彼女は超人なのよ」

「どういう意味なんだ？スメラギさん」

リヒティが言った言葉に返したスメラギに、ラッセが疑問を投げかけた。

すると別のデータが表示された。

「7年前……PMCトラストは人工的にEPS能力を付加させた兵士を造り出す計画を進めていた。でもその研究は彼女と数人の試作体を造り出して、闇に葬られた。他ならぬ、彼女の手によって……」

表示されたデータには、EPS能力の特徴が書かれていた。

リーディングによる人の意識の読み取りやプロジェクションによるイメージの伝達、さらに同じEPS能力者同士の感応などだ。

「世界は既に対ガンダムに向けて動き始めているわ。先行き不安だけど、みんな頑張って頂戴」

そうして通信は切れた。

「と言うわけで、ヴェーダから装備の繰り上げ解凍と新型装備の開発プランが降りたってわけだ」

地上ではイアンがマイスター達に向けて言った。

「ヴァーチェとデユナメスには既に装備しているが、デユナメスははっきり言って試作品の物だから無茶は厳禁だぞ？」

「ありがとよ、おやつさん」

デユナメスはフルシールドを装備。さらに背中にプロトGNビットを4基装備し、内2基は前方へのGNキャノンとしての機能を持つ。

ヴァーチェは両肩に小型化したGNキャノンを装備し、計6門のGNキャノンを持ち、砲撃能力を上げGNフィールドの出力も上がっている。頭部にもGNバルカンを増設し、近距離戦での手数を増やしている。さらに左腕にはGNサブマシンガンとGNビームサーベルを内蔵したGNシールドを装備している。

エクシアはまだ装備の調整が手間取っている為、装備に変更はない。キュリオスには背中に装備可能なGNミサイルコンテナの開発が急ピッチで進められている。

そして全機の機体前面に耐ビームコーティングがされる予定だ。

しかし、機体以前にパイロットの技量も憂慮すべき事態になっている為、必然的にマイスター達は現状のシミュレーションよりも高ランクのシミュレーションを新たに消化することとなった。

世界三大国家群共同のMS開発計画通称——プロミネンス計画。

その拠点は、ユニオン在日駐留軍横浜基地に決まった。

海に面しているとあって、ギガフロートの建設や基地の拡張整備工事が急ピッチで進められている。

ソラが率いる第13独立機動試験運用部隊も、エルシオールを旗艦

としてこの計画に参加している。

カタギリも対ガンダム調査隊の技術顧問として、この計画に参加。グラハムも対ガンダム調査隊の隊長として、ハワードとダリルを引き連れてMSWAD基地からこの横浜基地へと向かっている。

各国から続々とMSが集まるこの横浜基地は、さながらMSの物見市のような状態だ。

今は完全に旧型化し、第二線どころか第三線まで退ぞきほぼ解体待ちのユニオンリアルドを始め、量産型ヴァイスリアルド、陸戦型ヴァイスリアルド初期生産型/現行生産型、ユニオンフラッグ、フラッグイエガー、フラッグスペルビアも数機だが見ることは出来る。さらに私達のハンガーにはギャプランとギャプラン・フライル、まだ骨組みが露出しているがメッサーラ、砲撃戦に特化させたフラッグイエガーに次ぐ中距離支援砲撃用重MSバスターフラッグも完成間近であり、オーバーフラッグも1機は組み上がった。

人革連も大盤振る舞いであり、古い物はファントムから、ティエレン各種、最新鋭機のザク?やザクキャノン、デザートザクの姿があるが、ティエレンタオツーや高機動型ザクの姿はない。あれはスカリエッティの試作機らしいから当たり前か?

しかし代わりにグフや脚がドムのザクがあつたりする為、退屈はしない。

そしてAEUだが、ヘリオン、イナクト、アグリッサくらいしかない。この辺りは見るべき物は少なさそうだ。

「ビャーチエノワ中佐！」

MSを見てまわっていたら、久しぶりに生で聞く声に呼び止められた。ちなみにこのMS開発計画の責任者に任命されるにあたって一先ず二階級特進させられた。ものの見事に客寄せパンダにされてしまったな。

「篁中尉か、何かあったのか？」

「はっ！エルシオールより各MSの搬出作業が終了致しました。皆、中佐のお帰りをお待ちしております」

「そうか、ならば戻るとしよう」

そう時間もかからずに、ハンガーに戻ると、早速整備班とメッサーラ他各種MSの開発進行状況と改修状況の照らし合わせに入る。

そんな中だった。南アフリカ、セイロン島、タリビアの3カ所にデユナメス、エクシア、ヴァーチエが武力介入を行ったと知らせが入ったのは……

スカテイス ide

ガンダムの3度目の武力介入は、ヴァーチェとキュリオスが立場が違った以外は概ね原作通りだった。

本当はエクシアにアタックしてみたけど、僕達の機体は修理中だったからね。それにエクシアはミス・ビャーチェノワとフラッグファイターの獲物だから勝手に取ってしまうわけにもいかないからね。

そんな僕達も、プロミネンス計画に参加する為に支度を急いでいる。

しかしガンダムに勝てる機体と言うと、やっぱりコレかな？

「GP-04 ガーベラ……」

コレを彼女達が乗ったらガンダムに負けはしないだろうさ。

でもその前に、空戦系のMSも考えないとね、やることは山積みだよ。

グラハム s s i d e

「口惜しいな、せっかくガンダムが現れたというのに」

「仕方がないさ、今は太平洋のド真ん中、いくらスペルビアでも行けない距離はあるからね」

「熟知している」

輸送機の待機ボックスに詰めている時点で微妙な所じゃないかと思うカタギリは、フラッグスペルビアを見つめるグラハムにやれやれと首を振る。

わかっていてもすぐにも出て行きたい。

これで今ソラが研究している推進剤要らずのテスラ・ドライブが搭載されていたらすっ飛んで行っていただろうとカタギリは苦笑いしながら思った。

ゾッコンてやつは盲目だね――

「しかし、三国合同対ガンダム戦用新型MS開発計画が、個人的には気進みはしないな」

「おや、MS大好きな君のことだからてっきり楽しみにしてると思っただけど？」

「確かに楽しみさ、ソラがどのようなMSを造るのかはな、だがそれをAEUに真似されてはかなわない」

目の前の親友は心底フラッグにご執心だ。それもガンダムに対するソッコン並みに……むしろ昔よりもそれは強さを見せていると思う。まあ、十中八九ソラの影響だろうね。

彼女がフラッグの新型を造る度に、彼女はフラッグと共に称えられていき、今では女性のファイターも増えつつあるし、新型が優先配備されるMSWARDでは彼女は聖母様扱いなんだから。

でもグラハムの気持ちもわからなくはないよ。僕だって、フラッグの開発者の1人として、フラッグには愛着もあるから、AEUの猿まねには少しムツと来るかな？

だから僕達で造るのさ、誰にもマネ出来ないような最高のフラッグを――

「突然ニヤけて、何かあったのか？カタギリ」

「いや、早く新しいフラッグを造りたいと思ってね」

「フツ、頼れる友だ」

グラハムはそう言って僕の肩を叩いて部屋を出て行った。そろそろ交代の時間だね。

「グラハム・エーカー、フラッグスペルビア、出るぞ！」

輸送機から飛び立ち、入れ替わりにハワードのフラッグが輸送機に着艦する。

さて、日本まではもう少しか、ガンダムとは出逢えずだが、親友を待たせている手前、今日くらいは我慢弱い私でも少々の我慢はしなければな、忍耐力も武士の必須事項であるからな。

メッサーラはあと2週間もあれば完成する目処が立った。

さらにギャプランのファイバーユニットの開発計画も推し進めなければ……

「ビャーチエノワ中佐」

「篁中尉……」

「あの、少し休憩しませんか？ 今日もまともな休憩はしておられないのでしょうか？」

「いや、昼と夕方と夕食時に各10分の休憩は挟んだが」

「ま、まさかそれ以外には……」

「30分も休めば多い方だ。今世界は秒刻みで動いている。やれる時にやらねばなるまいさ、ここも何時武力介入の対象になるかわからないのだからな」

「わかつてはいますが、もう少し自分を大切にしてください」

「善処はするさ」

私は椅子に背中を預けて一息吐くと、緑茶の良い香りが漂って来た。

「粗茶ですが」

「有り難いな、頂くとしよう」

緑茶の渋味とそこにある独特の甘味と香りを楽しみながら、私は数枚の書類に目を通した。

「中佐、それは？」

「ん？ああ、新しいパイロットの申請関係の書類でな。しかしユニオン全体における女性パイロットは少ない、ましてやノーマルフラッグや量産型ヴァイスリアルドを超える機体を操れるファイターはほんの一握りだ」

書類にはタリサの顔写真が写っていた。

彼女はやや突っ走りやすいが、機動格闘戦では抜きん出た才能の持ち主だ。自分独自のマニューバー『ククリナイフ』。

コレだけの技量があれば、グラハム・スペシャルも夢ではない。しかも量産型ヴァイスリアルドでは彼女の技量に着いてこれないと言うのも非常に楽しみだ。

「楽しそうですね、中佐」

「まあな、あれだ。学校で転校生が来るくらいの感覚の楽しみさは感じているさ」

他にも伊隅みちる大尉や神宮司まりも大尉……

両名とも、能力的にトップクラスであるし、神宮司まりも大尉にいたっては士官学校の教導官であり、狂犬と恐れられる鬼教官だ。

しかし面白いことに、この2人は空よりも陸戦のデータが高い。しかも陸戦型ヴァイスリアルドでフラッグも墜とすその技量は見事としか言いようがない。

「今のところはこの3人だな」

3人が来てくれれば私を含めて稼働可能MSは8機となる。しかも神宮司大尉が来てくれれば彼女に指揮も任せられる。

唯依と伊隅みちる大尉の指揮能力も高い。

総指揮を神宮司大尉、分隊指揮を唯依と伊隅大尉でやってくれれば私はフリーでガンダムと戦える。

「中佐はお一人でガンダムと刃を交える気ですか？」

「いけないか？」

「いえ、けしてそんなことは、ですがやはり心配です。ガンダムの性能は未知数です、中佐にもしものがあつたら私達は……」

横に居る唯依の顔を見れば、心底心配そうに顔を俯けていた。

私は立ち上がると、唯依の肩を掴んで私と正面から向き直らせた。

「中佐……？」

「唯依、私は傲慢で自分勝手だとの自覚もある。だが自分の力を過信する愚か者でないことは自負しているつもりだ」

「わかります。中佐はお強い方ですから、ですがフラッグとガンダムでは」

「確かにガンダムの性能はフラッグを上回っているだろう。だがそれは技量差で覆せるとグラハムが証明した。ならば私もやってみせなければならぬ。友との誓いの為にもな」

そう、私はグラハムを超えると誓った。ならばエクシアを単機で退けてみせたグラハムを超えるには、私も単機でガンダムに当たる必要がある。特にスローネツヴァイとは渡り合ってみせなければハワードは……

「わかりました。なら、私とも誓ってください。必ず生きて帰ることを」

「相手がガンダムでは保証は出来ないな、私は守れない約束はしない主義だ」

「それでも誓ってもらいます。それがあなたの生への枷になるなら！」

唯依は真剣な眼差しで私に言って来た。眸は潤み、目尻に涙を溜めながら……

私は人差し指指で零れ落ちそうな涙を掬い取る。

「ち、中佐……っ」

「乙女に涙は似合わぬよ、唯依」

「っ／＼／＼」

顔を朱くする唯依に、少し気取り過ぎたかとも思いながら、私は口を開く。

「私は幸せ者だな、軍人であればより死は近い。だが唯依、人は死を回避する術もある。それは自信の力も必須だが、私はもう一つ重要なものがあると思う。それは帰るべき場所があるかどうかだ。人は現金なものだからな、帰るべき場所、帰りを待つ者が居れば居るほどに生にしがみつく」

「帰るべき場所と帰りを待つ者……」

「ああ、私には多くの帰りを待っていてくれる者達が居る。お前もその1人だ、唯依」

「ソラさん……ソラさんは、私の帰りを待ってくれますか？」

「当たり前だ。いや、この場所は待つと言うのは少々語弊がある」

「え？」

「共に生き抜く、と言うのが正しくはないか？」

「うっ、ソラさん、狙ってやってはいませんか？」

「さてな、私は私の思う言葉を口に行っているに過ぎないさ」

「……っふ、そうでしたね、ソラさんはそういう人でしたね」

「幻滅するか？」

「いえ、それがソラさんらしさなんでしょうね。エーカー中尉と出逢ってからひどくなりましたけど」

「手厳しい限りだな」

肩を竦めながら一息吐いて唯依を見るが、まだだいぶ顔が朱い。

「ソラさん、私は誓います。ソラさんと共に空を飛び、生き残ります。その為の力も、あなたから貰いましたから、フラッグファイターとしての矜持も」

「頼もしい限りだ。ならば篁唯依に宣誓しよう。私、ソラ・ビャーチェノワはフラッグを駆ってガンダムを倒し、必ず生き抜くことを」

「絶対、約束ですから……」

唯依はそう言うときにもたれかかってきた。

「唯依？」

「す、少しだけ、こうさせてください……」

「……満足が行くまで、いくらでも」

私はしばらくはそのまま身動きはしなかった。

「帰りを待つ者……か、ソラ、その中に私も入っているか……？」

ソラと唯依の居る部屋の入り口の影に隠れて、クリスカそう呟いた。そして手元にあるすっかり冷めてしまったコーヒーに視線を落とす。

て、一旦天井を見上げてその場をあとにした。

翌日、グラハム達と以前から召集をかけていたタリサが合流し、まずハワードとダリルのフラッグを、ソラ、カタギリ、エイフマン教授の3人がカスタムし、さらにタリサにはオーバーフラッグをあてがい、イーニアと霞の乗るギャプラン・サイコミュ搭載ビット試験型——ネクティスの有線制御式ビットとテスラ・ドライブを搭載したギャプランであり、ビットには機能限定型のグラビコン・システムを搭載し、1G下でもビットの運用が可能となっている。

クリスカはギャプラン・フライル、シャルがバスターフラッグに乗っている。

バスターフラッグは四躯が肥大化しており、脚や腕の太さはヴァーチェに匹敵する。セラヴィーのクアドキヤノンとラミエルを参考に、両肩と両腰に大出力荷粒子砲を装備していて、最大出力で撃てば劇場版序よりしく山が吹き飛ぶ計算である。さらに手持ち火器にバスターライフルを2挺装備しており、ツインバスターライフルと荷粒子砲を合わせたら下手な衛星兵器よりもとんでもない威力を誇る機体へと仕上がった。完成した後で中距離支援MSかコレ？と自

分でツツコミを入れてしまっただった。

私は相変わらずヴァイスフラッグカスタムtype-TFに乗っているが、新たにマゴロク・E・ソードを装備して戦場に立つことになった。

そして唯依もフラッグスペルビアを物にする為に毎日鍛練と言う名の模擬戦で私と刀を交えている。もっとも、ケガのないように模擬刀だが――

そして計画開始より2週間、タリビアがユニオン脱退を宣言し、私達第13独立機動運用試験部隊と、対ガンダム調査隊にタリビアへの出撃命令が下った。

mission24# 動き出した者達（後書き）

待たせたな諸君！

さて、次回も再びガンダム涙目でよいのか激しく悩みどころだ。

諸君の要望と所望を聞かせて欲しい。

では、また無限の彼方で逢おう！

mission25# 朽ちる翼

タリビアが太陽光エネルギー権を主張しユニオンを脱退するとの声明を世界へ向けて宣言。

この事態にユニオンはタリビアに軍事的圧力を掛ける為、タリビアを陸海空の全領域から包囲していた。

この事態にガンダムが武力介入をすると確信する上層部の命を承け、対ガンダムの切り札としてタリビアに向かうエルシオールを多数の機体が飛び回っていた。

対ガンダム戦とあって、機体の最終調整と、ハワード、ダリル、タリサの3人は新しい機体に慣れる為だった。

「遂にガンダムとご対面ですか…楽しみですよ、大尉」

「私もだ。そして出来れば現れて欲しいものだな、剣持ちのガンダムには」

チャンネルをオープンにしている為、ハワードとグラハムの会話が聞こえてきた。ちなみにグラハムは対ガンダム調査隊設立と配属に伴い昇進している。私と同じ客寄せパンダの色合いが強いがな……

「しかしさすがカスタムフラッグ、フラッグとは段違いの性能だ」

「ノーマルの2倍のスピードは出るからな、直線速度ならスperlビアにも追いつける出力はある」

「だがそれを当てにし過ぎるなよ？ガンダムとの戦いは生半可ではないのだからな」

「了解しました、大尉」

フラッグファイター達の会話を横耳に、タリサのオーバーフラッグを見る。多少旋回時にふらつきはすれども、それを除けばちゃんと飛んでいる。

「マナンドル少尉」

「は、はっ！」

「旋回時に脚部の出力を上げてみる、機体のぶれがなくなるはずだ」

「り、了解」

私の言ったことを実践すると、タリサの機体はぶれがなくなった。あとは慣れるしかない。

フラッグとリアルドの違いは、リアルドは空力制御機動によって機体のバランスを保つが、フラッグはAMBAC機動で機体のバランスを保つ為、リアルドになれてしまっているタリサがフラッグに乗

って機体がぶれてしまうのは至極当然なのだが、まだ搭乗5時間も経たずにオーバーフラッグを操る様は、彼女の技量と機体への慣熟性と即応性の高さが伺いしれる。

他に目を向ければ、クリスカのギャプラン・フライルとイーニアと霞のギャプランがMA形態でドッグファイトをしている。

機体性能ならテスラ・ドライブを搭載しているイーニアと霞のギャプランの方が上なのだが、それをクリスカは腕でカバーし、絶えず2人を追い掛けまわしている。あれでフライルにもテスラ・ドライブを載せたら驚異的だな。

唯依の方は、グラハム・スペシャルの練習中で上昇と降下を繰り返して変形を試みているが、成功はしていない。

あれはタイミングと度胸だからな、一歩間違えれば失速して墜落する危険性がある。しかもシミュレーターでの練習はあてにならず、実機での練習あるのみのだから……

「艦長！ガンダム出現！」

ユニオンの巡洋艦がガンダムを視認するが、ガンダムはユニオン艦隊を無視しタリビアの首都に向かって行った。

3機のガンダム——エクシア、デユナメス、ヴァーチェは散開しそれぞれがタリビアの主要都市に向かい、ソレスタルビーイングがどのような武力介入をするのかを世界が注目する中、遂に戦端が開かれた。

ソレスタルビーイングの取った選択はタリビアを紛争幫助国と断定し、タリビアに対し武力介入するという事だった。

タリビア軍のリアルドが粒子ビームにより破壊され、エクシアがタリビアに降り立った。

「タリビアを紛争幫助国と断定、目標を駆逐する」

エクシアはGNソードを展開しリアルドに接近する。

タリビア軍のリアルドはリニアライフルで応戦するもエクシアはそれを回避しつつリアルド切り裂いた。

「ヴァーチェ、介入行動に入る」

市街地での戦闘故、ティエリアは歯痒く思いながら、GNビームサ

ーベルでリアルドを切り裂いていく。

ティエリアには確信があった。あの白いフラッグがまた現れると言う確信が、故に必要な以上にヴァーチェの能力を晒さないように、ヴァーチェに取ってあえて非効率的な接近戦を選んだ。

別の都市でもデュナメスが交戦を開始していた。

「デュナメス、目標を狙い撃つ」

デュナメスはGNスナイパーライフルで的確にリアルドを狙撃して行った。

「人様の事を利用して…勝手しなさんな……」

「コウホウチュウイ、コウホウチュウイ」

「上等！」

後方からのリニアライフルの攻撃を宙返りで回避したデュナメスは、逆さまのまま、プロトGNビットから粒子ビームを撃ってリアルドを撃墜した。

戦闘が開始され、タリビアは自分達が武力介入されると知ると直ぐにアメリカ大統領に連絡を取りユニオン脱退を撤回した。それによりユニオンはタリビア共和国防衛の為に、展開している艦隊に出撃

命令を出した。

3機のガンダムはそれを確認すると戦闘を中止し予定通り撤退行動を開始した。

しかし、それを許さない者達が居る。

エクシア、デユナメス、ヴァーチェに各3機ずつ、ユニオン軍のMSが急速接近していた。

それは衛星軌道上のプトレマイオス2でも確認され、エクシアを猛追する3機のフラッグは、通常のフラッグの2倍以上、先頭のフラッグは5倍以上もの速度で、デユナメスを猛追する2機のMSはギヤプランタイプで、もう1機はフラッグであるが、このフラッグも5倍以上のスピードでデユナメスを追う。

そしてヴァーチェに向かう3機のフラッグも、1機は通常のフラッグと大差ない速度、1機も2倍以上のスピードだが、先頭の最後の1機は7倍以上というとてもない速度でヴァーチェを猛追していた。

グラハム side

「あのフラッグは……あの時の！」

エクシアの方でもその機体を確認出来ていた。

「これでガンダムと戦える…見事な対応だ！プレジデント！」

グラハムはさらにフラッグの速度を上げ、両腕のビームサブマシンガンを連射する。

エクシアはそれを躲すが、その隙にフラッグスペルビアはエクシアのすぐ横を通り過ぎる。エクシアはフラッグスペルビアを撃とうとGNソードライフルを向けるが、ロックオン警報が鳴り、刹那はすぐさま機体を翻し、間髪入れずにエクシアの装甲を何かが掠めた。

それは後方から追い付いたハワードとダリルのカスタムフラッグのバースト・レールガンカスタムから放たれた弾丸だった。

「ち、外したか…」

「間髪入れるなダリル！大尉！」

「その旨をよしとする！」

旋回するフラッグスぺルビアは空中で変形し、ブースターに外付けされている2本の強化型ビームサーベルを抜く。

「3対1、卑怯者と罵るか、だが！」

「くっ！」

刹那は2機のカスタムフラッグの攻撃を回避する。

ガンダムの中で随一の防御力を持つヴァーチェの装甲でさえへこんでしまう威力の弾丸だ。エクシアで受ければ一溜まりもないだろう。

ハワードとダリルは交互に絶えずバースト・レールガンカスタムを撃つ。これなら多少のタイムラグもあってなきものだ。さらにハワードは2挺のバースト・レールガンカスタムを撃っている為、弾幕に区切りはない。

エクシアが回避に専念する隙を突き、グラハムのフラッグスぺルビアが2本の強化型ビームサーベルを振り上げる。

「ガンダム、引導を渡すッ！！」

振り下ろされた2本の強化型ビームサーベルを、エクシアはギリギリでGNソードで受けるが、接触は一瞬、最低限の防御のみですく

さまエクシアはフラッグスperlビアと距離を取るが、再びレールガンの弾幕に晒され回避行動に移る。

「男子3日会わずば刮目して見よ……成る程、たったの2週間程だが腕を上げたようだな、ガンダムのパイロット!」

再び接近するフラッグスperlビア、しかし今度はハワードのカスタムフラッグも、バースト・レールガンカスタムを1挺で接近していく。

「ッ、挟み撃ちか!」

その意図に気づいた刹那は、GNビームサーベルを両手に装備し、フラッグスperlビアの強化型ビームサーベルを防ごうとしたが、フラッグスperlビアは何もせずにエクシアの横を通り過ぎる。

「なっ、しまった!」

気づいた時には、ハワードのカスタムフラッグが空いている左手にビームサーベルを装備して、目の前に迫っていた。

「もらったぞガンダムッ!!」

「やるかよ!!」

ビームサーベルをGNビームサーベルで受け止めるが、それだけでハワードの攻撃は終わらなかった。

バースト・レールガンカスタムの銃口をエクシアの胸部に押し当て、零距离で引き金を引いた。

「ぐあああつ!!」

「ぐううつ、まだあ!!」

暴発し、弾け飛ぶレールガンの破片の衝撃を気合いでねじ伏せ、ハワードは操縦桿を操る。

傷だらけのカスタムフラッグは、主の命に忠実に従い、ビームサーベルを振り下ろした。

爆煙で視界はなにも見えずだが、ハワードは確かな手応えを感じていた。

「ハワード・メイスン!」

グラハムが叫び、爆煙の中からカスタムフラッグが斜め下へ抜け、エクシアはハワードのカスタムフラッグの対角線上の方から、左腕

を肘の部分から失いながらも、GNソードライフルでハワードのカスタムフラッグに追撃をかける。それに気づいたハワードはすぐさまディフェンスロッドで防御するが、3発受けたところでディフェンスロッドごと左腕が撃ち抜かれ、左腕がもがれた。

「くう！よくもフラッグを」

「下がれハワード！ダリル！ハワードを」

「了解！」

グラハムは両腕のビームサブマシンガンでエクシアに連射しながら、ハワードのカスタムフラッグと距離を取らせる。

エクシアも近寄られまいとGNソードライフルで応戦するが手数が違う上に――

「私の道を阻むな！！」

機体に当たりそうな粒子ビームをビームサーベルで切り払うという神業でエクシアに肉迫する。

「くっ」

「うおおおおっ！！！！！！」

マグネット・コーティングの恩恵による高速反応速度による連続の斬撃に、エクシアは術なく、GNソードで受け続ける。

刹那は齒軋りしながら、フラッグスペルビアの斬撃を受け止め、エクシアのパワーに物を言わせ切り払うと、距離が開いた隙にGNソードライフルを連射しながら、前回と同じく海に潜って撤退した。

「黒いフラッグ……いつか必ず……」

フラッグファイター達にリベンジを誓いながら――

唯依 side

唯依はクリスカ、イーニア、霞を率いて、デユナメスを担当することとなった。

自身の乗る機体もフラッグスベルビアだ。ガンダムに勝てずとも負ける道理はないのは実証されている。

「仕掛けるぞ、各機、戦術プランに従って行動する。いいな！」

「了解！」

ソラが与えてくれた機体と戦術プラン。

彼女達に取ってこれほどまでに力強い味方は居ない。

「墜ちろ！」

クリスカのギャプラン・フライルの3門の砲口から次々にビームが放たれて行く。

それを援護するのは、イーニアと霞の2人乗りのギャプラン・サイコミュ搭載ビット試験機。こちらも2門のビーム砲からビームを放つ。

ソラの戦術プランは、2機のギャプランで長距離射撃から始まり、ガンダムの動きを止める。

イーニアと霞はガンダムの牽制に専念。

クリスカが陽動と攪乱、そして唯依のフラッグスperlビアのマコロク・E・ソードでトドメを討つ。

シンプルだが、確実な戦術プランであり、相手が1機であるから取れる戦法だった。

「カスミ！」

「…了解」

イーニアに返答しながら、霞は瞳を閉じてイメージを固定する。

「…行ってください！」

ギャプランの背中ユニットが分離し、有線制御式ビットが、ギャプランとは別方向から攻撃を加える。

「コイツらビットも！ハロ、GNビット！」

「リョウカイ、リョウカイ」

デュナメスも2基のプロトGNビットを分離し、有線制御式ビットへの迎撃にまわす。

さらにGNビームピストルの2挺拳銃とGNミサイルで弾幕を張り、唯依達の接近を阻むが、クリスカはニュータイプとしての直感を活用し、その弾幕をくぐり抜ける。

「ガンダム！」

「こなくそ!!」

変形したギャプラン・フライルは、ロング・ヒートブレードで切りかかる。

デュナメスはそれを半身を引くことで回避するが、それは罠であり、クリスカのをとをトレースして来た唯依のフラッグスベルビアが、マゴロク・E・ソードを振り下ろす。

「はああああーーーーッ!!」

「くそつたれ！」

回避は不可能の距離だが、少しでもダメージを減らそうと、ロックオンは機体を全力で後退させた。

フルシールドはざっくり斬られたが、薄皮一枚で、ガンダム本体には損傷がなかった。

「ふう、危なかつ、ぐあつ！」

「コウホウチュウイ、コウホウチュウイ、テキビットセッキン、テキビットセッキン」

後ろからビットで攻撃されたらしい。

こちらのビットも相手にしながら本体を撃つことをしてみせたパイロットに、ロックオンは舌を巻く。

やっぱりコイツらも別格か……

言い訳でもないが、自分たちやガンダムが弱いわけではなく、ソラ・ビャーチェノワの率いる部隊が非常識なのだと、ロックオンは再認識し、GN粒子を最大散布しながらGNビームピストルと4基のプロトGNビットで弾幕を張り、海の中へ撤退した。

「来たか、ソラ・ビャーチェノワ…！」

ティエリアは長距離砲撃でヴァイスフラッグカスタムを牽制するが、距離が離れている分、容易く回避される。

「シャルはプラン通り、タリサは援護！」

「了解！」

ヴァーチェの砲撃を回避しながら、バースト・レールガンカスタムを撃つ。しかしこちらがやる通り、あちらも回避する。

「2週間で何が変わったのか、刮目させてもらおうか、ガンダムツ
ー！」

続くヴァーチェの砲撃をバレルロールで回避し、機体を変形させる。

「ぐうううっ」

身体にかかるGが増し、それに耐えつつ、バースト・レールガンカスタムを撃つ。

「（当たるな）」

「GNフィールド！」

「なっ！」

ヴァーチェの装甲をへこませる威力を持つ実体弾が、GNフィールドにいと容易く弾かれた。しかもGNフィールドの色が若葉色と言っよりも緑色から深緑に近い色をしている。

「フィールドも強化されているのかっ」

「今度はこちらの番だ」

ティエリアは頭部のGNバルカンと左腕のGNシールドビームサブマシンガンでヴァイスフラッグカスタムを攻撃する。

「なんとっ！」

機体を操り、回避に専念するが、2、3発は受けてしまった。

「フラッグが、なんという装甲だ」

「ガンダニウムでなければ即死だった……ええいつ!!」

ソラは再びヴァーチェに接近する。

射撃が無理ならば、直接攻撃を仕掛けるまでだ。

「GNフィールド!」

「貫けっ!!」

ヴァイスフラッグカスタムのレーザーソードとGNフィールドが激しく閃光を散らす。

さらにソラは、マゴロク・E・ソードを抜き、GNフィールドに突き刺す。

「くっ、フィールドを」

ほぼ拮抗するレーザーソードと違い、マゴロク・E・ソードは徐々にだが、フィールドに食い込み始めている。しかし反撃しようにもGNキャノンはGNフィールドを張るのに使ってしまったている。かと言って今フィールドを緩めれば確実にフィールドを抜けてくる。分の悪い賭けになると、ティエリアはナンセンスだと思いながらもこの今の高揚感を否定はしなかった。

ガンダムを傷つけた借りは返させてもらう。

GNフィールドを解除し、マゴロク・E・ソードはGNバズーカに突き刺さる。

「バズーカぐらいは！」

「なっ、くうっ!!」

ティエリアはGNバズーカを手放し、GNバルカンとGNサブマシンガンを近距離で連射する。必要以上に近づき過ぎてしまったソラとヴァイスフラッグカスタムに、それを回避する術はなかった。

「中佐っ!!」

タリサの叫びが木霊した。

ヴァイスフラッグカスタムは爆発することはないが、頭部と右腕を失い、機体表面はボロボロの姿になっていた。

「退け！マナンドル少尉!!」

「っ!!」

シャルロットの叫びに、タリサは機体をヴァイスフラッグカスタム
に向かわせた。それと同時に、世界を染める程の閃光が放たれた。

「くっ、ぐあああああっ！！！！」

GNフィールドを最大出力で展開しながら回避したヴァーチェであ
ったが、最大出力でバスターフラッグから放たれた荷粒子砲とツイ
ンバスターライフルの威力と余波は、ヴァーチェのGNバズーカ・
バーストモードを軽く凌駕するもので、直撃こそ受けなかったが、
ヴァーチェは右腕と右足と右側のGNキャノンをごっそり持ってい
かれ、ティエリアは舌打ちしながらも余波で荒れ狂う海へ撤退した。

この一連の件により、ユニオンはタリビアをガンダムから防衛した
とされ、タリビア国内の反米感情は沈静化し米国主導の政治へ舵を
取る事が出来き、タリビアの現政権もアメリカの支援を受けて安泰、
他の国々もタリビアの二の舞を避けるべく露骨な反米政策打ち出す
事が出来なくなった。

大破したヴァイスフラッグカスタムから救出されたソラは五体満足で怪我もなかったが、作戦上は勝てても勝負に負けたソラは、その悔しさを隠すことなく身体から滲み出させ、大破したヴァイスフラッグカスタムを見ていた。

「お前にも、随分無理をさせてしまったな」

私はフラッグに語りかける。

私は今回のことで痛感した。もう、ヴァイスフラッグカスタムではガンダム性能には追いつけないと――

このヴァイスフラッグカスタムは、言い換えればカスタムフラッグなのだ。元々がフラッグだった機体をエンジンを新型に変え、さらに関節も限界まで弄り抜いた。ワンオフ・カスタムの機体、しかし新型であるフラッグスペルビアやガンダムには一段二段の性能差がある。

これ以上弄る事が出来ないこの機体ではガンダムには勝てないと、今回の戦いで痛感したことだ。

しかしわかっていても悲しいことだ。

このヴァイスフラッグカスタムは、私が最初に乗ったフラッグであり、私がここまで手掛けた機体だ。性能面で見れば間違いなくユニオントップクラスの機体なのだが、汎用機故に、私が思い描く戦いに追従出来なくなってしまったのだ。

だが変わりに目指すものも出来た。

ヴァイスフラッグカスタムを超える汎用型フラッグの開発――

私の新しい開発テーマが出来たのだ。

「今まで苦勞かけたな。今はゆっくり休むといい、相棒……」

私はフラッグにそう告げると、早速今回の戦利品の品定めを開始した。

mission25# 朽ちる翼（後書き）

書いている途中で何故かハワード無双になってしまった……

そして性能の限界を迎えるヴァイスフラッグカスタム

あくまでも機体が悪いわけではなく、ソラの戦い方、つまり接近戦寄りの近々中距離戦闘にヴァイスフラッグカスタムでは対応が出来なくなってしまったと言うだけである。

さて、次回はアザテイスタンか……

少なくとも3国家軍合同軍事演習までに機体を間に合わせなければな……

感想や意見は随時受け続けるぞ、ではまた会おう、フラッグファイターの諸君。

mission26# ある日のファイター達

ガンダムとの戦いから10日が経った。

その間、私はメッサーラの整備を監督しながら、新型フラッグの設計に日々を費やしていた。

それからわかる通り、しばらくはメッサーラが私の乗機となるが、はつきり言って私の肌には合わない機体だが、他に乗るMSも、メッサーラに乗れる人間も居ない為に仕方がなく私が乗ることとなった。

「顔が優れないな」

「クリスカ……」

自室でメッサーラのスペックデータを確認していたら、クリスカに声をかけられた。というよりいつ入った。

「気配はあるのにいくらノックしても返答がないから、勝手に入らせてもらった」

「そうか……」

クリスカは部隊の副隊長である為、彼女はマスターキーを持っているから、それを使ったのだろう。

「そんなにひどいか？」

「私に気づかない時点で何を言う。鏡を見るまでもない、まるで死人だ」

死人か、確かにそうかもしれないな。

しばらくフラッグに乗れないのは我慢すればいいことなのだが、やはり自分で手掛けたフラッグに乗ってガンダムに負けたと言う、心の傷は癒えずにいる。

新しい開発テーマも決まり、設計も始めているが、如何せん捗らないのが現状だ。

「……出掛けるぞ、ソラ」

「え？」

「何を呆けている。出掛けるんだ、今のままでは隊の士気にも影響する。だから気を晴らし行くのが最善だと判断した！」

「ちょ、待てクリスカ！私にはメッサーラのテストが」

「聞く耳持たん！」

あれやこれや反論する暇もなく、私はクリスカに裸にひん剥かれてバスルームに押し込まれて、身体の隅々まで洗われてしまう。

「く、クリスカ、そ、そこは丁寧につ、ひゃんッ！」

「声を出すな、ジツとしている、洗えないだろう」

「だ、だから、優しく、ああんッ！」

敏感なところまでも力強く擦るから、身体が変に感じてしまう。

心は男でも身体は女であり、しかも私の身体は感じやすいのか、身体を洗う時、ましてや敏感なところを洗う時は細心の注意を払っているのにもかかわらず、そんなのお構いなしに洗うクリスカの所為で、変に身体が火照って、バスルームの鏡に映る自分は、自分で見てもひどく淫らな姿を晒していた。

そんな生み出さなくてもいい猛烈に屈辱的で痴態に満ちた黒歴史に自失していると、いつの間にか着替えさせられていた。

黒のフレアスカートに、少し変わった、袖が肩の部分で一旦途切れているスーツ的な服、そして水色のネクタイに、左肩にはエンブレムこそユニオンだが、『YOKOHAMA BASE』と書かれている。

そう、M u v - L u vの国連軍の制服だ。誰の差し金だこれは……

「行くぞソラ」

「ま、待てクリスカ！なににもこんな格好」

「聞く耳持たんと言った！」

「じ、上官命令だ、今すぐ離せっ」

「残念だがその命令には従えない。私はソラよりも上の上官から今回の命令を受けている」

「上官？」

本開発計画は私とスカリエッティが最高責任者の為、直接的な上官は居ないはずだが……

それどこの服の出どころは……？

私はそう思いながら抵抗を試みるが、強化人間とイノベーターでは力の差があるのか、クリスカは私に構わずにぐいぐい引っ張って行く。無論、基地の中にいる者達にそれを目撃され、擦れ違う皆がまるで珍しい物でも見る目を私に向けてくる。いや、当たり前か、この身体となつて7年――

一度たりともスカートなんぞ穿いたことなどないのだから。

クリスカは私の恥じなど知らず、MSハンガーに連れ込んだ。

「おや、クリスカ、ソラと出掛け……」

さ、最悪だ……

「こ、ここ、こっちを見るなカタギリ！！／／／」

くっ、なんたる屈辱だ！よりもよってカタギリにまで見られるとはっ！

「ちょうどよかった。カタギリ技術顧問、ソラの格好についての感想を聞きたい」

「え、かか、感想かい？」

訊くなクリスカ！そして顔を赤らめるなこの純粹培養坊ちゃんメガネ！

「え、えーっつと……」

「ん、何をしているカタギリ」

「っ／／／／」

よ、よりにもよってお前まで現れるか！フラッグファイター！！

「ほう、なかなか似合っているではないか。しかし初めてだな、ソラの女性らしい格好を見るのは、さしずめシンデレラとでも言うのかな？」

「こ、ここ、これはクリスカに無理やり着せたただけだ！わわ、私の本意ではないっ！！／／／／」

「フフ、その格好と恥じらいでは、ソラも乙女であると再認識させられたな。なあ、カタギリ？」

「え、あ、ああ、うん、そうだね。あははは……」

苦笑いするならいつそのこと似合わないと言って笑い飛ばしてくれカタギリ……

「カタギリ技術顧問、カスタムフラッグの調整についてな……のです……が……」

「どうしたハワー……ド……」

ああ、終わった。

7年間築き上げてきたなにかが脆く砕け散ったのを、私は感じた。

結局もって、私は第13独立機動試験運用部隊と対ガンダム調査隊の面々に恥曝しにあってしまったが、変わりに次の日からは少しだがフラッグの設計も進んだ。

精神的に別のダメージを負ったことのお陰とは思いたくもないがな。

しかしその日以来、部隊内の女性陣が何故か国連軍の制服を着るようになり、司令官たる私がまたユニオンの制服に袖を通すのはなんだか空気の読めない人間に扱われてしまいそうに感じた為、私も2週間経った今でも、国連軍の制服を着ている。つまりスカート……せめてズボンを着かせて欲しいものだ――

タリビアでの戦闘から3週間弱。

世界中の紛争や争いごとは縮小ないし終息傾向にあり、先日のモラリアの軍事演習への武力介入でも、ガンダムはその力を世界に示し

だが、ユニオン領、特にこの横浜基地では、皆が余計に兵器開発に熱中した。

曰わく、自分達の造る機体は、パイロット次第でガンダムを倒せる！と言っことだ。

正しくそうだ。

ヴァイスフラッグカスタムtype-TF、フラッグスperlビア、バスターフラッグの3機種は、ガンダムに唯一単機でも対抗出来る性能を有しているのだ。そしてパイロット次第では退けることも可能なことは、過去2回の私達の戦いで実証されている。

そのことを自慢や誇りにはすれど、鼻にかけず、さらなる強力な機体開発に精を出す部下達を見て、自分は良い部下に恵まれたなと思う。

話しが変わるが、プロミネンス計画開始から1ヶ月。

人革連はグフ・カスタムやドム、ドム・トローペンを次々と開発して、人革連領のMSハンガーは半分がジオン系MSで賑わい始めている。

AEUには変わりなし、おそらく私達や人革連から開示された技術の解析に時間がかかっているのか、こういう場だからこそ新たな純自国産MSの開発でもしているのか、どちらにしても変化はない。いや、それが普通であって、私達が少しズルをしているだけなのだな。

ちなみに私達ユニオン側は、新型フラッグの開発を進めながらも、

リゼルの開発をしている。

ヴァイスリアルドやフラッグ以上の汎用性と簡易変形システムによるパイロットを選ばない変形、そして陸戦型リアルドやシエルフラッグを載せての展開が可能なSFSサブ・フライトシステムとしての有用性が上層部に受けたい。

あと数日で雛型であるメタスとプロトタイプが完成予定であり、その2機のテストデータを基にリゼルは完成する予定だ。

しかし、リゼルはいいが、新型フラッグが3国家軍合同軍事演習に間に合うかどうかギリギリのところだ。

この新型フラッグでなければ、私はガンダムと戦うことすらままならない。

現段階で使える技術をすべて注ぎ込んだ新型フラッグ。

対Gスーツも新規のものであり、徹底した設計により、拡張や発展性に十分余裕を持たせながらも高いバランス性能を誇り、パイロットの好みで特化型には一步劣るが、それでも高レベルのニーズに答えることができるのだ。

「ふっ、はっ、せいっ！」

「はあっ、せいっ、でやっ！」

ユニオン領のMSハンガーの前で、ソラとグラハムの2人が模擬刀

を交えていた。

「なかなかどうして、っ！やるものだ！！」

「ふっ……フラッグファイターとしてのっ、年っ、季はっ！おと、るが！武士としての、年季はっ……私、にっ！一日の長と言うものがある……！」

「よく言ったソラアアアアー！！！！！」

「グラハムウウウー！！！！！」

強化カーボン製の模擬刀だと言うのに、打ち合う度に鉄を叩くような鈍い音を奏で、2人の身体や服は一太刀振るう毎に傷つき、血も出ていたりするのだが、周りの野次馬である人革連やA E Uの間人は2人の鬼神迫る闘気と気迫に止められず近寄れずにいて、ユニオン領の人間はまたかと思いつながら、武士の真剣勝負がなんたるかを、少なくともスぺルビアやマゴロク・E・ソードやシシオウ・ブレードに心を奪われたり、ソラやグラハムに憧れる人間が多いユニオン領の者達はわかってゐる為、あえて傍観に徹していた。

「私は純粹に戦いを望むっ！」

「その極みにある勝利を！！」

3時間ぶつ 続けて打ち合い、さらに血も少なからず流しているから

か、2人の目はかなり血走っていた。

「たとえ幾つもの恥を晒そうとも、この武士道だけはッ!!」

「ソラ! 引導を渡すッ!!」

体格差から、下段攻撃が主体になるソラは力的に不利だが、それを技量でカバーしグラハムよりも与えている太刀は多いが、グラハムは上段攻撃を多様できるので、一撃一撃は重く――

「くう、舐めるな! 今日の私は、阿修羅すら凌駕する存在だ!!」

「ならば私を斬り裂き、その手に勝利を掴んでみせろおおッ!!」

結果ダメージは2人ともイーブンであった。

「つく、このままでは…」

「埒があかぬか…」

体力も筋力も限界近い2人は一旦離れ、呼吸を整えた。

緊張が走る。

「いや、私などまだまだ、キミの足下にも及ばないさ。やはり『極み』への道は程遠い」

「程遠いからこそ『極み』というものだ」

「違う。また改めて果たし合いを所望する」

「望む所だ、いつでも受けよう」

そこで気抜けした2人は、同時に地面に仰向けに倒れた。

「ぐむつ、やはり真剣なる勝負のあとは身体が動かん」

「無理はするな、互いに限界を超えた攻防をしているのだ、気抜けすれば身体が動かんのは至極当然と言える。しばらくは俗念を忘れ、ゆるりと休むのも一興だ」

「その言葉に同意しよう」

そして数分経って医務室に運ばれ、軍医にまたやったのかと呆れられるのも慣れてしまっている2人であった。しかしその顔は、全力を望み、それを出し切った清々しい顔に、毎回軍医も強くは引き止められないのだった。

mission26# ある日のファイター達（後書き）

多大に電波を受信してしまったが、後悔はない！

最近諸君に頼りっぱなしだが、進行について相談次第。

A：原作ルート、つまりアザティスタンルートでガンダムとひろしをボコる。

B：新型フラッグ開発に専念する。

Aのメリットは、あつてなきような物だが、デメリットは、新型フラッグが3国家軍合同軍事演習に間に合わないと言う未来が待つ。

Bルートは、3国家軍合同軍事演習に新型フラッグが間に合うと言う結果である。しかしおそらく何の面白みもない『可能性』もある。

今一度、諸君等の力を私に貸して頂きたい！

mission27# 無差別報復テロ

モラリアでのガンダムの武力介入から数日――

世界の主要都市7ヶ所で同時テロが起こった。

ソレスタルビーイングが武力介入を中止し武装解除を行わない限り今後も世界中に無差別報復を行って行くとの声明もネットワークを通じて出された。

「私設武装組織ソレスタルビーイングによる武力介入の即時中止及び武装解除が行われるまで我々は報復活動が続ける事となる……これは悪では無い。我々は人々の代弁者であり武力で世界を押さえつける者達に反抗する正義の使徒である……か……人々の代弁者であると言明しながらも民間人を巻き込むとは……正義どころか人間の風上にも置けん！」

東京でもテロは起きており、せめてもの威圧とテロやテロリストの早期発見の為にメッサーラで東京や横浜の空を飛び回っていた。隣りにはグラハムのフラッグスベルビアも飛んでいる。

「中佐も大尉も……こんな事をしても敵さんは見つかりませんか？」

2人の後ろを飛ぶダリルがソラとグラハムに言うことは最もなのだ

が……

「…わかつている。私は我慢弱く、落ち着きのない男なのさ…」

「しかも姑息な真似をする輩が大の嫌いときている。ナンセンスだが…動かすにはられない」

ソラとグラハム、この2人は今回の無差別テロが相当鶏冠にキているらしい。最も、堪忍袋の緒が切れていないだけましなのだろうが

「お供しますよ、中佐、大尉」

「その忠義に感謝する」

ハワードの言葉に2人が同時に返した。

「（しかし、情けないことだ、無差別テロがあったという記憶はどうやら欠落してしまっているらしい）」

ソラは表に出さずとも、内心自分の不甲斐なさに苛立っていた。

無差別報復テロがあるとわかっていたのなら、何かしら対処が出来たのではないかと思いいながらも、何も出来ず、むしろ自分の所為で

良からぬ事態が起きないかとの懸念が、ソラの苛立ちを増長させていた。

「中佐、こちらエルシオール、中佐、聞こえますか？」

「私だ。何かあったのか？（いかな、こつも周りが見えなくなつてしまうとは）」

ソラは自身を卑下しながらも、表には出さずにエルシオールとの回線を開いた。

「中佐、人革連のドクタースカリエッティから暗号通信が届いています」

「スカリエッティから？こちらにまわしてくれ」

「了解しました」

通信が切れると、コンソールモニターにデータが送られ、その暗号を読み解く。

「なるほど、さすがスカリエッティ、頼れる友だ」

そう言ったソラは通信回線を開いた。

「レフィーナ艦長、エルシオール炉に火を入れろ」

「炉に火を？出撃なさるのですか？」

「ああ、偽義偽義を語る卑怯者共に鉄槌を下しにゆくのだ」

「奴らの拠点が判明したのか！？」

「ああ、スカリエッティからの確定情報だ。しかし良くやる。犯行声明は幾つものサーバーを経由して目眩ましをしているだろうに、スカリエッティ…恐れいる」

機体を旋回させ、ソラは機体を横浜基地へと向ける。グラハム達もそれに続き、空中待機しているエルシオールと合流し、伊豆諸島へと向かう。

まさか目と鼻の先に今回のテロの実行組織であるラ・イデンドラの活動拠点の一つがあるとはな……

私は情報を上層部に送り、一番近場と言うことで、伊豆諸島に拠点を置くラ・イデンドラを叩くこととなった。

拠点と言っても大型の輸送タンカーと小さな無人島らしいが、それくらいあればMSの1機や2機はあるだろう。

そして光学迷彩を展開し、こちらの戦闘空域に入る前に光学迷彩を解除。降伏勧告を送るが、タンカーは動きだし、タンカーから2機、

無人島からも3機のMSが上がってきた。

「ヘリオンか、私達が出る。エルシオールはタンカーの進路を妨害、転覆や座礁は構わないが攻撃は当てるなよ、一発でも吹っ飛ぶからな」

「了解しました。MS発進用意！両舷収束ビーム砲発射スタンバイを！」

ブリッジを出て、メッサーラで出撃する。

既にグラハム、ハワード、ダリルが出ているから私は要らないだろうが、今の私は腹の虫の居所が無性に悪いからな。

「墜ちろ！」

メガ粒子砲を撃ち、1機のヘリオンを撃ち墜とし、機体をMSへ変形させ、最後の1機はメガ粒子砲と両肩のミサイルランチャーと両腕のグレネードランチャーの一斉射で仕留める。

ヘリオン程度では歯応えがないが、やはりギャプランよりも動きは硬く感じる。その代わり総推力はフラッグとは比べ物にならないが

……

ちなみにタンカーは、エルシオールの収束ビーム砲が巻き起こした津波に転覆しそうになり、混乱の最中にあるところをグラハム達が

フラッグで包围し、降参した。

時を同じくしてガンダムの武力介入によりラ・イデンラの他の活動拠点も破壊されラ・イデンラは壊滅された。

人革連宇宙要塞ソロモン

その私室で、スカリエッティは少々疲れた顔でノートPCが置かれている机のイスに寄りかかっていた。

「どうやらテロ組織は壊滅出来たようだね」

実のところ、スカリエッティ自身も無差別報復テロのことはすっかり忘れていてしまっていたが、そこはスカリエッティを名乗る者、犯行声明文を解析して経由サーバーをすべて遡り、組織の情報をまんまと奪取し、それを本国とソラに転送したのがつい3時間前だが、

かなり頭を使ったせいか少し頭がボーっとしていたりする。

「それにしても、ガンダム鹵獲作戦か……」

人革連のガンダム鹵獲作戦。

それはガンダムが宇宙から大気圏へ突入した事実を、上層部はC Bの宇宙活動拠点ないし輸送艦の存在を予想し、一大作戦の準備を行っているのだが、それに宇宙用の新型MSリック・ドムの投入が決まり、特務部隊『頂武』の人数分のリック・ドムと指揮官用のリック・ドム？をソロモンとア・バオア・クーで急ピッチで組み立ている。

「しかし、ガンダムはこれで墜ちるんじゃないかな？」

今回の鹵獲作戦には、MS乗りとしても優秀なスカリエッティやプル達、さらにソロモン、ア・バオア・クー、アクシズの中でも一の練度を誇る宇宙軍第302哨戒中隊隊長の彼もビームバズーカを装備したリック・ドムで出るんだから……

「本当はGP-02でも送りたいのだけれどね……ソロモンよ、私は帰ってきたっ！……く、くははははは！……ジオニストの僕には胸アツ過ぎてどうかなってしまいそうだよ！あははははははは！……」

スカリエッティの嬉しさからくる狂った笑いは、冷たいソロモン海に響き渡るのだった。

mission27# 無差別報復テロ（後書き）

正直いるのかいないのか微妙だったが、次の話しへの中継ぎ故に我慢して貰いたい。

報告書（感想や意見）の提出はいつでも受け付けているぞフラッグファイター！

mission28# ガンダム鹵獲作戦

無差別報復テロから2ヶ月半近くが経ち、横浜基地ではまたさらにMSの数が増え、基地の拡張と言う名の要塞化は着々と完了しつつある。

3大国家共同プロジェクトとあって、こういった機密保持や襲撃の備え、特に新型兵器開発も遠まわしには争いを生む行為である為、武力介入に対しての備えは至極当然といえるだろう。

この2ヶ月半、私はようやく新型のフラッグの基礎設計を終えられた。

新型フラッグ——開発コード、ハイペリオンフラッグ。

『天を往く旗』との意味を持たせたこの新型フラッグは、スパロボのハイペリオンと同じくジェットエンジンを廃し推進剤非依存推進（PIP）機関を実現した2基のテスラ・ドライブ——ツインテスラ・ドライブを搭載し、機動性はキュリオスさえ上回る世界最速の機体である。

ちなみにこの仕様はS型、つまり指揮官やベテランパイロット向けの機体であり、それでも慣れるまではテスラ・ドライブにリミッターをかける予定だ。

エース仕様機——E型は強化型テスラ・ドライブを搭載し、平均的なガンダムの機動性と同等の機動性を持つ。

一般仕様機——F型は量産機初のテスト・ドライブ標準装備型で、機動性はガンダムには劣るがそれでもオーバーフラッグよりは上である。

動力はS型がプラズマジエネレーター、E型は核融合炉、N型はパラジウムリアクターの搭載を検討している。

武装は頭部のビームバルカン、ビームサーベル、プログナイフ、そして上下に銃口を持ちバースト・レールガンとバースト・レールガンカスタムを撃ち分けられるツインバースト・レールガン又は新たに開発したツイン・マグナライフル、ディフェンスロッドが標準装備であるが、パイロット次第で武装に変更が出る。そしてS型で指揮官機のみ、パルチザン・ランチャーを装備選択枠に入れる予定だ。防御面はS型はABフィールド（アンチビームフィールド）、E型にはビームコートを搭載し、F型には耐ビームコーティングを施すことになっている。

装甲はS型がガンダニウムα、E型はガンダニウムγ、F型はチタン合金セラミック複合材を使用している。

対G関係も新型の対Gスーツの投入により最高で20G以上のGを10Gクラスにまで軽減することに成功した。しかしS型だけは論外であり、最低でも13Gから18GまでのGがかかる為、テスト・ドライブのリミッターは対G対策でもある。無論、13G〜18GまでのGに耐えられるようにする訓練メニューも考案されている。

近々遠のオールレンジに対応し、ガンダム並みの機動性を誇り、生産ラインやパーツもフラッグ系の物を流用している為、生産性や整備性も保証されている。

アイリス社の日本支社にはパーツの生産を最優先で依頼している為、試作1号機は1ヶ月から1ヶ月半程あれば完成するだろう。

しかし、フラッグに乗れないのは気が辛いものだ。だが逆に、骨の髄までフラッグファイターであることに嬉しさと矜持が眉唾ものやリスペクトやイミテーションではなく本物であると胸を張れるというものだ。

人革連宇宙要塞ソロモン

現在、ガンダム鹵獲作戦に合わせ、このソロモンから、人革連軌道エレベーター『天柱』に向け、数十万の双方向通信システムが広範囲に散布されている。

さらに一隻の艦が発進準備をしていた。

ムサイ級後期生産型——パールギュントを旗艦とした4隻のムサイによる艦隊だ。

そのブリッジに、スカリエッティは居た。白衣ではなく、ジオンの士官服を着てだが……

「本当にこれでガンダムが網にかかるのでしょうか？」

グラードル艦長の問いに僕は答える。

「逆にかかってくれないと困るさ、これだけの物流作戦、そうそう何度も出来はしないよ」

「それはごもっともです」

天柱でも同じことが行われている。つまり史実の倍の物量を使っているのだから、手みやげひとつくらいないと上も納得しないだろう。その為に、最新鋭機のリックドムとリックドム？を用意したのだからね。

でも今回の結果次第で、ゲルググの投入も考えないとね、ドムも良い機体だけれど……

「艦長！双方向通信システムに通信障害発生！」

「どうやらかかったようだね」

「らしいですね。全艦最大戦速！」

「僕は待機ボックスに行くよ」

「お気をつけて、博士」

「今は大佐だよ、艦長」

そう、今の僕は技術者ではなく1人の戦士のつもりだ。

ロッカーでジオンのノーマルスーツに着替えて、待機ボックスに入る。すると僕に気づいたパイロット達が敬礼してきた。それに敬礼で返した。

「みんな揃っているね、今回の作戦はガンダムの鹵獲、つまり生け捕りにしないとならない」

「壊してはいけないのでありますか？」

「手足とかならいいけど、胴体はなるべく残して欲しいかな？上も僕も、ガンダムの動力は欲しいからね」

質問したパイロットにそう答える。

「MS隊の総指揮はガトー少佐に執ってもらうからそのつもりでね」

「了解しました、大佐殿」

「頼りにしているよ、ソロモンの悪夢をガンダムに見せつけてやってくれ」

「はっ！」

ガトー少佐が敬礼をもって返事とすると、周りのパイロット達も湧いた。

皆、僕と同じ同郷の物達で、ガトー少佐直々に鍛えられた精鋭だ。

「まもなく作戦領域に入る。パイロットは搭乗機へ！繰り返す――」

「皆聞いたな、総員搭乗せよ！」

『了解！！』

パイロット達はリックドム？に乗り、ガトー少佐は専用のリックドムに、僕は今回用意したザク？FZ型のカスタム機に乗る。ユニバーサル・ブースト・ポッドを増設したこのザク？FZ型Fbは、ゲルグゲをも超える機動性を持っていて、ランドセルと両脚にはプロペラント・タンクも増設されていて、戦闘時間も問題ない。

さて、頂武に第302哨戒中隊に僕達までいる布陣でガンダムがどこまで戦えるか見ものだね。

GN粒子の通信妨害効果を坂手に取り、人革連が放った数十万もの双方向通信システムによりソレスタルビーイングの母艦『プトレマイオス2』が発見され、プトレマイオス2もそれに気付きガンダムを出撃させていた。

キュリオスとヴァーチェは陽動の為、プトレマイオス2より発進し、エクシアは直援、デユナメスもオーバーホール中の為に左足に義足を着け、プトレマイオス2の直援に回る。

しかし、キュリオスとヴァーチェが陽動であると呼んだ頂武の指揮官であるセルゲイ・スミルノフ中佐は隊を3つに分け、陽動に陽動で答えた。

戦端が開かれる中、第302哨戒中隊はプトレマイオス2の右側面からの奇襲を行う為に、艦を進めていた。

3隻のムサイからそれぞれリックドム？やザク？F2型が発進し、ブル達の新型である高機動型ザク？R-3型も出てくる。そしてMS隊の中央をビームバズーカを装備したガトー少佐のリックドムが先頭に行く。

「しかし、よくも4機で保たせる。……良いな、作戦通り、我々は敵艦に奇襲をかける。以後は特務部隊と連携し、ガンダムを叩く」

『了解!!』

「よし、全機出撃する!」

ガトー少佐の合図で加速するMS各機。

その動きはブトレマイオス2でも捉えられていた。

「3時方向より接近するMS群、数は16機!」

「別動隊!?GNミサイルで迎撃して!」

「了解!」

ブトレマイオス2から次々とGNミサイルが放たれるが、長距離ミサイルに当たるような安い腕は、この第302哨戒中隊には揃っていない。

「長距離ミサイル?全機、回避行動!」

「この！」

ことごとくデユナメスの攻撃をよけたガトーのリックドムは、仕返しにとビームバズーカを撃つ。

回避するデユナメスはGNビームピストルに装備を変えるが、それすらもガトーのリックドムは躲す。

「なんてヤツだよ！ハロ、GNビット！」

「リョウカイ、リョウカイ」

デユナメスから4基のプロトGNビットが分離し、ガトーのリックドムをオールレンジから攻撃を始めるが――

「その手の武器は知っている！」

何せかつての愛機にも似たような武器は搭載されていたのだから――

ガトーはビームバズーカで1機のプロトGNビットを撃ち墜とすと、空いている手に持つザク・マシンガンで3基のプロトGNビットを撃ち墜とす。

「こいつも――」

「墜ちろっ!」

ビームバズーカをギリギリで避けながらデユナメスはGNスナイパーライフルとGNビームピストルで応戦するが、ガトーのリックドムは着実に距離を詰めてくる。

「もらったっ!」

「ち、くそっ!」

ザク・マシンガンの着弾の衝撃が、コックピットを揺らした一瞬の内に、ロックオンはガトーのリックドムを見失った。

「な、どこに行きやがった!?!」

「トレミーソンショウ!トレミーソンショウ!」

「なに!トレミーが!?!」

見ればプトレマイオス2のエンジンが火を噴いていた。そしてプトレマイオス2にビームバズーカを向けるガトーのリックドムの姿を見つけた。

「（このままじゃ…っ）」

被弾し、GNフィールドを張るプトレマイオス2だが、目の前のMS相手には時間稼ぎにしかならないと、ロックオンはどこかで確信があった。

「ハロ！ミス・スメラギに撤退を進言してくれ、このままじゃやられる」

「ニゲルノカ？ニゲルノカ？」

「ああそつだよ。どのみち、今の俺たちじゃあれは抑えきれない」

ロックオンはハロにいうと、再びガトーのリックドムに攻撃を仕掛けた。

「後退せんのか？いや、時間稼ぎのつもりか？」

「あんたはここで抑える！」

GNビームサーベルを抜き、GNビームピストルで牽制しながらデユナメスはガトーのリックドムに接近する。

ガトーもビームバズーカを離し、ザク・マシンガンで応戦しながらヒートサーベルを抜く。

「おうりやつ！」

「フツ、私に苦手とする接近戦を仕掛けるか、しかし、それは蛮勇と言っものだ！！」

GNビームサーベルをヒートサーベルで弾き飛ばし、ガトーはそのまま下から掬い上げるようにヒートサーベルを振り上げた。

「こいつ！！」

「もらったあああ！！」

ロックオンはそれに反応し、機体を引かせるが、ガトーはヒートサーベルを振り上げ切らず、中腹で止めると突きを放つ。

ヒートサーベルの突きは、回避行動を取ったデユナメスの右肩に突き刺さり、ガトーはリックドムの推力を全開にしてデユナメスの右腕を肩から斬り飛ばし、空かさずにザク・マシンガンとシュツルム・ファウストを撃つ。

「があああつ！！」

「機体もパイロットも悪くはないが、私を相手にするには、まだ未熟っ！」

トドメを刺そうとするガトーであったが、全機撤退の命が下った。
ガンダムの鹵獲に失敗したらしい。

「……命拾いをしたな、ガンダム」

ガトーはデュナメスの腕とビームバズーカを回収し、撤退した。

MS隊での奇襲攻撃は上手くいったものの、攻撃はGNフィールドに防御されて通らなかった。

ブトレマイオス2は頂武と第302哨戒中隊に任せて、僕達はエクシアの相手をしていた。

「墜ちろ、ガンダム！」

プルツのザク？R-3型のビームライフルが撃ったビームをエクシアはシールドで受け止める。

しかしすぐに別方向からビームが撃たれて、エクシアは回避する。そこにまたビームが撃たれ、エクシアは休む暇もない。

そこにスカリエッティのザク？FZ型Fbがヒートホークを抜き、急接近する。

「また新型！？しかも速いつ！」

エクシアはGNソードで受け止めるが、ザク？FZ型Fbの推力に機体が押されていた。しかも次の瞬間には視界から消え、またビーム攻撃が襲ってくる。

「Fbのスピードならガンダムと渡り合えるということは、GP-04ならそれ以上か」

空いている手に装備したMMP-80マシンガンでガンダムの気をこちらに向け、ヒートホークで斬り結び、離脱する合間はプル達がビームライフルで牽制する一撃離脱戦法で、スカリエッティ達はエクシアの足止めをしていたが、そこに全機撤退命令が出た。

「（やっぱり失敗したか）全機、撤退だ！」

スカリエッツィはオープンチャンネルでブル達や第302哨戒中隊に命令を出すと、エクシアを牽制しながら戦闘宙域から離脱した。

結果としてはガンダムの鹵獲には至らず、何機かリックドムも失ったが、ガンダムナドレの存在の露呈と、ビームバズーカが戦艦クルスのGNフィールドを貫く威力を持つていることと、GNフルシールドとGNスナイパーライフル、GNピストル込みのデュナメスの右腕の回収は出来た結果に、上は満足はするだろう。

mission28# ガンダム鹵獲作戦（後書き）

私生活でいろいろありすぎてモチベーションが下がってしまった所
為か、内容が薄い物になってしまつてすまない。

ああ、私の下に神でも死神でも良いから現れてくれないものか……

異世界へ転生出来ないものか……

そうしたら私はフラッグファイターになりたいものだ。それが無理
ならジオンでパイロットになり、第302哨戒中隊に所属してみたい
ものだ……

諸君の報告書を待つ。

はあ、世の中世知辛いものだ……

mission29# ヴァルキリーズ

近頃国内情勢が不安定なアザティスタンに対し、ユニオンは軍事支援として部隊を派遣することとなった。

ガンダムの武力介入も予想される為、対ガンダム調査隊はアザティスタンへ飛んだが、私達第13独立機動試験運用部隊は、私の権限で今回は辞退させてもらった。

確かに私が居なくとも皆ならやってくれるだろうが、私は心配性の上に、ヴァイスフラッグカスタムならともかく、メッサーラは虎の子の試作機故に壊すわけにも行かず、横浜基地で引き続きデータ収集とハイペリオンフラッグの開発を行っている。

「神宮司まりも大尉、伊隅みちる大尉、只今第13独立機動試験運用部隊に着任致しました」

「ご苦労、歓迎する」

私は執務室で新たな仲間を向かい入れていた。

「さっそくだが、2人には陸戦型の新型MSのテストパイロットをやってもらいたい」

「陸戦型の新型でありますか？」

「ああ、2人なら十二分に性能を発揮できるだろう。前線から陸戦型ヴァイスリアルドやシエルフラッグの上位機種が欲しいとの要望でな、シエルフラッグを強化改修したパワードフラッグと言ってな、詳しくはこの仕様書を見てくれ、両大尉の働きに期待する」

「はっ！神宮司まりも大尉、伊隅みちる大尉、新型MSテストパイロットの任、拜命致しました！」

「うむ。……さて、堅苦しいのは終わりだ。改めて歓迎する、神宮司大尉、伊隅大尉。今から食堂で歓迎会をやるからついてきてくれ」

「よろしいのですか？このような時に歓迎会など」

「伊隅大尉、このような時だからこそやるのさ。それに新生する我が隊の新設式も兼ねているからな、今日は我が隊は全面的に休業だ」

「新生……ですか？」

「名が変わって2人の他に整備班が増えるだけだな。上は私達も対ガンダム部隊として正規軍とするらしい。つまり今まで以上に忙しくなるから今しかやれないという事情もあるがな」

「了解致しました」

私は2人を連れ立って食堂へ向かう。隊の要員のほとんどが食堂に居るとあって、廊下はがらんとしている。

食堂に入ると、皆一斉にこちらに敬礼を送って来た。

慣れている私は普通に敬礼を返すが、神宮司大尉と伊隅大尉は気圧されたらしく一拍敬礼が遅れた。

私は唯依に先導され、特設の壇上の上に上がった。ご丁寧にスタンドマイクも用意してある。

私は壇上に立ち、スタンドからマイクを取った。

「本日までの数々の働き、皆ご苦労だった。隊の司令官として、先ずはそのことに礼を言いたい。ありがとう」

私がそこで一旦言葉を切ると、食堂中から黄色い声が上がった。

私はそれを手で制すると、続きを話す。

「しかし、C Bとガンダムの跳梁により、極めて均衡なバランスを保っていた世界は混迷の道を行きつつある。そこで希望となる物はなんだ！？思い返して欲しい、世界で初めて単機でガンダムを退けたのはどこの機体であるのかを！そう！我々の造り上げた誇りだ！私達が長い月日をかけて築いた誇りは、如何にガンダムであろうとも打ち砕けぬことを、私は断言する！！」

先ほどとは比べ物にならない声上がり、「フラッグ万歳」や「第13独立機動試験運用部隊万歳」や「ソラ・ビャーチェノワ中佐万歳」などが聞こえてもくる。

「だが我々の戦いはまだ終わってわけではない！むしろこれからであると、過酷なことをあえて私は諸君に告げる！だが私は知っている、諸君ならばガンダムを凌駕するMSを造り上げられるということ！私達は今日より正規軍となった、それに合わせ第13独立機動試験運用部隊は解体、そのまま私達は第13独立戦術機動飛行隊、通称——『ヴァルキリーズ』と名を改め、新型MSの開発を行いながらも、今まで以上に戦地に赴くことになる。だがあえて言おう、死ぬなよ！」

食堂を沈黙が支配する。

皆、覚悟を決めた顔だ。

「フツ…、諸君と共に戦えることを、私は一生の誇りに思う。本日と翌日はシフト以外は完全休日且つ無礼講だ。皆、今までの疲れを忘れ羽を伸ばし、英気を養ってくれ。以上！乾杯——！」

『乾杯——！！！！！！』

前挨拶と乾杯の音頭を終えた私は、制服とワイシャツの第3ボタンまでを緩めた。あまり慣れないことをするのではなかったな、かなり緊張した。

「中佐！」

「唯依か、私は無礼講だと言ったぞ？」

「し、しかし、自分と中佐では天と地の身分差で中佐は私の上官ですから」

私の言葉にどこかシュンとする唯依。別に咎めているわけではないのにな、というか唯依に犬の耳と尻尾の幻覚が見えるのは私の気のせいかな？

「…こういう時は肩の力を抜け、今日明日は堅苦しいのはなしだ。良いな？上官命令だ」

「は、はい……。では、ソラさん、一緒に食事は如何でしょうか？」

「ああ、私は構わないが、全部署への挨拶周りにつき合わせるが、構わないか？」

「はい！お供します！」

元氣になったのか？

唯依は顔を煌めかせ、尻尾が勢い良く動いているように見える。

ガチガチの生真面目軍人の唯依に、主の命令に絶対の忠犬か……

「フッ…」

「どうかされましたか？中佐」

「いや、なんでもない。行くぞ唯依」

「はい！」

唯依を連れ、私は各部署の挨拶周りを始めた。

技術部門でも設計部、技術開発部、武装部、EOT解析部に別れており、そこにエルシオールのクルーやMS部隊員や整備班などが混ざって、それなりの数を1ヶ所ずつ乾杯をしてまわった所為か、最後にまわしたMS部隊員の席に着くと、イスにどっかりと座った。

身体が熱いな……

「大丈夫ですか？ソラさん」

「っ…ああ、少し酒がまわっているだけだ。少し休めば問題ない」

声をかけてくれた霞の頭に手を乗せて撫でる。思えば霞の頭を撫でたのも久しぶりだな。

「カスミだけズルイー！ソラ！イーニアも〜！」

「んっ、…ああ、イーニアも毎日ありがとうな」

抱きついてきたイーニアを片腕で支えながら、イーニアの髪を手櫛で梳く。

2人ともサラサラの髪だな。色は僅かにイーニアが濃く、霞は薄い。私が中間辺りなのか？

そのうち私は2人を胸元に抱き寄せて、その温かさに身を委ねていた。

「ソラ…？」

「ソラさん？」

「…何があっても、お前達は私が守ってみせるからな」

これから戦いは激しくなる。

基地に居るのも艦に居るのもMSに乗るのも危険度は同じになるだろう。だから私は2人に少しでも高性能の機体を用意するまでだ。ガンダムに負けない機体を……

1日目が終了し、私は今度はひつついて離れないイーニアと霞を眠るまでそつとして置き、眠ってしまった2人を私の布団に寝かせると、再び食堂に戻り、残り物をつまみつつ、どっちらかった食堂の片付けをしていた。

さすがに女だけだからか、飲み潰れてそのまんまと言うのではないから片付けは結構楽だった。

「ソラ……」

「クリスカ、寝ていなかったのか？」

片付けが終わって一息吐いたところを狙いすましたかのようなタイミングでクリスカが食堂に入ってきた。

「何か飲むか？水と麦茶ならすぐ入れられるが……クリスカ？」

クリスカは無言のまま私に歩み寄ってきた。顔は俯いているからこちらからは確認出来ない。

どうかしたのかと訊こうとしたら、クリスカは俯いたまま私に寄り

かかってきた。

「クリスカ……？」

「……死ぬ気なのか……ソラは……」

「……何を言つかと思えば、不吉な夢でも見たか？」

「……ああ、見た」

適当に言っただけなのに当たるとは、少し怖いのだが……

「……どんな夢なんだ？私に聞かせてくれるか？」

「……ソラが、血にまみれて、光になって消えて、いくら感じようとしても感じられないんだ……」

「ニュータイプも辛いな……」

ニュータイプでイノベーターでESP能力を持つクリスカの事だ。予知夢のような夢やリアルな夢を見ても仕方がないだろう。

「クリスカ、顔を上げてくれ……」

私がそう言つと、クリスカは俯いた顔を上げた。目尻に涙を溜めた、私とそっくりの顔がそこにあった。

私はクリスカの涙を指先で掬い取ると、クリスカの手を取って、私の胸に押し当てた。

「ソラ…」

「クリスカ、私はちゃんと生きている。そして決して死なない、私にはやりたいこともやるべきこともたくさんあるんだからな」

「ソラ……私は」

「心配するなクリスカ、私はそう簡単に墜ちはしない」

「でも…」

いつもは気丈なクリスカでも、ふとしたときにはこんな風に弱々しくなるのは、感じすぎるニュータイプだからなのだろうか……

「一緒に寝るか？」

「っ…」

私がそう提案すると、クリスカは頬を染めながら遠慮がちに頷いた。

私は一度食堂を見回し、片付け残しがないのを確認すると、クリス
カが私の手を引き、今夜は彼女の部屋で一緒に、互いを抱き締めあ
って寝ることになった。

mission29# ヴァルキリーズ（後書き）

さて、いよいよ3国合同軍事演習も近い。

フラッグがガンダムを墜とす日も目の前だ。

諸君からの報告書を待つ。

mission30# 激突戦域

「しかし人革連がまた新型をか……」

まわされた資料によれば、今回はゲルググのG型を地上軍で、ゲルググの高機動を宇宙軍向けの次期主力候補機に上げるらしい。

しかしネタがあるからとは言えどもさすがスカリエッティ、開発スピードが私達とは段違いだ。

「またお前には無理させるな。なあ？相棒」

MSハンガーに固定された白いフラッグ。

両腰には新たにバインダーが追加され、ツインテスラ・ドライブとなっている。さらに両肩もコンデンサー内蔵型に換え、頭部のアンテナも新調され、少々趣味にも走った所為で全体像がマスラオ擬きになっている。

ヴァイスフラッグAX――

ヴァイスフラッグカスタムtype-TFをハイペリオンフラッグのテストベッド機として再改修した機体だ。しかし拡張限界を超えた改修に機体がついて行けず、機体強度に難があり、テスラ・ドライブの出力も80%でセーブしている。さらに試作品だがスカリエ

ツティから提供されたサイコミュのデータとESP能力者用のサイコ・コントロールシステムを発展させて作り上げたバイオセンサーも搭載し、機体の反応速度と操作性が上がっている。

それではようやくハイペリオンフラッグのF型と性能的にはそう変わりはないのだから、今のうちにこれでツインテスラ・ドライブのクセとハイペリオンフラッグのイメージを掴んでおかねばならない。非推進剤依存推進は勝手も違うらしいからな。

「とは言えども、やはり勝手が違うな」

機体の加速力が段違いであり、マグネット・コーティングによる接近戦での運動性の極限化。

マスラオやスサノオのように格闘戦に特化しながらもブレイヴの汎用性を持たせる。その最終的なイメージを今出来る形で具現化させたのがハイペリオンフラッグだ。

無論、その逆、フラッグ・イエーガーのパーツ流用により射撃戦特化。まだ検討中だがバスターフラッグと同じく砲撃特化型にもチューン出来る。

そして設計者である私でないといけないように、このヴァイスフラッグAXのバインダーは僅かな改装でGNドライヴの搭載をも可能としている。

そしてパーツ分割ではあるが、私が託された擬似太陽炉を基に、数基の擬似太陽炉の製作も開始している。無論クリスカに頼んでヴェ

ーダを使い、不自然がない程度でデータを調整している。

しかし、ヴェーダも意地悪だ。

ヴェーダはあくまでも中立の立場らしい。でなければ私は今頃死んでいるだろうし、C Bの位置やミッションプランだってわかるだろうし、大使の策略もわかるだろうに、それがいくら調べてもわからないのだから……

ヴァイスフラッグA Xでの機動テストの日々を送りながら、ビットの改良とファイバーユニットの製作とそれに搭載予定のグラビコン・システムの調整、クリスカのギャプラン・ファイルとの接続連動試験と調整……やるべきことが山ほどというより天ほどある。

しかしそんななかで打診されたゲルググG型とヴァイスフラッグA Xとの模擬戦。

相手はわからないが、やるしかないだろう。

「システムチェック終了、バイオセンサーとのリンク状態良好、ヴァイスフラッグA-X戦闘モードで起動」

機体が起動し、センサーマスクに光が灯る。

相手の陸戦型ゲルググも起動したらしく、モノアイが光る。

「あー、ミス・ビャーチェノワ、聞こえているかい？」

「ああ、何かあったのか？」

「いや、どうもしないけど、死ぬ気でかからないとあつという間に墜とされるかもしれないよ」

「心配は無用だ。もとより手加減する気もない」

というよりも全力で当たって勝てるかどうかも怪しい。

スカリエッティが造ったのなら、G型は茶色系や通常の緑系なのに対し、目の前の機体は胴体が緑だが四駆が青という、かなり不吉な色だ。しかもシールドはGP-02を思わせる巨大なシールドを装備している。そしてバイオセンサーで拡大された意識で感じられるプレッシャーは並々ならない。間違いなく手強い相手だ。

カウントダウンが開始し、プレッシャーが引いていく、だが代わりに冷や汗が大量に溢れ出す。

テスラ・ドライブの出力を上げ、いつでも飛び立てるように準備しておく。

「（3…2…1…）今ッ！！」

カウントゼロと同時に右にブーストする。

私の読みは当たりだった。

ヴァイスフラッグAXの居た場所をペイント弾が過ぎ去る。

陸戦型ゲルググはMMP-80マシンガンのカウントゼロと同時に撃ってきたのだ。こちらもし返しにバースト・レールガン撃つが、陸戦型ゲルググは左ブーストステップで躲しながら攻撃を返してきた。

「私の攻撃を避ける？やはり手強い…っ」

しかし、この程度では私のフラッグは止められない！しかし射撃戦では決着が着かない。

そう判断した私は一度立ち止まり、バースト・レールガン捨て、両手に強化型ビームサーベルを装備する。

それに応えてくれたのか、陸戦型ゲルググもビームサーベルを装備

するが、抜き方も見ているだけで肝が冷える。

フツ、グラハムにも見せてやりたかったものだ。我がマスラオの勇士を――！

「ソラ・ビャーチェノワ、推して参るッ――！」

機体が一気に加速する。

「やはり応えてくれたか、その意気に感謝する――！」

しかし手加減はしない――！

間合いに入り、一太刀で決める為に、2本のビームサーベルを上段から振り下ろす――！

陸戦型ゲルググはビームサーベルで受け止めた。そしてそのままシルドでこちらを殴りつけてきた。

「ぐあっ――！やる――！」

今度はあちらのターンに持ち込まれた。

機体を立て直した時には、陸戦型ゲルググはビームサーベルを振り下ろそうとしていた。その光景が、ひどくゆっくりに、スローモーションに見える。

私は右手の強化型ビームサーベルで受け止めるが、選択を誤った。

これでは忒の太刀が振れんっ！

しかし咄嗟とは言えみすみす反撃の糸口を逃すとは…私もまだ未熟か。

だが、機体も良いが、一番はやはりパイロットかつ！

一瞬の膠着の次はこちらから仕掛けさせてもらう。

右の強化型ビームサーベルを引き、左の強化型ビームサーベルを振るう。だが陸戦型ゲルググはブーストで後ろに飛び退き、距離を開いた。

今の間合いから回避するとはな……

確実に私の間合いとタイミングだったと言っのに。

「ん、通信？」

初見の通信コードから通信が入り、私は通信を繋ぐ。

「お初にお目にかかります、人革連宇宙軍第302哨戒中隊隊長、

アナベル・ガトー少佐であります。中佐のお話しは、スカリエッティ大佐からかねがね伺っております」

「アナベル……ガトー……ソロモンの悪夢とは、まさに冗談の過ぎる悪夢だな。粹な計らいだよ、スカリエッティ」

「いやいや、喜んでもらえて嬉しいよ」

「別に嬉しくはない。だが別の嬉しさはある、よもや彼のソロモンの悪夢と戦えようとは」

「ちなみに本物のソロモンの悪夢だから、ゲルググとの相性は抜群だよ」

「是非も無しッ！……たとえ相手がジオンのエースだろうとも、真っ向から斬り捨てるのみっ！」

再度強化型ビームサーベルを構え、ソロモンの悪夢と対峙する。

「やはりお話しに違わぬ武人とお見受けしました。そしてその心意気に感服致しました」

「ソロモンの悪夢にそう言ってもらえるとは幸福だ。しかし語らうは後日としよう。今はただ、真剣なる勝負を！」

「了解致しました。その申し出、お引き受け致します」

「全力を望む！手加減容赦、一切無用！！」

「承知致しました！」

陸戦型ゲルググはシールドを捨て、ビームナギナタを装備した。

「……………」

「……………」

沈黙が続き、息が苦しくなる。

私はモニターから目を離さずに片手でヘルメットを脱ぎ捨てる。それが合図だったかのように、陸戦型ゲルググはブーストダッシュでこちらに突っ込んでくる。

私は機体の腰を低くさせ、迎え撃つ。

「もらったあああああっ！！」

「くっ、おおおおおっ！！」

ビームサーベルを左の強化型ビームサーベルで受け、ビームナギナタを右の強化型ビームサーベルで受け、鏢競り合いに持ち込む。

私はヴァイスフラッグAXの左脚で蹴りを放とうとするが、陸戦型

ゲルググは右足を上げて蹴りを阻止して来た。フラッグとゲルググの脚ではパワーと強度は話しにならない。

結局パワー負けして弾き飛ばされるが、その勢いに蹈躑たたらを踏まずに、足下のアスファルトを踏み砕きながら踏みとどまり、駆け出す。続ける負荷に左脚にエラーが続出するがすべて無視する。

「斬り捨て、御めえええええええーんッ！！！！」

「やらせんッ！！」

強化型ビームサーベルを2本同時に振り下ろす。

陸戦型ゲルググもビームサーベルとビームナギナタを交差して受け止めるが、刃が交差した瞬間に、ビームサーベルのエネルギー供給をマックスにする。

ビーム刃が2倍に肥大化し、陸戦型ゲルググのビーム刃がパワー負けて揺れる。しかしそれはかつて目の前の相手が使った戦い方、陸戦型ゲルググのビーム刃も同じ位肥大化し、パワーは五分だ。

「その極みにある勝利をッ！！」

「そう簡単にはやらせんッ！！私は義によって立っているのだからな！私にも譲れんものがあるっ！」

そのまま鏢競り合うかとも思ったが、負荷に耐えかねた互いの武器がスパークし、ビーム刃が消えた。

「引き分け……ですな」

「感謝する。ガトー少佐」

久しぶりに熱い戦いに身を置けたことに、ガトー少佐に感謝し、今回の模擬戦は引き分けという結果で終わった。

「改めまして、アナベル・ガトー少佐であります」

「ソラ・ビャーチェノワ中佐だ。貴殿と出逢え、戦えたことと私の申し出に応えてくれたことに感謝する」

ガトー少佐との握手を交わしながら礼の言葉を述べる。

「しかし、肝を冷やしました。あれが侍というものですか」

「なに、私などまだまだヒヨっ子に過ぎんよ。それに、それを言うなら私もだ。ソロモンの悪夢、しかと見させてもらった」

「やあ、やっているね、お二人さん」

「スカリエッティ大佐！」

スカリエッティの登場に、ガトー少佐は敬礼したが、私は腰に手を当てて相對する。

「スカリエッティ、私は聞いてはいなかったぞ、なぜもっと前に教えなんだ」

「それはこういう日を予測してさ、良いプレゼンだっただろう？」

「それは認めるがな」

しかし納得はしないと、態度で示してやった。

「だがドムを造ったばかりで今度はゲルググと来るか」

「完成度はガトー少佐のお陰で一番の出来だと自負しているよ」

「いえ、自分は大佐に命を救って頂いた身、私に出来ることで助力しているに過ぎません」

自慢気なスカリエッティに、あくまで謙遜のガトー少佐はやはり本物らしい。

「しかし、ガトー少佐はどのようにここへ？」

「中佐殿ならば私の最後までご存知かと存じます。私は最後の一撃に特攻を敢行し、あとは星屑と散り行くのみでした。ですが目が覚めたらムサイの医務室に横になっていました。それが2年前でした」

「なるほどな、ならば少佐は対ガンダムのスペシャリストということだな、私も負けていられんな」

「中佐ならばガンダムのパイロットには遅れはないと、私は具申します」

「嬉しい限りだ。ならばまた日々精進しなければな」

その後もいくつか言葉を交わし、私はヴァイスフラッグAXの整備に向かった。

mission30# 激突戦域（後書き）

ブシドー・ソラvsガトー少佐

結果引き分けてみた。

技量はガトー少佐の方が断然上だが、今回は接近戦の勝負だった為、ヴァイスフラッグAXの性能に助けられた部分もある。

内容に若干の修正を入れた。

フラッグファイター諸君の報告書を待つ。

機体解説：フラッグスベルビア（前書き）

我らが誇りの設定だ。

機体解説：フラッグスベルビア

フラッグスベルビア

型式番号：S V M S - 0 1 I F

全高：1 9 . 0 m

重量：1 0 . 4 t

動力機関：パラジウムリアクター

推進機関：高出力水素プラズマジェットエンジン/テスラ・ドライブ

装甲材質：ガンダニウム α

武装

腕部ビームサブマシンガン

ビームサーベル

強化型ビームサーベル

ソニックブレイド/プラズマソード

プログレッシブナイフ

20?機銃

ディフェンスロッド

機体解説

徹底的な近接戦闘仕様に開発された機体。その為、パイロットには高い白兵戦技量が求められる為、今のところは少数しか配備されていないが、その性能は第3世代ガンダムとも渡り合える。

頭部と胸部、腰回り、両肩はフラッグ、胴体はART-1、四軀はフラッグの面影はあるが、マスラオやスサノオ、ブレイヴの造形が

見え隠れしている。

両肩にART-1のブースターを着け、ソニックブレードやプログナイフを格納出来るようにする。テスト・ドライブは背中の中央スペースに3基でフラッグ1機分の推力を誇るブースターに内蔵して装備し、変形時には機体上部の保護パーツと機首になる。

両腕には2連装ビームサブマシンガンを内蔵し、ある程度の射撃能力を持たせている。

パイロットによつては、ビームサーベルより強力なビームソード、反りがある強化型ビームサーベル、ガンダニューム製のバスターソードと肩部シールドと予備のビームサーベルやビームダガー、デイバイン・アーム、ブレード・トンファー、適性者にはシシオウ・ブレードやマゴロク・E・ソードが装備される。

機体解説：バスターフラッグ（前書き）

久しぶりのオリジナルフラッグの設定だ。

フラッグファイター諸君の変わらない応援に感謝する。

機体解説：バスターフラッグ

バスターフラッグ

型式番号：S V M S - 0 1 B B

全高：1 8 . 9 m

重量：1 5 . 4 t

動力機関：パラジウムリアクター

推進機関：高出力水素プラズマジェットエンジン

装甲材質：ガンダニウム Y

武装

バスターライフル

ビームサーベル

2 0 ? 機銃

大出力荷電粒子砲

機体解説

対ガンダム戦の為に開発された中、遠距離型 M S。

四躯が肥大化しており、脚や腕の太さはヴァーチェに匹敵する。セラヴィーのクアドキャノンとラミエルを参考に、両肩と両腰に大出力荷電粒子砲を装備していて、最大出力で撃てば劇場版序よりしく山が吹き飛ぶ計算である。さらに手持ち火器にバスターライフルを2挺装備しており、ツインバスターライフルと荷電粒子砲を合わせた時には衛星兵器を凌ぐ威力を持つ。

しかしこれは標準装備であり、さらに対艦攻撃用の G 型装備もある。

G型装備はグラビコン・システム、テスラ・ドライブ、サイコミユを内蔵した対艦モジュールユニットであり、形はアームドベース・オーキスのブースターユニットその物を機体の背部にドッキングさせるものである。

武装はバスターライフル並みのビーム砲を備えたバスターファンネルをユニット尾部に2基ずつの計4基を装備。

ユニット前面にある荷電粒子砲の砲身延長ユニットを両肩と両腰の荷電粒子砲に装着することで艦砲並みの長距離砲撃能力を追加し、粒子収束率も上がっている。

ユニット左右にホーミングレーザー発振器とテスラ・ドライブ内蔵型の大型ユニバーサル・ブースト・ポッドを備えており、機動力や運動性はG型装備時の方が寧ろ上がっている。

もはや決戦兵器並みの代物だが、それはG型装備を対ガンダム兵器と名打って、後々の為に造ったものだからである。

機体解説：ハイペリオンフラッグ（前書き）

私達の天を駆ける旗の設定だ。

機体解説：ハイペリオンフラッグ

ハイペリオンフラッグ

型式番号：SVM S - H 0 1

全高：1 8 ・ 6 m

重量：S 型 E 型 8 ・ 4 t / N 型 4 6 ・ 4 t

動力機関：S 型 プラズマジェネレーター / E 型 擬似ミノフスキー核融合炉 / F 型 パラジウムリアクター

推進機関：S 型 ツインテスラ・ドライブ / E 型 強化型テスラ・ドライブ、高出力水素プラズマジェットエンジン / F 型 テスラ・ドライブ、高出力水素プラズマジェットエンジン

装甲材質：S 型 ガンダニウム α / E 型 ガンダニウム γ / F 型 チタン合金セラミック複合材

武装

頭部ビームバルカン

ビームサーベル

プログレッシブナイフ

ツインバースト・レールガン

ツイン・マグナライフル

ディフェンスロッド

パルチザン・ランチャー

機体解説

対ガンダムMSとして開発された、2307年における最高レベルのMS。

近々遠のオールレンジに対応し、ガンダム並みの機動性を誇り、生産ラインやパーツもフラッグ系の物を流用している為、生産性や整備性も保証されている。

指揮官型のS型、エースパイロット型のE型、一般型のF型が生産予定である。

S型はジェットエンジンを廃し推進剤非依存推進（PIP）機関を実現した2基のテスラ・ドライブ——ツインテスラ・ドライブを搭載し、機動性はキュリオスさえ上回る世界最速の機体である。指揮官やベテランパイロット向けの機体であり、PIP機関に慣れるまではテスラ・ドライブにリミッターをかける予定である。

エース仕様機——E型は強化型テスラ・ドライブを搭載し、平均的なガンダムの機動性と同等の機動性を持つ。

一般仕様機——F型は量産機初のテスラ・ドライブ標準装備型で、機動性はガンダムには劣るがそれでもオーバーフラッグを上回る高性能機である。

mission31# 最高のスピードと、最強の剣を所望する！

「最高のスピードと、最強の剣を所望する！」

アザテイスタンから帰還したグラハムの、私に対する第一声がそれであつた。

私が「ご苦労だったな」と労おうとした言葉を遮つてだ。

アザテイスタンでの事を簡潔に纏めると、太陽光アンテナは史実と違い、被害は比較的軽微で済んだ。

ミサイル攻撃は受けたが、近くで戦い、それに気づいたグラハムとロックオンがすぐさま対応、デユナメスは新装備としてGNシールドビットを左肩に9基、プロトGNビットも洗礼化されたようので、背中にサイズダウンしたGNビットが6基装備していた。

そう言ったことがあり、2機の活躍によって太陽光アンテナは守られた。あとは史実の流れの通りになったが、これでアザテイスタンはしばらくは平和だろう。

しかし、デユナメスに新装備があつた事を知つた為、さらに新型のフラッグが完成間近なのと私のヴァイスフラッグAXを見たからか、とりあえずその辺りはおいておくとして――

「あれでも踏み込みはユニオン最速の剣なんだぞ？それをさらに速くしろとは、そのうち死ぬぞ？」

「私はガンダムを倒し、キミが私を超える日まで死ぬつもりはないさ。スぺルビアは良い機体だ、私の反応速度にもついてきてくれる。だがガンダムを倒すにはまだ足りん。故に、スぺルビアの生みの親であり、武士道の先達であるキミに頼みたい」

グラハムの目は真っ直ぐだ。元来頑固者のグラハムだが、ブシドーに目覚めてからは余計に頑固者になってしまったらしい。良く言えば意志が強いとも言える。

「ふう……合点承知だ。だが頼んだからには、使いこなしてみせろよ？フラッグファイター」

「感謝する。さすがは頼れる友だ」

「煽ててもフラッグしか出てこないぞ」

こうしてオーバーフラッグス設立に合わせて、グラハムのスぺルビアの強化改修計画が始まった。

そしてそれと平行するようにして、今現在、知り合いで唯一グラハム・マニューバーを成功させつつあるハワードのオーバーフラッグスを、ヴァイスフラッグ仕様にして欲しいとの以来が、カタギリから寄せられた。大丈夫か？オーバーフラッグス…

スぺルビアとオーバーフラッグの改修は同時並行で進んではいるが、どちらも部品は特注の為、アイリス社日本支部には一生頭が上がるまいだろう。

今回のスぺルビアの改修だが、ハイペリオンフラッグの部品を使っている為、全体像はブレイヴに近いが、頭部は鎧兜になっている為、そこから一気にマスラオに近くなる予定だ。さらに武器も新型実体剣を用意する為、もはやスサノオ擬きだ。

そんな無茶な機体に慣れる為、グラハムは毎日ヴァイスフラッグAのデータを使ってツインテスラ・ドライブに慣れる努力をさしている。

ハワードもヴァイスフラッグに慣れる為にシミュレーターに缶詰めである。

しかしそんな猫の手も借りたい忙しい時に、私はさらに忙しくなることとなった。

「かああああーっ！！天才が憎いつ！！」

ここ数日まともにブラッシングする暇もなかった髪の毛サバサの私は、さらにボサボサになるのも構わずに頭をかきむしる。

擬似太陽炉の組み立て作業は順調に進んでいるが、トランザムは原理を知っているからまだ再現出来るが、やはりツインドライヴ・システムの方はまだ再現出来ない。二つのドライヴを同調させてGN粒子の生産量を2乗化する。理屈はわかるが、いくらダブルオーのツインドライヴのデータがあつたとはいえ、リボンスはよくあの短期間でリボンスガンダムにツインドライヴ・システムを搭載したのもだ。いや、そもそも太陽炉の個数に圧倒的差があるから仕方がない。今ある擬似太陽炉は3つ、今のところこの3つの擬似太陽炉での組み合わせではダメだった。

私は奇才の自負はあれど天才とは違うとも思っている。
だからイオリア・シュヘンベルグやスカリエッティが時々羨ましいとも思う。

「はぁ……いかな、弱気になつては」

PCのコンソールの脇にある手書きのイラストにはマスラオとスサノオ、そしてブレイヴが書かれている。

やはり私の最終目標もここだ。

グラハムが求める最強の剣と最高のスピード……それを体现するの

はこの機体以外には有り得ない。

シシオウ・ブレードやマゴロク・E・ソード、グラハムがGNソードを回収していたから新しい強い剣も造る事が出来る。

「1stシーズン、すべてを賭けたこの機体、必ず無事に、私の友人を返してくれ」

PCのモニターには、鎧武者が映っていた。

私は両腰にある刀の柄頭に手を添えた。

横浜基地のユニオン領演習場に、4機のフラッグタイプが佇んでいた。

ヴァイスフラッグAXと背中に大型のユニットを装備したバスターフラッグの他に、初めて世に出るタイプのフラッグ――

シエルフラッグの次世代機である陸戦型MS、パワードフラッグ。

バックパックはランドセル型に変わり、2基のロケットエンジンだけでもフラッグの1.5〜2倍の推力を誇り、脚部の姿勢制御スラストによる高速ホバー機動はドムよりも速く、肩の姿勢制御スラストによって小回りも利く。エネルギーは陸戦型ヴァイスリアルドと同じくマイクロウェーブ受信アンテナによる外部電源方式を使っている。

さらに両腕にソニックブレードを腕に格納せず、ランドセルに装備した代わりにモーターを内蔵し、ハイレザーライフルKATAG I R I M K - 2の運用にも十分耐えられるようにしている。

「神宮司大尉、伊隅大尉、機体状況はどうだ？」

「マイクロウェーブ受信システムに問題はありません」

「バッテリーへの充電状況も良好です」

「了解した。シャル、ユニットの方は？」

「グラフィコン・システム並びに3基のテスラ・ドライブに異常は見られません。いつでも行けます」

「よし、神宮司大尉と伊隅大尉は先発、3分後にシャルのバスターフラッグG型装備がこれを追撃、その1分後に私のヴァイスフラッグAXが両者にアタックを駆ける。いいな三つ巴戦だ、パワードフラッグの機体の性能を限界まで引き出せ、習うより慣れろ」

「了解！」

「了解」

「よし、いけ！」

「行きます！」

最初にまりものパワードフラッグが最大出力でブーストジャンプを行い、あっという間に小さくなる。みちるのパワードフラッグはブーストダッシュの高速ホバー機動で駆け出した。

「シャル、出力は30%でな。重力下テストとはいえそれは本来宇宙で使うものだからな」

「了解。しかしよろしいので？G型装備の性能テストは」

「構わない。どのみちG型装備は重力下で使うような、使えるような装備でもないからな」

なにせ対艦攻撃大規模面制圧装備なのだから、大気圏内では使う予定はないだろう。

「バスターフラッグ、レイナード・シャルロット、行きます」

グラビコン・システムにより柔らかく空に浮いたバスターフラッグは、パワードフラッグを追撃する。

「さて、何分保つか」

2人の技量から瞬殺はないだろうが、それでも感覚的にはガンダム試作3号機デンドロビウムを2機のパワードジムで相手するような物だ。

ムリゲーにも程がある。

「さて、逝くか……」

結果として、2人は私が辿り着くまで持ちこたえた。

三つ巴戦にはなるが、G・テリトリーによりバスターフラッグは無傷のまま私達を圧倒して、特に損傷なし。

パワードフラッグとヴァイスフラッグAXは撃墜判定であり、やはりホーミングレーザーは卑怯であると思った。

今回は重力下性能テストの為、G型装備はちゃんとした武装はしなかったが、あれにファンネルが追加されると考えたら、造った私自身が怖くなった。

そしてさらに2週間の間に完成したファイバーユニットの調整をし

ながら、グラハムとハワードの機体の改修をしつつ、ヴァルキリーズの練度を上げていった。

オーバーフラッグスも設立され、それは私にスローネとの戦いの力ウントダウンを知らせるのだった。

m i s s i o n 3 1 # 最高のスピードと、最強の剣を所望する！（後書き）

あと少しでスローネボコタイムだ。

誇りある者達はどう戦うのだろうか……

mission32# 2 振りの刀

「オーバーフラッグスか…」

「ああ、対ガンダム調査隊の正式名称だ」

ここ最近のスケジュールの大半を締めるグラハムとハワードのフラッグの改修と調整に来ていたところ、グラハムから対ガンダム調査隊がオーバーフラッグスになることを告げられた。いよいよ大詰めだ。

「公にはフラッグのみで構成された第8独立航空戦術飛行隊として機能する事になる。母艦もエルシオール級の式番艦を都合してくれるらしい」

「そうか、となると早く機体を仕上げなければな」

ハワードの機体は改修は終わり、ヴァイスフラッグカスタムtype-TFへと生まれ変わった。私の技術の詰まったあの機体とハワードならば、そうそう落ちはしないだろう。

「調査隊が正規軍となり12人ものフラッグファイターが転属、かなり大掛かりな作戦が始まると見た」

「だろうな。おそらく、対ガンダム作戦を展開してガンダムを鹵獲しないし最悪撃墜するだろうな。出なければ上層部がアイリス社に挺入れはしないだろうさ。この間またパーツを取りに行った時に忙しくて死にそうだと専務に泣きつかれたよ。ま、そのお陰で私のハイペリオンフラッグも間に合いそうだ」

「ハイペリオンフラッグが？なるほど、それは頼もしい限りだ」

「これでガンダムにも遅れはとらんさ」

その代わりに少し恥ずかしい格好を我慢しなければならないが……

そんなことを思いながら数日。

私はオーバーフラッグスのオーバーフラッグの慣熟訓練に同行していた。引き続きグラハムのフラッグの改修とハワードのヴァイスフラッグカスタムtype-TFの整備は私が監督しなければ出来ず、しかも訓練にグラハムが参加するのに機体がなく、私のヴァイスフラッグAXを使うからだ。

「高出力のプラズマジェットに新型のリニアライフルか、独立機動隊らしくなって来たじゃないか……」

ハワードが居並ぶオーバーフラッグを見て言う。バースト・レールガンはまだ絶対数が少ない為、ハワードとダリルの機体以外は新型リニアライフルのトライデントストライカーを装備するようだ。

「だがこれでどこまでガンダムに対抗出来るか」

「でなければ死ぬだけだ。ダリル、お前はオーバーフラッグスの中で誰よりもオーバーフラッグに長く乗っているんだ。自信を持って」

「ソラの言う通りだな」

「中佐、隊長……」

そうとも、オーバーフラッグとて、戦い方次第でガンダムに傷を負わせられるのはハワードが実証済みだ。

「戦う前から臆病風かよ……」

そう言つてオーバーフラッグの影から出来た人物がいた。確かジョシア・エドワーズ少尉だったな。

「部下がこんなじゃ、グラハム中尉の力量も知れるつてもんだな」

「中尉じゃなくて上級大尉だ。新部隊編成で昇進なされた」

「ほう…そいつは凄い。また上官でも殺したか？」

「根も葉も無い事を言うな！」

「精々気を付けな、後ろから撃たれるぜ？上級大尉殿にな」

「フツ、ならばそうするでしょう。もっとも、その時は全力で斬り捨てさせてもらうがな」

ハワードとダリルの影に隠れてしまっていた私がそう言いながら身体を向こうから見える位置にずらすと、ジョシユアは慌てて私に敬礼した。良かったな、私が普通の心の持ち主で、たまに居る使えないバカだったりすれば上官侮辱罪で牢にぶち込まれていたぞ。

「お前が何をどう思おうと構わんさ。だがその汚名、戦場で晴らしてみせてやれ、フラッグファイター」

「他人の喧嘩を本人の了承なしに目の前で買わないで欲しいものだが」

「やってみせろと言った。機体だけではない。単機でガンダムを退ける技量を見せてやれ」

「では、楽しみにさせて頂きましょう。失礼しました、中佐殿」

そう言ってジョシユアは去って言った。

「アイツ、隊長のことを…」

「エースの名声はやっかみと憧れから来るものさ。それにソラが言

った通りだ。その汚名、戦場で晴らしてみせよう」

「でなければ私がAXを貸す意味がない。無傷で返せよ」

「了解した」

数時間後、訓練後の模擬戦ではグラハムとハワードの一騎打ちとなり、熾烈なドッグファイトの末にグラハムが勝利したが、2、3発ペイント弾を浴びていた。

模擬戦終了後に、グラハムとハワードが揃って私に謝ってくるということもあったがな。

「両腰のツインテスラ・ドライブによる高機動力、両肩グラビコン・システムによる常識を逸脱した三次元機動とG・テリトリーによる防御力。各関節には慣性質量をコントロールして負担を減少するTGジョイントを使っている。装備も2本の刀型の実体剣を用意した。マゴロク・E・ソード以上の超高周波振動で、切れ味は世界一。状況に応じて柄同士2本を合体させ、薙刀にもなる。だが一番の大

目玉はコレだ」

私は目の前の鎧武者の説明をしながら、隣りのグラハムに一枚の紙を見せた。

「なっ！こ、これは本当なのか！？」

「私は友には嘘は言わんよ」

グラハムは震える手で紙の内容を読んだあと、私をガバツと抱き締めた。

「さすがは私の友だ！これでガンダムとも戦える！」

「わかった、わかったから離せ、苦しいぞ」

「この喜びをキミ以外とどう分かち合えというのだ！これであれば鬼に金棒どころか、鬼に羅刹と修羅がガンダムだ！！」

「言っていることがメチャクチャだぞ」

「わかつている。それほどまでに嬉しいということだ！！」

「まったく……」

私はグラハムが満足するまで、そのままにさせた。

グラハムの新たな剣——ムラマサ

動力は元々バスターフラッグのG型装備に搭載予定で造ったプラスマリアクターを搭載。外観はマスラオに背部はスperlビアのままであるが、テスラ・ドライブは搭載されていない。配色はスサノオと同じく黒と白である。

計算上はCBの第3世代ガンダムを超えているはずだ。特に接近戦では3・5世代、グラハムの腕ならばダブルオーに匹敵するはずだ。

武装は長刀『不知火』と短刀『雲龍』、その2つを連結し、双刃の薙刀『蒼天』となる。

そしてその隣りに、頭部をヴァイスフラッグAXのように鎧兜を被ったハイペリオンフラッグが佇んでいた。

「この2機が、私達の運命を切り開く」

「切り開いてみせようとも、私達の友情とフラッグファイターの矜持に誓って」

そして数日後、私達ヴァルキリーズとオーバーフラッグスに、3国家合同軍事演習への参加命令が下りた。

m i s s i o n 3 2 # 2 振りの刀（後書き）

次回は本格的に合同軍事演習と、いよいよ諸君が心待ちにした瞬間だ。

m i s s i o n 3 3 # 合同軍事演習（前書き）

少し読みにくいかもしれないが、我慢して欲しい。

mission33# 合同軍事演習

横浜基地のMSハンガーはまさに戦場となっていた。

「アイリス社からの納品が遅れている？仕方がない、フライルーの2番機は後回しだ！先に1番機とファイバーユニットの調整を済ませろ！」

「タリサ機のABフィールドのエネルギー供給にブレがあるぞ！もう一度1からやり直しだ！！」

「シャルロット機のG型装備の艀装作業に遅れがあるぞ！どうなっている！？」

「アイリス社からのファンネルの納品が遅れているんです！！」

「ええい！一気に12機のフラッグをカスタムするから！これでは中佐に面目が立たない！」

「凄まじいな…」

合同軍事演習に向けて、ヴァルキリーズ各機の特ガンダム戦を想定した整備と調整が急ピッチで進んでいた。

私はそれを見ながら、ハイペリオンフラッグの最終調整をしていた。

能力を隠す為に、ムラマサとハイペリオンフラッグは合同軍事演習にぶっつけ本番で出撃する為、整備と調整は万全にする必要があった。

一方、グラハムも頭を悩ませていた。

「ふむ……13機のオーバーフラッグとヴァイスフラッグ、私のムラマサ、ここまで性能差がはっきりある機体同士となると、フォーメーションもシビアだな」

「あ、隊長」

「ハワードか」

「お疲れ様であります。またフォーメーションの件ですか？」

「ああ、なかなか厄介だがやりがいはある。相手がガンダムやヴァルキリーズでなければ、間違い無く世界最強と自負できるだろうが」

「ガンダムはともかく、ヴァルキリーズには勝てる気はしませんよ。バスターフラッグはデカブツのガンダム並みの砲撃能力の上に、G型装備まで持つてこられたらオーバーフラッグでは太刀打ちは出来ませんよ」

「私もさすがにあれは勘弁願いたいものだ。しかし経験して損はないだろうさ、ソレスタル・ビーイングが同じようなものを持っているというに限らないのだからな」

「それはそうですね、ヴァルキリーズとの模擬戦はガンダム戦に通ずるものがありますから」

実際、狙撃タイプがないが、砲撃戦、格闘戦、機動戦を得意とするMSは揃っている上に、ヴァルキリーズ各機はビーム兵器を標準装備している。その為、ヴァルキリーズとのシミュレーションでの模擬戦を繰り返すオーバーフラッグスは、ガンダム戦の予行練習をしているのにも等しかった。もっとも、ヴァイスフラッグに乗り、余裕があるハワードだからこそ気づけた部分とも言える。

「そう言えばそろそろ昼食だな」

「ではビャーチェノワ中佐もお誘いしますか？」

「そうだな、そうすると――」

『やはりファンネルの調整は難しいな。これでは昼食は抜きだな』

「――なんだ、今の声は……」

ハワードの提案に乗ろうとしたグラハムの頭に言葉が聞こえた。

「隊長？」

「いや、なんでもない。直接出向くとしよう、彼女は通信では応じない気がする」

「では自分は別行動にて先に席を確保して置きます」

「任せる」

グラハムはハワードと別れ、先ほどの声のことを考えながらヴァルキリーズのMSハンガーへ向かった。

「サイコミュ、私に使えるだろうか……」

「…ソラさんなら大丈夫だと思います」

ハイペリオンフラッグにファンネルを搭載する為に、私は霞に手伝ってもらいながらサイコミュの調整を進めていた。

両肩にツインテスラ・ドライブを搭載している為、場所が空いた背部にプロヴィデンスやレジェンドのドラグーンを小型化したファンネルをサキガケのGNバーニアのようにファンネルラックを縦に装備し、腕部の可動や変形に邪魔にならないように装備し、数は6基装備する。

同じ頃、人革連のハンガーでも――

「よもや私が、再びこれに乗ることになるつとは……」

本来なら、宇宙軍である第302哨戒中隊も、合同軍事演習に参加することとなり、その隊長たるアナベル・ガトー少佐にも新型機が配備されていた。しかしそのMSは、今世間を騒がしているガンダムであつた。

それはかつて共に駆けた、ジオンであつたガトー少佐にとって敵が造つたMSだ。

武装は頭部の60mmバルカンと2本のビームサーベルに、今回はゲルググの試作ビームライフルを装備して行く。

ガンダム試作2号機、核攻撃を目的としたこのガンダムは重装甲であり、敵中枢に突入する為に機動性も高い。そして対ガンダムに対する意趣返しとソロモンの悪夢を見せた機体である為、第302哨戒中隊にとってこれほどの心強い味方はない。

さらに近くにもまた3機のガンダムがある。

ガンダム試作4号機、宙間戦闘高機動型ガンダムであり、宇宙専用の機体だが、地上戦用に調整され今回の合同軍事演習に参加する。これはプルとプルツの機体だ。

そしてガンダム試作3号機、今はガンダムのみのステイメンだが、別のハンガーではソラから提供されたデータを基にスカリエッティが造つたグラビコン・システムを搭載し、大気圏内でも運用出来るようにアームドベース・オーキスを調整中である。これはマリィダの機体になる。

「上は本格的にソレスタル・ビーイングのガンダムを潰す気らしい

な」

でなければ自軍でのガンダム開発計画が進むとも思いはしない。

ちなみに事後承諾であり、それが許されるのはスカリエッティだからだった。

ちなみにスカリエッティは試作1号機フルバーニアンで出る予定である。

今回ばかりは、スカリエッティも結果を出すのに我慢して遠慮はしないらしい。

そして時は進み、合同軍事演習の日がやって来た。

「部隊総数55、参加MS総数860機——卑怯者と罵られようと、軍の決定には従わせてもらうぞ！ガンダム！」

沖縄上空を行く2隻のエルシオール級のブリーフィングルームではデータリンクでヴァルキリーズとオーバーフラッグスがブリーフィングをしていた。

「入電！演習場であるタクラマカン砂漠に、ガンダムとおぼしき機影を確認！」

「全艦第一種警戒態勢！」

「やはり来た……！」

「しかし何故だ？1000機近いMSの真っ只中に……」

「あるのさ、彼らが釣れる餌がな」

私はダリルの発した疑問にデータを添えて答えた。

「こ、これは！」

「3国はテロリストをわかっていて見逃したのさ、あの砂漠の海を
行く餌として」

「っ！濃縮ウラン埋設施設！」

私の表示したデータにいち早く思い至ったのはグラハムだ。

「旧世紀の遺物を餌にしたのか、ガンダムをおびき寄せる為に！」

「そんな、一步間違えれば世界中が汚染されてしまうというのにつ
！」

「これが軍人のやることかよ！」

「軍ではなく俗物ばかりで頭がおめでたい政治家連中さ。悔しい限りだが、私達軍人には逆らえん連中だ」

ハワード、唯依、ダリルが怒りを露わにしながら言った。

「ここまでやったのだ、失敗は許されん」

「その通りだ。だから私達はこの日の為に集い、力を結集させたのだ」

その頃、タクラマカン砂漠では――

「くそっ！ 何て物量だ！」

「徹底的な面攻撃……地形効果を利用した遠距離からの曲射砲撃、自爆攻撃から長距離レーザー兵器まで……！」

GNフィールドを展開しながら可能な限りの攻撃を回避するデュナメスとキュリオス。

「ミス・スメラギの予測は当たっちゃったな……！コイツ等、最初から俺たちが目当てだ！」

A E Uや人革連のM Sは容易く粒子ビームで墜ちるのに対し、ユニオンのM Sはよほど頑丈なのか、デユナメスのG NビームピストルやキュリオスのG Nビームサブマシンガンでは何発も撃ち込まなければ墜ちず、時々混じるレーザー兵器はG Nフィールドを展開していなければガンダムでも墜ちるかもしれない。現にデユナメスはG Nフルシールドが一部欠けていた。

タクラマカン砂漠A E U作戦司令部――

「ユニオン3、初期攻撃に成功！」

「遠距離砲撃続行！ガンダムを釘付けにしろ」

「了解、遠距離砲撃続行！」

「キューバ1から有視界反応！TF2123へ部隊の派遣要請！」

エルシオールブリーフィングルーム――

「おそらく、次に現れるとするならこのTF2123ポイントだ」

「手薄な場所から残り2機のガンダムによる退路確保……か」

人革連基地――

「A E Uの司令官はあのマネキン大佐だから、対応は速いだろうね。
ガトー少佐、出撃の準備を」

「いよいよでありますか」

「そうだ。頂武を援護する」

A E U作戦司令部――

「ガンダムの高火力ビームにより、敵機は退路を形成！」

「想定内だな……遠距離砲撃続行。ガンダムをその場から逃がすな！
それと、ジェイル・スカリエツティ大佐とセルゲイ・スミルノフ
中佐に連絡しろ、羽付きのガンダムは任せるとな」

エルシオールブリーフィングルーム――

「現れたか、青いガンダム！」

「デカブツのビーム兵器で強引に退路を作るか……狙撃タイプはともかく、羽付きは人革連の獲物だな」

「レフィーナ艦長、剣持ちのトレースは最優先だ。あのガンダムは

私達の獲物だからな」

「了解しました」

めまぐるしく変わる戦況に状況把握すら忙しい。しかし間髪入れない猛攻撃に、ガンダムの動きは鈍い。特にやはりユニオンが多く展開する戦域は、ガンダムも慎重になっている。やはりハイレーザーライフルやG・レールガン、バースト・レールガンはガンダムに有効のようだ。そしてガンダニュームの防御力も手強い、ユニオン側の被害は軽い。

ピキインッ

「ん？」

「…脳量子波？」

「ピーリス少尉か……スカリエッティもか」

微かに感じた感覚に、クリスカの脳量子波という言葉に、ピーリス少尉とハレルヤ、そしてスカリエッティでもあると確信が持てたが、最近私はどうしたんだ。それにグラハムも何か感じているのか？

タクラマカン砂漠離脱ルート戦域――

「マリーダ、足止め頼むよ」

「了解、マスター」

マリーダのガンダム試作3号機デンドロビウムからミサイルコンテナが発射し、離脱ルート真上で大量のマイクロミサイルを吐き出す。

「んなのありがよ!!」

GNビームピストルでミサイルを撃ち落としながら、撃ち漏らしはGNフルシールドで防御する。

ピキッ

「ッ!うああッ……あああ!」

「どうしたアレヤ!」

「ああ、頭が……!来る、超兵が来るう……!」

「超兵だと!?ッ!」

「見つけた!」

脳量子波の干渉で動けないキュリオスに、ソーマ・ピーリス少尉の

ティエレンタオツーが、デュナメスの攻撃を避けながら接触し、キ
ュリオスを押しながらデュナメスと分断させる。

「思いつボかよ！」

ロックオンはデュナメスを攻撃するグフ・カスタムやドム・トロ
ペン、ゲルググG型に反撃するが、ゲルググG型のビームライフ
ルは避ける為に照準もまともに合わずに攻撃は中らない。

「コイツ等！なっ！」

「動きが硬いな、ガンダム」

そこにガトー少佐のガンダム試作2号機がデュナメスにビームライ
フルを撃つ。

「ガンダム！？まさか人革が！」

「遅いつ！」

下がるデュナメスだが、ガトーは試作2号機の推力に物を言わせて
肉迫し、シールドで殴りつけた。

「がああああつー!!」

ロックオンは衝撃に耐えながらも交代を続ける。

ロックオンの何かが告げている。目の前のガンダムは危険過ぎると。

「ハロ！シールドビット！」

「シールドビットテンカイ！シールドビットテンカイ！」

試作2号機のビームをシールドビットで防御しながら後退し続けるデユナメスだが、新たに3機のガンダムが加わった。

「またガンダム！？」

「墜ちな！」

「墜ちろ！」

プルとプルツーのガンダム試作4号機がビームライフルでデユナメスのシールドビットを潰しにかかり、スカリエッティのガンダム試作1号機フルバーニアンが、ビームサーベルを抜いてデユナメスに突貫する。

「マスター！」

マリーダの試作3号機デンドロビウムがフォールディングバズーカでデュナメスの後退を足止めする。

「ガンダムは俺達のシンボルだつてのに！！」

「ガンダムをもってガンダムを制する時代が来たのさ！」

デュナメスのGNビームサーベルと、試作1号機フルバーニアのビームサーベルが切り結ぶ。

しかしすぐに離脱し、ガンダム試作2号機と入れ替わる。

「コイツ等……！！」

「所詮は接近戦の動きは苦手か、MSならば白兵戦は熟練させておくべきだ！」

ビームサーベルが振り下ろされる前に、ガンダム試作2号機の腕をシールドビットが受け止める。

「くっ、器用な真似を！」

シールドでシールドビットを薙払うが、デユナメスはその間に背中を向けて最大スピードでその場を離れた。

「間違いない。アイツ、ニュータイプになりかけてる」

「少しイジメ過ぎたか……」

プルツの言葉にスカリエッティはそう呟いた。

エルシオールブリーフィングルーム――

「ニュータイプか……」

「ソラ……」

「心配ないさイーニア」

私もサイコミュに触れ始めた所為か、先ほどプルツとスカリエッティ、そしてロックオンの声が頭に響いていた。

これは下手をすれば……

「ソラ……っ!」

見ればイーニアは泣き出しそうだった。

なまじ人の心や意識を感じられるのも厄介だな。特に私とイーニアの間は……

私は泣きそうなイーニアを抱き締めて、安心するように背中をさすっていた。

「作戦開始から6時間以上が経過か……」

「そろそろだろうな。ヴァルキリーズ各員は第二戦闘配置にて待機！フラッグファイター諸君、空で会おう」

データリンクが切れ、グラハムも動き出す。

「オーバーフラッグスも第二戦闘配置に入る。フラッグの最終調整を忘れるな！」

「了解！」×多数

オーバーフラッグスとのデータリンクを切り、ヴァルキリーズがブリーフィングルームを出たあと、私はイーニアと向き直った。しかしイーニアは震える手でがっしりと私の服を掴んでいた。

「いったいどうしたイーニア、何をそんなに心配する」

「いや、ソラ…いなくなっちゃ、いや」

「私は居なくてはならないさ。ハイペリオンで勝てるさ、絶対にな」

「ソラ……ソラあっ！」

私はイーニアを抱き留めて、頭や背中を撫でてやった。

クリスカにイーニア

私に色々に近い2人が感じているのなら、警戒して損はないか……

私はイーニアを抱えながらパイロットロッカーに向かった。途中で整備士達に温かい視線で見られるが、人間、慣れは怖いな。

「ソラあ……」

「大丈夫、大丈夫だから……」

「ソラ、イーニア」

「クリスカ」

「イーニアの心配ももつともだ。私も、嫌な胸騒ぎが抑えられない」

「それはニュータイプか？イノベーターか？EPS能力者としてか

「？」

「……すべての、総合的に感じた私の感覚だ」

「そうか……」

クリスカまで感じているのなら、やはり何かあるのか……しかし私は何も感じないが、やはり機体に乗っていないとダメか。

「イーニア……」

「ソラ……んっ……！」

「っ……！？」

私はイーニアと唇を合わせながら、私とイーニアのヘッドギアを外してプロジェクションを使った。

するとイーニアも大分落ち着いた。とりあえずはだが……

「ソラ……」

「もう大丈夫だな、イーニア」

「う、うん……っ……」

落ち着きはすれど、頭から煙りを噴きながらイーニアは俯いてしまった。

やはり時間がないからとはいえやり過ぎだったか？

「ソラ……」

「っ、ク、クリスカ……！」

まるで怨嗟のような呟きに、私は身を凍らせた。

俯いているクリスカが怖い。これがプレッシャーか！

「……もう知らん」

「クリスカ」

「知らんといっつー！」

このまま行かせたら色々と面倒になると思った私はクリスカの腕を掴んで引き止めた。

「クリスカ……泣いているのか……」

「知らんバカ者が…」

物凄い剣幕だが涙目故に迫力は半減だがプレッシャーは3倍当社比。そしてクリスカはプレッシャーを放ったまま、顔をズイツと近づけてきた。至近距離だとやはり凄みは増す。しかしやはり近くで見ると私達の顔はそっくりだ。遺伝子的にも99・89%一致、つまりほぼ同一人物。違うのは髪型と中身か……いや、胸は私が少し大きいのか、以前おふざけでクリスカと私のパイロットスーツが入れ換えられていた時は胸が苦しかった記憶がある。

「何を考えている」

「いや、特に考えてない。それよりクリスカは何を考えているんだ」

「な、なにも考えてなどいない！それよりも早く着替える、司令が遅れてどうする！」

「わかった。すぐに着替えるさ」

制服から新しいノーマルスーツ……00式衛士強化装備。黒を基調に白、私の機体カラーとは逆の、オーバーフラッグスのフラッグフアイター達には見慣れた配色をしている。

「な、なんだその格好は！」

「なにつて、新しい対Gスーツだ」

私がロッカールームを出ようとしたら今度はクリスカが私を引き止めた。

「真面目にやれ」

「私はいつでも大真面目だ」

「ならこんな破廉恥なものを造るな!」

「これが今一番効果的なんだ。そろそろ行くぞ、皆待っているのだろっ」

私はクリスカの腕を握り返して、その腕を引き寄せて、クリスカを抱き締めた。

「ソ、ソラ!？」

「イーニアを頼む」

「なっ!」

私はクリスカの耳元でそれだけ呟くと、クリスカから離れて先に出ようとする。だが――

「ソラ！」

「なんだクリスっ……」

「……………」

後ろを振り向かされたと思ったら、クリスカの顔が、先ほどよりも近い距離……いや、鼻先が触れ合う程の距離にあって、尚且つ唇に柔らかな感触があった。

私は眸を閉じてただ受け入れた。

後頭部と腰にまわされた腕も、口を割って入ってくる、彼女の舌も

ロツカールームから出た私は、先ほど以上に周囲の視線を釘付けにしなから、ハイペリオンフラッグのコックピットにのり、ヴァルキ

リーズ全機に通信を開いた。

「ヴァルキリーズの精鋭に通告する。これから出向く戦場では諸君等の命を賭けてもらうことになるだろう。すまないが、みんなの命をくれ。だが、あえて言おう。死ぬなよ！」

「了解！」×6

皆から返事が返ってきたところで一旦通信を切り、神宮司大尉にのみ回線を開く。

「どうか致しましたか？中佐」

「神宮司大尉、もしもの時は隊を頼む」

「中佐っ」

神宮司大尉は目を見開くが、やはり教官だったからだろう。すぐに顔は引き締まる。

「…了解しました」

「頼む」

さて、これで後顧の憂いなく戦える。

「死ぬ気ですか、あなたは」

「シャル、通信は繋いでいないはずだが」

「あなたなら、わかるでしょう」

脳量子波で私の思考が伝わったのか……

「あなたは死なせはしませんよ」

「なに」

「私が守るのですから」

シャルはそう言って通信を切った。

「フッ、言ってくれる」

「ヴァルキリーズ、ミッションタイムクリアー」

「了解した。ハイペリオンフラッグ、ソラ・ビャーチェノワ、出る
！！」

エルシオールから投下され、ツインテスラ・ドライブの推力で天を
往く旗は飛び立つ。待ちわびた戦場へ向けて……

m i s s i o n 3 3 # 合同軍事演習（後書き）

いよいよガンダムとご対面だ。楽しみだな、フラッグファイター諸君！

m i s s i o n 3 4 # 折れた翼（前書き）

また少し読みにくいが、我慢してくれ。

mission34# 折れた翼

「少しペダルが硬いが、許容範囲内だな。強化装備の耐G性も今のところ問題ないが、やはり全力旋回時のGは実際やってみなければわからないな」

編隊を組ながら空を行くヴァルキリーズとオーバーフラッグス。その中で2機の機体が若干フラフラとしていた。今日が処女飛行のハイペリオンフラッグとムラマサ——ソラとグラハムは機体の微調整をしながら飛んでいた。

「やはり機体のバランスが少し崩れるか、そこは腕でカバーすればいいだけか」

サブモニターに映るムラマサももう普通に飛んでいる為、調整は済んだのだろう。

「しかし、直前でのターゲット変更とはな」

元々私達の当たるガンダムはエクシアのはずだったが、直前で上層部の命令でデユナメスに変更された。

スカリエッティからの報告だと、デユナメスはシールドビットを失っているらしい。だがまだビットは使っていないらしい。下手をす

れば接近するのは難しそうだな。

「CP、目標を視認した。見えているなグラハム」

「無論だ。作戦行動に移る」

まだ遠映だが、ピンク色の粒子ビームが空に向けて放たれていた。モニターの一部が拡大され、デユナメスがGNスナイパーライフルで空から攻撃を仕掛ける量産型ヴァイスリアルド部隊を迎撃しているが、狙いが甘い。

「ヴァルキリーズはフォーメーションBで作戦行動に移る」

「オーバーフラッグス！フォーメーションEでミッションを開始する！」

「隊長！ジョシュアが！」

通信からのダリルの声と同時にジョシュアのオーバーフラッグが単機でデユナメスに向かっていく。

「ジョシュア！編隊を崩すな！」

「エドワーズ少尉！どういっつもりだ！」

「戻れジョシユア！中佐と隊長の手を煩わせるな！！」

「フン、隊長面して！！」

グラハムと私とハウードの制止を無視し、ジョシユアのオーバーフ
ラッグは空中で変形した。

「空中変形！？」

「いつまでも、自分達のだけのものと思ってえ！！」

トライデントストライカーの連射モードでデユナメスを攻撃するが、
リニアライフル系ではガンダムには大したダメージにもならない。
そしてデユナメスはGNビームピストルでジョシユアのオーバーフ
ラッグを撃墜した。

「ジョシユアが！」

「ええい！フォーメーションをCに変更する！」

『来るのか！ハロ、GNビット！』

「待て！迂闊に近寄るな！」

頭にロックオンの声が響き、私は叫んだ。

「なに！？ソラ！行くなと言っのか！？」

「中佐！？」

「全機散開！動け！！」

機体をバレルロールさせながら粒子ビームを避ける。やはりハロが制御しているからか、動きが機械的だ。

「ヴァルキリーズのファンネルに比べれば！！」

粒子ビームを回避したハワードはダリルを狙うGNビットをツインバースト・レールガンで撃ち落とした。

「ハワード！！」

「動けダリル！！」

「ええい！フォーメーションを崩された！全機、一時離脱する！」

「いや、神宮司大尉！ヴァルキリーズとオーバーフラッグスを率いて離脱しろ！グラハム！ハワード！私達でやるぞ！！」

「了解です中佐！！」

「その旨をよしとする！」

「道を開く！シャル、援護を！」

「了解！牽制をかけます！」

「頼む！…私にも使えるはずだ。行けファンネル！！」

「粒子加速、行け！」

シャルのバスターフラッグの荷電粒子砲がデュナメスに一直線に向かう。

「砲撃はティエリアの十八番だつてのに！！」

行動予測も入れた荷電粒子砲に、デュナメスはGNフィールドとGNフルシールド、残った3基のGNシールドビットも使いながら機体を守りながらジグザグに後退する。

連射を利かせるのに威力が減るが、それでもG型装備の延長砲身で威力は高出力ビームライフル並みの威力はある。ガンダニュームでも融解する威力だ。向こうもそれがわかってから避けるのも必死だ。

そしてファンネルを先行させて牽制にする。

隊列は射撃武装のあるハワードが先行、その後ろに私が続き、最後はグラハムだ。

「チャンスは一度だ、決めてみせるフラッグファイター!!」

「中佐の機体です、やってみせます!!」

「コイツ等、アザティスタンやタリビアの!クソッ」

ファンネルを使っているからか、はっきりと声も聞こえる上に周りの状況もわかる。

「援護します!伊隅!!」

「了解!」

まりもとみちるのパワードフラッグがブーストジャンプで上空に跳び、G・レールガンカスタムとハイレーザーライフルをデュナメスに撃つ。

「ぐあっ!ち、シールドが!!」

GNフルシールドが吹き飛び、デュナメスが揺らぐ。

「頼れる部下だ。ハワード！」

「やります!!」

デユナメスが体勢を立て直す前にハワードのオーバーフラッグが肉迫する。戦闘機動での空中変形——グラハム・スペシャルで機体を変形させたハワードはレーザーソードを抜いた。

「うおおおおー!!!」

「コイツ!!」

ロックオンは半身を反らしてデユナメスはハワードのレーザーソードを避けるが、ハワードはデユナメスの横を減速せずに通り過ぎると、ツインバースト・レールガンを後ろを見ずに撃つ。普通なら当たらないような攻撃だが、ソラのハイペリオンフラッグのサイコムとニュータイプの力が、ハワードにデユナメスの位置を確信させていた。

ツインバースト・レールガンの2発の弾丸はGNフルシールドのなくなったデユナメスの右肩に直撃し、デユナメスはバランスを崩す。

「人呼んで、グラハム・スペシャル!!」

私は機体を変形させ、強化型ビームサーベルを抜き、デュナメスの左肩を切り裂きながら通り過ぎる。

「アイツ!!しまっ」

「抱き締めたいな、ガンダムウツ!!」

グラハムのムラマサも変形し、デュナメスに突撃しながら押し倒した。

「ぐああああ!!」

「まさに、眠り姫だ……!!」

ムラマサは押し倒したデュナメスの頭を掴み上げ、GNスナイパーライフルを取り上げた。

「中佐!御無事で!?!」

「ああ、問題ない。神宮司大尉、伊隅大尉、援護感謝する。ヴァルキリーズ司令ソラ・ビャーチェノワ中佐からCPへ、ガンダム捕獲に成功、以後回収機の到着を待つ。以上」

AEU作戦司令部――

「大佐、3機のガンダムを捕獲したと報告がありました!」

「噂に名高いヴァルキリーズにロシアの荒熊にアンリミテッド・デザイアが居ればこそか、あと1機……外人部隊からの連絡を待つのみか、しかし当初は何故演習にアレを投入するのか疑問だったが……成る程、最初から想定内というわけか」

エルシオール――

「なにこれ……艦長!新たに双方向通信に障害発生!」

「まさかまだガンダムが!?!」

「サテライトリンク!ビャーチエノワ中佐に急ぎ報告を!機関最大戦速、本艦はヴァルキリーズの援護にまわります!!」

「取り舵60!機関最大戦速、よーそろ!」

タクラマカン砂漠人革連方面――

キュリオスを抑えた頂武の護衛をする第302哨戒中隊とスカリエッティ達だが、頂武とは別の緊張感が漂う。

「来る……いや、こっちじゃない！どこだ！？」

「ドクター！ソラが！！」

「なに！？」

プルが叫び、スカリエッティも殺気を感じていた。

「ガトー少佐、プルとプルツィを連れて向かってくれ！脚は2号機と4号機の方が速い！！彼女を死なせるわけには！！」

「了解しました！」

ヴァルキリーズ――

「中佐！エルシオールより新たにガンダムが現れた可能性との報告が！」

「なに！？」

「まだ機体があるのか！ガンダムは！？」

唯依の報告にグラハムとダリルが反応する。

「全機、全方位を警戒しろ！」

バスターフラッグがデユナメスの真上に移動し、オーバーフラッグスはグラハムとハワードを除いてMS形態で空中待機。クリスカのギャプランファイバーがバスターフラッグの後ろ側を警戒する。

「……何が来る……」

ファンネルを展開させて周囲を警戒する。

「っ、来る！！ソラ！」

「でええいつ！！」

イーニアの叫びに反応し、機体を回避行動を取らせる。

「赤いビーム！？」

「意識が5つある？なんだ！？敵意は3つ……いや4つ、だが1つはなんだ？」

「追撃くるぞー！！」

「散開だ！このビーム、通常射程からの攻撃じゃないぞー！」

赤い粒子ビームを回避しながらファンネルを迎撃にまわす。

「当たれえええつ!!」

遠くで複数の光が見えたが、手応えはなかった。

「外した!?!くっ!」

四方八方から殺気が襲い、粒子ビームが機体の周りに降り注ぐ。

「ファングか!?!」

パルチザン・ランチャーのEモードでファングを撃ち落とし、近い物は強化型ビームサーベルで切り裂く。

「見える、私にも敵の動きが……!」

長距離からの粒子ビームもバレルロールで回避する。

「無茶をするなソラ！」

「無茶だろうとも、私が敵を引きつけねば！！あれか！」

赤い粒子を放つ3機のガンダム——スローネだ。しかし他にも機体があった。

「スローネ・ヴァラヌス？なんだ、ラピエサージュだったりするのか！？」

ガンダムスローネと一緒に居る赤い粒子を出す機体。1機はバスターソードを装備するスローネ・ヴァラヌスだが、もう1機はヴァラヌスが母体らしいが、アインとツヴァイの武装やパーツも積んでいる。その機体から私は知っている感じを受けた。

「リーディングされている？ESP能力者がいるのか！？」

3機のガンダムスローネは3方向に散って行った。

「グラハム！1機そっちに向かう！！」

「新型2機を相手にするのか！？止めるソラ！」

「ダメですソラさん！それはっ！！」

「逃げてソラ!!」

「私は墜ちるかッ!!」

スローネ・ヴァラヌスがバスターソードを抜いて接近してくる。

私は強化型ビームサーベルでそれを受ける。

「やってやるさ!ハイペリオンなら、私とフラッグなら!!」

パワーは拮抗している。

鏖戦り合う刃だが、ハイペリオンフラッグは片手が空いている。

「墜ちろ!!」

パルチザン・ランチャーをスローネ・ヴァラヌスに向けてEモードを撃つが、スローネ・ヴァラヌスは宙返りして避けた。

「今のを!?!後ろ!!」

後ろからもう1機のスローネ・ヴァラヌスが放ったファングがビー

ム刃を展開していた。

「中佐はやらせん!!」

「唯依!」

唯依のフラッグスペルビアがビームサブマシンガンでファングを撃ち落とす。しかしスローネ・ヴァラヌスのスカートにはまだファングが残っていた。

「唯依!まだファングは!」

「これしき!!」

唯依のフラッグスペルビアはマゴロク・E・ソードを抜き、スローネ・ヴァラヌスに切りかかる。スローネ・ヴァラヌスはGNビームサーベルでそれを受ける。

「中佐の邪魔は!」

「唯依!機体をつ!」

ファングが射出され、私は叫んだ。

唯依は私の声が届いたのか、GNビームサーベルとマゴロク・E・ソードの鏢競り合う力の力場を利用して上に宙返りし、スローネ・ヴァラヌスの上を取った。

「墜ちろおおー!!」

「ダメだ唯依! 避ける!!」

「純夏!!」

「なに! 純夏だと!? つ! 唯依!!」

唯依のフラッグスperlビアがスローネ・ヴァラヌスの四軀を、マゴロク・E・ソードとビームサーベルで一気に切り落とした瞬間、フラッグスperlビアの背中に2基のファングが突き刺さった。

「純夏ああああー!!!」

「唯依iiiiii!」

2機は爆発しながら砂漠へと落ちて行った……

「つつ! きいいさまらがああああー!!!」

私は怒りに頭が煮えたぎりながらも冷静にコンソールを操作し、パ
スワードを入力した。するとバックパックが分解し、コーン型スラ
スターが現れ、ハイペリオンフラッグの背中から目の前のスローネ・
ヴァラヌスと同じ赤い粒子が放出される。

「唯依の敵いいいーーーーー!!!!!!」

推力を全開にし、ハイペリオンフラッグはスローネ・ヴァラヌスを
押し込み始めた。

「墜ちろスローネえええええーーーー!!!!!!」

私は憎しみのまま、刀を振るった。

「く、新型など聞いてはいないぞガンダム!!」

黒いガンダムの砲撃を避けつつ、グラハムはムラマサを操っていた。ランディとステュアートのオーバーフラッグが墜ち、隊列が乱された。

シャルロットのバスターフラッグはデユナメスを確保の為に動けずにG・テリトリを展開しながら荷電粒子砲とホーミングレーザーで迎撃する。

クリスカのギャプランファイバーもG・テリトリで防御しながらロング・ブレード・ライフルを撃つ。

スローネアインは回避しながらも、執拗にグラハムとまりものムラマサとパワードフラッグを狙うが、それで墜ちる機体でも腕でもないが、新型のガンダム故に警戒し過ぎて防戦一方になる。

「神宮司大尉！私がガンダムを引きつける、その間に隊を率いて可能な限りガンダムのパーツを回収して離脱しろ！」

「しかしエーカー上級大尉！」

「早く！ヴァルキリーズの誰かが欠ければ私は彼女に顔向け出来ない！」

「…了解しました。ご無事で」

「そちらこそな」

グラハムは通信を切り、ムラマサをガンダムに向かわせる。

「その程度の砲撃など!!」

ガンダムの砲撃は脅威だが、中らなければどうということはなく、このムラマサだからこそそれが出る。

「盟友が造りし我がムラマサの力を見よ!ガンダムツ!!」

グラハムはコンソールを操作し、パスワードを入力した。

バックパックが分解し、コーン型スラスターが現れ、目の前のガンダムと同じ赤い粒子を放出する。

そう、ムラマサには、ガンダムの動力と同じ物が搭載されている。それがソラから知らされたムラマサの目玉であり、100%の性能を引き出せるようになったムラマサにはガンダムは恐る恐るに足りない。

「GN粒子だと!?!」

「ガンダムツ!!!引導を渡すつ!!」

不知火と雲龍を合体させた蒼天を手にガンダムに急速接近する。

スローネアインはGNビームライフルを撃つが、グラハムはそれを見切った。いや、銃口の向きで射線を予測しているのだ。

「なに！？ 攻撃が！」

「斬り捨て、御めええええええええーんっ！！！！」

ガンダムの目の前で振りかぶった蒼天をグラハムは振り下ろす。

GN粒子で強化された蒼天は超高周波振動も加わり、スローネアインの右肩と右足を切り落とした。

それは斬られる瞬間に、スローネアインが僅かに動いた為に縦真つ二つは避けたが、しかしグラハムはそれで終わりにしない。

返す刀でスローネアインの胴体を横に斬り裂きながら、ムラマサはスローネアインの横を抜けた。

一瞬の出来事だった。

「我が剣に、断てぬものなし！」

蒼天を分離し、両腰のバインダーに取り付けられた鞘に不知火と雲

龍を納刀すると、スローネアインは胸を十字に切り裂かれ、爆散した。

「掴めたぞソラ、私にも、極みをつ」

タクラマカン砂漠人革連方面

「な、兄貴のスローネの反応が!!」

「よそ見してて良いのかい？」

「なに!？」

スカリエツティはスローネツヴァイにビームサーベルを振り下ろす。

頂武は奇襲で半分やられたが、第302哨戒中隊は健在。連携しながら撤退をしていた。まあ、キュリオスの武装は確保しているから

手土産には十分だろう。

「マスター！」

マリーダのガンダム試作3号機からメガ粒子砲が放たれる。

「コイツ！！」

「マリーダ！閃光弾だ。僕達も引くよ」

「了解！」

「逃がすかよガンダムもどき！」

「そちらがねっ！」

閃光弾に合わせて、スカリエッティは自分の鋭敏になった脳量子波を信じて引き金を引いた。

ガンダム試作1号機フルバーニアンの撃ったビームは、スローネツヴァイの右腕と左のファングコンテナと頭部を撃ち抜いていた。

「クソがああああー！！！」

激昂するミハエルだが、機体状況は大破に近く、しかも兄であるヨハンのスローネアインの反応が消えていることに後る髪を引かれて、舌打ちしながら妹のネーナと合流することを選んだ。

一方エクシアの刹那は、スローネドライに助けられたが、いきなりスローネドライが動かなくなった為、サーシエスのカスタムイナクトと交戦していたが、疲労困憊の刹那は押されていた。

「いい加減見飽きたんだよ、とつとと墜ちちまいな！クルジスのガキイー！！」

「く、おおおっ！！」

GNソードを両腕に装備しているエクシアは、カスタムイナクトの攻撃を辛うじて捌いているが、やはり刹那の反応が鈍い為、押されている。

ガンダムマイスターは、ヴァルキリーズにボコボコにされていたお陰で、史実よりも技量が総合的に上がっていた。

特に刹那の技量は、ズバ抜けた伸びを見せていた。やはり自分の距離で二度も負けたことが悔しかったせいだろう。このGNソードの同時装備も、シールドよりは手数をとという刹那の意志だった。これで体力が万全なら、サーシエスも退けられたが、今は機体を気合いで動かすので精一杯だった。

「く、眼が……」

しかも先ほど身体に直接ダメージを叩き込まれた為、刹那は自爆も考慮し始めた。

「逝っちまいな!!」

「やるかよ!」

2機の刃が重なると思った瞬間、2機の周りを赤い粒子ビームが過ぎて行った。

「ネーナ!」

「ミハ兄い……ヨハ兄いが……ヨハ兄いが……」

「ネーナ、とにかく逃げっぞ、オレらはまだ」

「うん……HARO」

「シャーネーナ!シャーネーナ!」

「ステルスフィールド、展開……!」

スローネドライから広域にGN粒子が散布される。

「なんだ、ありゃあ」

「GN粒子の広域散布？」

「ち、手負いでも3機相手じゃ命が足りねーな。あばよクルジスのガキ、しばらくガンダムは預けとくわ！」

サーシエスはドライを警戒し、さらに1機はボロボロだが、ガンダムが3機の状況に不利と判断して撤退した。

人革連方面――

「通信遮断領域の拡大だと……！それが出来るならなぜ今の今までやらなかった！どういつつもりだ、ソレスタルビーイング！」

「ドライの広域散布か……」

GN粒子のお陰で鋭敏になる脳量子波でタクラマカン砂漠の現状を感じていたスカリエッティは口元に弧を描いた。

「（いよいよわからなくなってきたよ。でも、それが世界で人生だ。楽しみにしているよ、ミス・ビャーチェノワ）」

「貴様が、貴様が！貴様等があああっ！！！！！」

強化型ビームサーベルを振るい、バスターソードに蹴りを喰らわせてスローネ・ヴァラスを吹き飛ばすと、パルチザン・ランチャーのBモードを撃つ。しかし、スローネ・ヴァラスも上手く避ける。

「純夏が、純夏が……返せ、返せよ純夏を！！！」

「それは私のセリフだっ！！！」

強化型ビームサーベルとバスターソードが何度も切り結ぶ。

互いの機体から発するGN粒子の影響か、ステルスフィールドのGN粒子の影響か、それともサイコミュの影響か、ソラとスローネ・ヴァラスのパイロットは、通信もなしに意思の疎通をしていた。

だが2人を支配するのは憎しみと怒りだった。

心で感じるからわかる。

2人は互いに大切な者を目の前で失ってしまったのだと……

「守れなかった！今度こそと思ったのにっ！！」

「私は誓ったのに！なぜお前が！唯依っ！！」

ハイペリオンフラッグがパルチザン・ランチャーを投げ捨て、強化型ビームサーベルの二刀流に変える。

スローネ・ヴァラヌスも両手でバスターソードを構え直す。

「うおおおおおーーーー！！！！！！！！」

「であああああーーーー！！！！！！！！！！」

悲しい戦いは、未だ終わらずにいた。

同じ頃、刹那はアレルヤと、ナドレとなってAEUの捕獲部隊を蹴散らしたティエリアと合流し、さらにラッセとイアンが完成したばかりのGNアームズを駆り、デユナメスの救出に成功するも、的がデカいGNアームズは中破してしまうという結果で、満身創痍なが

らも、C Bはタクラマカン砂漠からの撤退に成功した。

m i s s i o n 3 4 # 折れた翼（後書き）

超展開とおかしな手抜きとご都合主義と原作ブレイクと色々混じってしまっているが、許して欲しい。

m i s s i o n 3 5 # 憎しみと影（前書き）

今回も展開が好かない者も居るだろうが、よろしく頼む。

missions# 憎しみと影

「うおおおおー！！！！！！！！！！」

「でああああー！！！！！！！！！！」

切り結び、鏢競り合う2本の刀と1本の剣。

ぶつかり合い、離れてまたぶつかり合う。

「くっ、これほど打ち込んでいるのに斬り込めん！」

バスターソードを片手の強化型ビームサーベルで受け止めてから忒の太刀を叩き込もうとすれば距離を離され、しかしパワーで押そうとしても不利になればまた機体を離す。

先ほどまでならいざ知らず、GNドライヴを起動させたハイペリオンフラッグは第三世代のガンダムを凌駕している性能だ。

早くこいつを斃し、唯依を救助しなければならんと言っのに！！

「くたばれええええーっ！！」

「くそおおおおー！！！！！！！！！！」

ハイペリオンフラッグは連続で斬撃を叩き込むが、スローネヴァラヌスは猛りとは裏腹に冷静にバスターソードで斬撃を防御している。それが余計に私を苛立たせる。

「お前だけは墜とすッ!!」

「それは私のセリフだッ!!」

ハイペリオンフラッグはまた右手の強化型ビームサーベルでバスターソードを受け止め、残った左手の強化型ビームサーベルで突きを放つ。突きならば少し離れようとも追撃が間に合うと判断したからだ。しかしスローネヴァラヌスは右手をバスターソードから離し、右膝から短刀を抜いてそれを防いだ。

「賢しい真似を！」

「うおおおおお!!!!!!」

バスターソードに力を入れてくるスローネヴァラヌス。

引かないのか!?

「ぐつく、貴様！」

「今度は必ず守ってみせるって誓ったのに！！紛争根絶なんか知らないけど！純夏が笑って暮らせるように戦うと決めたのに、それをお前達が！！」

「子どもが戦場に出てくるから唯依は！！」

「純夏を守るためだ！！」

「守る為に戦場に出すのは矛盾しているっ！！」

「仕方がなかった！！」

「なにがっ！！」

「純夏は戦う為に産み出されて！そんなことも知らずにっ！！」

「守れないのは弱いからだ！！」

「お前が言っかつ！！」

「戦場に出すくらいなら彼女を連れて逃げるべきだった！その覚悟もない貴様につ！！」

「命が握られててもかつ！？」

「ならその元凶を断ってみせろ！！」

「勝手言っくなっ！！」

「自ら踏み出せずにいる者に明日が掴めるか!!」

そうさ。私もこの世界に来たばかりの時、あの時元々の『私』はイーニアを連れて逃げるつもりだった。

逃げるまでは同じ、だが逃げた後の選択はすべて私が、私の意志で選んで来た。

たとえ命を狙われても、追われても、その覚悟はあった。だが目の前のこいつは現状だけでどうにかしようとしていた。置かれた環境内でできることなど高が知れている。置かれた立場が酷ければもつとだ。自分から道を切り開こうとしないで――

「唯依の敵を取らせてもらおう！トランザムッ!!」

システム画面にTRANS-AMと表示され、ハイペリオンフラッグが赤く染まる。

「なっ、消え！ぐあっ!!」

「はあああああああ――!!!!!!!!」

トランザムで3倍になった機動力で後ろに回り込み、胸から後ろへ突き出すGN粒子発生装置を斬り裂く。そして次は左腕を斬り裂き、

次は頭、そしてコックピットを――

「ぐあっ！！」

コックピットを貫く瞬間に衝撃が襲った。システム画面には両脚が破損の表示。

「なんだ！？ぐああああっ！！」

また衝撃。

そしてモニターの隅に人影。

「あ、あれは！リボーンズガンダム……いや違う！ガンダム……」

先ほどの攻撃は新たに現れたガンダムの物だった。そして1ガンダムは再びGNビームライフルを撃ち、それは吸い込まれるようにハイペリオンフラッグの胸部を撃ち抜いた。

「キミの才能には心底驚かされたけど、飛び出し過ぎる力は計画の障害になる。今はまだ彼をやらせるわけにはいかないのさ」

落ち行くハイペリオンフラッグを見ながら、1ガンダムの中でリボンは呟いた。

「より良い未来を選択する力……その力を僕達の物に出来れば計画はより確実な物となる」

空中で辛うじて浮いているスローネヴァラスを回収しながら、1ガンダムは何処かへと飛んで行った。

新型のガンダムの登場と、その撃破に全世界は震撼した。

しかしその犠牲も大きい物だった。

ヴァルキリーズは死者こそいなかったが、フラッグスperlビアとハイペリオンフラッグ、そして貴重な擬似太陽炉を一つ失い。

司令官たるソラは墜落のショックによる打ち身、爆発によって弾け飛んだコックピットの破片で頬を大きく切る傷を負うが命に別状はなかった。

唯依も命に別状はないが、彼女の場合は全身に破片が突き刺さったことによる出血多量で、3日が経っても意識は戻らなかった。不幸中の幸いは、遺伝子異常がないことだっただろう。

「本当に、申し訳御座いませんでした」

私は唯依の見舞いに来ていた巖谷中佐と久しぶりに対面して、第一声がそれだった。

巖谷中佐にとつては唯依は娘も同然だ。軍人だからと言っても、怪我をさせてしまったのは私に責任がある。

「お前さんの身体はいいのか……？」

「はい。お陰様で……」

再生治療はしたが、傷痕はあえて残していた。そのため、私の右腕類にはかなり大きな傷痕がある。身体も打撲で引きつるが、日常生活や軍務に支障はない。

「そうか、それならいいさ。お前さんに何かあったら、唯依やヴァルキリーズのみんなは悲しむだろうからな」

「巖谷中佐、私は」

「何も言っな。唯依ちゃんも軍人だ、覚悟はあっただろうし、それで前さんに謝れてみる、唯依ちゃんの覚悟が無駄になる」

「はい……」

私は巖谷中佐、そして唯依に敬礼を送り、病室を出て別の病室に向かった。

中にはイーニアと霞が、あの継ぎ接ぎスローネヴァラスから回収した純夏の様子を見ていた。もつとも、こちらも寝ているが……

「どうだ、彼女の様子は」

「……依然、変わりはありません。解析の結果は私達と同じESP能力者であること以外わかりません。バイオメトロリクスも該当者はないと……詳しいことはこちらに」

「そうか……」

ESP能力者も私やイーニア、霞は身体を強化されているが人間だ。そして彼女も別段上げるべき点はなく人間である。つまり00ユニットではないということだ。

しかし、あのスローネヴァラスのパイロット、声と感じから白銀武なんだろうが、この純夏は造られたと言っていたが、トリニティのように造られた存在なのか？それなら命を握られているとも頷ける。

まだ情報が少なすぎる。本人に訊けばいいが今は難しいだろうな。それに今度こそという言葉も気にはなるが……

「また様子見にはくる。彼女を頼む」

「…わかりました」

「うん、任せて」

霞とイーニアの返事を聞き、私はMSハンガーに向かった。

ヴァルキリーズは唯依のフラッグスペルビアと私のハイペリオンフラッグが大破。

タリサのオーバーフラッグが、デユナメスを救助に来たナドレと交戦して中破。

あとは皆小破だ。

しかし擬似太陽炉を失ったのは痛い。

上層部にはガンダムの動力部の模倣品として報告している。黙っていたのはCBに知られないようにする為と言いつけた為にお咎めはない。部品横領もスローネヴァラヌスの鹵獲で不問になった。

トランザムについては映像記録は無いために報告はしなくて済みそうだ。

しかし、これで世界は否応なく対ガンダムに向けて動きだし、ユニオンが人革連が世界をリードするだろう。

人革連は独自にガンダムを造ったのだし、ユニオンはガンダムを墜

とした機体があり、唯一ガンダムの鹵獲に成功したのだから……

継ぎ接ぎスローネヴァラスと撃墜したスローネアインは、ウチの主導で解析を進めるらしい。

しかしスローネヴァラスがあると、GN-Xはどうなるかわからないな。しかし、1ガンダムが出て来るとは想定外だし、スカリエツティも論外だと言っていた。あれはイノベーター専用機で、この時期にあれに乗って武のスローネヴァラスを助けたとあれば、パイロットはリボンスの可能性が高いとはスカリエツティ談である。

今手持ちの擬似太陽炉は、スローネヴァラスの物が損傷はあるが修理すれば使える為に相変わらず3つだ。

しかしトリニティ兄妹のストッパーのヨハン・トリニティはグラハムが討った為、歯止め役が居なくなる上に、あの状況だ。

武も純夏が死んだと思っているだろうし、トリニティと行動を共にするなら酷いことになるかもしれない。

だがあの白銀武が私の仮定する存在なら、恨みの対象は私個人に向かうはず。彼の人間性に賭けるしかないか――

「落ち着けたかい？」

「リボンス……」

「彼女の事は残念だったけど、キミが生きていて、僕は嬉しいよ」

「心にもないことを……」

「本心さ。でもこれでキミには別に戦う理由が出来たじゃないか」

「戦う…理由……」

「敵討ちさ。コックピットは外されたから、おそらくあのパイロットは生きているよ」

「………いいのか……？それじゃあ紛争根絶とやらが遠退くぞ」

「別に個人の敵討ちくらいの余裕はあるさ。それにキミにはトリニティのストッパーになってくれないとね、ガンダムだってタダじゃないんだから。1ガンダムはキミが使うといい、あれならフラッグを落とせる力もある」

「………わかった。有り難く貰っとくよ」

「期待しているよ（ヴェーダの情報にあのフラッグの現象についてはデータはない。ソラ・ビャーチェノワ、彼に討たれて死ぬも良し、

生き残って世界を纏める立て役者になるもよし、今はまだ、静観が必要かな？少なくとも僕達は……」

m i s s i o n 3 5 # 憎しみと影（後書き）

果たして武は兄妹のストッパーになれるか、そして世界の往く先は…
…

mission36# 世界と組織と個人

合同軍事演習から一週間。

未だに唯依と純夏は眠ったままだ。

横浜基地は相変わらず騒がしくも平和だ。

ヴァルキリーズはヴァラヌスとアインの解析や機体の修理と搬入で忙しいが……

今日はガンダム鹵獲と撃墜により、上も金振りがよく、ハイペリオンフラッグのS型とE型が1機ずつとF型が3機納入された。

S型は再び私の専用機としてチューンし、擬似太陽炉を両腰のバインダーを延長拡張してツインテスラ・ドライブと一緒に組み込む。E型は技量的に使える人間がハワード、唯依、まりも、みちるの4人居るため、一応しばらく様子を見ることになり、F型はタリサとダリルの機体として調整が始まった。

しかし平和はいいが、一週間ガンダムが沈黙しているのは不気味だ。特に手当たり次第に武力介入をしていたはずのトリニティが、兄を失ったせいなのか沈黙している現状がだとはまたまたスカリエツェイ談。私はヴェーダとのリンクで色々と虫食いだからな。それに世界が劇的に変わりすぎて予備知識にもならない。これもスカリエツェイ談だ。

だが、私は少なくとも現状が好転していると思いたい。私達が生んだ結果が世界に変革をもたらしている。

世界は対ガンダムに対して一丸となることを決意。水面下では地球連邦の樹立に向けて動いている。しかし例外はここ、横浜基地というか、日本というか……

情報は公開しているしMSの設計図は出しているが、せつかく血と汗と涙の結晶をタダで連邦に組して提供するのに人革連やユニオンの技術陣は否定的で猛抗議している。特にGPシリーズと擬似太陽炉と言ったところか。ガンダムを退けた功労技術の上に、どちらも今の世界には異質というか過ぎたる力というか……

ただでさえヴァルキリーズはハイペリオンフラッグという高級MSをユニオンに提供しているのだから、そこにきてガンダムの動力部まで渡せとは虫が良すぎるとヴァルキリーズの皆は口々にいう。まだ私が1人で造っていたからいいものの、これでヴァルキリーズで造っていたら暴動でも起きていただろう。私はカリスマ性があるのは理解しているが、過度のカリスマは扱いに困る。

話しが逸れたが、ちなみにAEUは遅れを追いつかせるのに必死の為、地球連邦に組するのを良しとしている。

まるで国会のように日夜議論が交わされているが、AEU側は何も結果を出せていないから強くも出れず押されていて、基地内の空気はギクシャクしている。しかも焦りも見え、昨日は人革連領に侵入者が入ったとかなんとか……

「地球連邦を作るのは結構だけどね。それで僕達の技術をタダで手に入れたいとの思惑が見え透いているよ」

「確かに……」

上からも擬似太陽炉の催促は来ているが、まだ研究課題も多いとして突っぱねている現状だ。

スカリエッティもガンダム、特に2号機を渡すわけにはいかない為、ガンダム開発計画は凍結。機体は2号機を除いて解体、2号機の補修部品に回すらしい。元々ガンダムは合同軍事演習用に用意した機体らしいから、本人はいいらしい。

その変わりジオン系でGPシリーズを超える機体を造っているらしい。第一陣はゲルググ、ツダ、ガルバルディβ、ハイザック、ゼクアイン、バーザムを出すらしい。

まあ、パイロット次第でツダとゼクアインとバーザムならガンダムとも戦えるだろう。ガトー少佐ならゲルググで行ける。

そしてプルとプルツー専用キュベレイ Mk-?、マリーダ専用少量産型キュベレイを開発中らしい。
ちなみにスカリエッティはザク?改 Fb に乗り戻すのだとか……ザク スツキーだな、相変わらず。

そんな一週間を過ごす中、私達ヴァルキリーズは休暇が降りた。それは対ガンダム部隊への労いと、これからコキ使うから今の内に休めと言われた気分だった。

「最近、中佐が元気ねえな」

「無理もないだろう。篁中尉とビャーチェノワ中佐は友人関係でもあった。命に別状はなくともあの人のことだ、責任を感じているのだろう」

横浜基地のユニオン領の食堂で、タリサ、シャルロット、まりも、みちるの4人は珍しく食事の時間が一緒だった為、こうしてテーブルを囲んでいた。

「中佐は責任感の強いお人だからな」

「ガンダムを倒すまで、頬の傷も消さない気だろう。消せる傷を消さないのは、その傷に誓った何かがあるからだだろう」

「教官殿の言葉は重いなあ……」

「それは一応横に置き、私にある提案があるのだが」

3人は意外そうな顔でシャルを見た。

「お前、何かあったのかよ？」

「いや、ただ現状の中佐を見ていただけないだけだ。中佐の機嫌一つで我らヴァルキリーズの作業効率は変わる。あの人は自分が影響力を持つとは理解していてもその程度は知らない。それに日々お世話になっている身だ。私達がガンダムと戦って生きていられるのは誰のお蔭か考えたことがあるか？」

「中佐には日々感謝しても仕切れないさ。私達ヴァルキリーズの兵器はすべて中佐が設計開発したものだ」

シャルの言葉にまりもが答えた。タリサもみちるもそれはわかっていた。

3 国合同軍事演習で、数多くの命が散った。

自分達の状況を第三者視点で評価すればまず間違いなく一番死亡率が高かったはずだ。それを生き残れたのは、直撃を避けていた自分達の腕もあると思うが一番の要因はMSの性能が良かったからだ。あの状況でノーマルフラッグやリアルドに乗っていたらと考えたら生きた心地がしない。完全に死んでいた。特にタリサは機体を中破させられたとあって、身に染みて実感していた。

タリサのオーバーフラッグはABフィールドのお蔭でナドレのシールドビームマシンガンを耐えていたが、GNキャノンでフィールドを突破され、頭部と右腕を失った。だがそれがもしABフィールドではなく耐ビームコーティングだったらと考えたら今更怖くなってきた。

「アタシらほんと、中佐に守られてばっかだな」

タリサの呟きは、3人に重く響いた。

シャルもG・テリトリーのお蔭でスローネアインのGNランチャーや撤退時のデュナメスのGNミサイルを防げたし、まりもとみちるも、パワードフラッグのジャンプ力と高速ホバー機動のお蔭で死なずに戦えた。

ソラならそれは機体を扱えるお前達の実力だと世辞なしに言うだろうが、彼女達から言わせれば、自分達の命を守ってくれるMSは、ひいてはソラに守られているのも同じだった。

「だから、この休暇の機会に恩返しも兼ねて旅行を提案させてもらう」

旅行プランの書かれた紙をテーブルに出した彼女のかける伊達メガネが怪しく光った。

「んっ、んんーっ！……生き返るな……」

1日のあとのシャワーは身体の疲れを癒やしてくれるから、人生で一番気の抜ける時間だろう。本当なら湯船に浸かりたいが、贅沢も言っていられない。シャワーを浴びる時間があるだけマシだ。

シャワーを浴びていると神宮司大尉がシャワールームに入ってきた。

「お疲れ様です、中佐」

「ご苦労だったな、大尉」

2人は軽い感じで互いに労を労った。

2人はしょっちゅうシャワーの時間が重なることが多いのだ。

「中佐は休暇はどうされる予定ですか？」

「私か？そうだな、せつかくの休暇だがあいにく予定もない」

「ビャーチェノワ少尉やシェスチナ少尉、社少尉とはお出かけにならないので？」

「イーニアと霞は2人で遊びに行くらしくてな、私がついて行くと言ったがクリス力が代わりに行くから休めと聞かなくてな。故に私は暇人だ、唯依の見舞いはあるがな」

まりもは内心汗を掻きながらもガッツポーズをした。

何故かシャワーの時間帯が被ることを知っていたシャルからソラの説得を任されたからだ。

昔からそして今も軍の花形で誇りあるフラッグファイターになれたのもソラのお蔭だ。

二重の意味で恩返しをしたいまりもにとっては、このミッションは必ず完遂させなければならないものだった。

「あの、実はシャルロット少尉とマナンドル少尉と伊隅と温泉旅行に行くプランを立ててまして、よろしければ一緒にどうでしょうか？」

「ほう、温泉か、日本に来てもう7年だが、そう言えば行ってなかったな。場所はどこなんだ？箱根か？草津か？」

あまりにの食いつきにまりもは内心驚いたが、もうひと押しだと確信が持てた。

「箱根は近場ですから、今回は草津の予定でいます。旅行期間は1泊2日で」

「1泊2日か……」

考える素振りを見せるソラにまりもは冷や汗を流すが、事前にシャルからミッシェンプランは提示されている。そしてソラはシャルのミッシェンプラン通りの反応を返して来る為、今は自分是从つのみだ。

「中佐は時には休むこともお考えになってください。篁中尉が起きた時に中佐が倒れられたりすれば、彼女も今の中佐と同じような顔をすると思います」

「私と？」

鏡に写るソラの顔は、疲れもなく隈もないが、いつもの覇気が感じられず気弱さを感じさせる。

「フツ、ヒドい顔だな……」

自虐的な笑みを浮かべるソラ。

「せっかくだ。その旨をよしとする」

「では！」

「ああ、唯依には悪いが、たまには遠出の休暇もいいだろう」

ミッションコンプリート。

シャワーに流されて自覚はなかったが、まりもは知らず知らずの内にガンダム戦以上もの汗を掻いていたが、それ以上に達成感で満ちていた。

m i s s i o n 3 6 # 世界と組織と個人（後書き）

諸君に質問したい。

素顔がグラサンか包帯のどれがいいだろうか？

m i s s i o n 3 7 # 慰勞温泉旅行（前書き）

別に深い意味はない閑話だ。

mission37# 慰勞温泉旅行

翌日、休暇の日。

ソラ、まりも、みちる、タリサ、シャルロットの5人は群馬は草津の地に居た。

「なにやら視線が集中してないか？」

「それは、まあ……」

ソラの疑問にみちるは苦笑いだ。

ただでさえ美女揃い、2名は美少女と、まあ、目立つ集団の上に、ソラは右頬を覆う程の眼帯をしているのだから別の意味でも人目を引く。

「中佐、いくらなんでもその眼帯は目立つかと……」

「仕方がないだろう。少しピリピリするのだから」

まりもが指摘するも、眼帯なしだと空気中の酸かなにかで傷痕がピリピリするのである。

「しかし、良い香りだ。これぞまさに温泉地と言つもの!」

「よ、よく平気ですね、中佐……」

「なんだタリサ、だらしないぞ?これしき、整備中のMSハンガーの方が何十倍もヒドいぞ。それにこの香りの良さが理解出来んとはフラッグファイターとしてあるまじきことだ!」

「フ、フラッグファイターは、関係ないかと……」

タリサは源泉独特の硫黄の匂いにダウンらしい。

「とりあえずは旅館でチェックインを済ませ、荷物を纏めてから温泉街巡りと致しましょう。よろしいですか?中佐」

「その旨をよしとする。だがその前にヴァルキリーズ精鋭の諸君に通告する」

「ッ、はっ!」×4

ソラがいきなりスイッチをONにした為、反射的に整列して敬礼してしまうのは軍人の性の成せる技か……

余計に目立つたが……

「この旅の趣旨は慰労で間違いないなシャル」

「はっ！その通りであります！」

「つまりはOFFであり、休みというわけだ。そうだなタリサ」

「はっ！中佐の仰る通りであります！」

「ならばいつものように中佐とは呼ばんでいい。違うか伊隅大尉？」

「はっ！し、しかし、恐れ多くも中佐を中佐と呼ばずには」

「名前で呼べば良いだろう。違うか？神宮司大尉」

「いえ！間違つてはおりません。…ですが私達一兵士に中佐をお名前でお呼びするなど」

「反論は聞かん。慰労旅行でまで中佐中佐と呼ばれては疲れる。最低限の礼だけ尽くせば良い、誰でもなく私本人が許す。良いな！」

「り、了解であります中佐！」

「まりも、2回は許すが仏の顔も3度までだぞ」

「は、はっ！い、いえ、わかりました。あ、えと、……中佐」

「はあ……今日中に直せよ」

「はい……」

シユンと落ち込むまりも。年上が年下に言い負かされた瞬間だった。かなり強引だが、前回、ヴァルキリーズ設立時も無礼講だと言うのに畏まれていたのだ。

今回は慰労旅行でやるならとことんまでもリラックスする為の上官命令でもあった。

旅館も2300年代と言うのにかなり日本の味のある旅館だった。一瞬京都か！？と1980年代生まれのソラは思った。

しかも今では珍しい襖やガラス戸と、近未来の生活にどっぷりだったソラにはひどく懐かしく感じた。

旅館の部屋に荷物を置き、せっかくの温泉街、気分も楽しみたいし足湯にも浸かりたい。故に服を脱いで浴衣に着替えるのだが――

「く、これだから胸は邪魔だ」

「なんか、すっげー悔しいな。少しでいいからわけてくれないか？
中佐」

「マナンドル少尉！正気を保て！」

浴衣の丈は十分だが、如何せん大きすぎる胸が邪魔で胸が苦しい。仕方がない為、これまた持参した浴衣を着る。

そして眼帯はいただけないそうなので黒のグラスンをかける。

「この私、ソラ・ビャーチェノワが肅清しようというのだよ！グラハムッ！！」

「中佐Σ！？」

ピキイン

「それはエゴだぞソラ！！」

「隊長Σ！？」

「地球が保たん時が来ているのだ！」

「たかが石ころ一つ、私のフラッグで押し返してみせよう！！」

「もう落下は始まっているのだぞ！！」

「フラッグは伊達ではない！そんな道理、私の無理でこじ開けるッ！！」

草津と横浜の遠距離リアルタイムでネタが勃発したらしい。

そんなネタをやり終え、ソラは浴衣姿で温泉街巡りを楽しんだ。しかしやはりグラスンでも視線集める事に疑問を感じてはいたが……

そして足湯に使ったり食べ歩きをしたり、温泉街を軽く一回りして、

夕食の時間帯が近い為、旅館に戻った一行だが、旅館の受付場に見知った人物を見つけた。

「スカリエツティ！」

「やあミス・ビャーチェノワ。それに勇敢な戦乙女達も、お揃いでどうしたんだい？」

「休暇だ。これからまた忙しくなるだろうさ。そちらもか？」

「まあね」

スカリエツティと事情を話し終わると、スカリエツティの隣りにいた顔に傷を持つ有名人が口を開いた。

「貴官が噂に名高いソラ・ビャーチェノワ中佐か……」

「ロシアの荒熊に名を覚えて頂けるとは感極まりです。セルゲイ・スミルノフ中佐」

「こんなところで戦乙女の司令官と直接会えるとは思ってもよらなかった。今後ともお見知り置きさせてもらいたい」

「こちらこそ、スミルノフ中佐」

私は有名人との握手に、父親の優しい手を連想した。

「しかしお二方だけなのか？プル達やピーリス少尉は何処に？」

「あの子達なら遊んでいるよ。プルツーの不機嫌指数がリミットブレイクしてるけど……」

「フフツ、しっかり者は損な役割と相場が決まっているが、どうやらピーリス少尉も楽しめているらしいな」

機体に乗らず、戦場での死合いや興奮と緊張下にならないからか、ひどく力が弱いが、同じニュータイプや超兵などなら感じられた。

「そうか、ピーリス少尉もか……しかし貴官はいいたい」

「彼女もニュータイプさ」

「ニュータイプ？ビャーチェノワ中佐が」

「ガンダムとの戦いで、どうにも覚醒を始めてしまったらしいのです」

「そうだったのか、だが今は互いに休暇中だ。こういう話しはまた機会がある時にするでしょう」

「了解しました。でわお互いに良い休暇を」

「貴官等もな」

「はい」

「それじゃあまた、ミス・ビャーチェノワ」

「ああ、そつちもな」

スカリエツィとスミルノフ中佐と別れて、ソラ達は部屋に戻った。

「いやー、あれがロシアの荒熊かあ……」

「軍人として見習いたい方ですね」

まあ、タリサとみちるの言いたい事はソラにもわかる。

ロシアの荒熊——セルゲイ・スミルノフ中佐と言えば、軍人なら軍の垣根を越えて1度は耳にするほどの優秀な指揮官だ。

そのあとは山の食材を色々と使った夕食を食べたあとはいいよい待ちかねた温泉だ。

「始めて見ますが、中佐は」

「みちる」

「うつ、……ソ、ソラさん、は、す、スタイルが良いですね」

脱衣場で下着姿のソラを見て率直な感想を言うみちるだったが、ソラを中佐と呼んだ瞬間に睨まれて、やもえずにソラの名を口にした。

みちるの言うことは最もだ。

白い肌にスラリとした四軀に細く括れのある腰や引き締まったヒップ。顔も綺麗さと気品が混じり一種の芸術か……銀色のサラサラの髪も女性からしたら羨ましさを感じる。そして巖谷中佐と同じように右頬を走る生々しい傷痕は、女性であれど誇りのある戦士である事を周囲に知らせている。

だがそのどれをも群を抜いて目立つのはその胸だ。

ソラとクリスカは体格も容姿も髪型以外はほぼ同じだが、こと胸だけはソラに軍配が上がる。

ただでさえ胸の大きいクリスカ以上に大きい!!この5人の中で1番大きいかもしれない。

「中……いや、その、ソラ、は何を食べたらそんなに胸が大きくなるんだ？」

「なにとはいえ、別段特別なものは食べていないぞ」

しかし、たった4つ——ソラは22歳、タリサは18歳の違いでここまで違うのだから、気になるのも仕方ないだろう。

「確か揉むと大きくなると何かで見た記憶があるが……」

「も、揉むΣ!？」

「確かにマッサージを行うことで乳房の血流がよくなり、バストアップに効果的というのは聞いたことはあるが、胸はあってもはつきり言って邪魔だ。ジロジロ見られるは肩は凝るは走り方も考えんと揺れて痛いらしい」

ソラは女の身体になれる為に色々調べ上げ、胸が大きくなり始めてからスポーツブラしか着けていない、時にはサラシも巻いて固定している為、胸が揺れて痛いとかは無縁である。

「それは胸があるから言える贅沢な悩みですよ……」

「まあ、そう落ち込むな。タリサのスタイルも、一種の保護欲がか

き立てられて需要もあるぞ」

「アタシはロリコン担当じゃない！てか年下のイーニアにも負けてんのがイヤなんだよ！！」

タリサとイーニアの年齢差は一応戸籍敵に2つだが、確かにイーニアの方が胸が大きい。

「成長期が遅いだけじゃないか？」

「18になってどう成長期に期待しろと！？いつそ一生チヨビとかバツサリ言われる方が精々しますよ……」

「確かにスタイル差にコンプレックスを持つのも、年頃のタリサなら無理はないだろうが、はっきり言って愚問だな。スタイルなどの外的要因での恋心など所詮は上面の物だ。私ならば女性をスタイルで決めたりはしない。如何に大事なものは心同士の繋がりが。愛し合う者2人が互いに心が繋がりたい合う事こそ真の愛であると私は断言しよう」

「ソラ……」

「それに人生まだまだ長い。それは軍人の上に私達の敵は未知数のガンダムだ。明日スクランブルで死ぬ確率も否定出来ない。だが安心しろ、私が必ずお前を戦場から返してやるからな」

「あ、ああ……」

「遠回しに告白に聞こえるのは私だけだろうか、神宮司大尉」

「中……ソラさんは変に天然だから、言い切ってみせる辺り無自覚かも……」

現に朱くなった顔を隠すように俯かせながら着替えるタリサを気に留めずに下着を脱ぎ、タオルで前を隠しながら浴場へ行ってしまった。

「アレで中佐が男だったら、今ので確実に墜とされていたな」

「逆に毎日が余計に悲惨かも知れませんか？ただでさえエーカー上級大尉と中佐は思考回路が似たり寄ったりなんですよ」

「だが別段鈍いというわけではないから別な意味で質が悪いんだがな……」

まりもとみちるとシャルの見解は一致していた。

アレだけのカリスマ性の持ち主で、ヴァルキリーズではスターと言うか至上主義の存在だ。

隊の8割り強はソラの狂信者であり、時々告白されているのも3人は見ているし、パイロットロッカーにラブレターが入っているのも見たこともあり、しかし相手を出るだけ傷つけずにやりわり断ることから相手もめげずに再度アタックをかけるヴァルキリーズの隊員達。

さらに合同軍事演習から今日、クリスカとイーニアがソラを見る時の視線の違いも感じている上に、イーニアに関しては以前よりスキンシップ〓抱きつきが場所の見境がなくなりつつもある。つまり無自覚の内に女性を虜にはするはその向けられる感情を否定せず受け入れるが断るといふ、あくまでも隊の中心を保つ。

そういうところは自分達以上の大人のずる賢さを感じずにはいられなかった。

故に質が悪いとみちるは言った。

好きにならせて心の繋がりを造るが、あくまでも上司と部下としてまたは家族や仲間として線引きしていることが質が悪いのだ。だから結束は強いが、休暇時は隊がやきもきする。今回だとて、シャルロットが裏で様々な工作をした下準備があつたからこそ、ソラをここに誘えたのだから。

「ズルいお人だ」

「それでも、私達について行くんでしょ？伊隅」

「もちろんよ、神宮司教官殿」

ちなみに工作とは、ソラの刀の素振り風景やグラハムとの模擬戦風景での凛々しくも上気して桜色に染まる頬と汗水輝く額や髪が色気を醸し出す物や、シャワーでの生着替え写真や、寝顔などなどの写真である。

——一枚平均1万であり、シチュエーションによって撮影の難易度が上がる為、自ずと値段が上がり、最高額は何十万する場合もあり。代表取締役兼旧第13独立機動試験運用部隊現ヴァルキリーズ非公式写真部部長レイナード・シャルロット作。旧第13独立機動試験運用部隊現ヴァルキリーズ司令、ソラ・ビャーチェノワ非公式ファンクラブ手帳より抜粋——

傷痕に湯をかけないように慎重に湯に浸かっていると、外——脱衣場が少し騒がしくなった。

「なんだ？子連れ」

「プル達さ」

タリサの疑問にソラが答えた。

ソラのニュータイプの感応能力が、プル達の気配を感じていたのだ。声からするにプルは風呂好きだからわかる。マリーダも内心ワクワクしているらしい。ピース少尉は苦笑いでも楽しみに、プルツーは不機嫌指数がリミットブレイクどころがマキシマムクラッシュャーだ。おそらく一般人なら第六感が接近を拒否する程のプレッシャーを放っているだろう。

「わあ〜！広おーい！！」

「はい、お姉さま」

「これが温泉？」

「ん……？ち！」

プルツー、私の存在を感じたからといってあからさまな舌打ちはど
うなんだ？

「あ！ソラ！」

「お、お姉さま！急に引つ張らないで」

「走ると転ぶぞ」

「へーきへーき」

「あっ！」

確かにプルは平気だろうが、自分のペースで走れていないマリーダが足を滑らせた。

「マリーダ！」

プルツーが叫ぶが、距離的にプルツーは間に合わない。しかしマリーダが足を滑らせた時に動いた人物がいた。ソーマ・ピールスだ。

ピールスが転びそうなマリーダを抱き留めるが、今度はピールスの足下が滑る為、ブレーキが効かない。しかしその前に壁になったのがソラだった。

「2人は無事か？」

「え？ああ、はい」

普段シャキツとしているピールスとは思えない程間の抜けた返事だが、本人マリーダを助けても自分が転ぶとわかっていただけに、ソラに助けられた為、予想が外れて気抜けしてしまったのだ。丁度ソラのふくよかな胸にピールスの顔が埋まっているからとはおそらく関係はないだろうが――

真相はこうだ。

マリィダが足を滑らせた時に、超兵であり、常人とは比べ物にならない反射神経と瞬発力を持つピーリスがマリィダを救出している間に、ソラがいち早く風呂から上がり、ピーリスの進行ルートに立ちふさがったのだ。伊達に超兵やニュータイプや強化人間をやっているのはいないのだ。

「プル、温泉は走る場ではない。ただでさえ滑りやすい場所なのだからな」

「ごめんなさい、ソラ」

「私より謝るべき、感謝すべき相手が居るだろう？」

「うん。ごめんねマリィダ、マリィもありがとう」

「私はピーリス少尉のお陰で無事でしたからお気になさらず。ピーリス少尉も、ありがとうございました」

「いや、マリィダ少尉にケガがなくてよかった」

「礼を言うよピーリス。それとアンタにも一応言っとしてやるよ」

「相変わらず嫌われ者か……」

「うるさい黙れ」

どうやら3姉妹とピーリス少尉の関係は良好らしいな。

妹を助ける苦勞人妹にそれを見守る姉と言った感じた。

「とりあえず髪と身体を洗ってこい、温泉に入る時のマナーだ」

「ドクターに習ったから大丈夫だよ」

「走って風呂場に直行するやつがよく言う」

「うっ、ソラが意地悪する」

「正論を述べたまでだ。早く行けば風呂に入れるのだから早く洗ってこい」

「はい。行こ、マリーダ」

「あ、はい。では、助けてくれてありがとうございます」

「フンッ！」

3姉妹を見送って、私は再度浴槽に浸かろうとしたら、後ろから声をかけられた。

「あの、先程は助けて頂き、ありがとうございます」

「いやなに、ピリス少尉にケガがあると、スミルノフ中佐に叱られてしまうからな」

「中佐のお知り合いで？」

「ユニオン軍ヴァルキリーズ司令、ソラ・ビャーチェノワ中佐だ。よろしく頼む」

「ち、中佐とはつゆ知らず数々のご無礼、大変失礼致しました！」

「ピーリス少尉。今は休暇中で軍も違う。そこまで畏まらなくてもいい」

「は、はあ……」

かなり不思議そうな顔をするピーリス少尉に、私は彼女を3姉妹の方に向けて背中を押した。

「ビャーチェノワ中佐……」

「彼女達は子どもだからな、君が守ってやれ、ソーマ・ピーリス少尉」

「はっ！もとよりそのつもりであります！」

「良き返事だ。その言葉、違えなき事を祈ろう」

「ありがとうございます。では一度失礼します」

「うむ」

互いの軍隊式の敬礼で別れ、私は冷えかけた身体を浴槽に浸からせた。

「大丈夫でしたか？」

「なに、あれくらいは止められなければ刀なんぞ振るえんさ」

私はシャルに答えて一度肩まで湯に浸からせた。

僅かにはねた湯が頬に当たりピリピリしたが、声も顔にも出さずに我慢した。

そのあとは中よりも広い露天風呂で、3姉妹とピーリス少尉も交えて湯に浸かり、今日は何をしたのかを語り合った。

そして翌日は私達に人革連の6人が加わり、昨日行けなかった場所を巡り、有意義な休暇を過ごすことが出来た。

皆には感謝しなければなるまいな……

mission38# 唯依と純夏

休暇から帰った私は、唯依が意識を取り戻したと聞き、病室へと直行した。

「唯依！」

「中……佐……」

唯依は病室のベッドで上半身を起こしていた。頭や首や手首に巻かれている包帯を見て、私は顔をしかめるが、私は彼女に歩み寄る。

「申し訳ございません。貴重な機体を失ってしまって、こんな様ではフラッグファイター失格です」

私に頭を下げる唯依を、私は傷に障らないように優しく抱き締めた。

「ち、中佐！？」

「よく、よく、戻って来てくれた……唯依」

「中佐……誓ったではありませんか、私がこうして無事なのも中佐との誓いがあるからこそ、中佐、いえ、ソラさん、私は誓いました。ソラさんと共に空を飛び、生き残ると」

唯依は私の腕から抜けると、私と真っ直ぐ向き合った。
そして手を私の頬に添え、顔を耳元に寄せてきた。

「んっ……」

「ソラさん。私は……私はソラさんの事が心から好きです。親愛ではなく、女性として、アナタをこんなにも愛おしく思っています」

「唯依、私は……」

「軽蔑……しますか？それでも構いません。想いを告げる事が出来ただけでも……」

「唯依、私は愛に性別も年齢もないと思っている。唯依の気持ちも嬉しく思う。だが私は、人を愛する資格も愛される資格もない」

そう、この身体は私の物ではない。

そして私は別世界の人間で死んだ人間だ。

今はここに居られても、ふとした時に居なくならないとも限らない。

そして私は今、政府に逆らってまで擬似太陽炉を守っている。

少なくともスカリエッティが擬似太陽炉を造るか、30基の擬似太陽炉が世界に渡るまでは……

しかしそれは反政府行為。

今は独立部隊司令官、開発計画の責任者、ガンダム鹵獲の功労者としてのお陰で現状を維持しているが、政府が私に何もしないと限らないし、唯依は、いや、この隊の皆は私に依存している部分もある。慕われるのはいいが、いざと言う時に私が居なくなる位で潰れてしまわないように、私は中心に居なければならぬ。

誰かの物になるわけにはいかないのだ。私は……

「それでも、私は構いません。言っただけではありませんか——」

唯依はそう言って、再び私と顔を合わせた。

「私はアナタと共に生き残る。冗談でも何物でもありません。私は一生……いえ、たとえ生まれ変わっても、私はアナタと共に生き続けます。それが天の果てでも地獄の底でも……」

「ふあ、唯依、くすぐった——」

唯依は反対側の頬、始まりは額近く頬で深く大きく顎辺りまでである私の傷痕を指先でなぞり、頬に手を添え、左頬に添えていた手を後頭部にまわして自分の方に引き寄せて、私と唇を重ねた。

クリス力とはまた違った。深く甘い口づけ……

どうして私の周りの女性はこうも私の心を惑わすのだろうか。

わかっている。それは私が招いていることだ。

イーニアは落ち着かせるとはいえ、私が唇を奪った。あの子も16、
そういうお年頃だし、昔からの親愛もあり、それが口づけをきっか
けに愛に目覚めてしまったのだらうと……

クリスカは遺伝子的にももう1人の私だと思っているし、託された
からには私は彼女を導く義務もある。

だが彼女はどうかだろう。

あの日以来、クリスカが私を見る視線が違う事にも気づいているし、
そういうフラグをいくつか立ててしまった記憶もある。だからクリ
スカに言わせれば、彼女が私を愛する存在となるのもおかしくはな
いだらう。あくまでも私の評価だが。

そして唯依――

昔から色々世話になったが、部下となつてからは色々彼女とも
繋がりはあつたし、あの日の誓いは端から見ればプロポーズだ。そ
して極めつけは今日、今、この瞬間の告白だ。

私は嬉しく思う。私も皆が好きだ。フツ、節操なしだな。

しかし私は彼女達の想いにも応えられない最低の人間だ。いや、失
うのが怖いから、微妙な位置を保ちたいだけなのかもしれない。こ
の幸せな空間を、ヴァルキリーズと言う場所を――

まったく、どこのギャルゲーの主人公だ私は。こんなことではスカリエッティ辺りに笑われるぞ。

「んっ……ソラ…さん……」

唯依は頬を朱く染め上げ、眸を潤し、とてつもなく艶めかしい色香を放ってくる。

「唯依、すまない。こんな私を赦せとは言わない」

私は、今度はこちらから口づけをして、唯依から離れた。

「ソラ…さん」

「今は休め、病み上がりの身なのだから……」

私は病室のドアの前で一度立ち止まって――

「ありがとう唯依。私は幸せ者だ」

そう言い残して彼女の病室を出ると、自室に戻り、自分で自分の身

体を何度も殴りつけた。

その気にさせるような言葉を言うクセに、想いを告げられても断る位しかしないズルい自分が、私は嫌いだ。

唯依が目覚めた翌日に、純夏も意識を回復した。

フルネームはやはり鑑純夏。

一応病み上がりの為、病室のベッドに横になったままで、私は彼女に話を聞く事にした。

彼女もやはり武力介入をする為に生み出された存在。だが違うのは魂の部分。

彼女はあの世界基準で言う2度目を体験した鑑純夏だと言う。

なぜそれを私に語ったのかと言うと、私がいくつか言った単語に反応し、そして私も魂はこの世界の人間でない事を明かしたからだ。私も随分と腹芸が上手くなった物だ。

彼女と似たような境遇であると明かし、僅かばかりでも彼女の興味を引き、彼女の味方であるとアピールする。常用手段だが、相手が相手だけに良心が痛む。

「それでひとつ訊きたいことがある。白銀武、彼は何者なんだ」

「武ちゃんも、私と同じで造られた存在です。でも小さい頃から私の面倒を見てくれて、私はそれが嬉しくて、結局は武ちゃんに甘えてばかりで……」

それは好きな相手だから仕方ない。

「お願いします！武ちゃんを助けてください！」

「生憎、それは出来ない」

「どうして！？武ちゃんは何も悪いことはしていません！私のせいで武ちゃんは」

「白銀武がトリニティと行動を共にし、武力介入を行えば彼も立派な人殺しの犯罪者で世界の敵だ。ソレスタルビーニングのガンダムパイロットとしてな」

「そんな……」

純夏はとてつもない絶望に満ちた表情だ。しかし私は正論を述べているだけだ。

「お願いします！私はなんでもしますから！だから武ちゃんだけは！！」

「女の子が気安くそういう言葉を口にしない方がいい。私だからいいが、相手が相手なら何をされても不思議じゃない。君もまたガンダムパイロットなのだからな」

そう、ここに居られるのも、私がガンダムのパイロットは2名とも死亡していると嘘の報告を入れていて、ヴァラヌスから純夏を降ろした時に居た整備班やこの世話をしている医師達に箝口令をしている上に、この医務室がヴァルキリーズの専用施設だからだ。拾われた環境が良かったとしか言えない。まさに『より良い未来を導く』だ。

「白銀武は君が死んだと思っているだろう。そして彼は私を恨んでいるだろう。君を撃墜したのは私の部下だしな」

「あ、あの、その人は……」

「ケガこそしたが今は退院しているから心配するな」

「良かった……」

やはりこの子に戦いは合わないな。特に人同士の戦いは……

「話を戻すが、私が話したところで彼は私に聞く耳持たんだろう。だが君自身の言葉なら或いは」

「それって……」

「彼を救えるか否かは君の覚悟次第だ」

つまり白銀武の為にもう一度MSに乗れと言う意味だ。やはり私は最低の人間だ。

「……やります。武ちゃんはいつも私を助けてくれるのに、私は何も出来なかったから。でも、私に武ちゃんと戦えるか……」

覚悟はあるのは目を見ればわかるが、まず技量だ。

ヴェーダのバックアップがあるかないかわからないが、私と斬り結べるのはグラハムぐらいだ。つまり技量的にはエースパイロット並み、あの言動から予想して白銀武も2度目の経験者であれば無限鬼道流を使えるはずだ。

接近戦に持ち込まれたら純夏の技量では四軀を解体されてお持ち帰りコースは火を見るより明らかだ。しかし、ヴァルキリーズには優秀な教官とガンダムと戦える機体を造れる科学力はある。

政府の方は、伝手を借りるか、最悪政治家連中を脅してやればいい。

これもまた彼女の力か……

「良かったな鑑純夏。君は本物だよ」

「え？」

「うちには優秀な教官が居て、ガンダムと戦える機体を造れる科学
力があり、そして私はある意味香月女史と同じく横浜の魔女だ。後
は君次第だ」

私彼女に手を差し出した。

純夏は身体を起こして、私の手を両手で包み込むように握った。

「……よろしくつ、おねが、い、しますっ……」

涙を流しながらも笑顔で、彼女は私の手を取った。

さて、私もやらなければな。この子の涙と笑顔に誓って。

無論、敵が労せずして減るとか味方が増えるかもしれないと言う打
算もあるが、私は鑑純夏、そして2度地獄を見た白銀武に訊きたい
のだ。異性体との戦いを、そして本物の戦乙女の戦いを、画面の向
こうではない、現実に共に戦った者の視点で……

m i s s i o n 3 8 # 唯依と純夏（後書き）

こんな物で怒られやしないかと不安だが、やるしかあるまい。

回線は常時開けておく、諸君の報告を待つ。以上

mission39# 『対話』の為の力

合同軍事演習から2週間……

世界は軍備増強路線であり、技術力チートの人革連はティエレンの生産を打ち切り、本格的にジオン系MSを正式配備するらしい。

一般部隊はザク？F2型やJ型、デザートザク、グフ、ドム、リックドムが主力であり、中距離はザクキャノンやドムキャノンを採用するらしい。

エースや指揮官にはザク？S型やFZ型、高機動型のR-2型、グフ・カスタム、ドムトローパーン、リックドム？

第302哨戒中隊のみ、ツダやゲルググ、ガンダム試作2号機が配備されている。

ユニオンは完全にユニオンリアルドが練習機でしか見る事がなくなり、量産型ヴァイスリアルドも練習機として使われ始めている。

その分開発が終わりコストパフォーマンスと性能に優れ、変形機構からも量産型ヴァイスリアルドの上位機種としての意味合いが強いリゼルとフラッグが戦場での主力機として配備され、フラッグファイターが当たり前になると思いきや、『フラッグファイター』『フラッグスペルビアクラスからの機体を自由自在に操れるか、グラハム・スペシャルを使えるパイロットが『フラッグファイター』と呼ばれる基準になって行っているらしい。

それはひとえにグラハムの活躍が大きい。

フラッグスぺルビアでガンダムと対抗してみせた元祖フラッグファイターの機体であるかららしく、そして今は次期主力としてハイペリオンフラッグが私達や特殊部隊に配備され始めたとあって、今のファイター達の花形はハイペリオンフラッグらしい。

私達ヴァルキリーズは、着々と新たな新技術……つまりガンダムの技術の再現と取り込みを始めていた。

私のハイペリオンフラッグ——もはや別物の為、ムラサメと名付け、ハイペリオンフラッグの派生機扱いでムラサメの上位機種として認可されている。それもそうだろう、ムラサメはムラサメよりも擬似太陽炉を1基多く搭載しているのだから。しかしプラズマリアクターとプラズマジエネレーターの出力差とさらにムラサメは両腰のサイドバインダーにテスラ・ドライブとGNコンデンサーを増設、ムラサメも背中にGNコンデンサーを増設している為あまり出力差やトランザムの時間差はなく持続時間はCB製第3・5世代と同等で任意のキャンセルも利くように改良されているが、粒子の毒性についてはまだ解消はされていない。以上から太陽炉の数違いでGN粒子の生産量が違う為、トランザム後のGN粒子の再供給の時間がムラサメが上回っているくらいの違いしかない。

そして今はちゃんとしたクラビカルアンテナを製作中であり、これをつければよりGN粒子のコントロールが容易になり、GNフィールドも張れるようになるだろう。

あとはスぺルビアの武装のひとつだったバスターソードを流用して造った74式接近戦闘長刀2本を背中に兵装担架をファンネルラックの保持アームに挟み込んで装備している為、戦術機のようには動

く事はなく、設置角を斜めにして武装を取りやすくしている。

しかしこれを装備すると変形出来なくなる欠点がある為、展開力が下がるデメリットがあるが、ムラサメはMS形態でも十分にユニオントップクラスの機動力を持つている為にあまり問題ないが、グラハム・スペシャルが出来なくなる。

ちなみにこの74式接近戦闘長刀だが、切れ味はムラマサの不知火と雲龍と同等の切れ味を持つ。そしてこの74式接近戦闘長刀に粒子コーティングは無論、テスト中だがGNソード？と同じように粒子ビームを纏わせる機能を試みているが、技術的には4年後の発想の為、粒子ビームを纏わせる途中で粒子ビームが四散してしまう。やはりクラビカルアンテナの調整も必要だな。プラズマはプラズマソードの例がある為に纏わせるのは簡単なのだがな。

そして純夏だが、神宮司大尉改め、まりもに事情は伏せて任せているが、毎日毎日辛いらしい。

さすが狂犬、教導は容赦ない。しかしそれも彼女の優しさだろう。まだ年若い純夏が死なない為の物だ。

彼女の技量は射撃方面に偏りがある。

脳量子波も使える為、ESP能力プラスでファンネルの操作は霞よりも上である事がわかった。

機体は彼女の意志と目的を尊重し且つ強力な機体として、擬似太陽炉を2基搭載したMSを開発することとなった。無論彼女の意味をより伝えやすくする為にサイコミュも搭載する。

サイコミュ関連も開発は進み、サイコフレームの試作品をヘッドセットと一緒に着けて相手の脳波を受信するテストをしている。サイコフレームが実用化出来れば、2人の対話はより確実になるだろう。上層部も対ガンダム戦用の機体となれば予算も惜しみなく割いてくれた。無論データは開示する。

擬似太陽炉に関しては運用方法の確立と人体への毒性の解消研究と本格量産の下準備の為と名打って公式的に生産許可をもらった。

やはり政府も、人体に影響がある物は使いたくはないらしい。人道的にと自分達の為にも。

もつとも、初期型の擬似太陽炉のGN粒子は収束して粒子ビームにしなければ毒性はないんだがな。素人にはそこまで話さなければわからないだろう。報告書にも、ガンダムの特殊粒子は条件付きで人体に細胞異常を及ぼす強い毒性を持つ可能性大。としか書いてないが、嘘でもないからあとから言われても切り返しは出来る。

これを読んだ時のスカリエツィは笑ってたが…

純夏の機体はフライルを母体にして彼女に馴染みのない変形機構を排除し機体のフレーム強度を上げ、アドバンスド・ヘイズルの高性能光学センサー・ユニットを装備し射撃精度を強化させる。背面もマルチ・コネクター・ポッドに拡散ビーム砲を内蔵したシールド・ブースターを2基装備、推進はマルチ・コネクター・ポッドに搭載されたテスラ・ドライブによるPIIP機関での非推進剤依存推進により推進剤の心配はない。擬似太陽炉は両肩のムーバブル・シールド・バインダーを取り外し、擬似太陽炉を搭載した新規のフレキシブル・バインダーを肩に装備する。見かけはダブルオーライザーの

両肩バインダーに似ているが、これはファンネルラックでもあり、バインダーにはフィンファンネルを4基計8基装備する。無論フィンファンネルは回収してエネルギーの再充填も可。推進はGN粒子によって行われる。そして内側にビーム砲を備えてそこから粒子ビームを撃てる。アルヴァアロンのようにクラビカルアンテナ機能も兼ねている為、前方に展開して高濃度圧縮した粒子ビームを撃つことも出来る。

主武装はロング・ブレード・ライフルの銃身を延長しエネルギー供給をカートリッジ式から機体供給に変更し威力を高め、ビーム・ピストル上部にセンサー素子を取り付け狙撃能力を高めたロング・ブレード・スナイパーライフル。両肩のフィンファンネル。バインダーのビーム砲と高濃度圧縮粒子ビーム。背中に増設した可動兵装担架システムに担架したニュー・ハイパーバズーカ2挺。緊急時の近接戦闘用にソニックブレイドをサイドスカートに両1本ずつと頭部にGNバルカンが用意されている。ちなみに機体はティターンズブルーからUNブルーに塗装変更する。

システム周りは無論トランザムを搭載。現時点はサイココミュだが、テスト次第ではサイコフレームに切り替える。

コックピットに機能限定のグラビコン・システムを内蔵している為、衛士強化装備と合わせれば肌を感じるGは加速時や旋回時の僅かなものと慣性移動で身体が僅かに外側に引っ張られる感じくらいだ。

ラフ画を見せた時に、ブルーティアイズ……？とスカリエツティは言っていたが、そんな機体は聞いた記憶はないが……私が死んだ後の新作のアニメの何かに似ていたのか？

まあ、似ているのならせつかくだ。名はギャプラン・ブルーティアイズにするでしょう。

そしてギャプラン・ブルーティアーズに必要な部品の発注をアイリス社日本支部にまわし、あとはパーツが届く前にフライルから余計な物を外してフレーム強度の強化作業と純夏の衛士強化装備を造らないとな。あれもあれで時間がかかる。なにせ素材は縮退物質繊維からヒントを得て造ったガンダニュームα繊維で造っている。極最近になって出来たものだが、その効果は身を持って知っている。私が頬の傷程度で済んだのもコレで衛士強化装備を造ったからだ。剛性を持ちながら引っぱり強度もある為、伸ばしても切れず、これを加工するにはプログナイフ並みの超高周波振動刃で加工している。なにせガンダニュームαだ。衝撃と痛みに耐えれば対人火器や対MS用歩火器程度じゃビクともしない。

着る人間がある程度成長しても着れるように伸縮性も高く耐G性もかなり力を入れている。

「デザインは00式か98式……00専用の方がいいのか？」

プランはあとからあとから湧いてくるばかりだ。

そんな2週間が過ぎて3週間目の中頃、AEUが新兵器の発表会を行う情報が流れて来た。

「とうとう、AEUも新兵器の御披露目か、意外に遅かったかな？」

「言ってるな、私達が異常なだけさ」

「一応自覚はあったんだ」

「まあな」

部品発注や諸々の手続きを終えた私は、休憩がてらにユニオン領内のカフェでカタギリと出くわし、久しぶりに直接言葉を交わしていた。

「それにしても、まさかガンダムの動力機関を独自開発するなんて思ってもみなかったよ。さすがはソラ、いつも僕の予想の遙か斜めに行くけど、今回は真上に直進して成層圏を突破されたよ」

「なんの、あれほどの性能の機体がなぜ当初は4機だけなのかを考えたのさ。あと、ガンダムのパーツにあったコンデンサーの特殊粒子をあらゆる方面から徹底的に調べたからな」

重粒子を蒸発させることなく質量崩壊させる事でエネルギーへと変換し、重粒子の崩壊によってGN粒子が発生する。

しかしそれを実現させるにはトポロジカルディフェクト¹¹位相欠陥を使う為、製造するのに地球よりも高重力下、高磁場環境の木星の環境でしか製造できず、製造年数も数十年かかる為、生産性は皆無。

GN粒子の部分を特殊粒子と言い換えてカタギリに語ったが、ポカインとしてメガネもズレている。

「どうしたカタギリ？」

「……いや、やっぱり君は天才だよ。エイフマン教授だってまだガンダムの動力機関がトロポジカルディフェクトを使っている木星でないと造れないとぐらいしかわかっていないのに」

「そこまでわかっていいるのならば、エイフマン教授も造り方をわかってしまったと同義さ」

だがそんなものを一々造っているのは一生ガンダムには勝てないのは明白。

故に一番のネックであるトロポジカルディフェクトと使わずに、外部からの電力供給により機関を動かしてGN粒子を精製することで電力供給という制約があるが、その他は本物と同じ性能の物を作ることに成功した。それに半永久的に電力供給出来る物も手元にある為、実質ガンダムのGNドライブそのものだ。

もともと、私には託された太陽炉と前世の知識があつてこそその擬似太陽炉の開発が出来たという側面が強い。

ちなみに純正太陽炉も、擬似太陽炉の研究にかま掛けて極秘裏にだ製造実験中だ。しかし木星の同等から倍の超高磁場環境を作る装置を造り、一応月軌道でモノポール採取の実験中だが、先行き不透明だ。

しかしこの世界はCBの壊滅が現実味を増しているから、もしもの時の為にやっつけて損はないだろうし、それに私達はカスタム出来る擬似太陽炉なのだから、機体の性能をより高めていけばいい。

そんなことをかいつまんで話し終われば、カタギリはやれやれと言った風に肩を落としていた。

「話しが変わるが、A E Uの新兵器について何か情報はあったか？」

「いや、でもA E Uも必死なんだよ。なんせイナクトの御披露目にガンダムに武力介入されたんだから、情報開示も慎重なんだよ」

「確かに、A E Uにはガンダムと戦えても、退けられる機体はないからな。そうともなれば当たり前か」

カスタムイナクトでオーバーフラッグクラスの機体だ。

高性能機体が続々と開発される今日、A E UのM S群は完全に旧式と言われている。

「だからさ、A E Uもそろそろ何かしないと経済的にも世論的にもかなり追い詰められてるからね」

唯一ガンダムに遅れを取る国。

自国民の解釈はそんな感じらしい。

A E U、自国の威信を賭けた新兵器とやら、存分に拝ませて貰おうか……

mission39# 『対話』の為の力（後書き）

特に意識することなく設定していたらいつの間にかブルーティアー
ズ化してた純夏のギャプラン。キャラには合わないが、せっかく考
えたからそのままにしてみた。

太陽炉関係について修正した。

そして諸君等の支援に感謝する。

mission40# 戦う為に

「このガンダム、ヴァラヌスが撃震みたいだ…」

白銀武はこの2週間、自分の心の整理をしていた。

純夏の敵を討つ。

しかしそれには自分はまだ弱い。

機体性能差はそこまで開きはない。ヴェーダのバックアップを受けていたヴァラヌスはシステムで勝っていたはず。あのフラッグがGNDライヴを搭載し、謎の発光現象のあと、動きが段違いになる前まで互角に打ち合っていた。そう、ヴェーダのバックアップがあつて互角、ならバックアップがなかったらどうなっていた？

あの時は向こうも冷静さを欠いていたから互角だったのかもしれない。次向こうが冷静に戦ったらどうなる？

システム差を技量で覆す。

以前それをやった烈士を知っている。

武は調べれば調べるほど、自分の敵が、その人と重なって行つた。

信念と誇りを持つフラッグファイター。

敵討ちだけしかない今の自分に、あのフラッグに勝てるのかどうなのか考えれば、答えはN oだ。

それでもやらなければならぬ。

大切な者を守れなかった自分、そしてそれを奪ったフラッグファイター……

自ら踏み出さない者に明日は掴めない。

あの地獄でも同じだ。

何もしなければ、破壊され蹂躪され無惨に殺されるだけだった。

だからもう一度、あのフラッグファイターと戦う為に、武は刃こぼれた刀を研ぎ直した。

1ガンダム、正真正銘のガンダム。ガンダムスローネすら超えるガンダムを、ヴェーダのバックアップもなしで物にする為に、武はひたすらシミュレーターに乗り続けた。

一方、トリニティ兄妹は、無事にアジトに戻り、スローネツヴァイは現在も修理中。

ミッションもなく、ミハエル・トリニティは何度もシミュレーターでムラマサと対峙していた。

兄、ヨハンの敵。しかし所詮はデータ、勝ててもミハエルの憎しみと怒りと無力さは抜けることはなかった。

妹のネーナとも2週間まともに話せていない。部屋に籠もっているのも無理はない。部屋の前に運んでいる食事には手をつけているから身体は大丈夫だとも思っている、心の部分、精神的なことはヨハンの領分で、ミハエルにはどうネーナに接していいかわからなかった。

「アニキ、教えてくれよ……オレはどうすりゃいいんだ。どうすればネーナはまた笑ってくれるんだよ」

ミハエルの呟きは、悲しく響くだけだった。

「ミッションガキタゼ！ミッションガキタゼ！」

HARROが飛び跳ねながらミハエルのところにやって来た。

ミッション内容を確認したミハエルは、1人で格納庫に向かった。

大破近かったスローネツヴァイは、ミハエルの考えで、スローネアインのパーツも使って修理と改修されていた。

接近戦主体のスローネツヴァイではネーナを守りきれないと思ったからだ。

GNランチャーとGNビームライフル、GNシールド、アインのトウルプレントツユニットから擬似太陽炉を追加装備。

スローネツヴァイR

妹の笑顔を取り戻す為に、2週間ミハエルが必死に考えたスローネツヴァイの新たな姿だった。

一方プロレマイオスチームも、エクシアにアヴァランチユニットを装備。

デュナメスはGNフルシールドを外し、GNシールドビットの装備数を9から18に増やした。

キュリオスはガストユニットを装備し、背中にGNミサイルコンテナを追加装備することとなった。

ヴァーチェはGNシールドビームサブマシンガンを外し、新開発された武装——GNビームガトリングを2挺を腕に直付けで装備する。さらに新型のGNコンデンサーとクラビカルアンテナによって粒子圧縮率が高効率化され、粒子ビームの運用効率が上がった。

「だがこれで勝てるかどうかだが……」

居並ぶ機体を見て、イアンは渋い顔をしていた。

この2週間、ヴェーダからのミッションがないお陰で、ガンダムの修理と強化も行えたが、片や擬似太陽炉を造ってしまったユニオンの奇才、片やガンダムを造ってしまった人革連の天才、その懐刀を相手に、4基だけでやれるかどうか……

「だからオレも出るんだろ？おやつさん」

「苦労かけるな、ラッセ」

「なに、これでオレも戦えるさ。刹那達が前で戦う分、オレがアイツらの家を守るさ」

0ガンダムMk-？

ソレスタル・ビーイングのファーストガンダムを再設計し、第3世代機として開発された新型ガンダム。

第13独立機動試験運用部隊や対ガンダム調査隊との戦闘で損傷するガンダム4機に、いずれ戦力不足になると予想したイアンが以前から設計開発し、先週ロールアウトしたばかりの機体だ。

ソラが基礎理論を組んだパラジウムリアクターを搭載した非太陽炉搭載型のガンダムであったが、イアンがムラサメやスローネの擬似太陽炉の存在を見て、急遽イアンが擬似太陽炉も搭載することになった。つまり奇しくもムラサメやムラサメと同じく擬似太陽炉ながら半永久的に活動が可能な機体なのだ。

0ガンダムを基にした汎用機であり、武装もGNビームサーベル、GNビームライフル、頭部のGNバルカンとヴァーチェのGNシールドビームサブマシンガンが標準装備だが、手持ち式の高威力粒子ビーム兵器GNランチャーを装備した遠距離砲撃も可能であり、支援機のGNディフェンサーと合体することで、機動力と火力を強化することも可能だ。

パイロットはラッセが務めるが、機体操作支援に緑ハ口が同乗する。

ブトレマイオスチームがようやく戦えるように体制を整え終えた矢先、ヴェーダから新たなミッションが提示された。

「ミッションは日本の横浜基地で行われる新兵器の性能調査よ」

「今頃横浜ですか？」

スメラギの言ったミッション内容に、アレルヤが問う。

横浜基地——3国合同での対ガンダム戦用MS開発計画が行われている基地。

ユニオンの擬似太陽炉搭載型フラッグや人革連製ガンダムが居を構える、世界最高戦力が集う基地。ガンダムの優位性を唯一無視する部隊の駐屯地でもある。

第13独立戦術機動飛行隊——ヴァルキリースの母地だ。

そして今までに幾度も新型MSを生み出した地だ。今更武力介入の対象になる意味がわからなかった。

「それは私にもわからないわ、武力介入の対象になるのは今更の感じだけ」

そう言つてスメラギが一度言葉を切ると、2つの機体が表示された。
ムラマサとムラサメだ。

「最優先ターゲットはこの2機とA E Uの新兵器、この2機は既に新しく現れたガンダムタイプを撃墜した機体だから言うまでもないけど、A E Uの新兵器の情報はあまり入ってないの。MSなのかそうでないのかもわからない現状よ」

「A E Uはイナクトの発表会に武力介入されたからな、用心深いこつて」

「それで、どの機体が向かうんですか？」

「トレミーを除いた現稼働戦力全てよ」

「なつ、母艦を丸裸にするんですか!？」

スメラギの答えに、アレルヤは驚愕する。

「現稼働戦力……ガンダム5機による武力介入……」

ティエリアが確認するように呟いた。

アヴァランチユニットを装備したエクシアはGNアームズとのドッキングは出来ず、GNシールドビットとGNビットを装備したデUNAメスも同じだ。

それ以前に動かすパイロットも居ない為、GNアーマーとしての運用も無理だ。

「ティエリアの言う通り、動かせる戦力は5機のガンダムのみ、調査目的でも、AEUの新兵器が脅威物になる物なら破壊もミッション内容にあるわ、つまりこの2機や人革連製ガンダムとの戦闘にもなる。タクラマカン砂漠よりもハードなミッションよ」

「それでも、オレ達は行く。それがガンダムだ」

さも当たり前のように言う刹那に、皆の意志は固まった。

「刹那の言う通りだな。オレ達ソレスタル・ビーイングに沈黙は許されない。たとえ相手が同型の機体でも、ミッションをやり通す。ただそれだけだろ？」

「ロックオン…」

ロックオンは今回のミッション内容の虚を突いた。

ミッション内容はムラマサとムラサメ、AEUの新兵器の性能調査だが、破壊する場合のターゲットはAEUの新兵器しか設定されて

いない。つまり無理に2機と戦う必要性はないのだ。

「危なくなったら逃げるだけさ。正直あの2機は、パイロット含めて化け物だ。それに片方はオレよりも力のある奴だ。一瞬で戦場を把握する上に、仲間を導いて効率的に部隊を運用している。さすが先輩、羨ましいぜ」

「ニュータイプ……人革連で研究されている進化した新人類……」

ニュータイプの研究はC Bでも行われているが、唯一確認されているニュータイプはロックオンのみだ。

故に研究はそこまでは進んではないが、ニュータイプが勘が冴えていて他人に意識を伝達が出来らしいとのことわっている。

そのロックオンが言うと、現実味に重さが増すが、悲観的にはならない。

マイスター達にも意地はある、ガンダムも強化された。勝てずとも負ける気もない。

「……ミッションは3日後の現地時間1500。マイスター達はガンダムの最終調整をお願い」

スメラギにマイスター達は返事をする、ブリーフィングは終わった。

あとはスメラギのミッションプランとマイスター達の腕とガンダムの力を信じるだけだ。

mission40# 戦う為に(後書き)

もはや原作の『げ』の時もなくなってきた……

2ndはどうなるか心配で仕方がなさ過ぎる……

また次回から激しい一戦の始まりだ。心していこう、フラッグファ
イター

mission 41# 怨恨と矜持

AEUの新兵器披露会当日。

横浜基地は生々しいまでの嚴重警戒態勢を敷いていた。

それもまた教訓か、AEUの新兵器にガンダムが武力介入をするのではないかとの予想に、横浜基地は現稼働戦力全てを警戒に当たらせていた。

もつとも、GN粒子による通信異常が起こる為、ムラマサとムラサメ——グラハムとソラは格納庫の前で待機していた。

ヴァルキリーズとオーバーフラッグスが展開しているのにも関わらず、2人が待機しているのは上からの命令だった。

「く、部下を先行させ、隊長たる私がこのような所で油を売るしか出来んとは……」

「仕方がないだろう。ガンダムが狙うかもしれない物の近くに居た方が、ガンダムの迎撃に効率的なのは確かだ」

「だとしてもこれでは!」

「仲間を信じる。私達の仲間は早々に墜ちはしない」

オーバーフラッグスは軍事演習で3人もの仲間を失った。

グラハムの気持ちもわかるが、だからこそ私達は私達の出来ることをする。

ガンダムと1対1で渡り合える私達に出来ることは体力を出来るだけ温存する事だ。

しかし、A E Uも本気で情報統制しているらしい。

ついでM Sなのか否なのかも今日までわからずじまいだ。

「披露会が始まったな」

「そうらしいな……」

司会者の長々とした挨拶を聞きながら、ツインテスラ・ドライブの出力は上げておく。

ギャプラン・ブルーティアーズは間に合わず、仕方なしにサイコミユを載せたギャプラン・フライルに純夏を乗せて待機させているが、今時点で純夏を戦場に出すつもりはない。白銀武が出てくれば私が止めて、あわよくば四軀をもいで純夏の所に連れて行くだけ、リボンスが現れる前に……

「ん？あれが……」

「長距離陸戦用イナクトなのか？しかしあの形は……」

「陸戦型ヴァイスリアルドに通ずるものがあるな」

「新兵器と言うんだ、またさる真似とは限らんだろうさ」

両肩にキャノン砲を備え、背中の飛行ユニットを廃し、アンテナのような物を背中に着けたカスタムイナクト。手にもリアライフルとは別物、機体と同程度の長さのライフルを装備している。

「動くのかあれは」

「さあな、兵器運用だけならばあまり動く必要もないだろうさ」

するとターゲットバルーンや的が現れ、カスタムイナクトは脚をがっしりと地面に着き、背中の砲を備えたユニットから補助脚が伸び、機体を固定する。

「エネルギーが上がっている？」

「プラズマキャノン砲か……」

私が呟くと、カスタムイナクトの両肩から青白い光りが放たれた。解析の結果はプラズマ収束体だった。

アグリッサのプラズマキャノンをMSに搭載出来るようにしたらし

い。

次はライフルだが、こちらはレールガンだ。

「バースト・レールガンよりは威力が低いらしい」

「弾速もな」

しかしA E Uにとってはようやくの対ガンダム兵器だ。

レールガンは見る目はないが、プラズマキャノンは確かにガンダムに当たれば効果的だろう。プラズマ故に電子機器やパイロットにダメージが行くだろう。最も、当たればの話だが……

「来たな……ガンダム……」

「なに？来たのか！」

私が呟くと、基地全体に警報が鳴る。

呼び出した戦略マップには、A E U側の機体が次々とロストしている。

ユニオン、人革連共に防衛ラインは新型を交えた混成部隊だ。突破するにも骨が要る。しかしA E U側の戦力は未だにヘリオンが主力だ。突破するのはA E U側の防衛ラインが1番楽だ。

「GNドライブ起動、粒子充填率120%」

「こちらの起動も終わった。いつでも飛び立てるぞ」

「ならば、行くか！」

飛び立つムラサメとムラマサ、2機の鎧武者は空に浮かび、赤い煌めく粒子を放ち、ソラが感じ取るままに飛び始めた。

「出やがったのかガンダムウツッ!!」

イナクトキャノンのパイロット、AEUの不死身のパトリック・コーラサワーも、機体をムラサメとムラマサの飛ぶ方向に向ける。

2機の放つGN粒子により通信は繋がらないが、このイナクトキャノンは、衛星軌道の衛星とのサテライトリンクによりより精度の高い砲撃が可能なのだ。

故にガンダムの居場所もわかる。

「このイナクトキャノンで今度こそガンダムを！」

ガンダムとはグラハム並みに因縁のあるパトリックも、迎撃の為に

鈍重なイナクトキャノンを駆って戦場に向かった。

「ち、ザコがわんさかと!!」

ミハエルは舌打ちをしながらもGNバスターソードでヘリオンを斬り減らして行く。

距離がある敵機はGNビームライフルで、密集する陸戦型ヘリオンはGNランチャーで一網打尽に減らして行く。

「死にたくないなら下がれよ!!」

武も1ガンダムにGNバスターソードを装備して戦っていた。

また1機のヘリオンを撃ち墜とす。

「前に出てくるから……」

それでもなるべくコックピットを避けるのは、今はまだあくまでも敵は1人だからだ。

敵討ちが終われば、武は死んでも構わないと思っていた。純夏を失った今の武には、敵討を討つ位にしか戦う理由がない。しかしそれだけじゃない。

あのフラッグのパイロットと真剣勝負をしたいとも思っているのも確かだった。

真剣勝負で勝たなければ、あの世で純夏はもちろん、仲間にも顔向けが出来ない。自分達を導いて死んで未来を切り開いた仲間達や先達達に……

「っ、接近する機体！？このスピードは！？」

「やはり新型かッ！！」

グラハムのムラマサがミハエルのツヴァイRに蒼天で斬りかかる。ツヴァイはそれをGNバスターソードで受け止めた。

「ランティとステュアートの敵、討たせてもらうぞガンダムッ！！」

「このフラッグ、兄貴を殺ったヤツ。兄貴の敵iiiiiiiiiiiッ
!!!」

「ミハエル!!」

「余所見していて良いのか!? 白銀武!!」

武の1ガンダムにもソラのムラサメが74式接近戦闘長刀を振り下ろす。

「っ、このフラッグの武器!?!」

「貴様の首、もらっ!」

4機の擬似太陽炉搭載機が空中でぶつかり合う。

「お前が兄貴を!!」

「ガンダムッ!!」

「お前を倒して!!」

「稚拙な太刀筋など!!」

飛び散る火花と閃光、舞い散る赤いGN粒子、そしてハイレベルの

剣舞いに、着いていける者はおらず、必然的に4機の独壇場となった。

「お前を倒せばネーナは!!」

「この程度で私とムラマサを墜とすなど、笑止ツ!!」

「沙霧大尉や冥夜以上の使い手でも!!」

「純粹に戦いを望か!ならば私も全力で望もう!!」

斬り結び切り払い、撃ち合い防ぎ合い、避け合い飛び交い、ぶつかり合い殺し合い、されど美しさを醸し出し他を魅了していた。

「このままでは千日手かつ!」

「そうはさせねえ!いけよファングツ!!」

「それがどうした!!」

ツヴァイRから射出されたファングを、ムラマサはビームサブマシンガンで撃ち落とし、粒子ビームをかくくりながら近くに飛んでくるファングを蒼天で斬り裂く。

「もらったぜ!!」

「なんのこれしき!!」

ツヴァイRが撃ったGNランチャーを、ムラマサはGNフィールドとG・テリトリーで防衛した。

「GNフィールド!？」

「もはやガンダムなど、恐るるに足りんっ!」

距離を詰めてムラマサは下から切り上げる。

ツヴァイRはGNバスターソードを振り下ろす。しかし触れた瞬間に弾かれた。

「なにっ!？」

「たとえ性能やシステム差があろうとも!」

GNバスターソードを弾いたムラマサはツヴァイRの上を取った。

ミハエルはすぐさまGNハンドガンを向けるが、粒子ビームを撃つよりもムラマサの方が速い。

「今日の私は、阿修羅すら凌駕する存在だッ!!」

蒼天を振り下ろすムラマサ、ミハエルは腕をお構いなしに機体に回避行動を取らせた。

結果右腕を犠牲に斬撃からは逃れられた。

「やりやがったなアー!!!!ぐっ、なんだ!?!」

機体に衝撃を見て原因を探ると、被弾の表示とその主が映った。

「もらったぜガンダム!」

地上からレールガンを撃ったイナクトキャノンだった。

「隙ありだ、ガンダム!」

「ちくしょう!!」

数少ないファングでムラマサを足止めし、ミハエルはGNランチャーをイナクトキャノンに撃つ。

「そうそう砲撃にイツ!!」

サイドブーストで回避したイナクトキャノンは、レールガンを撃ち返すが、ツヴァイRは難なく回避する。

一方ソラと武の戦いも熾烈な物だった。

「その武器の間合いは知ってる!!」

「たえそうでも!!」

サイコフレームを着けているせいか、こちらも千日手だった。

ヴアラヌスではなく、本物のガンダムの性能により、武はソラと互角に打ち合っていた。

「打ち込みが鋭くなった。ただ無駄に過ごしていただけではないらしいな」

「アンタを倒さないと俺は!!」

「しかし怨恨と性能差だけでは私は倒せん!! 私は矜持によって立っているからな、誇りもなく剣を振るう貴様に負ける道理はない!!」

振り下ろされるGNバスターソードを、左手の74式接近戦闘長刀で受け止め、右手に新たに74式接近戦闘長刀を抜きながら振り下ろす。

1ガンダムは74式接近戦闘長刀が振り下ろされる前に後ろに下がった。そして距離を取るのにGNビームライフルを撃つが、ムラサメはそれを物ともせずに向かってくる。

「ブレイクフィールド収束!!」

粒子ビームを回避しながら接近するムラサメの2本の74式接近戦闘長刀にブレイクフィールドが収束し、蒼白く光りを纏う。

「コイツ!」

「ソニック・セイバー!!」

上段から勢いをつけて、74式接近戦闘長刀は振り下ろされた。

1ガンダムはそれをGNビームサーベルで受け止めるが、パワー差に押され始める。しかし武も押されるばかりではない、がら空きのムラサメの胴体にGNビームライフルを撃つが、ムラサメはGNビームサーベルと74式接近戦闘長刀の接触力場を軸に機体を上に倒立するように回避させる。

「上!?!」

「もらった!?!」

武は機体を全速後退させながらムラサメのクロスした斬撃を回避した。

「後ろを!」

「ちいつ!?!」

背を向けてしまったムラサメに、1ガンダムはGNビームライフルを向けた。まるでスロー再生のようにGN粒子が銃口の奥から吐き出された。

しかし、粒子ビームは別方向からのビームとぶつかり、かき消された。

「なんだ!?!」

「フライルールの3号機!?!純夏!」

「武ちゃん!?!」

ソラの危機を救ったのは、ギャプラン・フライル―に乗る純夏だった。

た。

m i s s i o n 4 1 # 怨恨と矜持（後書き）

最初の『対話』の始まりだ。果たして白銀武は！？

mission 42# そら

背を向けてしまったムラサメに、1ガンダムはGNビームライフルを向けた。まるでスロー再生のようにGN粒子が銃口の奥から吐き出された。

しかし、粒子ビームは別方向からのビームとぶつかり、かき消された。

「なんだ!？」

「フライルーの3号機!？純夏!」

「武ちゃん!!」

ソラの危機を救ったのは、ギャプラン・フライルーに乗る純夏だった。

「バカ者!何故来た!？」

ギャプラン・フライルーを庇うように立つムラサメ。

ソラは純夏に怒鳴りつけた。

「ごめんなさい、でも武ちゃんは私が」

「ひよっ子に、いつたい何が出来るかつ!？」

機体がギャプラン・ブルーティアーズならまだしも、フライルと純夏の技量では武と1ガンダムには太刀打ち出来ない。

「今の…純夏の声だった…純夏の…」

死んだと思っていた純夏の声に困惑する武だが、その隙にソラのムラサメが右手の74式接近戦闘長刀を兵装担架システムに格納し、両手で残った74式接近戦闘長刀を正眼に構える。

「純夏、私が引きつける。その間に下がれ…」

「でも!」

「下がれと言った!死にたいのか!？」

「私だって戦えます!」

あくまでも引き下がらない純夏にその心意気は認めるが、考えているだけでも身体は動かない。戦場では考えよりも身体の直感を物を言う時もあるし、前記したが今の純夏の技量では武には勝てない。

「なんだって……なんたって純夏がつ！くっ！！なんでアンタが純夏が！」

「く、邪氣が来たか！ファンネル！」

パルチザン・ランチャーのEモードとファンネルで牽制を入れ、距離を取らせるが、集中力を半分純夏にまわしている為、ファンネルの操作が緩慢で次々とファンネルが撃ち落とされる。

「くっ」

「ソラさん！」

「どうして純夏がアンタなんかと！！！」

人目が多い場所ではトランザムは使えず、さらに純夏を気にしながら守らなければならない為、状況的に不利過ぎる。

「やめて武ちゃん！」

「純夏！？」

ギャプラン・フライルのサイコミュと、純夏の脳量子波とプロジ

エクシオンが、ムラサメと1ガンダムの放出するGN粒子を媒介に、武に彼女の声を届ける。

「武ちゃん！私と一緒に来て！！」

「純夏！生きてたのか！？なんだってMSに！」

「武ちゃん、もう戦わなくていいんだよ！ソラさんが私達を守ってくれるんだよ！！」

「強力なMSを作って功績を上げたからって、一部隊の司令官が俺達を庇いきれるか！！俺の気も知らないで！」

「嘘を吐いて、それでよくも言えるな！？ええ？白銀武ツ！！」

「何を！？」

「純夏が桜花を生き残ったのを知っているのか？2度目の英雄！」

「何をっ！アンタは一体なんなんだ！！」

「あえて言わせてもらおう、ソラ・ビャーチェノワ、私もまたこの世界の理とは別の存在であると！！」

ムラサメがパルチザン・ランチャーのEモードを撃つ。

1ガンダムもGNビームライフルを撃つ。

ビームが交差し、それぞれのライフルに直撃する。

「く！」

「ちくしょう！」

ライフルを手放し、爆散を無視して接近戦に移る。

「生きていたなら、何故純夏をまたMSに乗せた!!」

「彼女の意志だ！」

「そんなはずが!!」

そのまま鏖り合いが続くとも思ったが、それは別方向からの粒子ビームにより遮られた。

「今のは!？」

「赤い粒子ビーム!？まだあるのか!!」

粒子ビームが来た方を拡大すると、4門の砲を持つMSが4機。

「GN^{ガン}キャノンだと!?!」

現れたGNキャノンはムラサメに集中砲火を浴びせる。

「ソラさん!」

「状況が変わった、純夏は牽制しつつ後退しろ!」

「り、了解…」

「待てよ純夏!」

「ちっ、コレだからガキは!」

純夏を追おうとする武の1ガンダムを頭部のビームバルカンで牽制する。

「邪魔を!」

「あとを負わせるわけには……っ!?!純夏!」

「え?」

GNキャノンのGNロングキャノンの流れ弾が純夏のギャプラン・フライルーに向かう。しかしソラはサイコフレームのお陰が、その

粒子ビームに純夏に対する殺意が籠もっているのを感じ取った。

ソラは迷う暇もなくトランザムを起動させ、ツインテスラ・ドライブの出力をオーバードライブさせる。

瞬間的に光速の域に達したムラサメはギャプラン・フライルーの前に回り込めた。

しかし急激な加減速にソラもムラサメも着いて行けず、無防備状況のムラサメのコックピットブロックに粒子ビームが突き刺さった。

「…ソ…ラ……さん…？」

純夏の呟きに合わせて、世界が止まったようだった。

「…ソ…ラ……冗談だ……何かの冗談だ！！冗談と言ってくれっ！！」

「ソ…ラ……ソラ、ソラァー！！！」

「ソラ…さん……そんな……」

クリスカ、イーニア、霞は感じてしまっていた。

純夏の見ている前で、ムラサメは下半身をパージさせながら、上半

身と残ったコックピットブロックは爆発の炎の中に消えた。

「あ……ああ……ああつ、イヤアアアアア——！！！」

「！！！」

純夏の悲鳴が、サイコミュを通じて、戦場に木霊した……。

「うおおおおあっ……く……」

グラハムは雄叫びを上げながら鏢競り合っていたスローネツヴァイRを蹴飛ばし、ツインテスラ・ドライブをオーバードライブさせ、GNキャノンに一直線に向かった。

4機のGNキャノンはムラマサに攻撃するが、粒子ビームもGNミサイルもムラマサの張るブレイクフィールドとG・テリトリイの前には無意味だった。

「ああああああ——！！！！！！！！」

純夏は悲しみの悲鳴を上げ、とどめなく涙を零しながら、ロング・ブレード・ライフルでGNキャノンを2機撃ち落とした。

そして武にも容赦なく攻撃をした。

「止める純夏！俺は」

「武ちゃんがもたもたするからソラさんが！！」

まだ1週間と少しでも、自分のわがままを聞いてくれて、そして荒唐無稽な話しも信じてくれたソラは、純夏にとってこの世界での数少ない味方だった。

霞とみちる、仲間が自分の事を知らないのは切なく思えても、ソラのお陰で寂しくもなかった。何より武を連れ戻せる希望を見いだして与えてくれた恩人でもある。

「それなのに、武ちゃんはソラさんのことを何も知らないで！！」

「純夏！！」

「武ちゃんが…武ちゃんが！武ちゃんなんかアーー！！」

エネルギーが切れ、Eパックのカートリッジを交換し終わると、1ガンダムは既に撤退行動に入っていた。

「逃げないで武ちゃん！！ソラさんを…みんなのソラさんを返してよッ！！」

トリガーを押す純夏だが、涙で滲んでしまっている視界では、1ガンダムを捉えることは出来なかった。

「私のせいだ……私が出たせいで、ソラさんがっ……」

コックピットブロックへの直撃……そして爆発……確認するまでもなかった……。何より純夏は目の前で、誰よりも一番近くで見てしまったのだから……

スローネツヴァイRと1ガンダムは撤退し、横浜基地は多方向から現れるGNキャノンの対応に追われるがなんとかこれを退けられることに成功した。しかしヴァルキリースはその導き手たる指導者を、心の拠り所を、支えを失ってしまった。

「離脱するぞ、武力介入はなしだ」

「おいおい、いいのかよ!？」

「あの砲撃機も新型と同じ赤い粒子ビームを使ってる。あの乱戦の中に飛び込めば、今のヴァルキリースなら俺達も墜とされる可能性が高い」

「今回は私も賛成です。あの空気、進んで近寄りたくはない……」

「悲しみが、世界を覆っていく。なんでだろう、勝手に涙が溢れてくる……」

ニュータイプのロックオン、脳量子波を持つティエリアとアレルヤは何もしていないというのに、瞳から勝手にとどめなく涙を溢れさせていた。

ヴァルキリーズから放たれる深い悲しみが、そうさせていたのだ。

「あれが……世界の悲しみ……」

モニターに移る望遠の横浜基地を見て、刹那が呟くのだった。

バキィッ！

ヴァルキリーズのMSハンガーに乾いた音が響いた。

「貴様だッ！！貴様が戦場に出てくるから！ソラは！！」

クリス力が純夏の頬を殴りつけ、首もとを締め上げながら叫んだ。

「止めるビャーチェノワ少尉！！」

「しかし神宮司大尉！！このバカのせいでソラが、ソラが…っ！！」

純夏を締め上げたまま、クリス力は膝から崩れ落ちて泣き崩れた。

ムラサメの下半身は回収出来たが、それ以外、特にコックピットブ
ロックの破片は小さなものもあり回収出来なかったが、純夏のギ
ャプラン・フライラーの映像記録から、ソラは戦死と判断された。

「中佐…っ」

まりもは涙を堪えながら、泣き崩れるヴァルキリーズ各員に激を飛ばしながらMSの補給と整備を命令した。

「青白いガンダム……中佐の敵はっ！」

唯依は震える程に握り拳を作りながら、1ガンダムへの恨みを募らせた。

「今度会ったら、武ちゃんは私が……」

虚ろな目で、純夏は呟いていた。

「何故逝った……何故逝ってしまった……ソラッ!!」

オーバーフラッグスのMSハンガーでも、グラハムが荒れていた。
ムラマサから降りるや否や、ヘルメットを床に投げ捨てた。

「誓ったではないか!!必ず私を超えてみせると!なのに、何故だ
…何故…」

「……隊長、我々で敵を討ちましょう。フラッグを駆ってガンダム
を斃す。それがビャーチェノワ中佐への手向けとなると思考します」

「隊長、自分もハワードと同じ思いです。俺達で、フラッグで、必
ずガンダムをつ!!」

「その忠義、彼女も喜ぶだろう。……くっ、私から部下を奪ったば
かりか、親友まで奪うとは、次に見える時はその首を狩らせて貰う
ぞ、ガンダムッ!!」

横浜基地は、深い悲しみと怨恨を渦巻かせていた。

それが意識と呼べるのか、そもそも自分本人と呼べるのかは分からない。だが人としての意識がそこにあつた事は間違いなかった。

星々に僅かに照らされた宇宙空間よりも暗い、何処か。意識のみが存在する暗所。

その場所で、空に散つたソラ・ビャーチェノワは意識を覚醒した。

「私は既に、涅槃にいるというのか……」

ソラはそこを死後の世界かと思つたが、かろつじて把握できる視界の先にて小さな光を見た。

それは一人の女性が持つ銀髪の輝きであつた。

「……私……なのか……？」

私はその女性が自分である事に気づいた。

目先に映る自分は、私を受け入れるように両腕を広げていた。私は動いているわけでもないのに、自分の腕の中にすっぽり収まった。

温かい、とても安心感を感じる。

「ここは…天国か？」

「フフ、違うよ。ここは量子の世界だよ」

自分が口を開いた。口調一つで印象が随分変わる。

私は鉄の女を思わせると思うが、自分は勝ち気という印象を受けた。

「量子の世界？それは何故だ？」

「それはアナタの中にあるよ」

「お前は何者だ？」

「それもアナタの中……でも逢えて嬉しい。ようやく話す事が出来たんだから」

「私と話しても何もないぞ？」

「そんなことないよ。イーニアを大切に想ってくれて、ありがとう。ボクも、見ててちよっと羨ましいよ」

「見てた？」

「うん。心が死んだあの日からずっとね……」

m i s s i o n 4 2 # そら（後書き）

この物語は何処まで飛んでいくのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0171u/>

空バカの革新者の往く変革の世界

2011年8月4日23時28分発行